1997年4月1日発行(毎月1日発行)通巻第三十二号 1995年3月13日第三種郵便物認可

JAPANESE ROCK NEWSMEDIA

J-ROCK magazine

05
400YEN
Volume 24
MAY 1997
月刊ジェイロックマガジン

GLAY
4人が語るツアー総括

Toshi
心震わせるアコースティックライブ

NOKKO

SLY

THE SPACE COWBOYS

近藤房之助
「カラオケを意識した曲なんて書けないよ」

FEATURE： メジャーに近づくインディーズレーベル

STAFF ROOM： 人を振り向かせてこそアーティストだ！

PERSONZ / LAUGHIN' NOSE / Valentine D.C. / ZEPPET STORE / 栗林誠一郎 / CURIO / PIZZICATO FIVE

大黒摩季
new single in store now
ゲンキダシテ
'97アサヒ飲料
MITSUYA CIDER
CFイメージソング
Coupling with : You are not mine
JBDJ-1026/1,000YEN(TAX IN) / B-Gram RECORDS
[INTERNET ADDRESS] http://www.being.co.jp/bmf/

ビクターエンタテインメント株式会社 AD制作推進室

Victor
JVC

いっちょ
やってみっかな。

victor music audition '97

ビクターミュージックオーディション'97

ビクターAD室は、インディーズからメジャーまで、あらゆるカタチで君たちの才能を世に送りだすのがお仕事です。

■応募部門 A.アーティスト部門:ヴォーカリスト、バンド、シンガーソングライター B.作家(作詞・作曲)部門:オリジナル作品をエントリーしたい方 ■応募資格 年齢、性別、国籍、ジャンル、不問。(特定のレコード会社、音楽出版社、プロダクションに所属していない方に限る)未成年者は親権者の承諾が必要。■応募方法 ①作品を収録したカセットテープ(オリジナルまたはコピー曲を明記。2曲以上収録)※ライブビデオ(VHS)のある方は、同封してください。②写真2枚(全身、上半身。最近撮られたもの。)③プロフィール(氏名、年齢、住所、電話番号、自己PR 、あなたがよく読む雑誌名)を記入④オリジナル曲は、必ず歌詞を添付してください。以上同封のうえご郵送ください。なお、応募作品等の返却はいたしませんのでご了承ください。■結果発表 オーディションの結果は書状にて、直接通知いたします。ただし、作家部門は採用時のみの、通知とさせていただきます。
■応募宛先 〒150 東京都渋谷区神宮前2-21-7 ネオ・カミニート神宮前ビル3F ビクターエンタテインメントAD室「V.M.A.'97」JM係宛

詳しくモシモシ☎03-5410-8007。ディレクターの生の声、ニュートラックなどが聴けます。ガイドに従って情報ゲット!

300 AJA-1308

301 AJA-1504

302 AJA-1306

303 AJA-1204

304 AJA-1503

305 AJA-1203

306 AJA-1307

New Al.4.23 ON SALE
307 VICL-12026

308 VICL-5332

309 VIDL-10812

New Al.4.23 ON SALE
310 VIDL-10839

311 VIDL-11035

312 VICL-852

313 VIDL-10855

314 VICL-809

Aja Records リリース
300-The Pink Stocking Club Band [The Pink Stocking Club Band Mini Album]301-NIHIL TENTION[キレテツ]302-JA-BLACK Vol.Ⅱ[Until I Make You Mine]
303-ユムリ・イ・スス エルマノス[プロヴォカシオン]304-朝倉ミツヒロ[A GHOST IN A BLUE ROOM]305-LOVE NOTES[Photograph]306-伊能静[ANNIE]

AD室オーディションよりメジャー・デビュー
307-伊能静[Annie 1]308-KAITA[夜明けのプラザスイート]309-高田龍二[抱きしめてるだけじゃしょうがない]310-和田弘樹[dawn]311-林あさ美[ジパング]
312-GUNIW TOOLS[OTHER GOOSE]313-GANASIA[Grow up Potential〜夢に向かって〜]314-8分のバニラ[lamb charmer]

※操作方法 ダイヤル 4 で1曲前へ 6 で次の曲へスキップ * と[ダイヤルナンバー]で他へ移動。ダイヤル 100 -総合案内、250 -その他のオーディション情報

●主催:J-ROCK magazine ●企画運営:（株）ジャパンエデュテインメント ●後援:AME-MURA ROCK STREET（テレビ大阪） ●協力:B&EF

POLICE LINE DO NOT CROSS
彼はナニモノに撃たれたのか…
謎の突然死事件、容疑者浮かぶ!?
去る5月5日午後7時ごろ、北区の路上で起こった謎の突然死事件について捜査を進めていた大阪府警は、所持品などから死亡していた男性が唐桶好男（21）さんであることをつきとめた。目撃者によると、現場は真新しいホールの搬入口付近で、唐桶さんが通りかかったところで突然跳びはねるようにして倒れたという。胸が血まみれで当初は他殺と考えられたが、目立った外傷が無いことから、事件は謎を深めている。府警ではショック死の可能性もあるとして死因の究明を急いでいるところだ。唐桶さんの友人らは「流行歌が好きな明るい青年で、恨みを買うような節はなかった」と語っている。なお、死亡時刻がホールのイベント中であったことから、主催者に事情を聴いたところ、コンサートの音が外に漏れ出た可能性があるため、業務上過失致死の容疑者として出場した3つのバンドの名が浮上している。
Seek
J-ROCK magazine 2nd Anniversary
イベント協賛
フロム・エー FROM A
DDI POCKET cellular 正規代理店
NEXUS TOTAL NETWORK SERVICE
milbon

目覚めよ創造力。

これまではプロの手を借りなければできなかった。
自分のバンドのオリジナルプロモーションビデオ編集が、
自宅で、しかも驚くほど簡単にできてしまう
それが「Avid Cinema」だ。
プロユースのビデオ編集機材に迫るポテンシャルが、
専門知識なしでもライブ感覚でぐらぐら使いこなせる。
これまでになかった革命的なソフトだ。

◎デスクトップビデオ「Avid Cinema」登場◎

オリジナル・ビデオクリップも夢じゃない。
昨年末にアップルコンピュータから発売されたPerforma 6420に搭載されている「Avid Cinema」を使えば、プロのノウハウ満載のビデオクリップが簡単に作成できる。ビデオテープやカメラの映像、Quick Timeムービー、アニメーション、サウンド、マイクからの音声など、ビデオクリップを構成する素材が自由自在に扱え、高精度な編集、特殊効果、タイトル／音楽／ナレーションの追加などが、簡単マウス操作で行える。君も、自分だけのオリジナル・ビデオクリップを作ってみよう。すでにMacユーザーの君には、今春Avid Cinemaパッケージが発売の予定。

1. ストーリーボードでシナリオ作り。

2. ビデオから使いたい素材を取り込み音楽CDからサウンドもボタン1つで入力できます。

3. デジタルで簡単にビデオ編集。しかも画質がきれい。トランジションエフェクトも思いのまま。

4. オリジナルビデオクリップのでき上がり。でき上がったクリップは、ビデオテープに出力して配ろう。

システム条件▶対応機種は以下の通りです。Power Pc搭載、PCI拡張スロット、Appleビデオシステム装備のMacintosh Performa 5400シリーズ、6400シリーズ。コンポジットまたはSビデオ入力、およびPCI拡張スロットを装備したPower Macintosh 7500シリーズ、7600シリーズ、8500シリーズ。▶メモリ：24MB以上 ▶漢字Talk 7.5.3以上 ▶Quick Time 2.5以上（Quick Time 2.5はAvid Cinemaに付属）▶ハードディスク：1GB以上 ▶空きPCIスロット1基

Avid Cinema

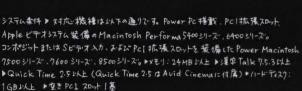
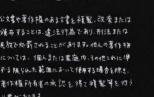
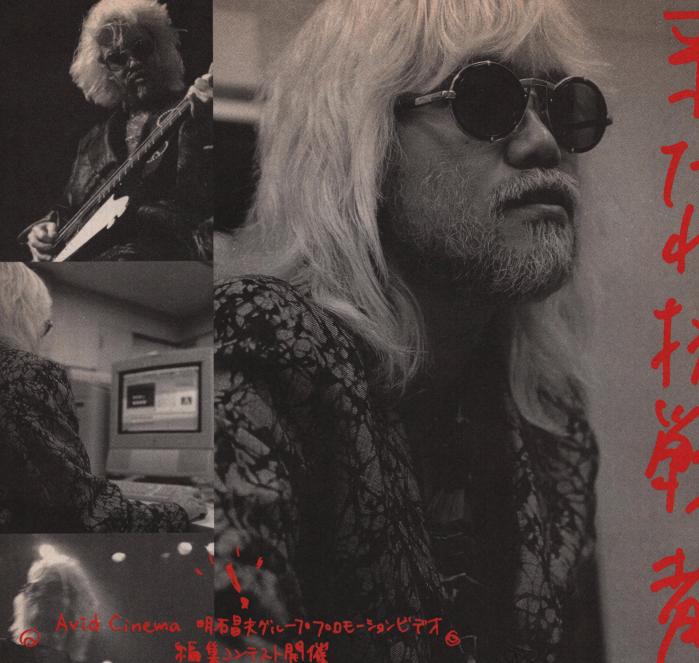
※公文書や著作権のある文書を複製、改変または頒布することは、違法行為であり、刑法または民法で処罰されることがあります。他人の著作物については、個人または家庭内、その他これに準ずる限られた範囲において使用する場合を除き、著作権所有者の承認を得て複製等を行う必要があります。

「Avid Cinema」標準搭載で、
箱を開ければいきなりビデオ編集スタジオ！

Macintosh Performa 6420 Home Studio
マッキントッシュ パフォーマ 6420

Power PC 603e（200MHz） 24MBメモリ／256KB二次キャッシュメモリ／28.8Kbps GeoPortファクスモデム Avid Cinemaカード／8倍速CD-ROMドライブ 2.4GB内蔵ハードディスク／16ビットステレオサウンド出力（SRSサラウンド）／ステレオスピーカ／サブウーハー PCI拡張スロット×2基／ビデオ入力 テレビ／FMラジオチューナ Apple Vision 1710 AV
※メモリは最大136MBまで拡張可能

問合せ先：アップルカスタマーアシスタンスセンター TEL. 0120-61-5800

◎ Avid Cinema 明石昌夫グループ・プロモーションビデオ ◎
編集コンテスト開催

- コンテスト概要　明石昌夫グループのライブ映像を「Avid Cinema」を使って加工し、30秒のプロモーションビデオを作る。審査の結果、優秀な作品については、賞品を進呈。
- 審査員　明石昌夫、J-Rock magazine 里居編集長、Apple Computer社スタッフ
- 実施期間　1997年4月1日(火)～5月20日(火) 当日到着分まで
- 賞品　最優秀作品賞（1名） performa 6420 他
- 入賞者発表　「J-Rock magazine」8月号誌上、およびインターネットホームページ「CYBER J-Rock magazine」
- 応募方法
  1) 「Avid Cinema」をお持ちの方
  ブルージー　平 あてにお電話ください。詳細をご説明します。(06-212-0660)
  2) 「Avid Cinema」を持っていない方
  西日本地区限定ですが、アップルセンターで操作方法のレクチャーを受けながら、コンテストに参加することができます。下記の中からお近くのアップルセンターに、まずはお電話してください。

AC肥後橋	大阪市	06-449-8338	横山
AC京都御池	京都市	075-212-1101	村上
AC信濃橋	大阪市	06-448-5156	大塚
AC神戸	神戸市	078-371-8661	藤原
AC江坂	吹田市	06-330-1100	武藤
AC梅田	大阪市	06-361-5553	辻村
AC広島	広島市	082-246-4555	磯野
AC福岡	福岡市	092-282-8970	伊東
AC上前津	名古屋市	052-322-1921	佐藤

- 主催　ジェイロックマガジン社
- 協力　アップルセンター肥後橋、京都御池、信濃橋、神戸、江坂、梅田、広島、福岡、上前津、ブルージーレコーズ

君の映像センスが試される時が来た。
「Avid Cinema」を使ったビデオ編集コンテストがJ-Rock Magazineの主催で開催される。
素材となるのは、私、明石昌夫率いるAMGのライブシーン。
ブルースフィーリング溢れる。
クールなビデオクリップを君の手で仕上げてくれ。

明石昌夫グループ

明石昌夫

夢の扉を叩け！
鍵はその音かもしれない…

現状の音楽活動に満足出来ない人、夢を実現したい人、バンドでやりたいけどメンバーが足りない人、パフォーマンスしたい人、ロックしたい人、ミュージック・シーンを変えたい人、とにかく唄いたい人等など･･･ 音楽を愛して止まないミュージック・イノベーターによる音楽シーンのインテグレーション（統合化）と、才気溢れるアーティストのフリーダム・エクスプレッション（表現の自由）を高い次元で実現させるというコンセプトの元に "GATE" はスタートしす。

GATE
GATE ALIVE TRUE EDITION

1st GATE テープ書類審査

レコード会社プロデューサー、ライヴハウスマネージャー、音楽誌（J-ROCK magazine）

編集長、イベントプロデューサー、アーティストマネージャー、プロモーター、CDショップマネージャー等からなる音楽選人達が、音楽性、ヴジュル、センス、将来性等あらゆる角度から分析し可能性のあるアーティストをpick up!

合格者　不合格者 → 再チャレンジ

2nd GATE TV番組収録

"AME-MURA ROCK STREET「GATEオーデション」コーナー"（テレビ大阪）の"ARTIST FILE"にエントリー＆オン・エアー

★ON AIRビデオ・テープを出演者にプレゼント！

3rd GATE "ARTIST FILE" にエントリーされたアーティストの中から音楽選人とテレビ視聴者達による投票を加えて "Alive1アーティスト"を選出

"Alive 1 アーティスト" に選ばれると･･･

★番組内にて "Alive 1 アーティスト特集"オン・エアー
★全国発刊音楽誌、インターネット、インディーズ・フリー・ペーパーにて特集
★GATE PROJECT主催のライヴへブッキング
★収録した映像をプレゼント！

4th GATE "Alive 1 アーティスト" の中から "MAX Alive アーティスト" 選出

MAX Alive アーティストに選ばれると･･･

★最新設備でのレコーディング
★制作会社によるプロモーション・ビデオの作成
★インディーズ・レーベルによるCD制作
★TV番組、雑誌等各メディアを使ったプロモーション
★ライヴ・イベント"SEEK"（1,000動員規模）への出演
★音楽マネージメントへ紹介

GATE PROJECTが、責任を持ってメジャー・レコード会社へのプレゼンテーションを行います。
※コンポーザー、アレンジャーの作品のみプレゼンテーションも行います。

Final GATE メジャー・レコード会社からデビュー

★デビュー後はメジャー・アーティストとして媒体（TV、雑誌）でのフォロー大特集
★"SEEK"での2ndライナー、ヘッド・ライナーとしての出演
★所属レコード会社において全国規模での大プロモーション

Future gate open‥‥

応募要項：

資格　音楽を愛してやまないプロを目指している方（男女、グループ、ジャンルを問わず）

募集部門

- A-GATE　ボーカル部門（男・女）
- B-GATE　バンド部門（グループ・ユニット）
- C-GATE　クラブサウンド部門（DJ・ダンサー）
- D-GATE　プレイヤー部門（G・B・Dr・Key その他）
- E-GATE　作詞・作曲部門
- F-GATE　アレンジャー マニピュレーター コンピューター ミュージック部門

応募方法

① 作品（カセットテープ、CD、ライヴビデオ等）をお送り下さい。
＊必ず、歌詞カードに作詞・作曲者名を明記して下さい。
オリジナル、カバーどちらでもOK！
自主制作・カラオケなどでもエントリー可、ライヴ音源・弾き語りもOK！
＊作詞については、詞のみのエントリー可能

② プロフィール
・連絡先（住所・氏名・TEL）・生年月日・身長、体重・音楽活動歴・自己PR
・作品に対するコメント・担当パート・応募部門（ex.B－Gate希望）

③ 写真（3ヶ月以内に撮られたバストUP＆全身写真）
＊グループ応募の場合は全体写真も送付下さい。（各個人氏名記入）

以上を同封の上郵送して下さい。
（但し応募された資料・作品等は返却できませんのでご了承下さい。）

審査方法：作品・書類審査の上、合否通知を郵送致します。

尚、合格の方には、TV番組収録の日時をご連絡致します。
また、合否に関する電話でのお問合せは一切受付ませんのでご了承下さい。

主催：GATEプロジェクト～Gate Alive True Edition～
住所：〒542大阪市中央区西心斎橋2－17－8MACビル7F
TEL：06(212)3665 FAX：06(213)7855

協力：BLUE-Z RECORDS、BREAKRASH RECORDS、Styling Records
後援：AME-MURA ROCK STREET（TV大阪）、J-ROCK magazine
協賛：メジャーレコード会社 数社、GRAND-Cafe　STU;DUO

スタッフ募集告知：
GATEプロジェクトでは、このプロジェクトを運営するスタッフも同時に募集致します。（デザイナー、カメラマン、企画営業、イベントディレクター、販促推進、ブッキングマネージャー等）*やる気のある方ならば、未経験でも可*

詳細は GATEプロジェクトまでTELにてご確認下さい。

5 J-ROCK magazine MAY 1997 Vol.24

CONTENTS

COVER ARTIST
GLAY

COVER PHOTOGRAPHER
TAKASHI

EDITORIAL DESIGN
HIROSHI SHIRAE
KAORU SHIROTA [Doing]

97年5月号 ©ジェイロックマガジン社
1997年4月1日発行（毎月1日発行）
通巻第三十二号
発行:株式会社ジェイロックマガジン社
〒542 大阪市中央区西心斎橋2-17-8
MACビル 8F
PHONE:06-214-1751
FAX:06-214-1761
印刷・製本:株式会社大伸社
編集人:里居正裕

INTERNET INFORMATION
CYBER J-ROCK magazine
http://www.j-rock.com

アーティストニュースを見よ。

本誌は、日本の音楽に焦点を当てていく音楽専門誌としてここに名乗りを上げる。
まず本誌中のJ-ROCK ARTISTS NEWSを見てほしい。基本的に、ここでセレクトしたアーティストたちに注目していくつもりだ。このアーティストたちは、編集部が次の5つの条件を基に際限の無い論議を行い、独断と偏見のもとにセレクトしている。

1. **ルーツ**（ロックスピリッツ、ブルースフィーリングを持っている）
2. **実力**（歌唱または演奏力がある。声に魅力がある）
3. **クリエイティビティ**（作詞・作曲能力に優れている）
4. **パフォーマンス**（カリスマ性がある。ライブパフォーマンス、ビジュアルがいい）
5. **生き様**（芸能人、タレント化していない）

以上の5項目を有していれば、
当然認められるべきで、そうしたアーティストを選出した。

HEAD FOCUS

GLAY

TOUR '96~'97
"BELOVED YOU"
"BELOVED YOU ENCORE"

撮影・TAKASHI
photographed by TAKASHI

HEAD FOCUS **GLAY**

TOUR '96~'97 "BELOVED YOU" "BELOVED YOU ENCORE"

本誌の95年8月号に掲載した、デビュー一年を迎えるグレイが大阪ウォホールで行ったライブは、今もなお彼らに問う観客との関係を考えるきっかけになったライブとして、とても記憶に残っている。激しく盛り上がった「Freeze My Love」の後、次曲のバラード「ずっと2人で…」への思いを語り始めたTERUが、前曲の勢いのまま鳴りやまない歓声に対して戸惑いを示したあとステージを一度降りてしまい、再び姿を見せると「人が話をしている時は、ちゃんと話を聞いてくれ」とはっきり意思表示をしたのだ。デビュー当初からハードナンバーとスローバラード、そしてポップナンバーという幅広く多様な楽曲を持ち、それを聴かせられるバンドであることが最大の魅力だったグレイだが、そんなバンドや楽曲に様々な反応を示す観客との関係は、宿命のようにライブに大きな影響を与えた。だからこそ、その後の彼らのライブでは、楽曲に対する新たな発見、プレイヤーとしての成長、ステージングの魅力などライブで不可欠な要素に加えて、バンドと観客の関係に必ず注目してきたのである。

96年春に行われた初のホールツアー『BEAT out!』に続いて、夏に展開された初めての武道館公演を含む全国ツアー『BEAT out! reprise』の大阪ライブは、その観客との関係を「バンドが観客と一体化し過ぎて埋もれている」とレポートする結果となった。確かにバンドとしての成長も、アルバム『BEAT out!』の楽曲が二回目のツアーでスタイリッシュに変化を遂げていることも感じたが、ステージのメンバーと観客の距離が近過ぎてそれぞれが同等に溶け合ってしまい、グレイというバンドの存在感を感じられない。シングル「BELOVED」の大ヒットで世間からも注目を集めテレビや雑誌への露出も頻繁になっていた中、「グレイはアイドルになってしまった」などという声が編集部に届くことも少なくなく、だからこそそんな外野の声を笑い飛ばす、彼らならではのライブを過剰なまでに期待したのだったが…。残念ながら「まだまだ本数を重ねないと」という思いをぬぐえなかった。

その後3 rdアルバム『BELOVED』が完成。現在のグレイの勢いを詰め込んだ作品は、前作『BEAT out!』とはカラーが違い、ライブなどによって大きく変化を遂げる可能性をバンド同様秘めていた。そのアルバムを引っ提げての全国ツアー『BELOVED YOU』は、バンド初の33本というロングツアーに決定。とにかく期待は高まったが、半面本数が増えることで新旧入り交じった観客の前でのステージになることも予想でき、少々不安でもあった。

グレイと観客の関係が新しい形を見せた、初のロングツアー

96年12月8日の静岡市民文化会館を皮切りに、ツアー「BELOVED YOU」は幕を開ける。最初に見た12月20日の神戸公演は、ライブの構成、観客との距離などすべてにおいて「まだツアー序盤」という、内心にあった侮りを気持ちよく裏切ってくれた。

その約一カ月後の97年1月26・27日。神戸以降、武道館2公演を含む13本のライブを行ってきたグレイの大阪厚生年金会館2デイズが行われた。先月号にもレポートしたが、特に二日目の27日は、メンバーのライブに対する無垢(むく)なまでの感情がオーディエンスに伝わり、その感情を支配してしまうという、グレイならではのライブとして成立。前半を抑え気味に曲をしっかりと聴かせ、中盤「カーテンコール」「a Boy～ずっと忘れない～」というスローナンバーを挟んで、後半を激しいナンバーの応酬で爆発させるというメリハリを付けた構成が、観客を完全に飲み込んだ。前回のツアー「BEAT out! reprise」で感じた、両者が溶け合ってしまったような一体感もそこにはない。観客が戸惑うのではないかと心配するほど、ステージのメンバーそれぞれの個性が研ぎ澄まされ、よりクリアになって、客席に一方的に襲いかかり、観客もそれに負けじとこたえている。それはグレイのライブにおける観客との関係のまた一つ新しい形として、今後面白くなっていきそうな余韻を残した。

ところが2月10日に行われたツアー「BELOVED YOU ENCORE」の大阪追加公演では、それまでの20数本とメニューが変わったためだろうか。ステージからの衝撃が前回の2デイズに比べてパワーダウン。もちろん以前のように観客と一体化して埋もれてしまうわけではないし、きちんとグレイのライブを見せてくれてはいるのだが、そこにプラスアルファな何かが感じられなかった。一度覚えたおいしい味を私は二度と忘れることがない。そして同じものはもう必要ない。ぜい沢だ、わがままだと言われようが、それ以上のものを追い求めなければグレイのライブを観る楽しみも意味もなく、それは観客も、そしてメンバーも同じこと。これからも終わりのない追いかけっこは続き、だからこそライブは面白く飽きることがないということを、このロングツアーは教えてくれた。

こうして33本のツアー「BELOVED YOU」「BELOVED YOU ENCORE」は終了した。そして私は今さらながら、「ライブがバンドに与える影響は計りしれない」という当然の事実をかみしめている。そして今まで彼らのライブを追う度に(愛情たっぷりの)イチャモンを付け、ファンから「グレイが嫌いなら載せてくれなくてもいい」とまで言われた本誌としては、グレイを大きく飛躍させた今回のロングツアーこそ、メンバー自身に話を聞かずにはいられない。このツアーで感じたことをそのままぶつけ、そこで返ってくる彼らの言葉を通して、今後のグレイのライブへの期待を膨らませ、また彼らを追いかけなければならないのだから。

［文・山田純子］

personal interview TAKURO

●まず、今回のロングツアーについての感想を聞かせてください。

TAKURO(G):よくやったなと思いますね。俺、ツアーはあまり好きじゃないんですよ、実は。ライブは好きなんだけどホテル暮らしがダメで。ホテルの部屋が大っ嫌いで。だから、そういう意味では非常に辛い修行のようなツアーでした(笑)。でもライブでは一つひとつの反省点が、すぐ次に実行できるから、連続してあることにすごく意味があったような気がしますね。11日間とか2週間とか出っぱなしっていうのもありましたから。

●個人的なテーマって何だったんですか。

TAKURO:ライブの一本一本でギターの音色を探していったところが今回のツアーでした。前回のツアーは、そこまで余裕がなくてバンドのグループ感がどうとか、メンタルな部分がどうとかってあったけど、そういうのは今回は割とクリアしてて、ライブ前の気持ちはいつも一定に保つことができたんで。そういうところではギタリストとしての成長を確かめられたと思う。いつもライブが終わった後に、その日のビデオなりテープなりを全部チェックして、次のライブで気付いた点を全部直していくっていう。そういったことに時間を割いてる自分っていうのは今回が初めてでしたからね。

●私は2月10日の大阪厚生年金会館でのライブを観て、素直に「いいバンドになってきたな」と思いました。そこで感じたのが、HISASHIくんが派手なアクションを見せるギタリストなのに対して、TAKUROくんは寡黙なギタリストになったなって。

TAKURO:『BELOVED』は激しい曲がさほど入ってるわけではない、おとなしいアルバムだったから、それに忠実に。「深いところを探る」じゃないけど、そういう目標を持って旅に出たんです。だから、ただ楽しくやるっていうのが目標ではなかった。TERUがお客さんに「楽しくいこうぜ」って言うのは、一つのコンサートの思い出として楽しい印象が残ればいいなと思ってのことなんだけど、俺としては自分がクリアしなければいけないハードルが常に目の前にあったから、プレイにしてもハデなアクションでお客さんを喜ばせるってことは逆に抑えるつもりで33本やりました。だから、HISASHIとの対比で言えば、そうかもしれない。

●今回、撮影を担当したカメラマンがTAKUROくんに対して「彼は自分のスタイルを持ってる人ですね」って言ってたんですよ。

TAKURO:ほう。カメラマンの目っていうのは自分よりも、もっと客観視できるだろうし、奥深いものを持ってるでしょうからね。俺の知らない何かを見たんだったらうれしいな。でも、スタイルを持ってるというよりは、スタイルを確認してたんじゃないかな。「俺は何がやりたいんだろう、何が好きなんだろう」ってところでの自問自答みたいなものはありましたね。ライブで言えば、お客さんが100パーセント満足すればいいだけなのか、それともお客さんを置いていっても自分が目指すところまで行ければいいのか、そういうことを常に。だから、かなり冷静だった。キレて「どうでもいいや」って思ったことは一回もなかったから。

●冷静だけどTAKUROくん自身は自然だったんでしょ。

TAKURO:うん。例えば、ライブが試験の本番だとして、その前にリハーサルっていうお勉強する場所があったとしたら、今回はまだ勉強中なのかもしれない。公開リハーサルじゃないけど、勉強してる感じ。だから過渡期かなって気もする。『BELOVED』をメジャーデビューしての3枚目と考えたら、「3枚でひと区切りだ」って俺はずっと言ってたから、もうどっかで次を見てるのかもしれない。このバンドは次にどこへ行くべきなんだろうかって。

●TAKUROくんは『BELOVED』でアコースティックギターを弾いてますが、アコギを弾く時はエレキギターと比べて気持ちは変わりますか。

TAKURO:今回は『BELOVED』と新曲

HEAD FOCUS GLAY

TAKURO

インタビュー・村田圭子

の「May Fair」っていう二曲でアコギを弾いたんですけど、アコギを弾く時はバンドの一員っていう意識よりも、それこそ友達の家や自分の家で「新曲ができたから聴いてよ」って気持ちに近いですね。家で作る時はアコギで作ったりもするから。そういう、より身近な気持ちの変化はあるな。だからそれまでのエレキの時はカッコいいTAKUROを見せたいんだけど、アコギに変わった時は飾ってない普通の自分に戻った気がする。座るっていうのも、すごい変化がありますからね。だから、フランクな、フラットな、何とも言えない気楽な気持ちになる。

この一行を歌いたいがために、旅をしてるんだと思う瞬間があった

●「BELOVED」自体がツアーに対する思いとか、TAKUROくんの今の気持ちを詰め込んだアルバムだったから、それこそツアーのことを歌った「GROOVY TOUR」が一曲目にバーンと来て、まさに〝今〟って感じがしたんです。実際に演奏してる時はどんな気持ちでした?

TAKURO:どうしてこのことを歌いたかったのか、ハッと分かる瞬間ってありましたよ。例えば、〝暗闇の中で聴いた貴方の鼓動〟(カーテンコール)っていう歌詞があるとしたら、もしかしたらここにいる全員の鼓動を一つにして、気持ちを昇華する瞬間を見たかったから、この言葉が出てきたのかもしれないって思う日もあったし、違うなって思う日もあった。それに、この言葉はいらなかったなって思う時もあったし。そうやって自分の中で一つのスマートな、ぜい肉のないものになっていく。だから世に出した瞬間からそれはみんなのものだし、俺は一リスナーとして自分の中で解釈ができた。例えば「カーテンコール」はただのラブソングじゃなくて、もっと男の成長する、少年から大人になる生き様みたいなものが含まれてるなって。それはもしかしたら、あの時の自分から今の自分までの数年間のことかなとかね。書いている時はただのラブソングとしてしかとらえられなかったものが、みんなの前で鼓動を一緒に合わせて聴くことによって「あっ、かつての自分を見ているようだ」とか。この一行を歌いたいがために、俺はこの旅をしてるんだって思う瞬間もあったし。

●私は曲の中のある一行を聴いて無意識のうちに、まるで自分のことのように胸が締め付けられる瞬間がいくつもあったんですよ。

TAKURO:でも共感する、共感共感また共感みたいな歌には、もうそろそろみんなおなかがいっぱいかもしれないですね。なんかそういうことを、今感じた。割とグレイはだれもがいいと思われるメロディー、「そうそう、気持ちが分かる」っていうようなものが大半を占めてるかもしれないなって。でもそうじゃなくて、例えば、その人の気持ちが押し付けられて「なんだよ」って思うんだけど、そのイヤな魅力にハマっちゃうような、「自分は絶対こうだ」と思ってることを徐々に広げていく作業も、これからのグレイには必要かもしれない。

●今回は初めて行った所もあったということで反応はどうでした?

TAKURO:バラードなんかで手拍子するしないっていう問題が前々からグレイの中であったけど、初めて行った場所でそういうことがあっても、俺の気持ちはそれほどイヤになったりしなかったですね。逆に口汚く「静かにしろ!」って叫んでる子を見てテンション下がったり。MCを全然聞かないで名前ばっかり言ってる所もあったけど…そのことをどうこう問題視するよりも、いいコンサートを観せて、グレイのライブのルールとか、そういうものを無言のうちに教えようかなっていう気持ちでやってた。逆に「どこどこのライブのファンのマナーは最低でした」って言われると、俺がそいつに対してスゲエ頭にくる。俺が自分の親の悪口は言ってもいいけど、人に言われると腹が立つみたいなね。ほんとにうれしそうに手拍子なんかしてると、静かに聴けって言葉で言うよりも、今は黙って演奏して何かを伝えよう、次は静かに聴いてくれよなっていう、「みんなを愛そう」という気持ちはあったかもしれないな。「次もまた必ず来るからさ」って。だから「GROOVY TOUR」で〝一期一会だ〟って歌ってて、確かにそうなんだけども、もしかしたら極端なものの言い方だったかもしれないなといった気持ちの変化もあったりして。でもそれは、グレイの成長がどうこうっていうんじゃなくて、これは俺個人の気持ちの成長だと思うから。

●でもそれは、それだけライブを重ねてきたから変われたってことですよね。

TAKURO:いろんなものに自信があるから。横で歌ってるTERUをすごく頼もしく思ったり、自分たちが育ててきた曲たちにすごく自信があったりということで、そこで諦めないっていう気持ちがね。もっと根気強くなったんだろうし。そういうところかな。

人間的にも、この長い旅で大きくなった

●今回は東京を離れる期間がいつもより長くて、少しは自分の時間が取れたんじゃないですか。

TAKURO:自分の時間って、それこそ自分の机に座らないと勝手が違うから仕事ができないみたいな。地方行ったからって別にそこの名所が観たいわけじゃないしね。しかも明日のライブに関しての問題が山積みになってるから、ホテルの中で、曲作ったりフレーズを考えたりして煮詰まったりしたし。楽しかったのはリハーサルとライブの本番の二つだけ。後はもう駅も裏から入って、ホテルも裏から入って、会場も裏から入って、閉め切った車の中での移動でしたからね。その分、夜に飲みに行くのも多かったですけどね(笑)。15時間おきに酔っぱらって、しかも泥酔してた(笑)。

●体は大丈夫だったんですか。

TAKURO:いやー、最後はきつかったですけどね。でも、楽器を置いてる飲み屋で、もうさっきライブが終わったばっかりなのに、俺とTERUとD・I・E・さんでセッションが始まって。昔の曲からずーっとやりだしたりとかね。それをスタッフとか他のメンバーに延々と聴かせる(笑)。すっごいボロボロのピアノと、ボロボロのギターで。TERUがガーッと歌ってね(笑)。

●このツアーでバンドとしての成長を実感したことってありました?

TAKURO:TERUが調子悪い時に後ろの楽器隊全員が、それを補うようにフレーズ入れたり、動いたり。ボーカルはテンポを上げると歌いやすくなるから、今までのテンポよりもちょっと後半上げたりっていう、その辺の対応ぶりはものすごいものがありましたね。あと、だれかの音が出なくなったら、それを補うフレーズがすぐ出るとか。長いツアーだったから体調悪いやつもたくさんいたしね。それは多分バンドでしか見られない、いいものじゃないかな。だから人間的にも、この長い旅で大きくなって、そういった人を気遣う細やかさも随所にあった。

●バンドとしての親密さが、さらに深まったと。

TAKURO:そうですね。だから最初に掲げていた目標として〝素のままで、どこまでカッコいいか〟ってことは気持ちの中にあったんじゃないかな。

●新たにやりたいことは出てきましたか。

TAKURO:これだけ素なバンドで自信がついたから、今度はライティングと自分たちの動きをちゃんと計算した上で、もっと作り込んでやりたいですよね。で、曲なんかはもっとシンプルなバカロックみたいなやつをやって、その中でちゃんとした作り込んだビジュアルとそれに付随する作り込んだメッセージっていうものを考えたいと思いますね。

キレて「どうでもいいや」って思ったことは一回もなかった

personal interview JIRO

HEAD FOCUS GLAY

JIRO

インタビュー・山田純子

●今回はグレイ初のロングツアーだったわけですが、JIROくんにとってはどういうツアーでした？

JIRO(B)：自分の中では最初「もっときちんとしたコンサートをやっていきたいな」と思ってて、メンバー全員もそういう気持ちで臨んだんですけど、ツアーの最初の方で「もっと暴れたい」とか「やっぱりまだ大人にはなれない」とかそういう声がいろいろ出てきて…。今回のセットはドラム台とベース台とキーボード台があって、前半戦は絶対にその上の方で弾いてたんですよ。それで客観的に他のメンバーを見たりして演奏重視でやれてたんですけど、TAKUROくんから「JIROが楽しそうじゃない。何か悩んでんの？」って言われて。それは単純に俺が暴れなかったからなんだけど、俺の中では演奏面を重視したコンサートをやりたかったし、バンドのボトムがしっかりしていくことに満足を得てたから、言ってる意味が全然理解できなくて…。でも、そういうふうに見えてるってことは、TAKUROくんの中にも何かふっ切れないものがあるだろうから、「分かった。だったら、ガンッといこう。ホールってものを考えないでとことんやっちゃおう」って。

●それはいつぐらいですか。

JIRO：神戸(7本目)あたり。早いうちからミーティングはしてたんですよ。だから今回のツアーでは、あのころが俺の中で何かがふっ切れた時でしたね。

●アルバム『BELOVED』が完成した時に、「グレイにはヒットチャートに昇るような曲もこんなハードなカッコいい曲もあるんだってことを示せた」って言ってましたけど、それは今回のライブでもとても分かりやすく伝えられましたよね。

JIRO：そうですね。前半二曲でつかんで、聴かせて、また後半に「BELOVED」や「グロリアス」しか聴いたことない人なら引っ繰り返るんじゃないかっていうぐらいハードなものをやったから(笑)。それに今回は「HIT THE WORLD CHART!」の途中の遊びとか、俺と永井(利光)さんがカウントしないで目の合図だけでバンって入ったりとか、いろいろアドリブを楽しむこともできた。あと、アンコールツアーの時の「カーテンコール」から「HIT THE WORLD CHART!」に行く時のカウントなしで突然入る作戦とかね(笑)。人に言わせると、「メンバーが楽しんでることは、お客さんに理解できないかもね」ってことだったけど、それはそれで俺らが楽しいからいいやって。

●うん、その楽しさは十分客席に伝わってきてたと思います(笑)。

JIRO：おっ、良かった。今日は何かしんないけど、たたかれる覚悟で来たのに(笑)。

●だってJIROくんがツアー前にこうしたいって言ってたことは、かなりできてたじゃないですか。まあ、最初にやろうとしてたことから変わった部分もあったんでしょうけど。

JIRO：最初は納得できなかったけど、実際アンケートや手紙なんかを読んでも「あんまりこっちに来てくれなかった」とかあって、今回はそうじゃないんだと思いつつも、前とのギャップが激し過ぎたかなとも思ってた。だから今になってやっと理解できたなと思いますよ。グレイってバンドのもっと骨っぽいところを見せたかったんだけど、お客さんはもっとポップなグレイを見たいと思ってることとか。自分の見られ方とか。今回のツアーでそれがすごく分かりました。

●ステージ上でのJIROくんは、メンバーからどういうふうに見られてるんでしょうね。

JIRO：よく分からないけど、俺が沈んでるとすぐメンバーに影響しちゃったりするかな。そうなるとお客さんにも伝わっちゃう。

●責任重大ですね。

JIRO：多分俺が表面的に起伏の激しい人だから。みんなはそれを表面的に見せなかったりするんだけど、俺はむかついたらむかつく顔をするし、楽しけりゃ楽しい顔をする。結構気を使う部分があったのかもしれないですね(笑)。だからそうなるよりも俺が盛り上げて、もっとTERUを走らせないといけないなと思います。

●いろんなバンドが長いツアーの途中で中だるみに陥ったり、精神的に落ち込んだりするんですけど、グレイはどうでした？

JIRO：そうでもなかったですね。確かに周りの人たちは絶対にグチャグチャになる時が一回あって、それを乗り越えると後半うまくいくって言ってたんだけど…俺らは

相変わらずで(笑)。その辺はみんなうまく自己処理してたかもしれないですね。
●JIROくんは、どうやって処理してたんですか。
JIRO:とことん飲んで、オフの日にはCDを山のように買ってとか。
●東京にいたらハードスケジュールをこなしてるわけだから、逆に地方を旅する生活が新鮮だったとか?
JIRO:外に出られれば一番良かったんですけどね…。でも長崎では外に出ました。着いた時から「何かすごい街だな」って引かれるものがあって。で、ライブの前に早起きして一人で観光してきた。あそこは全国の中で一番印象的でしたね。日本とオランダと中国の文化が交ざってるから、変で変でしょうがなくて。カメラを持ったのなんて、ロンドン～アイスランド以来ですよ。

オープニングで写真撮られて怒らないヤツはいない

●長いツアーの中には良かったライブもうまくいかなかったライブもいろいろあったと思うんですけど、その中ではやはりプロ意識みたいなものも培われるんじゃないですか。
JIRO:そういう意識はどっちもどっちだなと、今回のツアーで思ったんですけどね。前だと怒りも表に出しちゃったり、もう今日はダメだと思うこともあったんだけど。今は何かプロとして使命感みたいなものがあるんですよ。やっぱりお客さんに気を使われるのもヤだし、怒ってるからって怒ってばかりいても見てる方は絶対つまらないし。…そうあってもプロとしてのやり方をうまく見せたい。うちのバンドのスタイルからしてそういう感情をうまく出すのはいいんだけど、それがマイナスだとよくないと思う。
●お客さんにとっては一年に何回かしかない特別な日だし、バンドにとっては成長の場だし難しいですよね。
JIRO:それは絶対思うんですよ。でも前半戦であったんだけど、オープニングの幕が落ちた瞬間にいきなり写真を撮られた日には、怒らないヤツはいないだろうっていう。それをステージ上からも怒ったりするんですけど、やっぱり事前にカメラチェックとかをきっちりやってほしいと思って。それ以降は「何と思われてもいいからしっかりチェックしてくれ」って口を酸っぱくして言った。その写真を撮った一人のために、自分のテンションが下がるのがすごくイヤなんですよね。その程度のことで怒らなきゃいいんだろうけど、それを見過ごすのもイヤだったから。今回、俺はライブにおいて何がイヤだったか考えたら、写真ですね。せっかくきちんとおちゃらけた表情とか見せないで、カッコいいものを自分たちでしっかり選んで雑誌とかに出してるのに、そういうのを簡単に撮られてしまうのってすごく辛い。
●ライブでもスタジオ写真とは違うカッコいいものを見せることができますもんね。今回のステージではシンプルなセットに、衣装も黒で統一するという演出がしっかりされていたし。
JIRO:そう、その辺も結構考えたんですよ。今回のツアーではまずバンドにスケール感を付けたいってみんなで話してて。で、衣装がバラバラでチョロチョロしてるっていうよりも、全員同じようなものなんだけど、それでも個性が出るみたいな感じにしようって。着るもので表現する個性なら雑誌なんかでいろいろできるしね。
●今回は最新作『BELOVED』が中心だったんですけど、ライブのポイントには昔のアルバムから「ACID HEAD」や「BURST」が登場することはどう思ってますか。
JIRO:もうお約束になってますからね。
●そうなってることに抵抗はない?
JIRO:それはない。まあ、アンコールの「BURST」で帳尻を合わせるような感じがイヤだったんで、今回のツアーに入る時「やめようか」っていう話をしてたんですけど、やっぱりお約束曲は俺の好きだったバンドのどの人たちもやってるから。ボウイが1stアルバムの作品をラストギグスでもやっちゃったとかね。
●逆に楽しむ感じですか。
JIRO:うん、それに「ACID HEAD」や「BURST」をやると、すごく自分たちのバンドがパワーあるんだなって感じられる。特に「ACID HEAD」なんか知らない人とかもいて、最初は全然盛り上がってなかったんだけど、だんだん盛り上がってくるのが楽しくて。だから飽きないのかもしれないですね。
●あとツアーの前半、読者から怒りの手紙が来てたのが「どうしてグレイの開演はいつも遅いのか」っていう内容のもので。
JIRO:セッティングが押すんですよね。やっぱり会場によっては搬入口がすごく小さいところとかあって、いろいろ大変なんです。だからファンの人もヤだろうけど、俺らはもっとイヤなんです。…でも板挟みなんですよね、俺らも(笑)。今回って全部会場の一番後ろの席に行って「客はこういうふうに見てるんだなあ」っていう感触を確かめてきたんですけど、意外とステージから見てる時の方が遠かったりして、だから逆に三階席の後ろ以上に送るぐらいの気持ちでやることができたんです。で、そんな時にまだスタッフが照明のセットをやってたりするんですけど、数ミリのズレまで気にしてみんなやってくれて。それを見て俺らも頑張らなくちゃって思えた。

グレイは型にはまってないバンドなのかなって気がする

●ツアーの前半でJIROくんがやろうとした演奏重視のライブってものは、今後やってみたいことの一つになってくるんですか。
JIRO:そういう部分も後半にはうまい具合にできたなと思いますよ。押したり引いたりっていう駆け引きはできるようになったんで、それはあんまり考えてやることじゃなく、もっと自然にできていくことなんだって分かった。
●そういうことが今回のライブで分かったのはどうしてなんでしょうね。
JIRO:お客さんに求められる自分と、自分が本当に見せなくちゃダメな部分っていうのが、自分で理解できたからじゃないかな。
●今後はそのバランスを取りつつ、ライブで見せていこうという感じ?
JIRO:うん。でも、よく言う「いい意味で裏切った」とかね。そういう感じで(笑)。多分今回のツアーでみんなが俺に期待してたのは、俺の髪の色だったり髪型だったっていう部分は少なからずあったと思うんですね。まあ、自分もそれにこたえたいなって思うし、こたえる面白さも裏切る面白さも知ってるんで、「分かった。でもコスプレを増やしたくないからモヒカンにしてやろう」とかね(笑)。
●そういう「やってやろう」が原動力になり、どんどんアイデアも出て来る。
JIRO:そうそう。何においても期待されなくなったら、バンドとして魅力なくなったのかなって思うだろうし。
●では、最後にこのツアーを終えてグレイは今後どうなりそうですか。
JIRO:33本もやれば途中でゴタゴタするとか言われたけど、別にそういうのもなくて、そういう意味じゃ俺らは型にはまってないバンドなのかなって気がする。煮詰まることは煮詰まるんだけど、昔みたいにとことんナーバスになる感じでもなかったし。だから次はまたアルバムを作るのが楽しみになってきた。『BELOVED』はミディアム系が多過ぎたなってバンドで話してて、ツアーでも激しい曲は前のアルバムから引っ張って来たり頼ってたんで、次はもうちょっとバランス良く作れたら、ライブにメリハリがつくだろうなと思ってます。

客に求められるものと、自分が見せるべきものが理解できた

personal interview TERU

●今回のツアーが始まる前のインタビューで、TERUくんは「前回は客席とステージが密着し過ぎてたから、次はその距離を考えたい」と言ってたんですけど、今回のツアーはその客席との距離感がうまく取れたんじゃないですか。

TERU(Vo)：今までとの感覚の違いだと思うんですけど、今まではライブハウスのノリでやってたんですよ。「ホールがライブハウスに見えるようなライブをやりたい」って。だから客との距離感っていうのも、ライブハウスのりで考えてたりして。でもそれが今回はホールで33本ということもあって、「大きなホールをどう消化していくか」っていう感覚に変わった。ホールでやるんだから見せ方も伝え方も違うだろうって気付いたんですね。

●ステージと客席に距離が保たれていても、十分に観客を楽しませたライブでしたよね。

TERU:ライブが始まる前からステージ上での雰囲気作りをすごく心がけていて。それは「俺たちが楽しければみんなも楽しいだろう」って感覚を持ち始めたからなんですよ。今までだったら客を乗せてその反応を見て、それで俺たちは楽しくなるんだっていう感覚だったんだけど、客との間に自分たちで線を引いてステージの上は俺たちのものだって。それをみんなが見て聴いてくれることで、俺たちが「来い」って言わなくても来てるような状態を生み出すような感じだった。

●でも、今までとはかなり違う雰囲気なだけに、客の反応に不安はなかったですか。

TERU:あっ、それはない。それはきっとその子たちが自分たちの楽しみ方をだんだん分かってきたからじゃないかな。俺たちが発するものをただ受け止めるんじゃなくて、俺たちが「来い、来い」って言わないなら勝手に行っちゃうぞって、そういう感覚。これが気持ちのキャッチボールってものなんじゃないかなと思うし、それはすごく面白くなってきた。

●ボーカリストの見せ場であるスローナンバーの二曲「カーテンコール」「a Boy」でもキャッチボールはうまくいきました?

TERU:今回は全体的に無理に止めようとは思わなかったんだけど、一度だけ演奏自体止めて「ちゃんと聴いてほしいんだ」って言ったことがあった。やっぱり最初から最後までちゃんと聴いてほしいし、それを聴きに来てる子たちもたくさんいるからね。だからちょっとした手拍子や歓声で歌を壊されると…。あそこだけは「俺の思うがままにやらせてくれ」っていう場所だし、歌で聴かせる場所っていったらあそこしかないし。

●この点に関しての今後の課題ってありますか。

TERU:課題っていうか、もうそうなったら止める。それが改善策。

●今回のTERUくんは、それ以外の時にもはっきり意思表示してましたもんね。神戸では「写真撮るなよ」って言ってたし。

TERU:うん。だってね、例えばコップに入ってる水をこぼした時、だれかが「それふかなきゃダメだよ」って言わないと、ふかない人もいるわけじゃないですか。だからライブでもそういう人がいるんだってことを考えて、ちゃんと言わなきゃダメなんだなあって。ただそうしてくれることを待つんじゃなくて、ズケズケ言っちゃおうって思ってる。それぐらいでライブの流れが壊れるぐらいだったら、そういうバンドでしかないってことだし(笑)。逆にそこで流れを変えることもできるだろうしね。

歌を歌うことにおいては自分がどんな状態でも全部一緒

●今回ボーカリストとしては、長いツアーだけに大変だったでしょう?

TERU:そうですね。だけど基本的に歌えるレベルまでは全部持っていけたかな。声が出なくてダメな日はなかった。

●本番前のリハーサルではいつもどういう調整をしてたんですか。

TERU:多少抑えてますけど、本番さながらで歌ってます(笑)。やっぱりリハの最後の二曲ぐらいは、きちんと会場での音のレベルを合わせないと、本番のオープニングでいきなりモニターの調子が悪かったら、それだけでテンションが変わるからね。

●やはりリハーサルはかなり気合を入れて。

TERU:でも、開場が押すのはそういう理由じゃないですよ(笑)。

●せっかく話が出たんで、その点に対する意見を聞きましょうか。大阪のアンコールで「早く帰らないと親に怒られるぞ」って言ってたから、「開演が遅れて帰るのが遅くなって怒られた」っていう手紙が来てるんだろうなと(笑)。

HEAD FOCUS GLAY

TERU

インタビュー・山田純子

TERU:アハハハハ。まあ、そういう手紙はよくもらいます。だけど会場の大きさとかの関係で遅れたのは本当ですからね。ただ、親に怒られても本当に良いライブだったらガマンできるんじゃないかな。だって俺が高校生のころだって楽しいことがあって夜ふかしして怒られても、「楽しかったからいいや」って思ってたしね。

●逆にそれだけのライブを見せないと。

TERU:そう、それはすごく思ってます。

●さっき「歌うところまでは自分をキープできた」という話だったんですけど、アンコールツアーの大阪はTERUくんの調子が悪そうに思えて。

TERU:遊び過ぎかな(笑)。

●何てことを…(笑)。

TERU:でもね、調子悪いぶん何かでフォローしようと思うから、すごく感情的な歌になったりするんですよ。だから声が出てる時は出てる時でこの声を維持してもっと広げたいって思うし、声が多少出辛い時は「声だけじゃない、もっとすげえものを見せてやる」みたいな感じで、感覚がグッと変わる。

●そんな時の方が逆に意識が飛んでしまったり？

TERU:うん。特に声が出辛いほど意識が飛ぶ。もちろん気持ちいいときはそれでまた飛ぶんですけどね。

●意識が飛ぶとどうなるんですか。

TERU:MCとか何を言ってるのか分からなくなります(笑)。話すことは決まってないし、考えてても本番になったら全部忘れちゃうから、その時の自分を最大限に出せればと思ってますけど。ただ今回一番困ったのがね、33本という大きなツアーだったんで、その中の何本かを見に来る子たちっているじゃないですか。すると「メニューが変わってない」って文句タレるヤツがいるんですよ。だから「何回も見に来る子たちばかりじゃないってことが、何で理解できないんだろうなあ…」ってすごい思った。同じ曲だっていろんな表情があるのに、何でそれが分かんないんだろうとも思ったり。俺はその日の自分の言いたいことだとか、雰囲気とか、気持ちで、「ああ、今日もまたいい歌が歌えた」って思えたからね。

●でも、そんなメンバーそれぞれの気持ちやテンションが、長いツアーの中ではライブの出来に大きく影響するわけで。それをステージで見せないのがプロだという見方もありますけど、TERUくんはそういうところをどう思ってます？

TERU:そういうプロ意識みたいなものが過剰になり過ぎると、空回りするんですよ。プロだからこれはやっちゃいけないとかこうしなくちゃいけないとか、そういう制限もどんどん出てくるし。そういうものを取っ払うことこそ、自分にとっていいことなんじゃないかなと思う。もともと俺ってそういう人間じゃないですか。自由奔放ですから(笑)。だからそういうものは意識しないようにしようかなと。だけどやっぱり見られることや演奏に関しては、ちゃんとプロ意識を持ってなくちゃいけないと思います。それがないとお金をもらう理由がないし、もしプロ意識が全くなくて自分たちのやりたいことだけをやるんだったら「タダで見に来てください」ってことになるんだろうから。

●自分の体調やテンションを気にして枠にはまるより、聴いた人がどう感じてくれるかが大切だという。

TERU:そうそう。本当に自分の声の調子が悪くても、伝えたいことが伝わってくれたらすごくうれしいし。歌を歌うことにおいては、自分がどんな状態でも全部一緒のような気がする。それでも本当にダメなライブだと思ったんだったら、署名でも集めてくれればもう一回行くよって(笑)。それぐらい自信を持ってやってますから。

ライブの中で遊びたくてしょうがない

●今回「HIT THE WORLD CHART!」のアレンジを変える遊びの部分がその日のアドリブだったり、アンコールの「BURST」でD・I・E・さんがステージセットに昇っていったり。何においてもボーカルは大変そうでしたけど、ああいうところでバンドが見えましたね。

TERU:うん、今ああいうことがすべて自然にできるんですよね。ライブの中で遊びたくてしょうがないっていう。

●でもそれを単なる自己満足で終わらせずに観客をしっかり楽しませたのは、バンドの大きな成長なんじゃないですか。

TERU:そうですね。自己満足で何も伝わらないほど、悲しいことはないですからね。今回のツアーではたまにちょっとコミカルな部分も見えたりしたんだけど、そういうところもグレイにはあっておかしくないと思う。HISASHIがいきなり倒れて、「HISASHI!　HISASHI!」って呼ぶと立ち上がってきたりね(笑)。一年前のグレイだと、ああいう部分は意識して排除してたから、絶対できなかったんだけど。

●でも、ふざけてるように思えたり、それまでのライブの雰囲気が壊れるってことはなかったですよ。

TERU:ホント？　俺たちは楽しくて楽しくて仕方ないだけなんだけどね(笑)。

●楽しむなら徹底的に楽しむ。中途半端じゃダメってことでしょうね。

TERU:うん。一番怖いのが中途半端で終わること。例えばサザンオールスターズがライブでハゲヅラかぶったりしてますけど、本物に見えるようなヅラをかぶっちゃったら面白がるより「本当にハゲたのかな？」とか別のところに意識が行っちゃうでしょ。そういう微妙なバランスや違いは、自分たちでライブをやりながら勉強しないといけないなと思ってますね。

●今回もいろんな面でかなり勉強になったと思いますけど、TERUくんが得た一番大きなものって何でしょう？

TERU:得たものっていうか、一番理解できたことは、お客さんにいろんな人がいるってこと。年齢の差とかじゃなくて、気持ちの持ち方は人それぞれっていうか、すげえ乗ってるんだけど恥ずかしくてただ見てるだけの子たちもいるし、ただ騒ぎに来てるだけの子たちもいたりね。今まではみんなが思うことや感じることは、一緒なんじゃないかなって気がしてたの。でもいろんな所を回って、やっぱり場所によって客層も違うし、乗り方も違うんだなって。

●こうやって話を聴いてると次のライブを期待するなと言う方が無理ですね(笑)。

TERU:次はね、客席を無視(笑)。あんまり客を考えないようにしたいなって。いろんな人たちがいるって分かったんだから、もうノリ方は関係ないし、どうでもいい。ただ俺たちはステージで楽しくやるからねって。

●今回のグレイのライブを見て、やっぱりバンドってライブでいろんなことを吸収するんだなって改めて思いました。

TERU:そう。ライブをやってる最中には分かんないんだけど、あとでビデオを見たら分かることがいっぱいあった。それを繰り返すと、自分の見せたいところが分かってくるんですよね。「あっ、これカッコいい。ここをもっと膨らませて見せたいな」とかね。だからそういうのは今後も自分なりにどんどん改善して。きっとそれがね、もっともっとグレイを大きくするきっかけになるんじゃないかな。だから次は、個人個人がすごくやりたいことを自由にやって、そのパワーをまとめた時のすごさっていうのを見せたい。…それはソロ活動とかじゃないですよ(笑)。

●分かってますよ(笑)。

TERU:きっとジェイロックだと「ソロ活動を始めるかも」とか書かれたりするかもしれないから(笑)。そうじゃないですからね(笑)。

「俺たちが楽しければみんなも楽しいだろう」って感覚を持ち始めた

personal interview HISASHI

HEAD FOCUS GLAY

●今日はツアーの総括として話を聞きたいんですけど、グレイにとっては初めての長く大きなツアーでしたね。

HISASHI(G)：始まったのは12月の初めごろだったんですけど、今考えると全然違ってたなあって。まだアルバム「BELOVED」に慣れてなかったから、演奏を聴かせてステージングもこなしてちゃんと見せてっていう方に必死で、自分たちの曲を聴きながらのライブができてなかったんですよね。でも今年に入ってツアーが再開されてからは、曲に入り込んだり歌詞がどんどん耳に入ってきたりっていう、聴きながらできるコンサートになったから良かったと思います。

●ツアーが始まってからメニューをどんどん変えていったそうですけど、そういうのも聴けるライブができるようになった要因の一つだったり？

HISASHI：前回のツアーとかだったら「お疲れさま～」で終わりだったんですけど、今回はビールを飲む前に「今日はあそこがああだったよね」っていう話が自然とライブ後の楽屋で生まれる雰囲気があって。

●今まではなかったんですか。

HISASHI：なかったです！「いやあ、良かった、良かった」って。「さあ、飲もう」って感じ(笑)。でも今回はやるごとに悪いところも出てくるし、それを良くもできるっていうツアーだったんで、話し合って改善を毎回のようにしていましたね。

●それが長いツアーでの新鮮さを保ってたんですかね。

HISASHI：そうですね。ずっと「まだ失敗できる」って気持ちがあって。失敗するってことは、失敗したってことに気付いたってことだから、どんどん改善されていくんですよね。だから出来の悪いロボットをどんどん精密にしていくような、そんなツアーでもあった。

●今回のツアーはいろんな面で大きく成長しましたもんね。前半抑え気味の曲順で、メンバーも観客をあおったりせずクールに演奏してたのは印象的でしたよ。

HISASHI：そうですね。でも、やっぱり基本的な概念としてコンサートは盛り上がるものっていうのが頭にあっただけに、今回のああいう選曲や曲順には最初とまどいがありましたけどね。

●そうなんですか。

HISASHI：当たり前のように前半盛り上がって、中盤ちょっと抑える、それがライブだっていう感覚ができ上がってただけに、リハーサルをやってる時は「大丈夫なのかな？」って。でも楽しくやれましたからね。例えば前半のミディアム系の曲が多いところって、実は自分の中ではすごく盛り上がってたりするんですよ。どうしても引っ掛かる言葉があって、そのお陰で気分が高まったり。そういうことはやってみて初めて気付いた。

●そういうライブもあるんだという。

HISASHI：そう、ちょっと引いたところでのライブ。見せ過ぎないで、自分の中でためて、それをバンドにどう反映させるかっていう。そこら辺は秘かな楽しみでした(笑)。だから今回のツアーをやって昔からグレイが言われてる「後半からエンジンがかかったね」っていうのは、逆にグレイの持ち味だと思い始めたんですよ。あえてそれを狙ってそれができたっていうのは、また一つグレイのコンサートの流れみたいなものを確立したんじゃないかなって。

●ツアーの中で私は関西方面で行われた4本を見せてもらったんですけど、HISASHIくんに残ってる一番の印象がアクシデントが多かったってことで(笑)。

HISASHI：アハハハ。そう、毎回大阪ってツイてないんですよ。

●例えばギターのストラップが切れて、どうしようもなくなってTERUくんに抱きついたり(笑)。

HISASHI：ワハハハ、そうだぁ～。俺、ギターがないと子供のようにおびえちゃうんで(笑)。

●ああいうことってごまかせそうにも思えるんですけど、HISASHIくんって身ぶり手ぶりで「これがこうなったから俺は困ってるんだ！」っていうのを伝えちゃうじゃないですか。

HISASHI：そうなんですよ(笑)。でもね、アクシデントがあったら「しめた！」って思いますよ。うれしいですね。ストラップが切れた時はさすがにビックリしましたけど。そういえば俺ってそういうのが一番多いんですよね。前回のツアーではステージの上ですごく神経が過敏になってて、いきなり袖に戻ったりしてたんで、それを反省してたんですけど、やっぱり治らない。だか

HISASHI

インタビュー・山田純子

ら例えば怒ったりもするだろうし、おどけたりもするだろうけど、それは逆にいいんだと思って。そう思ったから今回はそうしたんでしょうね。

●今回はステージのメンバーのいろんな感情が、ストレートに伝わってくるライブでしたからね。

HISASHI：人間ってあまりそういう感情を出すことがないと思うんですよね。例えば俺が普通に仕事とかしてても、怒った時もすごく楽しくてうれしくてしょうがない時も、その何パーセントも表には出せないような気がするんです。でも、なぜかステージ上だとそれが出せるし、許されてる。ホント天職だなと思います。

●今回は長いツアーということもあって、ライブの構成や見せ方などいろんな面で、バンドとして得たものがたくさんあったと思うんですけど。

HISASHI：一回すべてをブッ壊しちゃうことって大事だなって思ったんですよ。常にマイナーチェンジを繰り返すんじゃなくて、一回概念を壊してからやりやすいようなチェンジをしていくっていうのは、すごくバンドのためになるし、音楽じゃなくても何か人間性とか精神的にも考え方とかも変わるだろうし。それは何にでも言えるんじゃないかな。人生でも、車でも。

●でもそれって勇気がいることですよね。

HISASHI：そうですね。でも、自信があるから(笑)。例えばクラウチングスタートを初めてやった人ってすごくバカにされたんですけど、スタートダッシュの速さとかが分かって有名になってみんなやり始めた。それぐらいの自信が俺の中ではあるんですよ。最初はどんなにバカにされてもいいと思うし、それがあまりにも変だったらそれを徐々に変えていくっていう。

だれにも言わないで考え込んじゃってた

●今回はアドリブが多いライブだったし、その日だけしか見られない聴けない瞬間がいっぱいあったでしょ。

HISASHI：そうですね。「HIT THE WORLD CHART!」の遊びの部分もリハーサルはやるんですけど、絶対にみんな本番で同じことはやらない。毎回ステージで「やられたぁ〜!!」と思いながらついていくんですけどね。例えば4小節ぐらいあってみんなで入るって感じなんですけど、その4小節の中で自分の引き出しをどんどん開けて、「ない!ない!ない!これかなあ?」とか(笑)。あれは、ホント面白かった。

●残念ながら私は「HIT THE WORLD CHART!」のHISASHIくんバージョンを見られなかったんですか。

HISASHI：最初に俺の番が回ってきた日というのが、13日の金曜日だったんですよ。で、これはちょっとダークなやつをやるしかないと思って、ものすごいドロドロした感じのやつをやったり(笑)。

●そういう楽しい部分もたくさんあったと思うんですが、やっぱり長いツアーでは体調が悪かったり、テンションが低かったり、自分のコントロールが難しい時もあったのでは?

HISASHI：ツアー中に「何だか今日のステージはかみ合わないなあ」って思った時があって、「何が悪いんだろう?」って考えたんですよ。そしたら長いツアーの中で、夜もあんまり飲みにいかなかったり、メンバーともほとんどしゃべらなくなったり、ずっとホテルでインターネットばっかりやってる状況になってて、それで自分自身が煮詰まっててすごくたまっちゃってた。で、記念すべき日があったんですけど、「俺はこう思うからこうなんだよ」って酒飲んでる時にメンバーに全部話して。すると実は一個一個がすごく簡単に解決できることだったんですよ。それをだれにも言わないで一人で考え込んじゃってた。俺って毎回ツアーでそういうことが絶対あって、それがすごく切り替わる時期でもあるんですけど。

●知らないうちに自分の中にためてしまうタイプ?

HISASHI：そうですね。何かね、メンバー間でもあまり感情を激しく表現するのは得意じゃないんです、俺。だから結構ためちゃう。

●でも、それが長いツアーの途中だったりするとかなり辛いでしょ。

HISASHI：うん…、やっぱりそういうのはステージで分かりますからね。それにみんなが楽しそうに盛り上がってるのに、自分だけ楽しくなくて盛り上がれなかったりね。それが一番悲しくなるんじゃないかな。そういう時のステージをあとでスタッフに聞くと、必ず「今日はあんまり盛り上がってないようだったね」って言われるし、一人のせいでバンド全体がそう見えちゃうから「これはいかん!」って。

●その一番の解消法はやはりメンバーへの相談?

HISASHI：飲みにいって、マジメな話やふざけた話半々ぐらいのそういう話し合いをすることが、自分には必要なんだろうなって思います。そうすると次のライブは今まで以上のものができたりするし、それが答だと思うんですよね。それにイベンターの人にしてみれば困るっていうのも分かるんだけど、あまりにも無菌状態でいるのはちょっと(笑)。だから今回も結構遊びにいきましたよ。どこかでは、よく地方にあるボーリングとビリヤードとゲーセンが全部一緒になってる所に行って、永井さんとかとパターゴルフやって「外は気持ちいいなあ」って(笑)。すぐにファンの子が集まっちゃったんだけど、そういうちょっと危ないこともやった方がいい。まあ俺らにしてみれば空気の入れ替え程度なんですけどね。

今度はグレイに帰ってくる番じゃないかなと思う

●今回ライブ中はギターの持ち換えとかすごく多かったんですけど、ソロなんかでは急に男の子が背伸びしたり、双眼鏡でのぞき始めたりして。

HISASHI：はずせないなあ(笑)。

●でも、それを見てるとHISASHIくんがよく言う「あこがれのロックバンド」にグレイがなっている瞬間なのかなって。

HISASHI：うん、今はそれにこたえたいって気持ちがすごくありますよね。だから感情を込め過ぎたチョーキングとかもあったけど、それはそれでギターキッズなかは「やるなあ」と思ってるだろうなって(笑)。ライブでは男の子だけのかけ声なんて難しかったりするけど、それは俺も分かるんですよ。だってコンサートとか行っても必ず一番後ろにいたりしますから。「そこのオマエ!」とか言われたら、俺も絶対イヤだなあって(笑)。分かるんだけど、何か女の子に埋もれてる男の子をちょっとひいきしてあげたいって気持ちもあるんだよなあ(笑)。

●33本というツアーを終えて、HISASHIくんの中にはまた新しいロックバンド像っていうか、グレイというバンドの理想が見えてきたんじゃないですか。

HISASHI：今度は逆にグレイに帰ってくる番じゃないかなと思うんです。今回はメンバー一人ひとりのあからさまに違うところが出せたっていうのがあったんですけど、それをグレイに持って帰って来ようって。そうなることによって、もしかしたらもっとメンバーの個性が引き出されるかもしれないし、グレイの核となるところがもっと太いものになっていくんじゃないかなって。だから次のツアーまで結構時間があると思うんですけど、それまでは一人ひとりがいろんなことができて、いろんなことを吸収する時期だと思うんですよね。それで結果的にはグレイに「ただいま!」っていろんなことを持って帰れるようにしたい(笑)。

一回すべてをブッ壊しちゃうことって大事だなって思った

1997/FEBRUARY/19TH AT OSAKA KOUSEINENKINKAIKAN-DAI HALL

Toshi

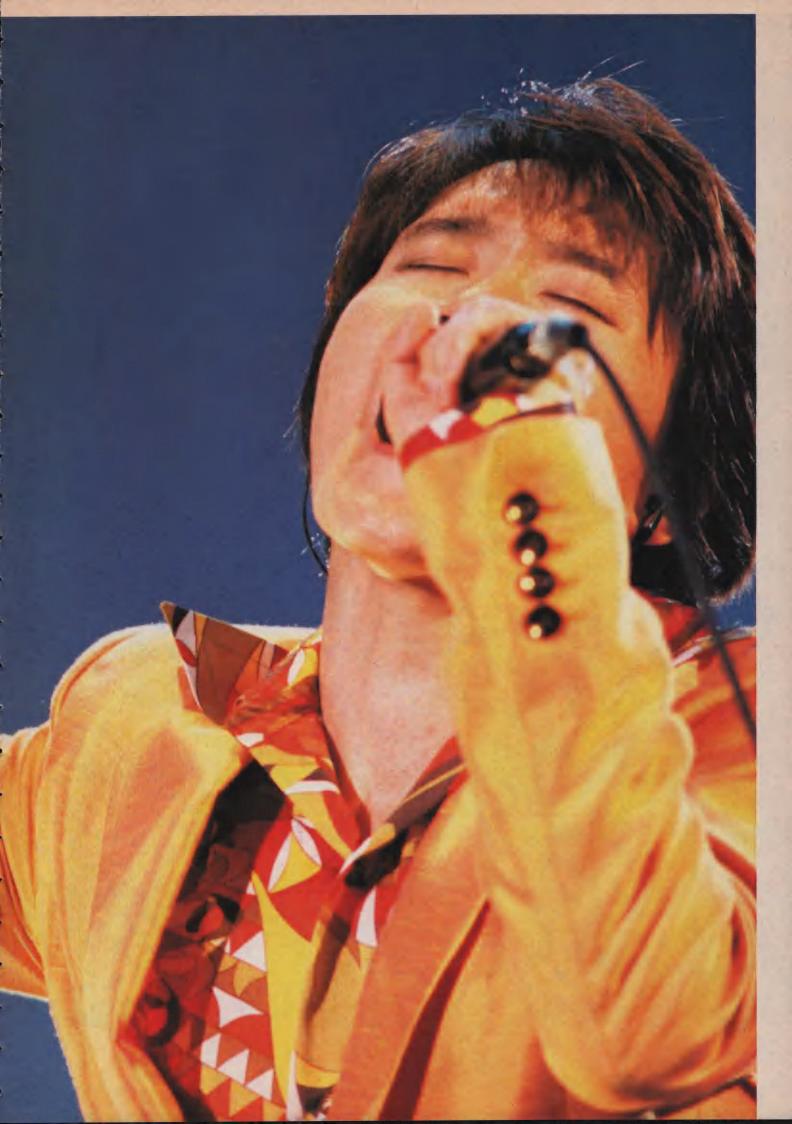
1997/FEBRUARY/19TH AT OSAKA KOUSEINENKINKAIKAN-DAI HALL

PlayList

1 楽園
2 Birthday Eve
3 碧い宇宙の旅人
4 さまよえる地球人
5 星の舞踏会
6 Simplicity
7 予感
8 MOONSTONE
9 GRACE
10 HANA
11 ガイアの祈り
12 Carry On
13 PASSION OF LOVE

encore

1 天使のメヌエット
2 Beautiful Harmony
3 Morning Glory

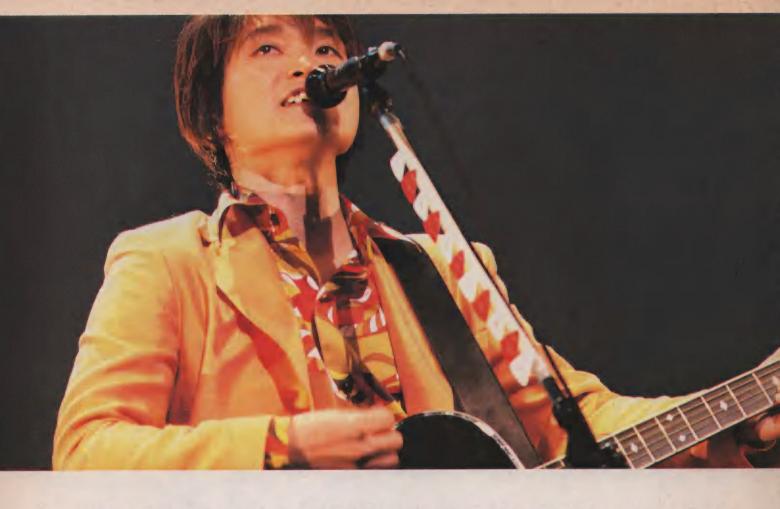
見えない力に突き動かされたToshiの癒しの歌が聴こえる

「Xジャパンのトoshi、電撃入籍！」というニュースが駆け巡った数日後、ツアー前半の最終日を迎えるというToshiのソロライブに出かけた。音楽性をガラリと変えた彼の〝アコースティックライブ〟が楽しめるとあって、私は興味津々。

開演前の客席はカラフルだ。Xジャパンのメンバーさながらのファッションで気合の入ったファンたちに交じって、母親が子供（小学生くらい？）を引率している姿も見られ、小さなファンにもToshiの歌が届いていることにうれしくなる。

ほぼ定刻通りに客電が落ちると、ステージは緑深い森林になった。降り注ぐのは音のシャワー。春めいた山吹色のスーツに身を包んだToshiが見えた瞬間、オーディエンスは波のようにドッと立ち上がり、はち切れんばかりの声援を贈る。生の弦楽器（バイオリン、チェロ、マンドリンなど）を主体としたサウンドは時折、勢いのよい歓声にかき消されそうになるが、Toshiの感情あふれるハイトーンボイスは会場の隅々まで響き渡った。しかし、どうも両者はかみ合わない。和やかな雰囲気を作ろうとしていたToshiに対し、不慣れなオーディエンスは戸惑いを隠せず、MCに入っても立ったまま。その客席に、Toshiは「たまにはゆっくり座って楽しむのもいいもんですよ。眠たくなったら寝ちゃっても…」とやんわり着席を呼びかけ、落ち着きを取り戻した。

優しくて繊細な曲調に合わせて客席からはカスタネットの大合奏が始まったり、ペンライトを揺らすと出現する幻想的な小宇宙もキレイだった。ただそんなファンならではのライブの楽しみ方は良いが、歌の無い間奏になると黄色い歓声を浴びせかけ、素敵な演奏やソロが聴こえなくなってしまう場面が何度もあったのは残念だ。

中盤を迎えステージ上がリビングルームに。八人いたプレイヤーも小人数に絞られた編成になり、よりリラックスした雰囲気になった。その中でToshiは「ライブを観る、という概念は捨てて、耳や心で感じたり、目で聴くという楽しみ方をしてほしい

1997年2月19日　大阪厚生年金会館大ホール

…」と提案。ソファーに寝そべりながら歌う茶目っ気を見せたり、彼のお気に入りでニューアルバムにも参加したアコースティックカフェの都留教博とピアニストの中村由利子を紹介。二人へのインタビューや、客席からのツッコミにこたえるなど、Toshiのトークも絶好調。

さらにToshiは、ゆっくりと言葉を選びながら語り始めた。薬害エイズと戦う人たちとの出会いや人生のパートナーとの出会い。それらがコンプレックスの固まりであった自分から解放する力を与えてくれたこと。装飾を身にまとったりせずに自分らしく素直でありたいと思ったこと。そんな気持ちを表現するために今回のアルバムを作ったこと…を、とめどなく語り続けた。ようやく言葉が途切れた時、彼への励ましの気持ちが込もった歓声で静寂は破られ、止むことがない。その歓声をバックに私は思った。Toshiの人生観や音楽性を変えさせた見えない力の正体はもしかすると神様の仕業かも?と。かつての刹那・破壊から愛を通り抜け、自然・宇宙・命という大きなテーマに立ちむかう半面、サウンドは大掛かりな物から素朴でシンプルな表現を求める辺りは、話題のヒーリング(癒し)サウンドの特徴そのものだ。彼自身が創作し歌うことで心が癒され、聴き手の耳に届く時、癒しのパワーが増幅する。気が付くと私も彼の歌と言葉に心が震えていた。

そのパワーはライブの進行にも効果を表す。Toshiも初めより生き生きと歌い、客席の反応も良くなり、「Carry On」を歌うころには満場一致でクライマックスを迎えた。

これをToshiのライブと観れば大成功だ。しかしアコースティックライブとして評価するなら点数は辛くなる。それは観る側のマナーの問題だろうと私は判断する。決して押し付けるつもりはないが、聴き方にもTPOがあるし、歓声だけでなく拍手でも場を盛り上げたり、感動を演奏者に伝えられることを知るべきではないだろうか。

[文・青木美紀　撮影・渡部伸/P・22のみ田村仁]

NOKKO

1997/FEBRUARY/4TH AT OSAKA IMP HALL

1997/FEBRUARY/4TH AT OSAKA IMP HALL **NOKKO**

PlayList

1. Seven ways to love
2. ベルベット
3. ビバーチェ
4. キリン
5. あくびとUFO
6. 透明なタンバリン
7. 人魚
8. Jump a little higher
9. Don't hold back
10. DNA
11. I will catch U
12. Call me night life
13. 天使のラブソング
14. Go Go Happy Day

encore

1. 恋はあせらず
2. ライブがはねたら

1997年2月4日 大阪IMPホール

聴けば聴くほど魅力的なNOKKOのカラフルなボイス

どうも三十路を越えてしまうと年齢というものをひしひしと感じてしまう。今までは気合で防げていた風邪に負けてしまったり、しかもその治りが遅かったり。そんな病に冒された体を引きずってNOKKOのライブ取材に出陣したわけだが、その道中で「レベッカの～」と考えていたりする。もうレベッカが解散して7年もたっているというのに…。そんなところからも年齢を感じてしまう。

会場に入ると、観客たちの年齢層が若いのには驚かされた。多分、リアルタイムでレベッカを知っている人の方が少ないだろう。また、女の子が多かったのは意外だった。同性に支持されるアーティストほどカリスマ性を秘めているが、そういう意味ではNOKKOもまたカリスマと呼べるだろう。確かにキュートで個性的な彼女のキャラクターは、女の子のあこがれなのかもしれない。とにかく「レベッカの～」という冠など、もう無意味。やっぱり7年の月日は長い！

客電が落ち、いよいよ開幕。ブルーのライトにステージが浮かび上がり、場内には無数のシャボン玉が舞っている。そんな中、SEのダンサブルなビートに導かれるように登場したNOKKO。「これだけの声量があれば、歌っていて気持ちいいだろうな」と思ってしまう彼女の迫力ある歌声は、聴けば聴くほど魅力的だ。また、楽曲によってカラフルに表情を変えるボーカルスタイルは、ステージの上でマイクを握る彼女の姿をとても大きく見せ、セットや演出効果に頼ることなく、歌声だけでシンガーNOKKOを存分にアピールする。特に「Jump a little higher」で聴かせた、声のインプロビゼーションとも言える強烈なシャウトは圧巻だった。そんな彼女の小悪魔的な女の子ボーカルの面影を残しつつ、大人の女性の色気すら漂わせる歌声。60年代のダンスミュージックの香りを漂わせる、古そうでいて新鮮味のあるリズミックなバンドサウンド。その二つがいい意味で完全に溶け合っていない分、キャラクターの強いボーカルと太くたくましいグルーブが同時に押し迫ってくる。その衝撃は強力でいて、とても心地よくもあり、いつしか場内をダンスフロアーに変えていた。

時間の経過など忘れさせ、テンポよく進んでいくライブ。三十路を越え、しかも病に冒された体に、オールスタンディングの会場はかなりヘビーなはずなのだが、苦になるほど疲れていない。お世辞を抜きにしては彼女たちが繰り出すサウンドの中に引き込まれていた。さらに、披露された本編ラスト「GO GO HAPPY DAY」の緩やかなビートが心地よく体を揺さぶってくれる。熱いふろにパッと入るより、温かいふろにゆっくり漬かる方が体の芯から温まるように、タテノリのビートでパッと盛り上がるよりも、リズミックなグルーブに体を預ける方がいつまでもハートがほくほくと火照っているようだ。

レベッカの幻影を追いかけている人も、ソロアーティストとしてのNOKKOを体験しにきた人も、今夜は期待を裏切られたのではないのだろうか。常に彼女は変化している。最新アルバム『RHYMING CAFE』で音楽の幅が広がったことは周知の通りであり、久々にステージに立ったことにより、ボーカリストとしての存在感がより強まったようだ。本当に歌うことが楽しそうに、笑顔で熱唱する彼女の姿は印象的だったし、その歌声は聴く者のハートを震わせてくれる。しかし、せっかく6年ぶりにライブ活動を再開させたというのに、今回のツアーが終われば、当分ライブの予定がないのはさみし過ぎる。早くステージに戻って来て、またその魅力的な声をライブで聴かせてほしい。今度は絶対に万全の体調で臨みたいし、年齢も少し若返って…それは無理か。

［文・石田博嗣　撮影・佐藤潤二］

1997/FEBRUARY/2ND AT OSAKA BAYSIDE JENNY

PlayList

1 CRASH STREET KIDZ
2 CRUNKY DOUGNUTS
3 SLEEPER
4 PUSSY FOR SALE
5 DIRTY FACE
6 WONDERFULL TV
7 A SAIN REVOL[illegible]
8 NEKOMANMA
9 ABORTION
10 BAD TIME
11 FRUSTRATION
12 LAUGHIN' ROLL
13 PISSEN' ASS
14 PUNK ALWAYS…
15 BASEMENT CLUB
16 NO FEAR
17 WILD MUSIC
18 BROKEN GENERATION
19 I CAN'T TRUST A WOMAN
20 CRASH STREET KIDZ ROCK'N'ROLL
21 THIRTY
22 RIDE ON KIKI
23 PREDITION
24 DEATH TRAP
25 SCENE DEATH
26 戦争反対
27 PARADISE
28 聖者が街にやってくる
29 GET THE GLORY

encore

1 LONDON NITE
2 B-29
3 WHITE CRISTMAS

1997年2月2日　大阪ベイサイドジェニー

演奏曲数は32曲！　ハードコアナンバーの応酬あるのみ！

「PUNK IS DEAD!!」「PUNK IS NOT DEAD!!」と何度も否定と肯定を繰り返されるパンクロックの生存。セックス・ピストルズはパンクか？　名を汚してまで再結成し、金に執着した奴らをパンクスと呼べるのか？　などと、ちょっと前に評論家の方々がいろいろ口走っていたが、それこそ「勝手にしやがれ」だ。そんなもんに絶対的な答えなどない。なぜなら、それはリスナーが自分で判断することだから。単純に何を指してパンクと言うかなんて、聴くヤツの基準だけで十分。僕はピストルズなんかより泉谷しげるの方がパンクスだと思うし、今や〝キンキのおじさん〟とまで呼ばれる吉田拓郎をキング・オブ・パンクスだと思っている。「何、眠たいこと言うとんじゃ～」と(怒)マーク付きで文句を言う自称パンク野郎もいるだろう。そんなヤツには中指を立てて「お前は無知だ！」と言って差し上げよう。

で、ラフィン・ノーズ。もちろん本物のパンクバンドである。大昔、インディーズブームを巻き起こし、バンドブームの火付け役ともなった彼ら。それはすごい功績なのだが、メジャーデビューしたことにより、どんどんヘンになってしまい幻滅したことがあった。結局、いつの間にか解散してしまったけど。それが今、こんな営利主義のJロックシーンの中で復活して現役でバリバリに活動している。それも、大昔よりエネルギッシュでパワフルだ。往年の名曲たちが何倍もすさまじさを増し、疾走感までもアップしているのには涙が出てしまう。

97年2月2日、ニューアルバム『A SAIN REVOLUTION』を引っ提げてラフィンが大阪ベイサイドジェニーにやってきた。アルバムの1曲目でもある「CRASH STREET KIDZ」で幕を開けたライブは、期待以上にバイオレントかつアットホームな空間を作り上げていく。熱い！　壮絶たるライブの熱気が二階の関係者エリアにまで昇ってきている。当然のようにオーディエンスはダイブの嵐だ。このデンジャラスなダイビング。失敗して、群衆の中に埋もれてしまっても、ちゃんと周りのヤツらが救助している。だから、どんなにバイオレントなライブになってもケガ人が出ない。無法者のように思われる無骨なパンクスの中にも、ちゃんと暗黙のルールがあるのだ。しかも、演奏の邪魔になるようなマナーの悪いダイバーは、ベースのポンからハートフルな蹴りが食らわされるのだった。

1曲目からエンジン全開でぶっ飛ばし、MCも曲の紹介ぐらいでダラダラとしゃべったりしない。いわゆるノンストップ。ライブ後半ともなると、頭の中からエンドルフィンがあふれ出したオーディエンスは、トランス状態に陥ってフラフラしている。しかし、まだまだパワフルだ。そんな連中にメンバーから「懐かしいヤツ」とプレゼントされたのは、27曲目「PARADISE」。ステージ前は、汗が飛び、熱気が充満し、ダイバーが跳ね…もうぐちゃぐちゃ。メンバーもかなりぶち切れ、さらにハイになるべく、28曲目「聖者が街にやってくる」、本編ラスト29曲目「GET THE GLORY」とJパンク史上不滅の名曲たちがプレイされるのだった。

終わってみればアンコールを含めて演奏曲数は、なんと32曲。当然、バラードなんてもんはない。ハードコアナンバーの応酬あるのみ…と言ってもラフィンのナンバーは結構キャッチーだったりするので、決して一本調子にならないというのが最大の強味。そして何と言っても、チャーミーの感情優先型のボーカルが最高だ。最高潮にまで高めた緊張感を爆発させたような勢いで、彼の叫びが迫ってくる。「法なんて金だろ」「メッキをまぶせ、さあデビュー」「栄光をつかめ」。しょーもないロッカーに言われるより、断然説得力がある。歌謡曲しかなかった時代の泉谷や拓郎のようにだ。曲の中にちゃんとアーティストがいて、時代には反逆的。これこそがパンクスピリッツというものではないだろうか。

［文・石田博嗣　撮影・金原　誠］

4人がせめぎ合うライブは喜びに満ちていた

ノッているバンドって、強烈なまでのパワーを放つ。それはシーンをグイグイ昇り詰める時、いい曲ができた時、メンバーの体調がよかった時、そして、バンドが固まる時…。原動力はでかいものからささいなものまで色々だけど、とにかく、そういった時のライブって多くのものを聴く者に与えてくれる。2月6日、大阪ウォホール。ドラムの藤田勉が急病のため延期になった昨年10月の振り替え公演だったこの日のパーソンズのライブは、まさにノッているバンドのそれを意識させられるライブだった。

慣れ親しんだオープニングSEもなく、おぼろげなブルーのライトが照らすステージに登場したメンバーが演奏し始めたのは、4ピースのバンドの一音一音を確かめ、味わうようにシンプルな音の重なりで届けられるニューアレンジの「Love Myself」。いつもなら、パワフルにガンガン迫ってくるところだけど…勝手が違うオープニングに、歓声は次第に失われていく。音と音のすき間に宿っているしっとりとした優しさ、しっかりとしたリズムに込められた力強さが、聴く者の中で心の傷をいやす力に、より元気を育む力へと変わっていくようだった。

「…LOVE Myself…」。J-LLの歌声の余韻が溶けていくと、オーディエンスの体内で膨れ上がった熱さが歓声や拍手となって吐き出され、ホールに響きわたる。上へ！　まだ幻想の世界に片足を突っ込んでいる客席の空気を導くようにJ-LLが天井を指示し、田中詠司の澄んだギターが「Sleeping Beauty」のイントロを奏でJ-LLを後押しする。うねりだした渡辺貢のベースとパンチの効いた藤田のドラムがあおる。目覚めたファンたちは、ストレートに浴びせられる「ENFANT TERRIBLE(恐るべき子供たち)」、間髪を入れず続く「ESCAPE GENERATION」の懐かしい曲たち、ぜい肉をそぎ落として力強くなった最新アルバム『GUARDIAN ANGEL』からの「Rock With Me」…ぶちまけられる新旧を交えたナンバーに、飛び跳ね、腕を突き上げ、みるみる場内の温度と湿度を上げていく。

「この曲はメンバーでも初めてやる曲です。最近さ、海が汚れたりいろんなことがあるけれど、地球ってみんなのものじゃん」。J-LLのMCから入った「For Two of Us」。曲に乗せて送り届けられるメッセージには重油で汚れてしまった海岸や海への悲しみ、そして地球の存在そのものへのいつくしみにあふれている。インターネットでもこの事故についてコメントしていたよな。そんな思いがオーバーラップして、僕の中で忘れられない特別な曲となっていった。

後半はまさにラッシュそのもの。線の細い体に似つかわしくない太さと様々な音色で楽曲に表情を与える器用さを持った田中のギターと、チョッパーで前面に出て聴かせたり、楽曲を支えたりとセンスフルなアプローチを見せる渡辺のベース、タイトでパワフルなプレイでスリルをまき散らす藤田のドラム、そしてパワーダウンすることを知らないJ-LLの声。メンバーそれぞれが放つエネルギーがぶつかり合い、ギリギリのところで共鳴し合う。すべてを理解している仲間同士だけが出せる音のせめぎ合いには空席だったギターに田中が入り、バンドとして結束し始めた喜びに満ちている。

熱く、心地よい時間は「sayonaraは言わない」で幕を閉じる。アコースティックバージョンで届けられるシットリとした演奏と切ないボーカルの響き。訪れる沈黙。今夜最後の曲は、あのオープニングの感じや、伝わってきたメッセージ、そしてバンドとしての勢いのすべてを包み込む深さを持ってゆっくりと流れていく。ライブ中のMCで「もう10枚もアルバムがあって、その中からいろんないい曲をこれからも伝えていきたいと思います」と語ったJ-LL。今回も10周年ライブの延期の意味もあったとしても様々な時代の曲が聴けたのだが、その曲たちは時間を飛び越えて、パーソンズの今を伝えてくれた。「今、バンドとして固まっていくいい時期です」。J-LLの言葉がリアルによみがえってきた。

［文・大西智之　撮影・金原誠］

1997年2月6日　大阪ウォホール

SLY

SE ~ARM AND HAMMER~
1 MASS MEDIA
2 SLEEPING DOGS
3 ETERNALLY
4 DIFFERENT TEARS
5 KEY
BASS SOLO
6 MANKIND'S CHILDREN
7 I SPEND MY LIFE JUST LOVING YOU
8 RUNNING
DRUM SOLO
9 SILENT THUNDER
10 GHOST OF THE PAST
11 SLY
12 SHUT UP AND BUY
encore
1 DREAMS OF DUST
2 KINGDOM COME

CLUB GIG '97 JUMP INTO CHAOS
1997年2月20日 神戸チキンジョージ

マックス・ノーマンが真ん中にいて、五人で一つの音楽を作った

よくバンドが「俺たちにしか出せない独自のサウンドを目指す」と豪語しているのを耳にするが、実際は「どこがやねん!」という輩（やから）が多い。それだけ新しいサウンドを作り出すのは並大抵のことでないということだ。しかし、スライの3rdアルバム『KEY』は、オジー・オズボーンやメガデスを手掛けた世界屈指の敏腕プロデューサー、マックス・ノーマンが自らプロデュースを買って出たという作品だけに、ひと筋縄ではいかないプログレッシブ（本来の「進歩的」という意味で）なハードロックを完成させている。そして、遂にこのアルバムを引っ提げてのアメリカデビューも決定したという。そんなスライが全国ツアーの合間を縫ってインタビューに応じてくれ、マックス・ノーマンとどのようにアルバムを作ったのか、樋口のソロプロジェクトやライブ、Jロックシーンなどについて語ってくれた。

新しいロックバンドって世界との距離を感じてない

●スライはキャリアの長いミュージシャンばかりで結成し、世界をターゲットとしているバンドですが、今のJロックシーンというものはどう映っているのでしょうか。
石原慎一郎（G）：日本らしいロックシーンができ上がっているんじゃないかな。
●日本らしいというのは?
石原：海外とは全然違うでしょ。ロックがジャマイカに行って、レゲエになったような印象を受けるからね（笑）。
二井原実（Vo）：でも、アンダーグラウンドではハードコアなバンドで、いいバンドがあるよね。大阪のガーリックボーイズなんかも好きだし、ココバットというバンドも良かった。
●最近のバンドの意識は自分たちのスタイルを貫くことより、"売れたい"になっているんですが、それに抵抗を感じたりは?
二井原：メジャーになりかけているか、ブレイク寸前のロックバンドには確かにその傾向はある。例えばこんなのとかね（本誌に載っているセレクトアーティストを指差して）。ロックバンドって感じがしない。
石原："こんなの"って（笑）。
二井原：世渡り上手ですから（笑）。
●昔は「世界に通用するバンドになりたい」と言っているバンドが多かったんですけど、最近めっきり少なくなりましたよね。
石原：そんな面倒くさいことを目指すよりも、日本で商売になるからね（笑）。でも、それは人の好きずきだから。
寺沢功一（B）：それぞれの目標があるからね。
二井原：新しいロックバンドって、あんまり世界との距離を感じてないんじゃない? 今ってたくさん外国のバンドが来ているでしょ。アホほど毎週…それも場所がライブハウスじゃないですか。そんな間近に観ていると、カリスマ性とか感じなくなりますよね。
●確かに海外のアーティストに対する思いが変わってきていますよね。
二井原：僕らなんか雲の上の存在だったんだけどね。昨日も名古屋でライブをやったんだけど、5月に同じステージでロニー・ジェイムス・ディオがライブをするんだから。そんな時代だから、環境も違うんだろうしね。
●それにバンドが海外を目指さなくなったせいか、演奏力のなさが目立つんですが、みなさんがキッズのころって練習はよくやったんじゃないですか。
寺沢：やっぱり無我夢中に。いろんなテクニックを身に付けたくて、練習しまくりましたね。そういう人をすごくあこがれていたし。
●今はそういうあこがれる人がいなくなったんでしょうかね。
寺沢：いなくはないと思うけどね。
石原：巡り巡ってくるよね。エリック・クラプトンとかがはやっていたのに、パンクがドッとはやって、N.W.O.B.H.M.（ニューウエイブ・オブ・ブリティッシュ・ヘビーメタル）でギタリストの速弾きがはやって、グランジが来てという順番だから。ヘタウマみたいなのに飽きたら、またうまい人にあこがれるよ。

ないものを作りたいというのがすごくあった

●今はプロデューサー名義でCDが売り出されるような状態なんですけど、本来のバンドとプロデューサーとの関係とはどんなものだと思いますか。
石原：芸術家同士のぶつかり合いが一番理想的。たいがいは「時間に遅れるな」「予算内で抑えろ」みたいなベビーシッター的な役割になってきているよね。
●最新作『KEY』では世界的に有名なプロデューサー、マックス・ノーマンを迎えているんですけど、彼とスライの関係はどんなものだったんですか。
石原：ええ仕事したよ。最高! めちゃくちゃ勉強になった。いろんなアイデアを授けてくれたし、自分にない自分を見せてくれた。
●アドバイスとかもいろいろ?
石原：もちろんすごくあるよ。「ここの部分は退屈だから、どうにかして」とか、「同じフレーズを二回弾くな」とか。
●厳しそうですね。
石原：めちゃくちゃ厳しい（笑）。でも、音楽を作っているという感じで楽しかったね。三カ月間は長かったけど、有意義だった。
二井原：…（しみじみと）大変ですわ。あんまり言い過ぎるのも何なんですけど、あの人の頭の中に音楽の世界があるから、ある意味で頭が固いと言うか、絶対に人の言うことは聞いてくれない。ボーカルは特にそうだった。
●やっぱり英語で歌っているからじゃないんですか。
二井原：いや、そんなんじゃなくて、「何を言っているのか分からないのだけはやめてくれ」って感じ。
寺沢：今、「あの人の音楽の世界があって～」という話がありましたけど、彼の持っている例えばリズム感みたいなタイム感というのがあって、それを自分で理解するのにすごく時間がかかったりとか、そういう部分で苦労しましたね。でも、大変だったけど、楽しかったですよ。面白かった。「あっ、こうだったんだ」って新しく発見させてくれたというかね。
●樋口さんは?
樋口宗孝（Ds）：マックス・ノーマンは素晴らしいプロデューサーの一人ですよね。やっぱり独自の世界を持っているというのと、いい音楽を作るために何をやればいいのかというものを心得ている。エディ・クレーマーとかアンディー・ジョーンズとかの有名なプロデューサーと

1997/FEBRUARY/20TH AT KOBE CHICKEN GEORGE

もやったけど、普通はバンドの中に入ってきて音楽のことをごちゃごちゃ言ったりしないんですよ。もうディレクターみたいな存在。マックスはちゃんと自分のビジョンを持って、ここをどうしてほしいというのを言ってくる。
●マックス・ノーマンとはどの段階から一緒にやったんですか。
石原:曲作りから。すごく初期の段階からだよね。
二井原:プリプロダクションを半年ぐらいした。
●えっ、プリプロに半年もかけたんですか。
二井原:かけたんじゃなくて、かかってしまった。
●『KEY』がハードロックの既存の概念を打ち砕くようなサウンドだけに、それだけかかってしまったとか。
二井原:そうでしょうね。石原なんかリフのアイデアをいっぱい持ってきたけど、テンポも違えば曲調も違う曲のおいしいとこだけ「これを一緒にしようか」と言われて、くっつけたような力技もあったしね。
石原:泣きそうになるよね。「違う曲やろ!」みたいな(笑)。でも、ないものを作りたいというのがすごくあったからね。
二井原:それにせっかくプロデューサーを立てたんだから、その人の意見も尊重してやらないと意味がないでしょ。
石原:とりあえず言われたことは全部やってみて、気に入らなかったら「やっぱりこっちの方がいいんじゃない?」って。

マックス・ノーマンにすごく影響を受けた

●『KEY』だけに限ったことではないんですけど、今回は特にボーカルだけでなく、ギター、ベース、ドラムもフロントに立って歌っているという感じを受けたんですよ。
石原:プリプロダクションの期間が長かっただけに、いろんな挑戦もできたし。それにバンドを結成して4年、どんどん良くなっていくよね。
●それでいて各パートがぶつからないのもすごいですよね。
樋口:とりあえずうまいからね(笑)。ギターのリフとかサウンドに対して、どんなアプローチをするというのが自然に出てくるから、あえて「どういうふうにやるか?」とかアマチュアチックな考えは一つもない。
●アレンジを煮詰める時は、みんなでセッションしながらになるんですか。
樋口:『KEY』に関しては、さっきからみんなが言っているように、考えられないぐらいの数のリハーサルをこなしているし、アレンジも毎日変わっていった。「もう、覚えられへん」ってぐらい(笑)。
●そのアレンジもマックス・ノーマンと?
樋口:うん。だから、五人で一つの音楽を作ったって感じ。マックスが真ん中にいて、僕らが演奏してね。
●でも、そういうのが本来のプロデューサーとバンドの関係ですよね。
樋口:なかなかそういうプロデューサーがいないけどね。
石原:そらぁ、みんなリスクを背負うのイヤがるから。
樋口:自分の責任になってしまうからね。
石原:売れなかったら、自分の評判が悪くなるし、仕事がなくなる。
樋口:この『KEY』というアルバムはね、海外でレコード会社を見つけるという意味もあったんですよ。アメリカの今の音楽というのは、オルタナティブやグランジとかがはやる普通の人間には想像できない…アメリカ人にもわけの分からない世界で、僕らはそういうのを追ってやっていくんじゃなしに、独自の新しいスライとしてのサウンドをやるべきだろうというところから始まった。で、アメリカで成功しようじゃないかと。それでアルバムがやっとアメリカで出るんですよ。『KEY』がメインで一枚目と二枚目から二曲ずつぐらい入ったやつが、5月か6月ぐらいに。
●本格的に海外進出ということですね。
樋口:5月にファンデーション・フォーラムというのがあって、そこでアメリカ・デビューのお披露目みたいなのをやって、それから次のアルバムのレコーディングに入る。
●次のアルバムでも、またマックス・ノーマンを起用するんですか。
樋口:アメリカのレコード会社…まあスラブ・レコードというところに決まったんだけど、その意見もあるから僕らがマックスとやりたいって勝手に決められないんですよ。アメリカってレコード会社が主導権を握っていて、どういうふうにやってほしいか明確に言ってくるんでね。でも、曲は12～13曲できてますよ。
二井原:レコーディングがまだ先だから、もっとできると思うしね。
●やっぱり『KEY』が新しいサウンドを目指していただけに、もっと新しいものを追求していくことになるんでしょうかね。
二井原:そうなるでしょうね。でも、マックス・ノーマンと一緒にやってスライとしても曲の作り方とかすごく変わったんで、ある意味『KEY』に近いものになると思う。『KEY』はきれいだったから、もうちょっとパワフルな感じにね。
●その曲の作り方が変わったというのは、手法が?
二井原:いや、発想が。いつもだったら普通にパッパッパとやってしまうところでも、「ここもうちょっとひねった方がいいな」という着眼点を各々が持てるようになってきたというかね。
寺沢:うん。この間のアルバムのレコーディングを終えて、そういうのが自然と出てくるようになってきましたよね。
二井原:そういう意味では、マックス・ノーマンにすごく影響を受けたんじゃないかな。

ソロアルバムはデビュー20周年の集大成

●樋口さんがビーズの松本さんのプロジェクト〝ロックンロール・スタンダード・クラブ〟やソロプロジェクトの〝ドリーム・キャッスル〟で経験したことって、バンドに還元されていますか。
樋口:全然生かされていないです(笑)。松本君のソロは人の曲のカバーだし、自分のソロは自分でプロデュースして、自分の好きなようにやっただけだからね。
●その自分の好きなようにやったという樋口さんのソロなんですけど、ドラムをフィーチャーしたアルバムじゃなくて、いろんなタイプの楽曲が収録されていて、全然楽器が弾けない人でも楽しんで聴けるアルバムだと思ったんですけど。
樋口:そのバラエティーに富んでいるところとかは、自分で目指した部分でもあるしね。そ

れに僕が14年前に『破壊凱旋録』というソロアルバムを出したころのドラムというのは派手に見えるんだけど、あの時と今のドラムを比べたら今の方が数段難しいことをやってるんですよ。だから、うまさの観点というのが今と昔と違う。よく海外のドラマーのソロアルバムを聴いても、自分で適当に打ち込んだような曲にドラムを派手にたたいてるだけだから、そういうことはしたくない。
●ドラマーとしてよりミュージシャンとしてのソロアルバムって感じですよね。
樋口:そうですね。まあ、デビューして20周年で(笑)、その集大成というかね。今までの経験してきたいろんなことが表れていると思います。
●そんな樋口さんのソロプロジェクトのアルバム『FREE WORLD』を聴いて、他のメンバーが触発されたりは?
二井原:僕は、レコーディングしているところへ陣中見舞いに行ったんですよ。ロニー・ジェイムス・ディオの歌入れとか、スタンリー・クラークとか、タイ・テイバーとかを見物にね。ギターなんて目の前でかじり付いて聴いてましたから(笑)。
●目の前でそんなミュージシャンのプレイを観た感想は?
二井原:素晴らしい!　プロフェッショナルですね。世界の頂点に君臨するミュージシャンはすごい。ロニーにしてもサウンドチェックの段階で、声ができ上がってるもんね。話し声で「うわぁ、すごい!」って思ってしまう(笑)。で、またみんな人柄もすごく良かった。あんな一流のミュージシャンなのにね。
石原:僕の大好きなタイ・テイバーとかビリー・シーンとかが一緒にやっていて、それもすごいうれしいんだけど、それよりも何よりもだれとやっても樋口のタイコというのが、個性が出ていて面白かったね(笑)。スティーヴ・ヴァイとやろうが、だれとやろうが「俺は樋口や!」みたいな感じ。ドラマーで、サウンドからだれがたたいてるのか分かる人って結構少ないでしょ。自分のフレーズを持っている人とか、サウンドを持っている人ってね。だから、すごい個性があるんだと改めて実感した。
寺沢:僕はプリプロの段階で、日本で曲作りしている時に顔を出したんですけど、「この曲、めちゃくちゃ難しいけどできるのかな」って思いましたね。でも、アルバムを聴いたら…特にビリー・シーンなんですけど、すごくきれいに弾いているんですよ。それを聴いた時に「さすがだな~、違うな~」って思いました。
●下世話な質問なんですけど、これだけすごいミュージシャンをそろえると契約の問題とか大変だったんじゃないですか。
樋口:ちゃんと弁護士を雇いましたよ。レコード会社から「何曲しか弾いちゃダメ」というのもあったし。幸い今までにツアーで世界を7、8周回ったから、どこかで観てもらってたりして、「あっ、こいつか」という感じで本人がOKを出してくれたりした。そういう意味では苦しいツアーをやっていたのが功を奏した(笑)。でも、一番びっくりしたのは、自分がアマチュアや高校生の時に、レインボーで大阪厚生年金会館で「うわ~」って観ていた人が、そこにいた時には「この人、何年やってんねんやろ」と思った(笑)。
●ロニーさんですね(笑)。
樋口:「まだ、現役でやってんねんや」っていうのが一番うれしかったし、びっくりした。声も全然変わっていないしね。

ライブは全力投球しないと来てくれた人に悪い

●今度はライブを聴きたいんですけど…。
樋口:ライブね、ほとんどやってなかった(笑)。ツアーらしいツアーが今回が初めてなんですよ。
●そうなんですよね。今まであんまりライブがなかったから、ライブというものをどういうものだと考えているのかなと思って。
樋口:デビューした時に東京だけしかライブがなかったのもね、ドッカーンというでかい装置を持って行けなかったからなんですよ(笑)。今はもう考え方が変わって、ライブハウスでもどこでも全国に行かないとダメだと。やっぱり、まだデビューして3年目に入ったところだし、スライってバンドを知らない人がいるからね。各々の過去の経歴は長いけど、このバンドとして認識はまだ浅い。
二井原:ライブに関しては、どんどん良くなっているよね。やっぱり回数をやらないと良くならない。バンド独特のうねりとか、グルーブ感とかは数をこなさないと。スタジオで練習していても、お客さんがいるのとでは全然違うしね。
寺沢:ライブをやる度に思うのは、「ロックバンドはライブをやっていかないといけないな」ということ。そうやってライブをやることによって、バンドもグッと固まってくるしね。やっぱり必要なものだと思いますよ。
●石原さんは?
石原:大好き。生きがいを感じるよね。
樋口:終わってから?
石原:それはあんたでしょ(笑)。
●どの曲もそうなんですけど特に『KEY』の曲って複雑なだけに、ライブでプレイするのが大変なんじゃないですか。
樋口:それはもう…ションベンに行きたくなる(全員爆笑)。
●そのまま帰って来たくない(笑)。
樋口:「MANKIND'S CHILDREN」とか、一つ間違えたら戻れないと思う。
二井原:「MANKIND'S CHILDREN」もそうだけど、俺、「RUNNING」もあかんわ(笑)。
樋口:もう大変なんですよ。すごく緊張感がある。
二井原:そのうち顔が黄色くなってくる。
石原:それは黄疸や(笑)。
●今回のツアーはアルバム制作に入る前だけに、オーディエンスからエネルギーをもらうためのものだったりするんですか。
寺沢:それはまた違うような気がしますね。
●じゃあ、アルバムとライブは別物?
寺沢:別物だと思いますね。
樋口:全然、違うよ。ライブは人が目の前で観ているし。でも、僕は精神的にはライブをやっていても、レコーディングをやっていてもあんまり変わらない。なぜかと言うと、ライブレコーディングをたくさんしているから(笑)。だから、緊張感がどこでも変わらない。ライブをやっている時も、レコーディングしているみたいにきっちりたたかないとね。
二井原:ライブというのは、その日で一つの作品として完結してしまうじゃないですか。アルバムは永遠に残ってしまうでしょ。それが全然違うよね。昨日のライブは昨日の来てくれた人と僕らの中ででき上がった作品だから。そうやって考えると毎晩毎晩、全力投球しないと来てくれた人に悪いかなと思う。
●昨日の名古屋は今回のツアーの初日でもあるんですけど、どんなライブになりました?
二井原:良かったですよ。大合唱したし、アンコールも強烈だったし。
樋口:人が上がって来たし(笑)。
二井原:僕らはステージダイブするようなバンドじゃないのにね。
●お客さんがステージに?
樋口:びっくりした(笑)。前を観てたら、「あれ、寺沢こんなズボンはいとったかな?」って。
石原:人がギター弾いとったら、小突きよるねん(笑)。「二井原、えらい盛り上がってるな」と思ってたら、違うヤツやった。「だれや、こいつ」と思ったら、係員に連れ去られた(笑)。
●いい手ごたえだったんですね。
樋口:だんだん僕らのバンドの見方が分かってきたと思うんですよ。『KEY』を聴いていたら複雑な曲も多いから、ノリに行ったらいいのか、観に行ったらいいのか、聴きに行ったらいいのか分からない人もたくさんいると思うんですよ。それが、やっぱり乗れるバンドなんだ、熱くなれるんだと分かってきたんじゃないかな。

このインタビューを終え、僕が足を運んだのはツアー三本目となる神戸チキンジョージのライブ。前日の大阪での熱いテンションをそのままぶつけたように、初っぱなから"重厚"という言葉だけでは物足りないほど、重たくぶ厚いひと筋縄ではいかないプログレッシブサウンドが容赦なく押し寄せてくる。とにかくすごい衝撃だ。力強い説得力を持つ二井原のボイス、緩急を付けてサウンドの中を暴れ狂う石原のギター、下半身を揺さぶる寺沢のベース、変幻自在に複雑なビートを繰り出す樋口のドラム、そんな四つのパートが楽曲の中で、絡み合い、溶け合いながら強力なバンドグルーブを作り上げ、オーディエンスをトランス状態の深みへと導いていく。

最新作『KEY』からの応酬が続いた後、2ndアルバムから「DIFFERENT TEARS」が披露されると、二井原のボーカルスタイルが変わった。ロニー・ジェイムス・ディオやAC／DCのブライアン・ジョンソンを彷彿(ほうふつ)させるシャウティングスタイルによって発せられる強力無比なボイスに、海外に名をはせるハードロックボーカリストの貫録をまざまざと見せつけられた。僕は彼をシンガーやロックボーカリストではなく、あくまでもハードロックボーカリストだと呼びたい。まるで体中の血を腹の底から吐き出すような超パワフルなボイスは、名ばかりのロックボーカリストには到底出すことはできないものだ。

また、非力なドラマーのように小手先だけでたたくのではなく、全体重をスティックに込めてなぐるような樋口のドラミングも圧巻。豪快でありながらも繊細であり、「一つ間違えたら戻れない」とインタビューで語っていた彼の言葉を思い出してしまった。そんな彼のソロタイムは、正に壮絶である。グイグイと意識が引き込まれ、思わず観客の一人となって「樋口～」と叫びたくなるほどのパフォーマンスを観せつけてくれた。これが石原が言っていた「俺が樋口や!」というドラムなのである。だれにもマネすることはできまい。

二井原の叫んだ「もっといこかー」という一声が、オーディエンスをさらに熱くさせたライブ終盤。パワフル&ヘビーなサウンドにスピードが加わったエキサイティングな楽曲群が、オーディエンスをより深くトリップさせていく。激しく髪を振り乱すキッズ。世界をターゲットとしているバンドだけに、演奏力や楽曲のクオリティーは半端じゃない。それをライブハウスという空間で味わえるのだから、このクラブツアーはメタルキッズやロックンロールジャンキーに最高のドラッグとなったことだろう。それだけにバンドとオーディエンスがサウンドによって結び付き、極上のパフォーマンスと最高のリアクションが繰り広げられるのだった。

世界制覇の第一歩を踏み出そうとしているスライ。こんなエネルギッシュかつテクニカルなライブを観せつけられたなら、耳の肥えた海外のキッズやロックンロールジャンキーでさえひとたまりもないだろう。何と言っても既存のハードロックの枠に納まらない、新種のサウンドを武器として持っているのは大きい。僕は彼らが世界のシーンに強烈な一撃をくらわせ、それに触発されてJロックシーンに新しい流れが発生してくれることを期待している。これは無茶な希望ではないはずだ。

[文・石田博嗣　撮影・高木昭仁]

独自の新しいサウンドで、アメリカで成功しようじゃないか

CROSS TALKING

THE SPACE COWBOYS

ALBUM
TRANS
KSC2-161

水野克泰(Vo)

メジャーシーンに飛び込んで一年を迎えたザ・スペース・カウボーイズ。デビュー前のインタビューで「もっとロックの本質的なものを作っていきたい」と頼もしい言葉を放ってくれた彼らが、その一年後に発表した2ndアルバム『TRANS』を聴けば、自分たちの思うロックへと迷うことなく突き進んでいることが実感できる。そこで、『TRANS』が誕生したいきさつと思いを、ボーカリストの水野克泰とギタリストの大山英寿に聞いてみることにした。

●私は前回の『ELECTRIC CIRCUS』ツアーの大阪公演を観てから2ndアルバムが楽しみで仕方がなくて(笑)。で、聴いてみて、よりロック的に研ぎ澄まされた楽曲が詰め込まれていると思ったんですが、自分たちとしてはどうですか。

水野克泰:ある意味、1stでやったことに対して吹っ切れた気がする。

大山英寿:それは当然ライブとかも絡んでくるんだけど、その経験があって俺たちがどんなバンドなのかが分かったっていうか。じゃあ、それをしっかり音にしなきゃいけないなって。

水野:デビューして一年になりますけど、スペース・カウボーイズという名前は先行していても、なかなか音までついていかないっていうか、イメージが先行しちゃってる部分に気付かされたんです。だから「僕らはこういうゴツイ音を出すバンドなんだ」ってところをもうちょっと追求してやってみようというのが四人の中にありましたね。

大山英寿(G)

●このアルバムでスペース・カウボーイズ流のロックンロールを見せつけられたように思いました。

水野:今回は完全なセルフプロデュースではないんだけれども、セルフの域までいけるようになりたいっていうのがあって。で、プリプロをやって、その最終日あたりに一日レコーディングスタジオを借りて、収録するであろう13～14曲の被せものも含めて録音したデモテープを作ってから、本チャンに入ったんです。

●今回、興味を引かれたことの一つがメンバー全員が作曲を手掛けていることなんですが。

大山:特に決め込んだわけじゃなかったんだけど、みんな曲を作れるし、四人をちゃんと出したいというところで、だれの曲が入ってもいいんじゃないかと。

●一枚のアルバムに四人の作曲した曲が入ると単純にバラエティーに富んだアルバムになるイメージがあるけど、それが感じられなかったから、その辺をかなり煮詰めたのかなと思ったんですが。

大山:まあ、それなりに苦労はしたよね。

水野:例えば、他のメンバーが作ってるものを自分なりに吸収しないとダメだし、究極は完成した段階で自分たちのものとして血となり肉とならないと表現し辛いから、いろいろ考えながらやりましたね。でも、面白いなと思ったのは、他のメンバーが作ったことで新鮮さがあるからインスピレーションがわきやすい。

●選曲は難しくなかったですか。

水野:今回は選曲よりも一枚のアルバムというところに執着したっていうか。シングルだけが飛び抜けてて、それを盛り上げるためだけ

インタビュー・村田圭子 ／ 撮影・佐藤潤一

のものじゃないところに行きたかった。
大山：ちゃんとした流れを持った上で聴かせることが大事だったからね。バンドとしてアルバム全部をしっかり聴かせるために曲の並びとか、つなぎとかをアレンジ面も含めて考えたから、納得するまでは結構時間がかかった。
水野：でも、レコーディングに入ったら煮詰まることもなく集中力で乗り切れたっていう。
大山：レコーディングで悩まないようにしようと、しっかりプリプロをしたからね。もう、本チャンが入ったらダーッと生きのいいやつを音源にしたいなと思ったから。多分、悩んじゃうとそのまま音に出ちゃう。そういうのってカッコ悪いでしょ。
●ところで、大山さんのエッジの効いたギターが気持ちよかったんですけど、そこにはかなりのこだわりがあるんじゃないかと。
大山：それはありますよ。「どこですか？」って聴かれたら困るんだけどね（笑）。
水野：あるだろうね。例えば、俺も歌ってて水野節を必要としてるし。声を聞いただけで「これは水野」、ギターを聴いただけで「これって大山くんのギターじゃない？」って思われるほどに突き詰めていきたいなっていうのは絶対にある。そこまで行けたら本望だよね。
大山：うん。俺はギターはやかましい方がカッコいいっていうのもあるんだけど、やり過ぎず一番気持ちいいところって何だろうって思ってる。楽曲をぶっ壊すギターは弾きたくないからね。
●今回ギターのアプローチで新たに挑戦したことってありますか。
大山：細かく言うとテクニック的なものじゃなくて、今回はけん盤を使ってないんでギターだけでどれだけ曲の表情を生かせるかっていうのが、俺の中での実験的なテーマとしてあった。シンプルっちゃあ、シンプルなんですけどね。あと音質とかにはこだわりましたね。好きなアンプ一台で、クリーントーンもひずんだ音も全部それで録ったりとか。で、「ああ、俺ってこういう音が好きなんだ」っていう新たな発見もあったし、逆に「俺ってこれしかできないんだな」っていうのも（笑）。あと、他のメンバーが作った曲で「俺って今までそういうギターをあんまりやってなかったから、できるかな」って思ったのもあったけど、そういうのもちゃんと挑戦してみてうまくいったし。

●今回は「EMERGENCY」と「揺り籠と棺桶」というアコースティックギター（アコギ）をフィーチャーした曲があるんですが、以前のインタビューで、ドラムの大古殿さんが「もっとロックの本質的なものを作っていきたい」と言ってたことの、これが一つの答えかなと。
水野：間違いないですね。正に、このアルバムで表現できた音の一つだと思う。僕はもともとアコギはめちゃくちゃ好きだし、このバンドだったら、そういう曲があっても絶対いけると思った。それに、このアルバムではアコースティックなニュアンスのものをフィーチャーしてもいいと思ったから。

詞は作るものじゃなくて書くもの

●詞は水野さんが自身の曲にも付けるんですが、メンバーが作曲した曲にも付けていく。そこには違いがあるんでしょうか。
水野：う〜ん、違うって言えば違うし。やっぱり、さっき言ったみたいに曲を聴いた時の新鮮さがあるのと同じくらい面白いですね。詞はうちの場合、曲先行だから後で書いていくんですけど、だれの曲っていう意識では書かないから、もう自分のものとして。それこそ触発されるものから順に書いていく感じで。自分のものが書きやすいかって言ったらそんなことはないし、逆に難しかったりする。
●詞のインスピレーションは曲から？
水野：そうですね。多分、大枠として私的な部分での自分たちのテーマ的なものを考えるんだけど、その曲が欲しがってる言葉っていうのが絶対にある。ギターのアルペジオとバックのサウンドからくるものがかなりあった。それもごく自然に。僕は、詞は作るものじゃなくて書くものだと思ってて。なんか、あんまりメロディーにとらわれたくないから書き始めたことに対して、あえてそのニュアンスを変えちゃったりとか。メロディーを意識して作っちゃうと言葉を選んだりしそうだから、そういうところに行かないようにしますね。
●逆に大山さんが作曲した曲で「こういう気持ちで作った」みたいなことを水野くんに伝えたりするんですか。
大山：ある程度は伝えたりするけど。で、それが伝わった感じの詞もあるし、逆に水野が「いや、俺はこういう感じの方が」って面白くなる

僕らはこういうゴツイ音を出すバンドなんだってところを追求した

曲もある。あんまり決めちゃうとよくないから。だって明るい曲なのにスゲエ悲しい詞を付けてきたりするんだけど逆に面白かったりするからね。
水野：今のところ詞っていうものに関してはおざなりにしたくないから。例えば、サウンドが肉体だったら詞は魂だと思ってるし、そういうところで絶対にいいものを作ってるっていう自信はある。その辺はキャッチボールをしながらっていう。今回は、ほんとに四人で作ってて、それぞれにかなり深い思い入れがあると思ったし、その辺を聞きつつって感じで。
●今回の詞は1stの直接的に伝わるものに対して自分の内面に向かっているような印象を受けたんですが、詞に対しての変化はありましたか。
水野：こういうニュアンスのものが書きたいなと思ってても、なかなかそこに答えがあるわけじゃないと思うんですよ。詞も音もそうだと思うけれども、常にゼロから作り上げることだし。それこそ、1stがあったからここにこれたと思うし、このアルバムでやりたかったことが詞を書いてみて改めて発見することも多かったし。そういう意味で1stとは違うものですね。書き方も違えば、ニュアンスも違うし、目線も違う。だから、意味がかなり変わってきたと思います。
●今回、詞で伝えたかったものっていうのは？
水野：ストレートに等身大のことを言うと入ってきやすいんだけど、それよりも物事を抽象的に歌うことによって、よりリアルに聴こえることってあると思って。そういうことをテイストとしてとりあえずやろうと。で、内容は「光」に対して「影」とか、「生」に対して「死」とか、そういう相反するものをアルバムの13曲すべてに与えてあげて、アルバムタイトルの「トランス」を象徴する言葉の「トランスフィーチャリズム」という男が女になりたいっていうか、一つのあこがれっていうものにオーバーラップさせて、なんか面白いことができないかなってものをエッセンスとして少しずつ入れてる。1stでは「子供っていうのはこういうものだよね」っていうところがあったけど、今回はもっと違うところから攻めたいなと思って。なんか、スペース・カウボーイズは、ある種きれいで清潔感があるものに見られがちなところがあったんです。だからそこで、ある意味人間臭さだったり、表に見えてるものじゃなくて内に秘めているもっと精神的なところを提示するもんだと思ったから、今回はあえて前のニュアンスも残しつつ、汚いところも含め白も黒も全部出しちゃうっていう。だから、その辺をいろいろ想像しつつ、考えつつ聴いてほしい。

ライブにスリルがなくなったら終わり

●3月17日からアルバム『TRANS』を引っ提げてのツアー『GALAXY WARS TOUR』がスタートするんですが、どんなライブになりそうですか。
大山：まあ、『TRANS』からの曲が多くなるのはもちろんあるけど、想像はできないな。自分たちが楽しめるためにどうしたらいいかっていうのは考えるかもしんないけどね。飽きないようにっていうかさ。あと、次は長いツアーだし、初めて行くところがすごく多いからお客さんが全然いないところもあるかもしんないし。いや、あっちゃあ、よくねえけど（笑）。
●大阪ではIMPホール、東京では渋谷公会堂とホールへと進んでいくわけですが、メジャーデビューして1年がたった今の状況を自分たちとしては、どうとらえてます？
水野：サティスファクションっていう感じだよね。多くの人に聴いてもらいたいっていうのはあるけど、小屋の大きさで売ってるわけじゃないから、小さいところでやろうが、大きいところでやろうが、どこでやろうがテンション的には同じライブを見せたいなって思ってる。だから状況は良くはなってるけども、別にどこに行っても変わらないよって言いたい、それだけなんですよね。渋谷公会堂でやったからスゲエとかさ、そういうのは別にないから。
●じゃあ、ライブは自分たちにとってどんな場所ですか。
水野：自分が一番素直になれる場所じゃないですかね。音楽が好きだし、ライブをやることは一番気持ちいいと今でも思ってるし。そういう意味ではライブをやってる自分が、何をやってる時よりも好き。ライブにスリルがなくなったら終わりだと思ってるから、観てる方にも伝わるぐらいのスリルを出していきたい。お互いにドギマギしていたいな。

CROSS TALKING

ZEPPET STORE

昨年9月にシングル「声」でメジャーデビューしたゼペット・ストア。その後連続してシングルをリリースし、いよいよ4月23日にはメジャー1stアルバム『Cue』を発表する。新作を聴いてまず驚かされるのは、インディーズ時代そしてデビュー後のシングルにも必ず登場した英詞の楽曲が、1曲も収録されていないこと。つまり全11曲が日本語楽曲で統一されているのだが、それは新鮮さと共にまた一つゼペットワールドを作る要素が増えたのだということを教えてくれる。

前回話を聞いてから約半年。ボーカリスト木村世治が話してくれたひと言ひと言からは、バンドの成長、そして彼らの音楽が届けてくれる温かさ、切なさ、やさしさのわけが伝わってくるはずだ。

木村世治(Vo)

曲作りは、恐ろしいぐらい全然変わってないですよ

●新作『Cue』は、脱退したギターの五味くんと一緒に作った最後のアルバムになったわけですが、バンドとしては別の大きな意味を持ったアルバムに仕上がりましたね。

木村世治：そうですね。まず僕の中でも、バンドの中でもすごく大きな点は、詞がすべて日本語になったということで。それにはいくつかの理由があるんですけど、シングルを何作か作ってきて日本語に対しての興味がすごく芽生えたってことが一番大きいんですよ。例えばライブをやってて口ずさんでる子を発見したりすると、すごくうれしくて(笑)。「言葉がダイレクトに響くっていうのは、こんなにも重要なことだったんだ」って気付いた。

●日本語の詞に対してのとらえ方が大きく変わったという。

木村：3rdシングルの「SUPERSTITION」の詞を作った時に、僕の中で決定打が出たんですよ。あの曲って最初は英語で出そうかなと思ってたんですけど、やっぱりシングルのA面だしバンドとしても日本語にしたいなって急きょ変えたんですね。その時に、以前は最初英語だった曲に日本語の詞を乗せるとすごく違和感があったんですけど、「SUPERSTITION」は見事にそれがなくて。そんないくつかの作業の中でずいぶん日本語に対するとらえ方が変わったんです。

●日本語そのものに対するとらえ方も変わったんじゃないですか。

木村：うん、変わりましたね。どういう言葉が乗ったら美しくメロディーが響くかというのは、日本語でもできるんだなっていうのを発見しました(笑)。

●今まで日本語に対してその部分での抵抗が大きかったんですもんね。今回はすべて日本語の詞なんで、もちろん内容にも耳が行くんですけど、「TO MY FUTURE」や「エヴリィ」の歌詞を読んでいると、次の自分たちをイメージしているような内容が多いですね。

木村：(笑)ちなみに「TO MY FUTURE」「エヴリィ」「HAVE A WING」は、ドラムの柳田が作詞したんですよ。

●そうなんですか。彼は次へ飛び出したいのかなあ(笑)。

木村：どこか一線を抜け出したいのかもしれない(笑)。

●じゃあ、木村くんは今回の詞にどういう思いを込めて?

木村：詞のテーマはでき上がってから思い付いたんですけど"探求"。どこか探りながら進んでいく詞が多いんですよ。「出口のない迷路を楽しむ」って柳田が「TO MY FUTURE」で書いてますけど、その意味がすごく大きい。アルバムタイトルも最初に出てきたのはQUESTっていう"探求"っていう意味のものだったんですよ。

●それがツアータイトルになったわけですね。

右:ALBUM
Cue
MVCH-29001
左:SINGLE
SUPERSTITION
MVDD-50

インタビュー・山田純子 ／ 撮影・佐藤潤一

最終的なアルバムタイトルの『Cue』は"きっかけ"って意味ですけど。
木村:それもね、本当はQUESTの『Q』にしようかと思ったんですよ。そうするとQUESTIONだったりいろんな意味に取れたりするじゃないですか。でも字ヅラ的にもCの方がかわいいんじゃないかってことで、『Cue』にしたんです。だけどアルバムの大まかなテーマは"探求"ですね。
●どうして今の自分がそういうテーマを抱いたのか、理由は思い付きます?
木村:多分忙しいからでしょう(笑)。
●自分を振り返る時間がない?
木村:うん、やっぱり減ってますよね。それに僕らって普通に音楽を聴いてたヤツらが音楽を始めて、いつの間にかみんなの耳に届ける立場になったわけで、やっぱりまずは自分を知らないと表現なんてできないんじゃないかと思うんですよ。
●そういう詞はどういう時に生まれてきたんですか。
木村:単語が一つ出てくると、全体がパッとひらめいたりすることが多いですね。
●英詞とはやっぱり作り方は違うんでしょ?
木村:全然違います。まあ、歌詞はどっちも大変なんですけどね(笑)。英語はね、例えば最後はどうしても"me"にしたいとか、そういうのを探りながらやってて、内容ははっきり言ってどうでも良かったりして(笑)。でも日本語はそういうわけにはいかないですからね。あと、日本語の詞は、一曲の中で成立する世界にしたいという気持ちがあって、詩集みたいな感じで読めるといいなと思って作ってます。
●ゼペットは昨年9月に1stシングルをリリースして、11月に2nd、2月に3rd、そして4月にフルアルバムとすごいスピードで作品をリリースしているんですが、消化不良にはなってませんか。
木村:その点は、大丈夫です。曲も速いペースで作れたりするので、逆にありがたい(笑)。
●今回のアルバム制作においても煮詰まりとは無縁?
木村:音を作って重ねていく部分での煮詰まりはあったんですけど、作曲に関してはほとんどなかったですね。すんなりと作れた。曲は本当にひょんなところから出てきますよ。形として残ってる曲というのは、寝る前にアコギで引いた曲を「おっ!!」なんてそのまま録音したやつだったりします。「声」とかもそうだったんですけど。
●新作の楽曲もそういう感じで?
木村:そうですね。合宿でドラムとベースと俺のリズムギターだけ録ったんですけど、ある日「ドラムがちょっと気にいらない」って話になって、「じゃあ、俺は歌詞でも煮詰めるよ」ってドラムを録ってる上の部屋でやってたんですよ。でもうるさくて詞に集中できなくて(笑)で、「もう、いいや」なんてギターを持ってできた曲が(新作に収録されている)「A LITTLE FLOWER」と「奇跡が起きるまで」。スルッと5分ぐらいでできたんです。曲作りに関しては、恐ろしいぐらい全然変わってないですよ。それはいいことだと思うし、崩したくないですね。

こんなにシャウトしたレコーディングは初めて

●新作『Cue』を聴かせてもらって特に印象に残ったのは、サウンドがシンプルになったことと歌ものとして成立していることなんですが。
木村:メンバーみんなの中に「いかにボーカルが良く聴こえるバッキングにするか」という意識があったのと、あとは重ねる部分を極端に減らしてバンドのグルーブってものを強く出したいというのがあったんです。前は足りないところのすき間を全部埋めていく作業をしてたんですけどね(笑)。
●インディーズ時代に出した『716』を聴いてる時は思わなかったんですけど、今『Cue』と聴き比べると、息を止めてしまうぐらいギュウギュウに音が詰まってるなあって思います(笑)。
木村:そうなんですよ(笑)。疲れちゃうんですよね。
●それがこういうサウンドになったってところが、バンドの成長なんですかね。
木村:そうですね。あと『716』に比べると曲のバリエーションもすごく変わったし。それに以前は、方法も理論も知らないヤツがギターを持ってギャーンって音を出したら、カッコよくてそれをそのままパッケージしちゃったみたいな、不協和音が売りだったところもあったんですよ。何かゴチャゴチャしてるっていうね(笑)。でも今回共同プロデュースしてもらった堤さんが、僕らには全然ない血を持ってる人だったこともあって、そういうのをなるべく減らしていって、ギター一本の世界でも通用する、なおかつバンドが出せてるってことを意識してやったんです。

まずは自分を知らないと、表現なんてできないんじゃないかと思う

●サウンドに対してのそういう気持ちの中で、歌も自然と前に出てきたわけですか。
木村:決定的に違うのは、前は俺が「歌がちょっと大きいから下げましょうよ」って言ってたんですけど、今回は全然変わって「もうちょっと聴こえたら気持ちよくない?」って言ってるっていう(笑)。やっぱり歌を聴かせてなんぼだろうみたいな感じでね(笑)。
●だからボーカリストとしていろんな挑戦をしているんですね。
木村:そう、歌い方でいろいろ冒険してます(笑)。それは自分の中でものすごく恥ずかしいことだったんですよ。でもメンバーが予想以上に評価してくれて(笑)。今まで日本語の曲って単語を一生懸命歌うみたいな感じで、一つひとつの言葉がはっきり聴こえる歌い方をしてたんです。でも今回のアルバムの一曲目の「BLUE」なんて、巻き舌っぽく歌ってて。実はそういうのにすごく抵抗があったんです。何かいわゆる日本のロックにありがちな歌い方のパターンにはまっちゃうんじゃないの?っていうね。でもメンバーが「そういうふうにやった方が、木村が思ってる英語のニュアンスは出るから、ちょっとやってみたら」って。で、やったら見事に大ウケしてですね。「それだよ。それを待っていた」って(笑)。
●歌い終わった本人はどうだったんですか。
木村:「え~! そうですか」なんて。でも聴き慣れると結構いいかなって(笑)。やっぱり日本語にしたことによって英語とは違う感情が入りますよね。だから歴史上こんなにシャウトしてレコーディングしたのは初めてだし、フッと気付くとそっくり返って歌ってたりとかしてました(笑)。
●でも巻き舌の英語っぽいボーカルになっていても、言葉はすごく伝わってきますよ。
木村:自分の中で限界ラインを引いて「これ以上巻くのはヤダな」とかそういうのはあったんですよ。やっぱり言葉は、日本語でやってるからには伝わらないとおかしいと思うから。
●では最後に今後について聞きたいんですが、デビュー当時は「とにかく何でもいいから歌を持って頑張るんだ」って言ってましたけど、こうやってシングルもアルバムも出して欲望は膨らむ一方なんじゃないかと。
木村:例えばドームやりたいとかね(笑)、そんなふうに言葉にするのは難しいし、そういう目標はないんですけど、漠然とした目標はすごく出てきてますよ。やっぱり1人よりは10人に聴いてほしいっていう意識は絶対ある。あと、去年ライブが少なかったんで今年はライブでいろんなところを回ってみたいなって思ってるし。ステージでの説得力とCDの聴いた感じとはまたちょっと違うと思うんで、そういうのを見せていきたいなと思ってます。
●ライブで受ける印象もかなり変わってきましたもんね。
木村:そうですか。やっぱりかなり意識してますからね(笑)。お金を取ってライブを見せてるっていうすごく当たり前のことを、アマチュアのころは何にも考えてなかったんですよ。自分が楽しんで終わりみたいな感じだったんですけど、そういう意識が今はなくなって、やっぱり満足して帰ってほしいなって思える(笑)。何か当たり前のことばっかり言ってますけどね(笑)。
●アルバムリリース後は全国9カ所のツアーで、これがさっき言った『QUEST』というタイトルなんですけど、"探求"なんてタイトルを付けたからには、バンドはそれだけのものを持ってないといけないですね。
木村:作る途中でとまどった部分があったのは事実なんですけど、でき上がったアルバムはかなりの自信作になったので大丈夫だと思います(笑)。
●期待します。今日のインタビューは、久しぶりのせいもありますけど、バンドの成長をすごく感じさせられました(笑)。
木村:うん、みんな常に周りを見られるようになりましたからね。自分たちだけのすごく小さなサークルだったのを大きくするためには、自分が手を振らないとだれも振り向いてくれないってことをメンバーみんなが分かってきてるし、今、全員の意識も固まってきてるんで。

FEATURE

メジャーに近づくインディーズレーベル

イラストレーション:山木俊之 ／ 撮影:佐藤潤一 ／ 企画構成:ジェイロックマガジン

メジャーとインディーズの境界って一体何だ?
バンドブームによってインディーズシーン自体がメジャー化し、アイテムも物によってはメジャーに通用するクオリティーを誇るようになった。それは今に始まったことではないのだが、最近さらにエスカレートし、インディーズのアイテムがメジャー顔負けの10万枚というビッグセールスを記録したりする。もちろんそんなアイテムの流通管理までもアーティスト自身がやっているケースは極めてまれであり、ほとんどがインディーズのレーベルに依存しているのだが…。と言うことは、こんな現象を仕掛けているのはレーベルサイドということだ。では、昔からインディーズレーベルはそんな形でアーティストに携わってきたのだろうか。今回のフィーチャーはそんなインディーズレーベルにスポットを当て、その誕生から現在までの歴史を振り返ってみた。また、大手レーベルの担当者にも話を聞いたので、インディーズレーベルというものがJロックシーンの中でどんな立場にあり、現在のインディーズシーンをどうとらえているのか分かってもらえるのではないだろうか。

インディーズレーベルなしにJロックは語れない

昨年、再結成によって過去の功績をぶち壊してくれたセックス・ピストルズ。76年、そんなピストルズの唯一のオリジナルアルバム『勝手にしやがれ』をリリースしたヴァージンレコードというのは、今でこそ航空会社を持つほどの大企業だが、そのスタートは一人の大学生が作ったインディーズレーベルだった。

「面白いバンドがいっぱいいるのに、なかなかデビューできない。ならば自分たちでお金を出し合ってレコードを作ろう」

そんな純粋な気持ちからインディーズレーベルというものが生まれた。そもそもインディーズとは、インディペンデンス・レーベル(独立レーベル)から生まれた言葉である。日本でもヴァージンレコードなどのイギリスからの流れを受け、60年代後半から早川義夫の1stアルバム『かっこいいことはなんてかっこ悪いんだろう』を発表したことで知られるURCや、吉田拓郎や泉谷しげるを輩出したエレックなどのレーベルが存在した。しかし、メジャーとは違った価値観でもって、自主的な活動を行い、次世代への源流を作ったとなるとゴジラレコードがJロック史上初のインディーズレーベルとなるだろう。78年、ミラーズのシングル「衝撃X」が第一弾アイテムとしてリリースされ、プレス数はわずか3百枚と小規模だったのだが、その注目度は絶大なものだった。

ゴジラレコードは1年余りの間に6枚のシングルをリリースしながら自然消滅してしまったが、その影響を受けたPASS、テレグラフ、シティロッカーなど多くのレーベルが誕生。フリクション、オートモッド、紅蜥蜴など後のシーンに多大な影響を与える名盤たちを世に送り出していく。そして81年、自らのレーベル、ポリティカルを設立したスターリンがシングル「スターリニズム」を4千枚売り切り、アルバム『トラッシュ』が一カ月で2千枚が完売となった。それはインディーズシーンにおいてハードコアパンクのムーブメントの訪れでもあり、時代は折しも横浜銀蝿の「ツッパリHigh School Rock'n Roll」やアラジンの「完全無欠のロックンローラー」のハードでもコアでもないえせロックが一世を風靡(ふうび)していたころである。

続々と生まれるインディーズレーベル。83年には有頂天のケラがナゴム、ラフィン・ノーズのチャーミーとポンがAAといった強力なレーベルを設立し、トランス、アルケミー、セルフィッシュなどの個性的なレーベルが誕生。そして、ガスタンク、G・シュミット、あぶらだこなどのパンクの枠を越えたバンドがシーンに送り込まれ、ムーブメントの対象がハードコアのパンクバンドから、インディーズ全域の個性派バンドへと変わっていった。その後、ウイラードの『GOOD EVENING WONDERFUL FIEND』(キャプテン)、リアクションの『INSAIN』(デンジャークルー)、デッド・エンドの『DEAD LINE』(ナイトギャラリー)などがメジャーに迫る好セールスを記録し、ラフィン・ノーズやウイラード、有頂天がメジャーデビューを果たしたことによって、インディーズというアンダーグラウンドのシーンが一般リスナーからも注目されるようになった。いよいよ空前のバンドブームが幕を開けたのである。

いい意味でも悪い意味でもバンドブームの需要に応じるようにジュン・スカイ・ウォーカーズやアンジーなどいろんなバンドをシーンに紹介したキャプテン。筋肉少女帯やたま、カステラなど常に超個性的なバンドを世に知らしめたナゴム。「メジャーとは違った価値観」という初心を貫くように、アサイラムやZ・O・Aなどの独自の世界観を持つバンドを輩出し続けたトランス。これらのレーベルに所属するバンドが中心となって、ムーブメントがどんどん巨大化していき、それに拍車を掛けるように、エクスタシーレコードからリリースされたXのアルバム『VANISHING VISION』がメジャーアーティストをしのぐほどの驚異的なセールスを記録した。

キャプテン、ナゴム、トランスなどの人気レーベルが君臨するシーンの中で、Xの後もレディースルーム、ジキルなど、現在のビジュアル系の流れを作ったバンドのアイテムをリリースし続けるエクスタシーと、関西に誕生したカラー、かまいたちなどが属するフリーウィルレコードが勢力を持ち、ビートパンク系のバンドがあふれかえるバンドブームの中、メタルやハードロック系のインディーズシーンを築いていった。やがて、その流れはデンジャークルーからのデランジェや、大阪のライブハウス、バハマが設立したアフター・ゼロからのガーゴイルなどの視覚的にもビジョンを持ったバンドの登場によって、ビジュアルインディーズに変わっていったのである。

バンドブームが衰退していく中、逆にビジュアルインディーズは躍進を続ける。エクスタシーからのルナシーやジル・ド・レイ、フリーウィルからのビリー&ザ・スラッツやデカメロン、デンジャークルーからのラルク・アン・シエル、自らのレーベル、ラ・ミスを設立した黒夢、そして川口のライブハウス、モンスターが設立した、ティアーズ・ミュージックからのメディア・ユース、スリープ・マイ・ディア、ペニシリンなど次々とシーンを代表するバンドが現れて、それらに触発されるように大小様々なインディーズレーベルも誕生。毎月何十枚とリリースされるアイテムの中には、万単位のセールスを記録するものも少なくなかった。

また、そんなビジュアルインディーズとは対極の位置から、渋谷系のムーブメントによって脚光を浴びたラブ・タンバリンズやカヒミ・カリィを輩出したクルーエルレコード、インディーズだからこそリリースできるようなバカバカしくも強力な音源を発表する殺害塩化ビニール、くせ者のレディースバンドを輩出する弁天レーベル、特にジャンルにこだわらずライブハウスに埋もれているバンドを発掘するシャリラレコードなどカラーのはっきりしたレーベルがシーンをにぎわせるのだった。

97年、ホールでライブを成功させたり、メジャーアーティストに交じってオリコンチャートにランキングされるインディーズバンドが目に付くようになった。当然、その陰にはメジャーアーティスト並みのプロモーションやセールス的な戦略を行うレーベルサイドの努力がある。それだけにもともとの「メジャーとは違った価値観」といったインディーズレーベルが持っていたコンセプトが、今では「メジャーに通用する価値観」になってしまっていると言えるだろう。メジャーとインディーズの境目がなくなったということだ。それが良いことなのか、悪いことなのかは分からないが、現在のJロックはそんなインディーズシーンなしには語れなくなっている。

PICK UP INDIES LABEL

ALCHEMY RECORDS

インディーズブームの中、84年に大阪で設立されたアルケミー・レコード。同時期に発足したヴェクセルバルグ、バルコニー、太陽レコード、キャプテンなどと共にシーンをより刺激的なものへと変えていったが、ブームの衰退ともにレーベルが次々と崩壊。アルケミーはそのころに誕生したレーベルの中で、唯一健在なのである。そして、今なおノイズサウンドで森田童子をカバーするというスラップ・ハッピー・ハンフリーや大阪パンクの新星であるバルザックなど個性的なバンドをシーンに送り続けている。そんなアルケミー・レコードの大阪業務を一手に手掛ける大西ゆかさんに話を聞いた。

●アルケミーは大阪のレーベルなんで、リリースするバンドも関西のバンドが中心になるんですか。

大西：それはあるでしょうね。社長の広重も京都出身なんで、関西のシーンというものにこだわりはあると思います。やっぱり大阪のバンドってほんとに面白いですからね。

●インディーズの魅力ってどんなことだと思いますか。

大西：何でもあり！

●では、そんなインディーズシーンでレーベルをやっている意義とは？

大西：社長がアルケミーを始めたきっかけであるとか、全然もうからないのにずっとやり続けているというのは、「すごく面白い！」と思ってもそれを記録として残しておかなければ、そこで終わってしまう。だから、アルケミーがやっていることというのは、バンドやその音なりを振り返ろうとした時に、メジャーだと振り返りやすい。でも、インディーズの面白いけど埋もれてしまうようなバンドだと、振り返りたくても資料がなくなってしまうから…う〜ん、難しい（笑）。

●何を言いたいかは伝わってますよ（笑）。どんなに面白いバンドがいても資料としての音源なりが残ってなかったら、その時だけ「面白い！」と思ってもらえても、時間がたてば忘れられてしまうってことですよね。だから、アルケミーはそういうバンドの音源を作っていくと。

大西：そうですね（笑）。それに、アルケミーがリリースしているのは、赤痢とか原爆（オナニーズ）とか非常階段とか。新しいバンドだと最近ではバルザックを出したんですよ。

●キャリアだとバルザックも古いんじゃないですか。

大西：アルケミーの中では一番若手なんですよ（笑）。だから、キャリアの長いバンドばっかりで、若いバンドがいないんですよ。

●若いバンドというよりも、刺激的なバンドを送り出しているということですかね。

大西：う〜ん、送り出していたのは86年や87年ぐらい…今が下火ってわけじゃなく、面白いバンドもあるんでしょうけど、私自身も出会わなかったり、社長からもそんな話が出ないというのは、やっぱりそう感じるバンドがいないんでしょうね。それに、私もそんなにライブハウスに行って、新しいバンドを探したりしていないし、アルケミー自体もいいバンドがいたら「CDを出しませんか？」って声をかけて回るレーベルじゃないですから。

●売るためにCDを出すというレーベルではないんですね。

大西：今までそういうのでリリースしたことはないですね。そうしないとお金もうけにならないし、会社として成立しないのかもしれないんですけど、それで成り立つのがインディーズであって、アルケミーなのかもしれませんね。自分たちがちっとも良いと思っていないものを一生懸命にプロモーションしたり、宣伝して売れるようにしたりするのは苦痛でしかないんで、できないでしょうね。悪く言えばアルケミーって、友達に自分がすごく気に入ったCDを「良いから聴いて」と薦める延長線上にあるのかもしれません。

●アルケミーの今後の展開は？

大西：今年の7月か8月ぐらいにヨーロッパに幾つかのバンドを行かせようかという話があります。でも、それは今に始まったことじゃなくて、今までもバンド側が行きたいと言えばアメリカとか、ヨーロッパに行ってます。

●以前に赤痢がアメリカでライブしてましたよね。

大西：今度は7月にイタリアへ行くんですよ。予定では赤痢と原爆と非常階段とマゾンナとでね。

●すごいメンツですね。

大西：そうでしょ（笑）。それと去年にニヒリヒト・スパズム・バンドとボルビト・マグスというバンドをカナダとニューヨークから呼んでライブをやったんですよ。そういうこととか、こっちから行って向こうでやることを今年は考えてますね。

●海外での反応はいいんですか。

大西：ノイズなんかだと日本よりも、むしろアメリカとかの方が通販の問い合わせが多かったり、向こうでも実際にCDが売れているみたいやし。向こうのレーベルから出しているアーティストもいますからね。うちで一枚出したから、うち以外のレーベルから新譜をリリースしてもらったら困りますなんてことはないですから。アーティストにはやりたいことは我慢せずにやってほしいと思ってます。

●今のインディーズシーンをどう思いますか。

大西：ワクワクすることが少なくなったような気がして、今のシーンはあんまり面白いとは言えませんね。

●それはバンドの質とかが？

大西：そういうのじゃなくて…京都の西部講堂で毎年大晦日にオールナイトのライブがあるんですけど、年々お客さんが減ってきているんですよ。それとか大阪のエッグプラントというライブハウスがつぶれてしまったこととか、だんだんと灯が消えて行くような気がするんです。何か悲しいですね。

●逆にメジャーシーンをどう思いますか。

大西：あんまり知らないんですよ。この間もね、スピッツってはやっているバンドがいるでしょ。私、全然知らなくて、「何で犬がはやってるんやろ」って思ってたら、みんなに「バンドやで」ってバカにされたんですよ（笑）。でも、何を聴いても同じにしか聴こえないんですよね。特に女の子の歌なんかどう違うんやろって思う。ちゃんと聴いてないんで、中には良い曲もあるのかもしれないんですけど。あとね、関西で言ったらウルフルズがファンダンゴから出てきたんで、今、ファンダンゴが学生のバンドとかでいっぱいなんですって。何かウルフルズがやってたのと似たようなライブを企画したりしてね。そういうのを聞くとテレビとかのメディアの影響力ってすごいと思いますけど。

●それでファンダンゴが盛り上がるならいいことですよね。

大西：でも、それはウルフルズの二番せんじでしょ。だれかの影を追いかけていかないと何もできないのかなと、ちょっと苦笑してしまう。

●確かに。

大西：別に有名なだれかが出たライブハウスじゃないところでやってても、自分たちが行きたいところがあって、そこに向かって行っているんだったら、その方が私は素晴らしいと思いますけどね。

ALCHEMY RECORDS

レーベルデータ＊＊

●レーベル名
アルケミー・レコード

●連絡先
〒542 大阪市中央区西心斎橋1-15-9-507
TEL&FAX:06-245-5177
URL http://pweb.pa.aix.or.jp/~jojo/

●設立
1984年
非常階段のメンバーであるJOJO広重が中心となり、彼の周りにいたアウシュビッツのボーカルの林ナオトなどと一緒に大阪で設立。その後、東京にも進出していく。

●レーベルのポリシー
広重社長の独断の基、普通だったらシーンに埋もれてしまうような音楽や、記録として残しておきたいバンドをリリースしていく。

●過去にアイテムをリリースしたアーティスト。
ウルトラ・ビデ、SS、非常階段、ハナタラシ、原爆オナニーズ、杉山晋太郎、アウシュビッツ、原爆階段、赤痢、メスカリン・ドライブ、想い出波止場、サバート・ブレイズ、メルツバウ、コンチネンタル・キッズ、インキャパシタンツ、K.G.G.M.、フォーク・テイルズ、ほぶらきん、ダンス・マカブラ、突然段ボール、レイプス、S.O.B.階段、花電車、ガーリック・ボーイズ、エンジェリアン・ヘヴィ・シロップ、ニヒリスト・スパズム・バンド、マゾンナ、スペルマ、全力オナニーズ、ソルマニア、スラップ・ハッピー・ハンフリー、バルザック、オウブ・ボルビト・マグス 他

PICK UP DISCS

『Three』／赤痢
ARCD-075 （95年6月）

83年に京都で結成され、当時はメンバー全員が中学生だったという赤痢。彼女たちの存在をインディーズシーンに知らしめたのは85年4月にビート・クレイジーより発表された1stシングル「赤痢」だった。弱冠17歳の女の子が歌ったナンバーはなんと「夢見るオマンコ」。ここで閉口してしまう人も多いだろう。しかし、この型破りなところが彼女たちのパンクスピリッツなのである。そんな赤痢の記念すべき1stアルバムがアルケミーから発表され、その後もマイペースな活動を行い、音源のリリースも積極的に行っていたものの、メンバー脱退により三人編成となってしまった。そんな彼女たちが3年ぶりにリリースした本作は、相変わらず演奏力は無視されているが、欠点をしのぐだけの魅力がざん新なサウンドにある。ピアノやウクレレなども取り入れ、民族音楽も吸収したパンクでもサイケでもなく、すべてのカテゴライズされた音楽を超越したような楽曲群は目を見張るものがある。

『TIN DRUM YEARS』
ザ・原爆オナニーズ
ARCD-080 （96年2月）

82年に名古屋で結成された、ザ・原爆オナニーズ。本作品は、そんな彼らが84年に自ら設立したレーベル、ティンドラム・レコードからリリースした『JUST ANOTHER』（限定666枚）、『NOT ANOTHER』（限定999枚）、『ONANIES AT LAST』（限定1500枚）といった記念碑的なアイテムをCD化したもの。すべてのフラストレーションをエネルギーに変えてさく裂する正当派パンクロックならではの破壊的なサウンドは、衝撃的なまでパンクなバンド名に恥じることなく痛快そのもの（バンド名で彼らをコミックバンドだと勝手に判断しないように）。変化球など全く必要とせず、まさに豪速球しか知らないワンパターン野郎などでもなく、緩急を付けた直球で勝負をしてくる原爆のパンクロックはカッコいい。また84年～87年の作品がこの一枚でたん能できるので、原爆がどんどん強力になっていく過程も分かるだろう。

『GUITAR UNLIMITED』／V.A.
ARCD-086 （96年8月）

ボアダムスの山本精一、非常階段のJOJO広重、元アウシュビッツの徳山喬一、元南海フォークウインドのしょうといった関西が誇るクセ者ギタリストばかり四人を集めたコンピレーションアルバム。まさにアルケミーならではの作品である。そして、そんな四人にあてがわれたテーマは"歌モノ"。それだけに彼らに対して全く免疫のない人でも、ここに収められている70年代のロックやサイケ、フォークが進化したようなざん新で新鮮な楽曲をほとんど抵抗なく受け入れ、尋常でない衝撃を得ることができるだろう。そして何より、ロックというものがボーカリストが歌っているだけの音楽ではないことを再確認できるはずだ。JOJO広重のノイズサウンドが苦痛になるか、芸術と思えるかは意見の分かれるところだと思うが…。また、赤痢のみゆ、あやなど関西の異才女性ギタリスト四人による、このコンピレーションの第二弾となる『GUITAR UNCONROLED』もリリースされている。

PICK UP INDIES LABEL

EXTASY RECORDS

XのYOSHIKIが2ndシングル「オルガスム」をリリースするために設立したエクスタシーレコード。このレーベルから輩出されたアーティストをざっと見ただけでも、X、ルナシー、グレイといった今やビッグネームとなったバンドから、ジキル、レディース・ルーム、ジル・ド・レイなど残念ながら解散してしまったものの、異端児的な存在でシーンを引っかき回してくれたバンド名が挙がる。また、最近ではメジャーのキップを手に入れたハイパーマニアや、注目株のアシッド・ベルのアイテムがリリースされている。
レーベルの歴史を振り返ってみると、サウンドだけでなくビジュアル的にも強烈なインパクトのあるバンドを次々とシーンに送り出しており、現在のビジュアルインディーズの源流がエクスタシーレコードにあると言っても過言ではない。そんなエクスタシーレコードのA&R（注）である浜野珠美さんに、インディーズレーベルを運営する意義などを語ってもらった。

●インディーズレーベルって僕らが思うに、メジャーにない価値観でもってバンドを発掘していくというイメージがあるんですけど、エクスタシーレコードの場合はどうなんでしょうか。ちなみにエクスタシーって、過去にリリースしたアーティストを挙げてみると個性的なバンドが多いですよね。

浜野：そうですね（笑）。でも、初期の方々は特に発掘して見つけたというより、社長のYOSHIKIの友達だったり、知り合いだったりするんですよ。だから、本当に発掘したというのは、ここ最近のグレイ、ハイパーマニアやブレスぐらいなんですよ。

●初期のころは、別にメジャーがどうのって関係なく？

浜野：ええ。とにかくそのころというのは特殊な雰囲気というか、勢いがすごくあったんではないかと思うんですが（笑）。

●確かに（笑）。じゃあ、グレイとかレーベルが発掘したバンドの、その選択基準は？

浜野：YOSHIKIに決定権があるんですよ。彼が必ず聴いて、それでOKが出たバンドということになるんですね。だから、普通の会社のように、こちらからプレゼンテーションをして社長がOKを出したものって感じです。

●と言うことは、バンドの選択基準というのは…。

浜野：もうYOSHIKIにしか分からないんですよ。

●YOSHIKIさんにプレゼンするバンドは、やっぱりライブハウスとかを回って探すんですか。

浜野：それもありますし、送られてきたテープを聴いたりというのもありますね。それを専任にやっている者がいて、それで他の人たちにも聴かせて選んで、こちらでライブを一度観て選んだ結果、社長にプレゼンするという感じですね。

●最近いいバンドはいます？

浜野：う〜ん、そうですね…難しいとは思うんですけど、現状はね。でも、根気よく探していこうと思ってます。

●いいバンドが少なくなってきているんですか。

浜野：出会えるタイミングもあるのかもしれないんで、出会ってないだけなのかも。そういうことにも気を付けながらも探してはいるんですけど…。

●インディーズアーティストの魅力って何でしょうか。

浜野：やっぱり本当に制約されることがない中で、やりたいことが全部できることですよね。そこにバンドが気付いてくれれば、もっと楽しくできると思うんですけど。

●そんなインディーズシーンでレーベルをやられているわけですけど、その意義は？

浜野：いいバンドに出会えれば、こちらも全力でその人たちが思うような…例えばたくさんの人に聴いてもらえるようにバックアップする。

●ちなみにエクスタシーで一番売れたアイテムというのは？

浜野：Xの『VANISHING VISION』が50万枚以上は売れています。

●すごい数字ですね。メジャーのアーティストでさえ、5万を超えるのは大変です。でも、それだけインディーズとメジャーの境界がなくなってきているってことでもありますよね。

浜野：それは言えますね。

●それってメジャーでいいバンドが少なくなってきたんでしょうか。それともインディーズが力を付けてきたんでしょうか。

浜野：どちらも有り得るような気がしますね。…うん、その通りですね。

●そういった状況の中だと、アンチメジャーではないにしても、メジャーにない魅力を持ったインディーのバンドをより多くの一般のリスナーに紹介しやすいんじゃないですか。

浜野：う〜ん、どうなんでしょう。うちの会社の場合は、そんなにアンチではないし…特にそういったことも意識してませんね。単純にいいバンドを見つけて、バックアップしているだけですよ。

●現在、エクスタシーレコードのお薦めのバンドを教えて下さい。

浜野：ハイパーマニア、東京ヤンキース、ブレス、ザ・ヘイトハニーですね。

●その理由は？

浜野：とにかくどのバンドもカッコイイです!!

●そもそもインディーズシーン、インディーズバンドとはどういうものだと思いますか。

浜野：インディーズという世界はひたすら信じる物を探している場所や状況で、インディーズのバンドというのは、信じる物をいちずに実行する人たちのことですね。

●では、メジャーシーン、メジャーアーティストとはどういうものだと思いますか。

浜野：メジャーシーンというのは、プロの商品を楽しむ場所や状況のことで、メジャーアーティストというのは、人を楽しませる商品を作れる人たち。

●最後にリスナーに対して何かひと言。

浜野：難しいですね（笑）。今でもインディーズって言葉の意味が分からない人もすごく多いと思うんですよ。だから、「こういう世界もあるんですよ」といった感じですかね。それと「ロックを聴きましょう!!」ですね（笑）。

＊注
A&R（Artist and Repertoire）：アーティスト（Artist）と楽曲（Repertoire）を総括的に管理する人。主に新人アーティストの発掘、レコードの企画および制作、制作や楽曲の管理などを行う。

EXTASY RECORDS

レーベルデータ＊＊

●レーベル名
株式会社エクスタシーレコード

●連絡先
〒150　東京都渋谷区恵比寿西2-13-7　代官山Yビル4F
TEL:03-5458-6381

●設立
1986年4月
XのリーダーであるYOSHIKIが音楽業界の既成概念、常識にとらわれない独自の方法論を実践するために設立。

●レーベルのポリシー
良いバンドは、しっかりプロモーションすれば必ず売れる。

●過去にアイテムをリリースしたアーティスト
X、レディース・ルーム、ルナシー、東京ヤンキース、ジキル、ジル・ド・レイ、ザ・ゾルゲ、メディア・ユース、スクリーミング・マッド・ジョージ&サイコシス、ユースクエイク、グレイ、ハイパーマニア、アシッド・ベル　他

●流通のみ行っているレーベル
[サンシャイン・シャーベットレーベル]ザ・ガイア
[ベアーズバンケットレコード]KEN、D・I・E、
[アンダーグラウンドガレージレーベル]ディープ・ブレス、ザ・ヘイトハニー

PICK UP DISCS

『VANISHING VISION』／X
EXC-001　(88年4月)

エクスタシー軍団の快進撃は、このアルバムから始まった。50万枚以上という脅威的な売り上げを誇る本作は、当然のことながらインディーズ史上最も売れた作品である。当時はJロックシーンがバンドブームを迎えようとしていたころだけに、必要以上に注目を集めたが、興味半分で手にした者をそのままライブへと足を運ばせてしまうだけの有無を言わさない圧倒的なパワーと勢いを秘めている。体力の限界に挑戦するかのような激しいサウンドの中に溶け込んだ繊細なメロディー。「哀」と「狂」がめまぐるしく展開し、ツインリードギターの特性が最大限に発揮されたアレンジ。ドラマチックなバラード。どれを取っても他のバンドを全く寄せ付けないオリジナリティーがあり、演奏力においても一線を画していた。インディーズという限られた世界の中ではあるが、YOSHIKIの思い描くXを表現できたアルバムと言えるだろう。英語バージョンの「紅（KURENAI）」が収録されている。

『LUNA SEA』／ルナシー
EXC-005　(91年4月)

人気上昇中だったとはいえ、まだまだインディーズシーンでも無名だったルナシー。しかし初回プレスは予約のみで完売となった。それは、エクスタシーからの新人なら興味があるとリスナーの購買意欲をあおったとも言え、それだけレーベル自体が勢いを持っていたのである。そして、そんなリスナーやレーベルの期待を裏切らない作品の絶対的な完成度があったからこそ、本作はその後も爆発的に売れ続け、結果的に万を超えるセールスを記録している。
　この作品の魅力は安定した演奏力と、ジャケットに写るメンバーの妖艶（ようえん）なビジュアル。そして、何と言ってもハードロックやパンク、プログレの要素を持ちながらも、既存のジャンルを越えた独創的なサウンドで、単純に耽美や退廃といった言葉では片付けることのできない魅惑の世界を築いていること。いまだにこのころのルナシーのサウンドをまねるビジュアル系バンドは後を絶たない。

『灰とダイヤモンド』／グレイ
EXC-015　(94年5月)

「原石ともいえる唯一のインディーズアルバム」。そんなコメント付きでレーベル側からプッシュされたグレイの1stアルバム。それまでのようなYOSHIKIの友人関係ではなく、エクスタシーが独自に発掘した第一弾アーティストでもある。内容的にはインディーズ時代の集大成となるのだが、ざん新なアイデアに富んだアレンジは新鮮な衝撃を与えてくれ、スタイリッシュなサウンドを生み続けている彼らの原点を見ることができる。また、当時の彼らが持っていた、たぎるような勢いが完全にパッケージされていて、インディーズ作品ならではの荒々しくも刺激的なアルバムに仕上がっている。それからわずか三年足らずだが、ミリオンセラーを記録した最新作『BELOVED』と聴き比べると彼らの飛躍的な成長がうかがえるとともに、本作のクオリティーの高さを痛感することだろう。ちなみに、最近でもライブ終盤にプレイされている「BURST」が収録されているので、ファンは必聴である。

PICK UP INDIES LABEL

ShaRiRa RECORDS

設立からわずか四年。ライブハウスへの働きかけやイベントの開催など積極的な活動を展開するシャリラ・レコードは、ストレートなロックアーティストを手掛ける「シャリラ・レコード」、オルタナ系の「ライオット・レーベル」、ビジュアル色を全面に出した「クライマックス」、テクノ・アンビニエントの「ZOUK O.D.レーベル」、ラジオ局FM埼玉とのタイアップで新人を発掘、そのディストリビュートを手掛ける「J.D.レーベル」の5レーベルからなり、多くのジャンルを網羅するレーベルだ。独自の発想でシーンに新しい血を入れようとするそのポリシーはロック的であり、興味深いのだが、その奥には葛藤(かっとう)もありそう。とはいえ、まだまだ何かをやってくれそうなシャリラ・レコードのA&R小川責司氏に話を聞いてみた。

●シャリラ・レコードは発足して四年ですから比較的新しいレーベルですよね。インディーズという世界でレーベルを運営する意義って何ですか。

小川：インディーズとメジャー…。これはかなり個人的な意見になっちゃうんですけど、例えば、小売店さんだとか雑誌さんがインディーズとかメジャーだとか無理に分けようとするのって、僕は理解できないんですよ。そりゃあ、作っている側の規模の違いはあると思います。携わる人間の数だとか。うちなんてプロモーションを二人でやっていて、レコーディングともなると、スタッフは僕一人とエンジニアってこともあるぐらいですから(笑)。でも受け手側からしたら、もはやメジャーもインディーズも変わらないんじゃないかって。

●なるほど。

小川：メジャーのレーベルだと、商業ベースがより強く出てくるわけですから、売るためにはどうしなければってことが付きまとってくるじゃないですか。だからインディーズでレーベルをする意義というのは、そういう意味で違う視点から音楽を伝えることができるってことですかね。

●違う視点というのは?

小川：僕が見るインディーズのアーティストの魅力って〝素〟であることなんです。それこそ自分らしさをさらけ出して、やりたい音楽をやってほしいと思う。もちろん、アピールできる表現力がなければならないわけですけど。そういったところで、「〝売れる〟じゃなしに、〝いい〟と思う、〝好きだな〟と思えるものを」という視点で見ていられるわけですよね。だから、例えば「ライブをやりましょう!」となった時に、メジャーだと100万人動員した他のバンドのライブのビデオを見せたりするところを、インディーズだとそのバンドが出している音だとか個性を引き出すためにはこうしたらってことを言ってあげられる。

●みんなが「売れる」っていう同じ視点で見た商業主義じゃ…。

小川：いつまでたっても日本のシーンはこのままでしょう。でも、メジャーだけじゃなしにインディーズ・レーベルでも、今は完全にシステム化されてしまっている。例えばプロモーションを掛けるとしてこのアーティストは○○系だから、あの雑誌にアプローチして、載せてもらえば効果があるとかね。

●じゃあ、小川さんのプロモーションっていうのは。

小川：そこに葛藤が…結果だけを見てしまうと、僕のやっているプロモーションも同じなのかもしれない。でも、気持ちの一番には「好きだなって思う音楽を伝えたくてやっているんだ!」というのがあるってことで納得して。メジャーだとかになってくると、「君の担当はこのアーティストとこのアーティスト」って振り分けられてしまうわけでしょ。でも、うちは押しつけられてやるんじゃないんですよ。人数も少ないですし、好きだなって思ったアーティストのCDの制作なり、プロモーションなり、ライブとかを手掛けていくんですけど、それだけアーティストのことを分かってあげられるし、本当に良さを理解してた上で、それを伸ばすためのプロモーションをかけられるってことで。

●それだけをするとなれば大変でしょう。

小川：めちゃくちゃにね(笑)。でも、担当しているアーティストがテレビに出ることになって、それをライブでお客さんに告知している時だとかを見ちゃうと、もう忘れてしまいますよ、うれしくて。あと、お客さんや業界関係者の方がCDを聴いてくれていた時だとか。

●じゃあ、担当アーティストのメジャーデビューが決まった時なんかは、うれしいんじゃないですか。

小川：うちでは、今年の1月にインスパイラル・ガーデンがシングル「PASSION」でデビューしたんですが、この時はほっとしたっていうのが正直な感想です。レコード会社は東芝EMIさんなんですけど、事務所はうちの母体のロック座ですから僕の中ではそんなに大きな変化ってないんですよ。でも、知っているバンドがデビューするのはうれしいというより、頑張ってほしいなって感じかな。メジャーは結果を出さなくてはならないわけだから、50万、100万、それこそ世界を変える気持ちでやらなきゃだめですよね。

●メジャーデビューはそんなに魅力的なことじゃないと。

小川：バンドによっては、メジャーデビューという結果が最終目的って連中もいるし、有名になってメシを食いたいっていう気持ちもあるだろうから、それはそれで否定はしませんけれど、僕はインディーズでやっていけばいいじゃんって考えてます。これは初めに言ったメジャーとインディーズの垣根の話にもなってきますけど、今やCDをリリースするにしても、そんなに大変なことじゃなくなって来ていますし、クオリティー面でも問題はなくなっている。物流にしても、インディーズのCDを売っているショップが増えているから、昔のような大変さはないじゃないですか。だからね、やりたい音楽を伝えるってことなら全く問題はないわけですよ。

●良くも悪くも、実際にメジャーを越えるセールスのバンドもいますしね(笑)。今後についてうかがいたいんですが。

小川：うちでは昨年1月から始めて、この間の2月11日で10回を迎えた『to EXIT』っていうイベントをやっているんですけど、これを今後も定期的に開催していきたいです。それでどこのジャンルにも当てはまらないようなシャリラの色を出していければと。

●そのイベントにはシャリラ以外のアーティストも?

小川：出ています。ブッキングはライブハウスからの推薦やイベンターにかんでもらうこともありますし、ライブを見て声を掛けることもあります。

●ライブを見てからってところはジェイロックマガジンと同じですね(笑)。

小川：お陰様でテープだとかをいっぱい送ってもらうんですけれど、なかなかいいのがないですし、やっぱりライブで何かを感じるバンドでないとダメですね。

●分かります。では最後に小川さんのイチ押しバンドを。

小川：うちのアーティストになるんですけど、「ヴェス」ですね。詞・曲・パフォーマンスも優れてますし、ロックバンドがなかなか出せない〝切なさ〟を伝えてくれる。今は変わったことをやろうとしているバンドが多い中、そんなのを通り越して、まっとうにポップの王道を行っているのがいいですね。もちろん、無理にじゃなしに天性でそうなんでね(笑)。

ShaRiRa RECORDS

＊＊レーベルデータ

●レーベル名
ShaRiRa RECORDS（シャリラ・レコード）

●連絡先
〒101　東京都千代田区神田小川2-1　6F
TEL：03-3292-9710
URL http://www.rock-za.co.jp/sharira-records

●設立
1993年3月
「ShaRiRa」とはヒンズー語で「五感」を意味し、シーンに眠る未知なるアーティストを発見すべく設立。

●レーベルのポリシー
ルックス、年齢、ジャンルなどにこだわらず、いい音楽を純粋に伝えていく。ストレートなギターバンドから、ビジュアル系、オルタナ系、テクノアンビエントまで幅広いアーティストのCDをリリース。

●過去にリリースしたアーティスト
[シャリラ]
シャドウ、リディアン・モード、インスパイラル・ガーデン、ザ・U.K.クラッカーズ、三宅涼生、ジャカネイプス、キャンディー・チェリー・レッド
[ライオット]
スーパー・ジャンキー・モンキー、ギニーヴァンプス、クーデター、クレーン、ピラ・ステューパ
[クライマックス]
デザイア、スリー・アイズ・ジャック
[NOUK O.D.]
プランシェット・エーアール・マニア、サイボーグ・アンド・ベイビィー・カーニバル、ブッダスティック・トランスペアレント
[J.D.]
コンピレーションCD『NACK5 MUSIC CHALLENGER Grand Prix』『NACK5 MUSIC CHALLENGER Grand Prix②』

PICK UP DISCS

『LOVE PACE MAKER』
インスパイラル・ガーデン
SRC-010　（95年6月）

今年の1月に東芝EMIよりメジャーデビューを果たしたインスパイラル・ガーデン。シャリラから輩出された期待のメジャーバンドでもある。94年に現メンバーによって結成され、間もなくサポートにギターとキーボードを迎えて1stアルバムを完成させた。それから約1年ぶりに発表された本作は、バラエティーに富んだ4曲を収めたミニアルバム。キャッチーという言葉がこれほどまでにぴったりくる曲も少ないと言える「ETERNITY -SWEET NOTHINGS-」や、ブラックテイストを彼らなりに表現したタイトルナンバー「LOVE PACE MAKER」などで聴かせる、メロディーとリズムを強調したサウンドと甘くノビのあるボイスは彼らの最大の魅力だ。まだまだ未完成な部分を残すものの、良質のポップチューンとダンサブルなグルーブを武器とした、ある意味進化した歌謡ロックとも言える彼らのサウンドは、やがてデビューアルバムで一つの形を完成させる。

『終末の情景 -La Scene Du Finale-』／デザイア
CMPR-000　（95年8月）

彼らの存在をインディーズシーンに知らしめた三枚のシングル『静夢』『楽園』『追憶』。そこに収録されていた曲を新録し、いわばベストアルバムともいえる内容でデザイアの1stアルバムは届けられた。シーンの台風の目と騒がれ、アルバムを引っ提げての快進撃が期待されたが、メンバーの脱退劇に見舞われ、アルバムは発表したものの、残念ながらいまだに活動停止が続いている（一度、復活したのだが再び沈黙）。しかし、その一方で本作は売れ続け、シャリラの中でも一番のセールスを記録しているという。それだけ彼らに寄せられた期待が大きく、作品としてのクオリティーが高いということだ。確かにボーカルの幸也を中心とするバンドが織りなす楽曲の世界は独創的であり、センスフルなアレンジも魅力的だ。インディーズでも毎月、山のようにアルバムがリリースされ、バンドの栄枯盛衰が激しい中、今なお彼らの始動を願うファンが多いのもうなずける。

『balloon farm』／ヴェス
SRCA-020　（97年4月）

この4月に6曲入りのミニアルバム『balloon farm』をリリースするヴェス。この春、シャリラのイチ押しの新人という彼らは、フランス語で「すかしっ屁」（VESSE）という意味を持つバンド名に恥じないほど、しっかりとただならぬ香りをサウンドいっぱいに漂わせている。いい意味で洋楽テイストが抜けたソフトなすかんちのようで、最大の武器ともいえる歌謡曲のような甘いポップチューンは、どこか懐かしくもあり、新鮮でもある。「バンドブームのころにこんなバンドがいっぱいいたな」と思うのだが、そう思わせるだけで終わってしまうのではなく、もっと深く聴き込ませてしまう説得力を、キャラクター的にも個性の強そうなボーカルが持っている。ビジュアルのアプローチがアイドルグループ的なのが気になるが、それを極めてしまうか、逆に毒々しいほど派手にし、このポップテイストをキープしたままで音が挑発的になれば、なかなか面白い存在になってくれそうだ。

CROSS TALKING

3月21日、ヴァレンタインD.C.の超強力アルバム『All is Vanity』が発表された。「周りのことを考えへんぐらい自信過剰にさせてしまうアルバム」とインタビューでも語ってくれているが、その強気な発言もうなずけるほどの力作である。セルフプロデュースによって完成されただけに、はじけるようなサウンドから現在の彼らが何のオブラートに包まれることなく感じられ、聴いていて実に気持ちいいのだ。メジャー三枚目のアルバムなのだが、そういう意味では1stアルバムだと言えよう。そして、4月の後半からは、そんなアルバムを引っ提げてのツアーも予定されており、地元である大阪は本誌の創刊2周年記念イベント『SEEK』となっている。

今年、絶対に目が離せないヴァレンタインD.C.。そのボーカリストであるKen-ichiとギタリストのNaoyaが、自慢の最新アルバムや本誌イベントについて語ってくれる。

Ken-ichi (Vo)

Valentine D.C.

このアルバムが俺たちに財産を与えてくれた

●前回のインタビューで「ジェイロックで全ぼうを明らかにする!」と言った通り、アルバム『All is Vanity』の全ぼうを明らかにしてもらいたいと思います。まず、バンドにとってどんなアルバムができましたか。

Ken-ichi(Vo):毎回、デビュー作というつもりで作っているんですよ。それが正直な話、やっと形になったって感じ(笑)。今までのアルバムも、一枚一枚に個性があったと思うけど、今回はアルバムの個性じゃなくてヴァレンタインD.C.の個性が形にできたんじゃないかと思ってるんですけどね。

Naoya(G):今回のアルバムはセルフプロデュースだったんで、困った時にだれも助けてくれないし、全部自分たちで細かいところまで深く入り込んでお互いのプレイをチェックしないといけない。逆に自分たちで自分たちのイメージに到達するまで何度も録り直したりして、その中で一番気持ちよくプレイで

Naoya (G)

インタビュー・石田博嗣 ／ 撮影・佐藤潤一

自信過剰になってしまうアルバムができた

きたところを自分たちでチョイスしてるから、何のフィルターも通ってない現時点の自分たちの精神的な状態とかが、音に反映されているはずだと思っているんですよ。だから、本当の意味での俺たちの集大成。

●僕もそういう意味では、このアルバムはヴァレンタインD.C.の1stアルバムだと思いました。それこそインディーのころから着ていたビジュアルとかの重たい鎧を、1st、2ndとどんどん脱ぎ捨てて、今回のアルバムでフルチンになった感じ(笑)。歌詞にしても、曲にしても、サウンドにしても全然ポーズ付けたところがなくて、「これがヴァレンタインD.C.や！　文句あるか！」というような、開き直りじゃなくて、はじけ切った説得力がある。それだけに、自信を持ってこのアルバムのレコーディングに挑んだんじゃないかと思うんですけど。

Ken-ichi：作っている最中は、セルフということですごく不安も多かったんですよ。それはバンドのメンバーに対しての不安もあったのかもしれない。もしくは自分に対しての不安。自分がベストなものをチョイスできるのかというね。だからそういう意味では、最後にでき上がった音を聴いた時に「できたんだ！」という自信が持てましたね。これは全曲に対して言えることなんですけど、後悔を残したくないと。今まで〝良いモノ〟を作るために削られた部分に対して、後々になって後悔することが多々あったんですよ。今回も自分たちでかなり削りましたけど、後悔を残すぐらいなら削らないとか、足さないというやり方でやったのが、正解だったと思う。

Naoya：今まで基準がセールス的な商品価値というところだったのが、今回は俺たちの中での作品価値というものでしかなかったんですよ。だからフルチンのアルバムができたんじゃないかと(笑)。それがいい形をしているか、悪い形をしているかは分からないですけど、ピュアな俺たちの形をしているんじゃないかな。

Ken-ichi：最終的にでき上がって、自信を持っちゃったのはしょうがないことでね。裸にしろ、やり方がどうにしろ、最終的にはでき上がったものが判断基準であって、それが俺らに…はっきり言って周りのことを考えへんぐらい自信過剰にさせてしまうアルバムができたもんやから、しょうがない(笑)。

Naoya：気持ちの中では無敵だよな。

Ken-ichi：今までも「このロック業界で俺らの敵になるもんはおらん」って言ってましたよ(笑)。ただね、それをわざわざ口に出さなくても「3月21日を待ってみろ」みたいな気分になれたのは今回が初めてやないかな。ファンの手元に届くのは3月21日やけど、その手前でいろんな人が聴いて、それの反応をちょこちょこ言ってくれるわけじゃないですか。口裏を合わせたかのようにみんな「すごく良くなった。分かりやすくなった」と言ってくれて、やっぱり最初にあった自信がどんどん過剰になっちゃう(笑)。これはしょうがないことかなと。

Naoya：確かに自分たちの中で作品的にクオリティーの高いものができ上がったと思うんですけど、その他に今回のレコーディングで、お互いの力量に対して改めて感激できたんですよね。

●改めてメンバーを尊敬できたと。

Naoya：何かね、スピーカーから出てくる音を聴いて、カッコいい！って思っちゃうんですよね。もう体感。理屈抜きで、素直に認めてしまいましたね。お互いが共鳴し合えた。

Ken-ichi：このアルバムは、そういう意味での存在価値だけでいいやと。別に世の中に広がらなくて、自費出版で自分たちだけで作って「みんなようやったな」っていうアルバムでもいいという気持ちがある。

Naoya：そういう精神的なつながりという面で、このアルバムが俺たちに財産を与えてくれたみたいなところがある。

〝悩める〟ということがすごく楽しかった

●レコーディングの時はどんな雰囲気だったんですか。セルフプロデュースだけにいろいろ悩んだと思うんですけど。

Naoya：悩んでいる時の顔ってあると思うんですよ。その時にKen-ichiが見た俺の顔が、今までと違ったらしいんですよ。

Ken-ichi：違ってた。絶対にある程度、悩まなかったらウソですよね。ちゃんとクリエイティブな作業をしてるんやから。ただその時に、以前のNaoちゃんだったらギターブースから「ソロが浮かばない」って戻って来たとき、空気がどんよりしてて、こっちも掛ける言葉がなかったんですよ。今回は煮詰まって戻って来ても、笑いながら帰って来るんですよ。もしくは冗談を言いながら帰って来る。そういう状態だと俺らも話かけやすいわけじゃないですか。「今の良かったけど、あれはこういうのんがええんちゃうか」って。別にNaoちゃんは俺らを意識してたんじゃないんですよ。俺らの気分をほぐすためにわざとニコニコして出てきたんじゃない。

Naoya：そんな器用な人間じゃない(笑)。

Ken-ichi：だから、〝悩める〟ということが、すごく楽しかったんやと思う。自分の中で煮詰めて、悩めて、答えが出せるというのがね。今までは悩んでしまうとだれかから答えが出てしまう。

●そのためにプロデューサーがいるわけですからね。

Ken-ichi：そうそう。悩んでしまうとその人からの答になってしまう。それは悪いことじゃないんですけど、できるもんなら自分から出したいから、煮詰まると焦ってしまうんでしょうね。でも、今回はどれだけ時間がかかろうが最終的に出すのは自分の答であって、自分の音であるという自信もあったから、すごく前向きな悩みが見られた。

Naoya：今回は自分たちだけでやるんで、合宿をやったんですよ。レコーディングをする曲に関しても、チェックし合ったりとかね。録りの直前まで「グルーブが違う」とか細かいところまで突き詰めてましたね。ただひたすら一つの…グルーブだったら、グルーブのことだけを考えられていた。すごく環境が良かったってのもありましたね。

●そうやってメンバーが作ったオケに、Ken-ichiさんが歌を入れるわけじゃないですか。結構、気合も入ったんじゃないですか。逆にプレッシャーがかかった？

Ken-ichi：いくら曲作りの段階でみんなが「こんなふうにしよう」とギターとかベースを入れてても、俺が違う歌い方をすれば、違うものができるんですよ。そういう自信は昔からあるんで、歌入れに対する悩みとかはなかったんです。言い方は悪いんですけど、「俺が歌えば形になる」と思ってた。

●じゃあ、自分が歌うことによって、曲をもっと良くしてやるとかは？

Ken-ichi：俺が歌うことによって100が120になることは、やっぱりあると思うんですよ。でも、それを目指しているんじゃない。ただ、できてきたもんの上に気持ちよく乗らせてもらって、みんなのエネルギーを受けたボーカリストとして歌いたいだけ。あくまでもイメージ論ですけどね。それで120になってれば幸いです。

●今回は今まで以上に気持ちよかったんじゃないですか。

Ken-ichi：曲ができてきた段階で、「今回は気持ちよく歌えるやろな」ってのがありましたよ。俺の歌い回しってあるし、やっぱり好きな歌い回しもあるしね。そういうのを作曲者が分かってきた…〝分かってきた〟という言い方はおかしいな(笑)。みんなが歩み寄ってきたんだと。だから、今までは自分の歌い回しじゃないと思ったところは変えたりしてたんだけど、今回ほどそのまま気持ちよく歌わせてもらったことはない。

Naoya：Ken-ichiから影響を受けたり、Junから影響を受けたり、Takeshiから影響を受けたりというのは、お互いあるから、その分みんなが向かう方向に自然と向かっちゃうんですよね。不思議なもので。

Ken-ichi：バンド内でこんなにお互いのことを言うのは気持ち悪いねんけどね(笑)。

Naoya：褒め殺し合いかって(笑)。

Ken-ichi：実際、そう言わなしゃあない。このアルバムを語る上では、ここから話さんとしゃーない(笑)。俺がキッズやったころって、人のそんな話って気持ち悪かったし、「うそつけー」とか思ってたんやけど、違うんやなって。やっぱりそう言わなしゃーない。でき上がった時は、いつも感動しているけど、今回はそれが最大。

●それは、今、Naoyaさんが「みんなが向かう方向に自然と向かっちゃう」と言ってましたけど、そう思えるようになった時期に、セルフプロデュースすることができて良かったのかもしれませんね。

Ken-ichi：いろんな意味でね。時期も、単純にメンバーの年齢とかも。いい時期に、思う通りのアルバムができた。

自分らが思っている以上にいい作品になりつつある

●曲順を決めるのに苦労はしなかったですか。

Ken-ichi：ちょっと苦労したかも。「全曲シングルにできる」という言い方をしてたんやけど、それは今までもやってきたんですよ。どの曲をシングルにしてもおかしくない出来にするというのはね。逆にそれが足を引っ張って、みんないい曲やからどの曲がいい曲なんか分からんと（笑）。そういう意味では、今回もそう。曲調は分かれていると思うんですけどね。だから、結構悩んでね、"死"をテーマにしている歌詞の曲があったりするから、その次に「初恋」はないだろうと（笑）。でも、最終的にはそういったことは抜きに、単純に曲の並びだけで決めたんですけど。

Valentine D.C.

ALBUM
All is Vanity

CROSS TALKING

●1曲目が「パラシュートが必要だ」だったのは、意外だったんですけど、何度も聴いていると今のヴァレンタインD.C.を象徴しているような気もしてきて、1曲目というのがうなずけたんですよ。

Ken-ichi：あんまりカッコいいことは言わずに、ガツンと出したかったんですよ（笑）。

Naoya：アルバムとして戦略的な部分がなかった。だいたい1曲目というのは「ノリノリのアップテンポの曲で引き込んでおいて…」ってあるじゃないですか。そういうのではなくて、「パラシュート～」は俺たちにとって新境地的なところもあると思うんですよ。

Ken-ichi：でも、1曲目は曲が全部出そろった瞬間に決まってたような気がする。

Naoya：うん。これで始まったら単純にカッコいいだろうなって。

Ken-ichi：唯一、狙ったのはそれと対比させて「鎮魂歌（レクイエム）」で終わったこと。後は、ラフに組み立てた。レコーディング中に「そろそろ曲順考えなあかんな」と言ってる時は、まだ曲が完成してなかったし、歌詞の流れとか考えてたから悩んだけど、曲が出そろったら早かった。

●個人的には、「カセットケース」～「Hear This Booing」の流れがすごく気持ちいいと思ってるんですよ。

Ken-ichi：一番、レパートリーが飛んでいる部分じゃないかな。目まぐるしく変わるところですね。

Naoya：それを気持ちよく感じてくれているというのは、きっと俺たちと同じ感性を持っているんですよ（笑）。

Ken-ichi：今回のアルバムはね、言い方は悪いですけど、どんな曲順でも「きっと、こういう意味なんやろな」と勝手にとらえてしまう説得力を持っていると思うんですよ。さっき「パラシュート～」を1曲目にしたことに、「きっとヴァレンタインがこんなことを出したくて、やっているんだろな」って言ってくれましたけど、それが「カセットケース」でも同じようなことを考えてもらえると思うんですよ。確かにいろいろ考えた部分が伝わったところもあるけど、それ以上に深読みしてくれている場合が多い。だから、自分らが思っている以上にいい作品になりつつある（笑）。

思っているものを素直に出せば絶対にストレートに伝わる

●このアルバムを作る前に曲作りや歌詞とかでテーマみたいなものはあったんでしょうか。例えば歌詞を読んでみても、全然飾っていないし、自分のボキャブラリーだけで書いたような、それこそコンセプトアルバムという言葉がありますけど、それをこのアルバムに当てはめればコンセプトが"Ken-ichi"になりそう。

Ken-ichi：実際、そうですね。歌詞はいろんなスタイルがあると思いますけど、たまたま俺のスタイルは俺のことを書く。できるだけ飾らない言葉で、俺のボキャブラリーだけでね。新しい言葉が必要なために、何かをよそから持ってきたりとかしない方ですから。そういう意味では自分で見てもボキャブラリーが増えましたよ。昔の俺だったら選ばない言葉…同じようなボキャブラリーを持っていても、チョイスの仕方が変わってきた。

Naoya：今の段階でね、小さなところでコンセプトを決めちゃうともったいないような気がする。やりたいと思っているものを素直に出せば、丸裸の俺たちの感性だとか、精神的な部分とかは、絶対にストレートに伝わるんじゃないかな。この四人だけでしかやってないんだから、でき上がって聴いてみたらトータリティってあるはずだから。

Ken-ichi：そういう意味ではウチは古臭いし、カッコ悪いかもしれないけど、「ソウルでしょ！　まずはスピリッツでしょ！」というのがある。俺が何でミュージシャンであり、シンガーというものをやっているのかと言うたら、スピリッツを伝えたいというのがすごい基本にあるから。その大枠さえ外さなきゃ、何でも自分の思った通りの音になると思っている。

Naoya：人間的なところというのは、やっぱり「俺たちがやっているんだ！」というか、自分のスタイルというものを伝えたいじゃないですか。いつも言っているんですけど、自分の気持ちが手に伝わって、弦をはじくわけじゃないですか。それが音になって、伝わればいいと思いながらやっている。

●ダサイ表現なんですけどコンセプトが"ヴ

アレンタインD.C.“ということですよね。
Ken-ichi：そうそう。聴かれたら、そう答えなきゃしょうがない。
●Ken-ichiさんは歌詞を書く時は、曲を聴いてから書いているんですか。
Ken-ichi：俺は基本的に歌詞をためたりはしないんで、曲を聴いてイメージすることから始まって…どうしてもその時に言いたいことがあれば、言いたいことから曲を探す作業もするけどね。でも、大抵は曲を聴いた時にワーっとわいてくるイメージで。例えば「これは恋愛のことで悲しいだろうな」というイメージから入ったら、その瞬間にパッと心が恋愛の悲しい位置にいますから（笑）。そっから素早く書いちゃう。
●作曲者のNaoyaさんに「どんなイメージで書いたの？」とか聴くことなく？
Ken-ichi：あっ、たまに聴きますね。任されている自信があるんで、あんまり聴かないようにはしてますけど、ふと気になった時は「これは恋愛？　夢？　悲しい？　楽しい？」という聴き方をしますね。でも、それはNaoちゃんだけでなくて、メンバー全員に聴いたりしますけどね。
●歌詞が乗った時は、作曲者としてはイメージに合ったものが返ってきてますか。
Naoya：だいたい仮題を付けてますからね。曲を作った時に、まあ数字でもいいんですけど、愛着があるから仮題を付けるじゃないですか。それが曲のイメージを象徴する場合って、たまにあるんですよ。だから仮題を見てイメージを膨らませて歌詞を書いたりすることもあるみたいですね。
●Naoyaさんって曲を作るのはMACで？
Naoya：イメージが伝わる程度に大枠だけですけどね。
●それはメロディーまで？
Naoya：メロディーも一生懸命歌って渡します（笑）。
Ken-ichi：MACで作ってると言ったらすごくカッコいいけど、実はMACをMTR代わりにしてるだけやな（笑）。
Naoya：ちょっといい音で録れるかなって（笑）。
●今回のアルバムの「野良犬」って、生ギターでジャカジャカ作ってそうですもんね。
Naoya：基本はやっぱりアコギを持って、一発録りのラジカセを前に置いて、歌いながらタラタラって弾いて「あっ、これいいな」と思ったら、そのままラジカセに録る。
Ken-ichi：一番の基本はそのアナログやったりする（笑）。
Naoya：それを最低限イメージが伝わるようなデモテープにして、持って行くって感じ。

インディーズのころからスピリッツは変わっていない

●今度はライブのことを聴きたいんですけど、最近のヴァレンタインD.C.のライブを観ていると、すごく変わってきたと思うんですよ。
Ken-ichi：変わってると思います。やっぱりライブって瞬間的なもので、頭で考えていてはできない部分とか…パッと思った瞬間に筋肉が動くということが平気で起こり得る世界なんですよね。反射神経じゃないけど、熱いモノを触った瞬間に、手が耳たぶに行っているってことがあるでしょ。それに近いものがあって、その動きに自分がびっくりする。昔からそれを感じる瞬間があったし、「これがライブなんや。楽しいな」とは思ってたけど、このごろはそれが当然。逆に頭で考える部分というのが非常に少なくなってきている。だから俺、歌詞をよく間違えてしまうんですよ（笑）。
Naoya：ダイレクト・イン、ダイレクト・アウトの世界だからね（笑）。ファンの子たちの反応を観て、それがそのまま俺たちの顔とか、音とかに出てしまう。
●逆に、そう考えるようになったから、ライブが変わってきたんじゃないですか。
Ken-ichi：だから、「変わってるんでしょう」としか言えないんですよ。変える作業というのは今までもしましたけどね。例えば「こういうふうに観えるには、どうしたらいいか」と考えてた時期もあったし、そのために衣装やメイクとかいろいろにチャレンジしてきたけど、どんな格好しようが、どんな動きをしようが、最終的にはやっぱりスピリッツは変えられなくて、それが一番大事ということが分かったんですよね。

今の段階でコンセプトを決めるのはもったいない

●スピリッツは重要ですよね。
Ken-ichi：それがそのままライブに反映されているということが変わった要因やと思うんですよ。昔は反映したかったのにできなかったからね。だから、「変わった」という言い方しかできない。でも、俺は変わったというのがベクトルが変わったとは全然思ってなくて、同じ方向を向いたままで変わったと言いたい。ベクトルの矢印が向いている方向に進んだだけだと。スピリッツは変わってないんやからね。実際、俺だけやなくて、メンバーを観てても、ほんまにインディーズのころから言うてることは変わらん。「ええ加減、大人になれよ」と言うぐらい変わらん（笑）。逆に熱くなったんじゃないかな。Naoちゃんにしても、もっと冷静やったような気がする。それが最近、感情型になってきた。
Naoya：“その時、その時の気持ちを大切に”というのがあるからね。そうじゃなきゃウソくさい。唯一、自分の根源にあるコンセプトに素直に…まあ「素直になるように」と親に“直也”って名付けてもらったんですけど（笑）、やっぱりそれが一番の基本にないと伝わらないと思う。ライブはやっぱりみんなと…一体って言うと大げさかもしれないけど、俺がステージに立って演奏しているじゃないですか。それをお客さんが観てくれて、その反応を観て俺も熱くなるみたいな。そういうところを大切にしてきたいと思ってますね。
●そんなライブが体験できる、アルバムを引っ提げてのツアー『All is Vanity TOUR』が4月の後半からスタートするんですけど、その意気込みは？
Ken-ichi：やっぱり全国を回るのは久しぶりなんで、前回どれだけ種をまけたかということが、ちょっと疑問。
●それがどれだけ育っているかを観に行く？
Ken-ichi：いや、種がまけたかどうかが疑問なんですよ。だから、今回はそれがどれだけ育っているかを観に行くんじゃなくて、もう一回種をまきに行きたい。今回のアルバムの曲をやれば、どんな土壌であれ種をまけると思っているんでね。今まで何回もやっているところでも、もう一回まきに行きたい。やっぱりデビュー作やからね（笑）。
●そのツアーの大阪公演は本誌のイベント『SEEK』なんですけど、イベントとなると種のまきがいがあるんじゃないですか。
Ken-ichi：まきがいがありますよ。それも人のところの田んぼにね（笑）。
●人の田んぼってのがアインスフィアの田んぼなんですけど、相手にとって不足なしって感じですか。
Ken-ichi：俺らがインディーズ時代に唯一ライバルと言ってしまったバンドですからね。ジャンルは違うから、アインスのような音楽を愛する人に対して種をまくことは難しいかもしれないけど、基本的にアインスと俺らが持っているスピリッツというものは一緒やと思っているから、同じものを感じられるお客さんがいたら、勝てると思っている。客を取るとか、取らへんじゃなくて、とりあえず俺はその場では勝てると思っている。こんなこと言うてたら、アインスのファンに嫌われるかもしれへんけど（笑）。
●今回のイベントはそのつもりで出てもらわないと、和気あいあいになったら面白くない。やっぱりお互いが刺激し合わないと、バンドが成長しないしね。
Naoya：でも、単純にアインスフィアと一緒にできるのは楽しみですよ。今まで何回かやってきて、勝ち負けじゃないですけど「もうちょっと俺たちやれたのにな」と今になって思うことも少なからずみんなにあると思うんでね。今はメンバーの中ではすごく自信が付いてきているわけだから、逆にリラックスしてできるんじゃないかな。でも、メラメラとどっかにあるのかも（笑）。
Ken-ichi：俺はあるよ。友達やけど、メジャーになってからアインスのライブは一回も観に行ってない。あっ、一回、パワーステーションに観に行ったのかな。でも、そこで「お疲れさま」って言うのもいいかもしれへんけど、俺はその場にいない方がいいと思っている。
●ライバルだから？
Ken-ichi：う～ん、やっぱり俺の中でライバル視してたんかな？　ライブを観たいのは観たいんやけどね（笑）。
●じゃあ、バンドが刺激し合うイベントが期待できそうですね。

CROSS TALKING

栗林誠一郎

ALBUM
No Pose
BMCR-7016

マイペースな活動を続け、良質の音楽を生み出している栗林誠一郎。彼は、ソロと並行してBarbierとしての活動も行い、ZARD、DEEN、WANDSらに楽曲提供しているが、活動10年目となった97年は、自らの原点に戻ったという8枚目のオリジナルアルバム『No Pose』を届けてくれた。そこに詰まっている耳にやさしく柔らかなメロディー、言葉をそっと心の奥に運んでくる歌声は、まさに彼ならではの世界。そしてタイトル通り自然体な雰囲気が真っすぐに伝わってくる。

本誌初登場の今回は、彼の楽曲制作に対するこだわりや音楽観を交えながら、そんなアルバム『No Pose』を語ってもらった。

100パーセントにはずっとならないと思う

●今年はアーティスト活動を始めて10年という記念すべき年だそうですが、そんな時期に完成したニューアルバム『No Pose』は、栗林さんにとってどういうアルバムになりましたか。

栗林誠一郎（以下、栗林）：特に10年目ってことは意識してなかったんだけど、原点に戻るような感じのアルバムを作ろうかなとは思ってました。というのは、7枚目までテンションをどんどん上げて作って来てたから、結構マニアックな方向に行っちゃって、自分の中にも分かんなくなってるような感じがあって。で、原点に戻って、もうちょっとやさしいというか、聴いた感じが分かりやすいアルバムにしようかなと。

●アルバム中、具体的にどの辺りに栗林さんの原点が出てると思います？

栗林：1枚目のアルバムに近い曲調が多いと思うし、自分で初めてのアルバムを作る時の、好きな曲を思ったままに作った感じが出てるんじゃないかな。

●そういった理由もあるのかもしれませんが、新作の楽曲にはいろんな音楽要素が取り入れられていますね。

栗林：そうですね。いつもどういうわけだか、バラード、ハードロック、ポップス…、そういうのがいろいろ集まっちゃう。それは特別に意識して「いろんなジャンルの曲にしよう」とか思ってるわけではなくて、曲ができる時点で「このメロディーはハードロックだな」とか、「バラードだな」って一緒に情景っていうか、雰囲気として出てくるんです。

●ジャケットは栗林さんが扉を開けている後ろ姿で、今にも歩き出すといった雰囲気がありますが、これはこの作品で原点に返ったと同時に次の新しい扉がたくさん見つかったことを表しているのかなと。

栗林：そういった意味もありますね。扉を開けて、今はまだ次に何があるのか分からない状態ということもあるし。

●今はまだこの作品の満足感に浸っているところ？

栗林：う〜ん…、満足はしてないけど。

●あれ？　そうなんですか（笑）。

栗林：まあ、70パーセントぐらいの満足かな。

●厳しいですね。

栗林：100パーセントにはずっとならないと思う。自分の歌とかベースとか、後はアレンジ面。いろんなところでもっともっと良くなるような気がするからね。70パーセントのOKな面は、参加してるミュージシャンがやっぱり最高ですから。一応こう言っとくんだけど（笑）。

●そのレコーディングメンバーはすっかり慣れ親しんだ人たちなんですけど、腕の立つプレイヤーばかりなのに一つだけが突出したりせずに、とてもいいバランスでまとまってますね。それぞれが楽しんだ温かさみたいなものも伝わってくるんですが、これはその中心にいる栗林さんの人柄ですかね。

栗林：人柄は…悪いですからね（笑）。きっとそのミュージシャンたちの人柄がいいんですよ。でも自分のアルバムなんだけど、参加してくれた全員がそれぞれ主役みたいに考えていたところはあります。ダビングする時もその人の個性を生かしてもらうために、特に細かい指示はしないで、本当にワンポイント、自分にこだわりがあるところだけはこうしてほしいって言っただけ。

●それぞれのアーティストに自分の力を存分に発揮してもらう。

栗林：その方がいいプレイができると思うしね。自分もそうだから。

●でも音楽って、言葉で説明するのが難しいから、ワンポイントでも伝えるのに困りませんか。

栗林：最初の慣れないころはそういうこともあったけど、最近はもうみんななじんで、和気あいあいとやってるんで（笑）。

●栗林さん自身はレコーディングの時どんな感じなんですか。

栗林：うまくいかない時は煮詰まって、結構機嫌が悪い時もあります（笑）。だれとも口をきかなくなっちゃう時もあるし。でも、結局悪いのは自分だからね。後は周りに迷惑かけちゃいけないなとか、いろんなことを思ってます。今回のレコーディングは、特に歌に時間がかかったな。ほとんどの曲がすごく歌うのが難しくて、それで煮詰まってしまったり。

●そうなんですか。歌声からは全然分からないですね。

栗林：パッと聴くとそんなに難しく感じないんだけど、歌ってみると難しい曲が多かったんですよ。

●自然にさりげなく聴こえる歌声の裏には、苦労があった（笑）。

栗林：それを見せないとこがまたすごいんです（笑）。

●なるほど。

栗林：笑って聞いてくださいよ（笑）。

●（笑）そんな中で、ボーカリストとしてのテ

インタビュー・山田純子

ーマみたいなものは何だったんですか。
栗林：聴いた人がすんなり聴けるような歌を歌えればいいなという感じでした。だから歌う時はすごく難しかったけど、それを聴いた感じはすごく簡単そうに聴こえるっていうか。難しそうには聴こえないでしょ？　そういうふうに聴こえればいいかなと。

サビへ持っていくためのメロディーが難しい

●栗林さんの楽曲の魅力は何といっても耳に残るメロディーなんですけど、それに関してはどういう意識を持たれてるんですか。
栗林：もともとポール・マッカートニーやジョン・レノンに影響を受けてるんですよ。あの二人がいてくれなかったら、今こうしてやってないかもしれない。ビートルズの曲は、アレンジとかすごくマニアックなんだけど、メロディーが優しいし、きれいじゃないですか。そういうのを小さいころから聴いてたんで、自然にメロディーを大切にした曲が生まれてくるんじゃないかな。
●でも、いくら影響を受けていても、それを作り続けることは大変なんじゃないですか。
栗林：産みの苦しみも、たまにありますね。一カ月全く曲ができない時もあるし。一番大変なのは、サビへ持っていくためのメロディー。やっぱりいつもパッと浮かんでくるのはサビなんですよ。だからそこへ持っていくためのメロディーが必要で、それがなかなか出てこない。毎回かなり悩んでますね。
●あのメロディーが生まれるのもやはり大変なんですね。
栗林：そうですね。一応、大変です（笑）。
●栗林さん自身が自分らしいなと思うのは、どんなメロディーですか。例えば新作の曲の中で説明してもらえたら。
栗林：えーっとね、9曲目の「Up To You」と、10曲目の「Bad Position」。メロディーがあちこっちに行くじゃないですか。ああいうのは難しいんだけど、自分ではすごく自分らしいなと思うし、好きですね。滑らかなメロディーラインとかよりは、そういう方が自分らしいなって。
●逆に挑戦は？
栗林：2曲目の「ポトス」かな。今までの僕の曲に比べると普通のポップ。親しみやすい曲なんじゃないかなって。メロディーもそんなに難しくないし。すごく滑らかなヤマでメロディーが来てるんで。
●栗林さんは、ZARDやDEENなど、他のアーティストに楽曲を提供されてるんですが、そういう時はそれぞれのアーティストのイメージを大切にしていると思うんですよ。逆に自分の作品を作る時はどうしてるんですか。
栗林：やっぱり他のアーティストに提供する曲っていうのは、歌いやすいのを選んで渡してるんですね。だけど、自分の曲はホントに難しい…難しいっていうか、他の人にはちょっと大変かなっていうのをあえてやってみる。例えばメロディーが飛び交ったりする僕の好きな感じの曲は、歌うのがなかなか難しいじゃないですか。だからそういうのは自分でやってやろうっていう気持ちがあって。
●アレンジのアイデアは曲を作ってる時から思い浮かびます？
栗林：だいたいは曲ができた時に、何となく見えるんですよ。それでスタジオに入って、まず思い浮かんでたものをとりあえず入れてみて。足りない部分は後でダビングしていくって感じ。
●栗林さんにとってアレンジはどういうものですか。
栗林：少しずつ肉付けしていって、形が見えてくるその段階はすごく楽しいですよね。最後にどうなるかを想像しながらやっていく。でもね、自分では自分のことをアレンジャーだとか思ってないし、特にアレンジをしてるっていう感覚もないんです。本当のアレンジャーはもっと音作りに凝ってたり、いろんな音をどんどん足していくんだけど、そういうことはしないから。僕は薄いオケっていうか、そういうアレンジがすごく好きなんで。
●『No Pose』の楽曲はアレンジによっていろんなタイプの曲に仕上がってますけど、11曲を一枚にまとめる作業って難しくはなかったですか。
栗林：またビートルズの話になるんだけど、彼らもいろんなタイプの曲があるじゃないですか。でもまとまってるでしょ。だからああいう感じになるだろうなって。
●いろんな感じの曲があっても栗林さんの声での統一感がありますものね。今回ベーシストとしては何か考えられたことってあります？
栗林：ベースって普通一般的には影の存在っていうか、目立たない存在でしょ。でも、ポール・マッカートニーやスティングとかのベースって、ギターと同じくらい目立った弾き方してたり、歌うように音が出てる。だからそういうのは僕も意識して、あんまり淡々とした目立たないベースじゃなくて、ベースの存在はちゃんと分かるような、歌うようなベースにした。自分がボーカリストだからかもしれないけど、ベースも歌うように心掛けてるっていうか。
●ベースを単なるリズム楽器で終わらせない。
栗林：そうだね。ベースもカッコいいところがいっぱいあるしね。

ライブに来たらCDとイメージが違ったらしい

●こうやって8作目になってもマンネリ化した作品は作れないし、周りのイメージも期待もあると思いますが、そんな中で自分らしい作品を作り上げていくのはアーティストとして大変なんじゃないですか。
栗林：流行にはあまり左右されないんですよ。そのお陰で、自分の形っていうのを守れてるんじゃないかな。ただ、自分らしさっていうのを特別に考えてるわけじゃないんだけど、曲とかメロディーを他のアーティストより少し変えようかなっていう意識はある。他のアーティストとはちょっと違うメロディーライン。そのぐらいかな。
●栗林さんの場合は、自分の好きなものがはっきりしてるってことが、一番の核になってそうですね。
栗林：そうだね。だから嫌いなものとかあまり取り入れないし。ちょっとワガママかもしれないけどね。
●いや、それはワガママじゃなくてこだわりでしょう（笑）。
栗林：そうかな（笑）。でもその辺はすごい頑固だし、そういうものは必要だと思う。個性も大事だしね。
●そんな中で、今の栗林さんにとって音楽っていうのはどんなものですか。
栗林：体の一部みたいなものかな。…カッコいいでしょ（笑）。
●はい（笑）。
栗林：もし音楽がなかったら、生きてないかもしれないね。
●6月には東名阪ライブが行われるんですけど、栗林さんも楽しみなんじゃないですか。
栗林：普段、ファンには全然会うことがないんで、そういうファンと接触できる機会でもあるし。自分の本当にプレイしてる姿とか、観てもらういい場所なんで、これからもどんどんやっていきたいなと思ってます。
●栗林さんの歌声だけで、いろんな想像を膨らませているファンも多いでしょうしね。
栗林：前回のライブに来た人は、CDだけのイメージしかなかったんでイメージが変わったという人が多かったんです。すごく寡黙で、静かなイメージがあったみたいで。でもMCとか聞いたり、実際にライブを観てみると全然違うんだなっていう。
●それは栗林さんにとってうれしいことですか。
栗林：うーん、そうなることが分かってたから、ちょっとイヤだった。
●でもそういうことからさらに音楽に親しみを覚えることってありますよね。
栗林：うん、アーティストだからって、あんまり堅いイメージがあってもつまらないし。いいんじゃないですか（笑）。
●どういうライブをやろうと思ってますか。
栗林：聴かせるライブ。そしてみんなが「来て良かったな」って思うライブにしたい。きっと大丈夫です。…大丈夫でしょう（笑）。

もし音楽がなかったら、生きてないかもしれないね

"J-BLUES BATTLE Vol.3"

好評、J-BLUESシリーズ第3弾！今回も豪華メンツでお届けします。

1.All Your Love (OTIS RUSH) / Akashi Masao Group
2.Get Back (THE BEATLES) / 森田ゆか
3.Ain't Nobody Business If I Do (JAMES COTTON) / Sugami
4.Bitch (THE ROLLING STONES) / Grand Color Stone
5.Bayou Blood (KENNY NEAL) / STORMY
6.Black Velvet (ALANNAH MYLES) / 坂井泉水
7.Stone Free (JIMI HENDRIX) / 椎名祐海
8.Stormy Monday (T-BONE WALKER) / 近藤房之助

BLCZ-0303　2,039YEN (IN TAX)

'97.4.5 ON SALE

Coming Soon!!!

'97.5.4 ON SALE

お待たせしました。Akashi Masao Group 1st Video、遂に発売！6月には2度目の全国ツアーも予定されている彼等全人類必見!!

1.I'm In Blue
2.Palace Of The King
3.All Shook Up
4.The Hanter
5.Ain't Nobody To Love
6.Gimme Shelter
7.Train Kept A Rollin'
8.Purple Haze
9.Reconsider Baby

(全9曲 約60分)

BLVZ-41　3,900YEN (IN TAX)

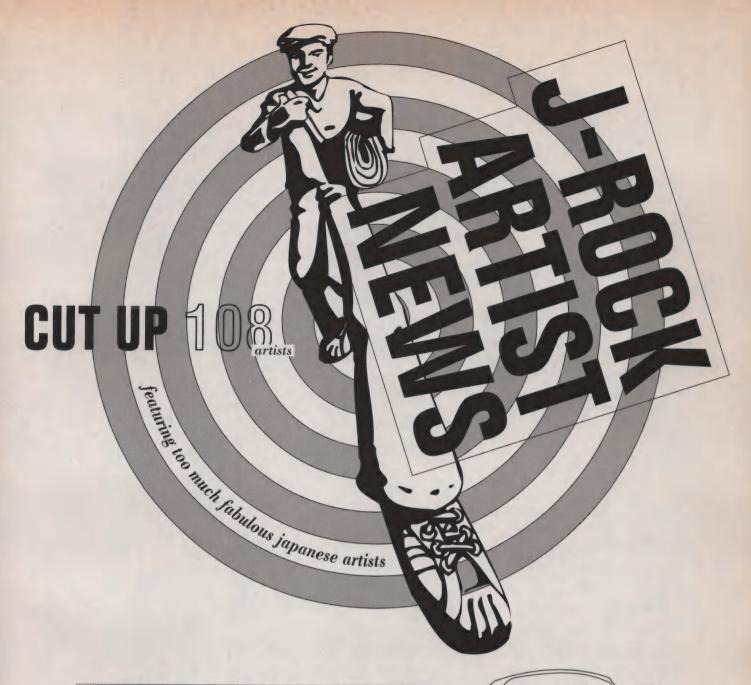
Akashi Masao Group 1st Video

"Birth Of The Blues"

BLUE-Z Artist達をサポートするファンクラブ "MEDIA GROOVE" !!
詳しい資料希望の方は80円切手同封の上、下記MEDIA GROOVE係迄。

24時間テープ案内
06-212-2240

BLUE Z RECORDS

〒542 大阪市中央区西心斎橋2-18-18 トポロ51ビル4F　PHONE 06-212-0660 / FAX 06-211-6055

SELECTED ARTISTS

J-ROCK SELECTION

ICE、Eins Vier、ACTION、Akashi Masao Group、THE YELLOW MONKEY、忌野清志郎、Valentine D.C.、ウルフルズ、X JAPAN、L⇔R、エレファントカシマシ、THE ENDS、横道坊主、大黒摩季、奥田民生、小沢健二、ORIGINAL LOVE、GARGOYLE、甲斐よしひろ、CASCADE、kyo、筋肉少女帯、GUNIW TOOLS、久保田利伸、栗林誠一郎、GLAY、CRAZE、黒夢、ken、cornelius、ZARD、斉藤和義、坂本龍一、サザンオールスターズ、佐野元春、ZYYG、シーナ&ザ・ロケッツ、SHEEN、シェラザード、SION、SIAM SHADE、JUDY AND MARY、JUN SKY WALKER (S)、少年ナイフ、SUPER JUNKY MONKEY、THE STREET BEATS、SPARKS GO GO、SPITZ、SPAED、THE SPACE COWBOYS、SMILE、SLY、ZEPPET STORE、SOUL FLOWER UNION、CHAR、CHAGE＆ASKA、CHARA、TWINZER、T-BOLAN、DEEN、DOG FIGHT、TOMOVSKY、DREAMS COME TRUE、長渕剛、ニューヴォーグ、NOKKO、PERSONZ、ハイパーマニア、▲THE HIGH-LOWS▼、BOW WOW、BUCK-TICK、VANILLA、浜田省吾、PAMELAH、B'z、PIZZICATO FIVE、氷室京介、FEEL SO BAD、FIELD OF VIEW、FAME、BLOODY IMITATION SOCIETY、BLANKEY JET CITY、布袋寅泰、真心ブラザーズ、松任谷由実、THE MAD CAPSULE MARKET'S、MANISH、Mr.Children、thee michelle gun elephant、media youth、modern-grey、THE MODS、矢沢永吉、LOUDNESS、LA'CRYMA CHRISTI、RAZZ MA TAZZ、LAUGHIN'NOSE、L'Arc~en~Ciel、LUNA SEA、WANDS

J-BLUES SELECTION

石田長生、QUNCHO、近藤房之助、塩次伸二、妹尾隆一郎、永井隆、山岸潤史、憂歌団

（ニュースは97年3月現在）

cut up 004
cut up 003
cut up 002
cut up 001
J-ROCK 100 select artists
featuring too much fabulous japanese artists

cut up 006
cut up 005
cut up 010
cut up 009
cut up 008
cut up 007
cut up 014
cut up 013
cut up 012
cut up 011
001

ICE

宮内和之がCharのトリビュートアルバムに参加した。発売は6月ごろの予定。

002

Eins・Vier

3月12日に初のライブビデオ『Live from ask』をリリース。5月21日には5枚目のシングル「…love me」もリリースされることになった。5月5日には、大阪ヒートビートで行われる本誌二周年記念イベント『SEEK』に出演するが、残念ながらチケットはソールドアウト！

003

ACTION

次のライブに向け、リハーサル中。

004

Akashi Masao Group

4月5日発売予定のアルバム『J-BLUES BATTLE Vol.3』のリリースを記念して、3月29日に大阪グランカフェにて行われる『UNPLUGGED LIVE SESSION』のゲストにボーカルの千葉恭司とギターの団篤史が出演。その翌30日には京都ミューズホール『J-SOUND『SU-NDAY BLUES LIVE』に、4月5日は京都ミューズホール『J-SOUND MUSEUM』に登場する。ファン待望のビデオ『BIRTH OF THE BLUE』は、いよいよ5月4日にに発売予定。また、ニューアルバムや全国ツアーなども予定されている。詳しい内容はブルージー(06-212-0660)まで。

005

THE YELLOW MONKEY

アリーナツアー『FIX THE SICKS』を続行中。5月2・3日名古屋市総合体育館レインボーホール、7・8日横浜アリーナ、12・13日大阪城ホール。4月19日にはニューシングル「LOVE LOVE SHOW」をリリースする。

006

忌野清志郎

3月3日にリリースされた、ジャズミュージシャン片山広明率いるデ・ガ・ショー十忌野清志郎でのインディー盤ミニアルバム『ホスピタル』が好評(問い合わせ・03-3476-0340)。このバンドでのツアー『Live in Hospital 皐月病』は、5月15日渋谷クラブクアトロ、18日名古屋クラブクアトロ、19日大阪クラブクアトロ、20日京都磔磔。また、4月16日にスタートするフジテレビ系ドラマ『Gift』(木村拓哉主演)に出演。久しぶりの俳優活動になる。

007

Valentine D.C.

3月21日にニューアルバム『All is Vanity』がリリースされた。『All is Vanity TOUR』は、4月25日熊谷VOGUE、28日名古屋クラブクアトロ、29日京都ミューズホール、5月1日福岡DRUM Be-1、2日熊本Django、4日広島並木ジャンクション、5日大阪ヒートビート(本誌二周年記念イベント『SEEK』)、12日仙台マカナ、15日札幌メッセホール、18日新潟JUNK BOXにて行われる。また、ツアーに先駆けてフリーアコースティックライブ『MEET THE V.D.C. '97』を展開中。日程は3月28日タワーレコード福岡店、29日熊本マツモトレコード、30日仙台イベントフォーラム山口、31日福島アウトライン、4月3日タハラ町田ジョルナ、5日大阪ミヤコ心斎橋店と京都京極東宝ホール、6日タワーレコード新宿ルミネ店、8日新潟JUNK BOX、11日函館あうん堂ホール、12日札幌自遊空間ホール。

Ken-ichiが西城秀樹トリビュートアルバムに参加、JunがGEORGE(ex.レディースルーム)のアルバムに参加との情報もあり！

※プレゼントあり

008

ウルフルズ

3月26日にニューアルバム『Let's Go』をリリースした。3月28日神奈川県立県民ホールからは、いよいよ『A.A.P Tour-Let's Go'97-』がスタート。3月30・31日渋谷公会堂、4月2日宇都宮市文化会館、7日市川市文化会館、9日静岡市民文化会館、12日徳山市文化会館、13日福山リーデンローズ、15日広島郵便貯金ホール、17・18日大阪フェスティバルホール、21日長崎市公会堂、23・24日福岡サンパレス、27日石川厚生年金会館、28日富山オーバードホール、5月6・7日北海道厚生年金会館、9日帯広市民文化ホール、11日青森市文化会館、13日岩手県民会館、22日新潟県民会館、23日長野県県民文化会館、30日松山市民会館、31日香川県県民ホール他。また追加公演として、5月26・27日渋谷公会堂、6月12・13日大阪厚生年金会館、6月28日沖縄県宜野湾市海浜公園が決定した。

009

X JAPAN

hideのソロライブビデオ『UGLY PINK MACHINE file』が、好評の1に続いて、2をリリース。二本見れば、絶対にライブを見たくなる！

010

L↔R

シングル「アイネ・クライネ・ナハト・ミュージック」「STAND」に続いて、いよいよ4月16日にアルバム『Doubt』をリリース。またツアー『Doubt』が決定。日程は5月15日新潟テルサ、16日富山県民会館、19日アクトシティ浜松、21日広島アステールプラザ、22日福岡市民会館、25日栃木県総合文化センター、26日仙台市民会館、30・31日大阪フェスティバルホール、6月3日名古屋市民会館、12・13日渋谷公会堂、22日札幌ファクトリーホール。ツアー直前のスペシャルライブ『Doubt"preview"』は、4月27日に赤坂ブリッツで行われ、WOWOWで生中継される。

011

エレファントカシマシ

シングル「戦う男」を3月14日にリリースした。メンバーは夏にリリース予定のアルバムのレコーディングの終了と共に、全国8カ所10公演のツアーに突入。勢いよく駆け抜ける。

012

THE ENDS

5月ごろにリリース予定だったシングルが少し先送りになりそう。完成を楽しみに！

013

横道坊主

4月16日に、東芝EMI時代のアルバム未収録曲を中心にしたベストアルバム『横道坊主 THE BEST～1989-1994～』をリリース。ライブツアーは、4月30日新宿パワーステーション、5月8日福岡ロゴス、10日大阪バナナホール、11日名古屋ハートランドで決定！

014

大黒摩季

3月26日にシングル「ゲンキダシテ」をリリース。この曲は三ツ矢サイダーのCMイメージソングとしてオンエアされている。強くて深い女心を歌う、究極のラブソングであると同時に、ヘビーな8ビートロックサウンドが圧巻。

cut up 015 / cut up 016 / cut up 017 / cut up 018 / cut up 019 / cut up 020 / cut up 021 / cut up 022 / cut up 023 / cut up 024 / cut up 025 / cut up 026 / cut up 027 / cut up 028 / cut up 029 / cut up 030

015

奥田民生

井上陽水奥田民生でリリースした、アルバム『ショッピング』が大好評だ。

016

小沢健二

未定。

017

ORIGINAL LOVE

夏ごろリリースのアルバムのレコーディングの真っ最中。今回のアルバムは、今までにやったことのない作曲の方法、アイデア、録音方法などを織りまぜた、バラエティーに富んだ作り方をしているらしい。乞うご期待！

018

GARGOYLE

バンド名を『Battle Gargoyle』として、ガーゴイルの楽曲の中から激しいものだけを演奏するスペシャルツアー『天下一武闘会』を、4月26日渋谷オン・エア・ウエスト、5月2日神戸チキンジョージ、5日新潟JUNK BOX、11日市川CLUB GIOで行う。7月で結成10周年になる彼ら。その7月にもライブを企画中らしい。

019

甲斐よしひろ

5月にシングルリリースが予定されている。また、4月25・26・27日に東京日清パワーステーションにて『ROCKUMENT 3 ～Female Night～』を行うが、5月23・24・25日にも同場所でのライブが決定。こちらのチケット発売は3月29日。

020

CASCADE

3月21日に2ndシングル「OH YEAH BABY」をリリース。4月23日には2ndビデオ『テリトリマシンガン』もリリースされる。現在は、春のクラブツアーがスタート。3月27日広島ネオポリスホール、29日大阪ウォホール、30日名古屋ダイアモンドホール、4月5・6日渋谷オン・エア・イースト、11日札幌ペニーレーン24、13日仙台ビーブベーズメントシアター。

021

kyo

4月23日にはニューシングル「ROSES」をリリース。5月21日には、広瀬さとし(スペード)、澄田健(ルーパス)など豪華なメンバーを作曲陣に迎えた全12曲収録のアルバム『Sexbeat』もリリースされる。

022

筋肉少女帯

4月30日にシングル「タチムカウ－狂い咲く人間の証明－」をリリース。また、4月12日よりラジオ『大槻ケンヂとタマゴのキミっー！』(毎週土曜日25：30～)が、TBSラジオ他全国23局ネットでオンエアされる。現在は『筋少チャン祭り　マッハー！』を展開中で、3月27・28日東京日清パワーステーション、4月5・6日大阪ウォホール。なお、人気のホームページのアドレスがhttp：//www.kids.co.jp/king-Show/に変更になった。

023

GUNIW TOOLS

好評のアルバム『OTHER GOOSE』の全曲映像化ビデオを、4月23日に発売。東名阪ライブ『March of the Goose』は、4月9日大阪ウォホール、10日名古屋クラブダイアモンド、14日渋谷公会堂(ソールドアウト)、20日渋谷公会堂(追加)で行われる。

024

久保田利伸

ライブビデオ『CONCERT TOUR '96 "Oyeees!"』が好評。現在はアメリカでプロモーション活動中。

025

栗林誠一郎

アルバム『No Pose』を3月26日にリリース。このアルバムを引っ提げて、『LIVE TOUR'97"No Pose"』が、6月12日名古屋クラブクアトロ、13日大阪クラブクアトロ、19日新宿日清パワーステーションにて行われる。

026

GLAY

5月にシングルがリリースされる予定。夏にはライブツアーも期待できそうだ。
※プレゼントあり

027

CRAZE

4月2日にビデオクリップ集『idolize FXXK MOVIES』をリリース。4月23日にはライブビデオもリリース予定だ。

028

黒夢

4月10日にニューシングル「NITE&DA-Y」をリリース。その後、ものすごい本数のツアーが決定している。まず、全国ライブハウスを駆け回る『"Many SEX Years"VOL.1/live house gig』は、5月3日熊本VOGUE、5日横浜CLUB24、9日佐賀ガイルズ、10日熊本ジャンゴ、11日福岡DRUM Be-1、13日松山サロンキティ、14日高知ZE/YO、15日高松オリーブホール、17日広島並木ジャンクション、18日京都ミューズホール、19日名古屋(会場未定)、22日金沢AZホール、23日新潟JUNK BOX、25日長野J、27日前橋CLUB FLEEZ、31日岩手AUNホール、6月1日秋田ジョイナス、3日青森ラビナ、5日札幌ペニーレーン24、8日神戸チキンジョージ。続いてホールを中心に『"Many SEX Years"VOL.2-//Many SEX [xxxx xxxxxxxx]』が、7月から10月まで44本行われる。

029

ken

ニューバンドヴァストのデモを制作中。このバンドは昨年リリースされたジャパンのトリビュートアルバム『LIFE IN TOKYO』のレコーディングに一緒に参加したKENと中村(B)、そしてオーディションにより加入したFUMI(Vo)、今年1月より参加した小関の4人バンド。何だか面白そうなことをやってくれそうな気配。ちなみに最近はライブ活動も活発化してきていて、3月27日下北沢クラブQUEで彼らに会える。

030

cornelius

引き続き、アルバムのレコーディング中。

031 ZARD

シングル「君に逢いたくなったら…」が好評。アコースティックな春を感じさせるサウンドだが、坂井泉水自身は花を咲かせたり、葉の色が変わってきたりすると春を感じるそうだ。

032 斉藤和義

アルバム『ジレンマ』から好評な10曲目「幸福な朝食 退屈な夕食」をシングルカット、4月9日に発売する。4月からはライブツアー「歌え なまけもの」もスタート。その大阪公演は、追加公演ともにチケットが一時間でソールドアウト！

033 坂本龍一

好評のシングル「The Other Side of Love」だが、坂本龍一featuring SisterMのSisterMは自分の娘、坂本美雨であることを先日公開。またこのシングルに関しては新たに、中谷美紀with坂本龍一で日本語バージョン「砂の果実」を3月21日にシングルリリースしたので聴き比べてみよう。また、5月には今年1月に行われたオーケストラツアー「f」で1曲目に演奏した約1時間4楽章の新曲「Untitled 01」も収録された、初のCDエクストラをリリース予定。

034 サザンオールスターズ

ドキュメントライブビデオ『平和の琉歌～Stadium Tour 1996 ザ・ガールズ万座ビーチ in沖縄～』と、昨年12月の「夷撫悶汰レイト・ショー」を完全収録したビデオ『夷撫悶汰レイト・ショー～長距離歌手の孤独in Jazz Cafe～』がリリースされた。次なる動きに期待しよう。

035 佐野元春

3月31日に、昨年のツアーをフィーチャーした2本組のビデオ『THE INTERNATIONAL HOBO KING BAND Featuring 佐野元春 in FRUITS TOUR '96』がリリースされる。また4月25日には音楽ライター能地祐子氏によるライブ『フルーツ・ツアー&フルーツ・パンチ』のライブルポ『フルーツ・ダイヤリー～佐野元春インターネット・ライブレポート～（仮）』も発売になる。

036 ZYYG

シングル「LULLABY」が好調だが、6月にツアーを行うことが決定。「LIVE ROCKIN' HIGH Vol.3 "Crash Beat"」の日程は、6月22日福岡DRUM Be-1、24日大阪ミューズホール、25日名古屋ハートランド、28日渋谷オン・エア・ネスト。現在は次のシングルのレコーディングに入っている。

037 シーナ&ザ・ロケッツ

レコーディングは3月いっぱいで終了予定。リリースは6月後半を予定している。

038 SHEEN

3月21日にシングル「終わらないヴァケーション」をリリースした。4月23日には初のフルアルバム『SUMP MAN』をリリース。その後ツアー『"JUMP"act I』を行う。4月24日東京日清パワーステーション、5月9日福岡DRUM Be-1、11日3日広島並木ジャンクション、15日大阪バナナホール、17日仙台マカナ。

039 シェラザード

キーボード永川敏郎のソロプロジェクト、ジェラルドのアルバム『THE PENDULUM』が、ようやく日本でもリリースされた。

040 SION

3月21日にアルバム『フラ フラ フラ』とライブアルバム『11月のクリスマス』がリリースされた。また、「SION YAON 1997」も決定。6月8日日比谷野外音楽堂、14日大阪城野外音楽堂にて行われる。

041 SIAM SHADE

彼らの魅力満載の1stビデオ『SIAM SHADE』がリリースされた。全国ツアー「逆襲のシャム」も好評で、残すは3月28・29日札幌ペニーレーン24、4月2・3日大阪クラブクアトロ、5・6日名古屋クラブクアトロ。

042 JUDY AND MARY

3月26日にアルバム『THE POWER SOURCE』をリリース。現在は全国ツアーを展開中で、3月30・31日石川厚生年金会館、4月2・3日新潟県民会館、5日松本文化会館、10日宇都宮市文化会館、13日神奈川県立県民ホール、21日松山市民会館、23日香川県県民ホール、25・26日福岡サンパレス、5月1・2日広島厚生年金会館、4日倉敷市民会館、7・8日長崎市公会堂、10・11日熊本市民会館、13日鹿児島市民文化ホール、15日宮崎市文化ホール、19・20日大阪城ホール、27・28日代々木競技場など、全国各地を回る。5月の大阪城ホール2デイズチケットは即日完売！

043 JUN SKY WALKER(S)

残念ながら解散。今後のソロ活動に注目しよう。

044 少年ナイフ

4月23日に、全曲新録音のミニアルバム『IT'S A NEW FIND』をリリース。大好評の『SUPER MIX』に続く、8カ月ぶりのオリジナル作品だ。ライブの方も4月上旬から5月中旬までの全米・カナダツアーが決定。今年も世界中で少年ナイフが大暴れする。

045 SUPER JUNKY MONKEY

バンドとしての活動はちょっとお休み。次のプロジェクトに向けて充電中。メンバー個々には活動する予定だ。

046 THE STREET BEATS

春の全国ツアー『BEATS-ISM'97』が行われている。4月13日熊谷VOGUE、25日市川CLUB GIO、26日横浜CLUB 24、5月22日広島バッドランズ、24日大阪ウォホール、25日名古屋クラブクアトロ。また、97年上半期のトリを飾る東京日清パワーステーションでのライブも6月8日に決定した。チケットは4月上旬に発売される予定。

047

SPARKS GO GO

阿部義晴（ex.ユニコーン）と共に結成したニューバンド、アベックス・ゴー・ゴーのシングル「お世話になりました」とアルバム『ABEX GO GO』が好評。4月1日神戸チキンジョージ、25日大阪メルパルクホールではライブを行う。

048

SPITZ

ロングツアー『Jamboree Tour』を引き続き展開中。3月27・28日仙台サンプラザホール、30・31日大阪フェスティバルホール、4月6日NHKホール、8・9日大阪厚生年金会館、19日沖縄コンベンション劇場。その後、延期になったライブの振り替え公演を、5月6日鹿児島市民文化ホール、8日宮崎市民文化ホール、14・15日長崎市公会堂で行い、ロングツアーの幕を閉じる。

049

SPAED

引き続き3rdアルバムのレコーディング中。

050

THE SPACE COWBOYS

全国ツアー『GALAXY WARS TOUR』がスタートした。今後は、3月27日熊本ジャンゴ、28日福岡DRUMロゴス、4月1日札幌ペニーレーン24、4日秋田ジョイナス、6日盛岡ペルソナ、8日仙台ビーブベーズメントシアター、10日新潟JUNK BOX、11日金沢VAN VAN V4、14日名古屋クラブクアトロ、15日大阪IMPホール、24日渋谷公会堂。
※プレゼントあり！

051

SMILE

4月26日日比谷野外音楽堂でライブが行われる。メンバーは、シングル&アルバムのレコーディング中だ。

052

SLY

全国ライブツアーも大盛況のもと無事終了したが、そのライブの模様を収めたビデオをファンクラブのみで手に入れることができる。オフショットや、メンバーのコメントも入った超レアアイテムだ。5月には全米でベストアルバムがリリースされ、それに伴って5月8・9・10日のL.A.でのイベント『FOUNDATIONS FORUM』に出演が決定。その後、そのまま4thアルバムのレコーディングに入る。またドラマー樋口のソロアルバム『FREE WORLD』も好調で、第二弾やツアーも予定しているらしい。
※プレゼントあり！

053

ZEPPET STORE

4月23日には、待望のアルバム『Cue』をリリース。ライブツアー『QUEST 1997』は、5月22日札幌メッセホールを皮切りに、24日仙台マカナ、26日新潟JUNK BOX、27日金沢VAN VAN V4、29日福岡DRUM Be-1、30日広島ネオポリスホール、6月1日名古屋クラブクアトロ、5日大阪クラブクアトロ、7日渋谷クラブクアトロで行われる。彼らの世界をぜひ体感しよう！
※プレゼントあり！

054

SOUL FLOWER UNION

4月21日に4曲入りマキシシングル『宇宙フーテン・スイング（英題：コズミック・フーテン・スイング）』をリリース。このシングルのジャケットは、ロード・ムービーを見ているかのような動きのある面白いジャケットになっていて、「家出のすすめ」というテーマに沿った物語をジャケットでも追えてしまう楽しい内容。また「宇宙フーテン・スイング」と「さよならだけの路地裏」のビデオクリップもクランクイン！ジャケットと楽曲で十分にロードムービーの世界を味わった後に、その世界をさらに押し広げる、叙景的「家出のすすめ」が見られることになりそう。今年最初のライブは5月1日大阪コークステップホール『コズミック・フーテン・レビュー』と、7・8日東京日清パワーステーションの『モノノケday』『ユニオンday』。さらにソウル・フラワー・モノノケ・サミットのライブが4月10日西宮枝川仮設、12日兵庫県教育会館（障害者春闘）、5月18日兵庫区湊川公園（フェスタin 湊川公園〈障害者支援フリーマーケット〉）が決定している。彼らの世界を体験しに、ぜひ出かけよう！

055

CHAR

3月21日に昨年の武道館でのライブアルバム『Char - Electric guitar Concert』を、4月21日にはライブビデオをリリースする。また、4月18日にはジョニー・ルイス&チャーのベスト盤と、アルバム3タイトルもリリース。

056

CHAGE&ASKA

CHAGEのソロバンドであるマルチマックスが、3月19日にビデオ『DOCUMENT&LIVE 1996-1997 177-DAYS Okidoki I BOOTLEG』をリリース。ASKAは3月12日にソロアルバム『ONE』をリリース後、3月30日横浜アリーナからソロツアーで全国を回る。4月10・11・13・14日名古屋レインボーホール、18・19・21・22日大阪城ホール、26・27日マリンメッセ福岡、5月1・2・4・5・7日代々木競技場第一体育館。

057

CHARA

4月23日にニューシングル「やさしい気持ち／Junior Sweet」をリリースする。

058

TWINZER

4月23日に5枚目のアルバム『prayer』をリリース。全国ツアー『LIVE AXEL#3』の日程は、5月21日福岡DRUM Be-1、23日大阪クラブクアトロ、24日名古屋クラブクアトロ、29日東京日清パワーステーション。

059

T-BOLAN

引き続き次の楽曲制作に入っている。

060

DEEN

春ごろリリース予定のシングルのレコーディングに入っている。

061

DOG FIGHT

絶好調の『LIVE BLITZ TACTICS』は、4月12日熊谷VOGUE、19日横浜CLUB24にて行われる。気合の入った丸坊主のTAISHOは必見！

062

TOMOVSKY

3月21日に初のビデオ『VIDEO TOMOVSKY』をリリースした。5月17日大阪ヒートビート、25日赤坂ブリッツではバンドライブも決定。また、インターネットのホームページも完成。アドレスはhttp://www.jah.or.jp/~takagi34/TOMOVSKY/HTM/index.htm。アクセスしてみよう。

063

DREAMS COME TRUE

メンバーは新作の制作期間中。前作『ラヴ・アンリミテッド』のバンドスコアと吉田美和のソロ『Beauty and harmony』のピアノスコアが発売になった。

064

長渕　剛

シングル&アルバムのレコーディング中。

065

nuvc:gu

6月19～22日の4日間、恵比寿ギルティにて4周年記念ライブが行われる。毎回違うゲストも登場予定とのことで、詳細発表を期待しよう。

066

NOKKO

ライブツアー終了後、次の楽曲制作、およびプリプロに入った。リリースは未定。

067

PERSONZ

6月リリース予定のシングルのレコーディング中。4月中旬からは、11枚目のアルバムのレコーディングリハーサルもスタートする。6月16日には東京日清パワーステーションのライブも決定した。好評のインターネットもぜひアクセス！　アドレスは、http://www.t3.rim.or.jp/～zoe。

※プレゼントあり！

068

HYPERMANIA

いよいよ年内にメジャーデビューが決定。着々と準備が進められている。そのためしばらくライブ活動の方は休んで、曲作りに専念するらしいが、どんな内容を聴かせてくれるのか楽しみである。

069

➡THE HIGH-LOWS⬅

5月に全新曲4曲入りの初のミニアルバムをリリース予定。もちろん先日リリースされたばかりのビデオ『ザ・ハイロウズのホリデイズ・イン・ザ・サン』も好評だ。ロングツアー『Tigermobile』もいよいよスタート。3月27日郡山市民文化センター、28日仙台電力ホール、30日岩手教育会館、31日山形ミュージック昭和セッション、4月3日千葉市民会館、11日高崎市民会館、15日藤沢市民会館、17・18日岡山市民文化ホール、20日下松スターピアくだまつ、21日広島アステールプラザ、23・24日高知県民文化ホール、25日松山市民会館、5月1日金沢市文化ホール、2日富山県民会館、4日長野NBSホール、6日新潟フェイズ、12日岐阜市民会館、14日名古屋市公会堂、15日静岡市民文化会館、22日秋田県児童会館、24日弘前スペースアストロ、25日青森市民文化ホール、27日函館金森ホール、28日札幌ファクトリーホール。その後も関西や東京で行われる。

070

BOW WOW

残念ながらバウワウが活動停止を決定。かねてより進めてきた曲作りの作業の中で、各自の音楽（ハードロック）のとらえ方の違いがはっきりしてきたためらしく、今後はソロ活動に入る。近い将来、きっと再始動してくれる日が来ることを祈ろう。

071

BUCK-TICK

延期になっていたツアーがスタートした。3月29日NHKホール、4月10・21・22日大阪厚生年金会館。久しぶりのライブで彼らはまた、新たな衝撃を感じさせてくれるはず。

072

VANILLA

3月21日にニューシングル「空を飛ぶ船～ROOM#412～」と、ビデオクリップ集『R』をリリースした。

073

浜田省吾

ツアー『ON THE ROAD'96 "tender is the night"』も、4月12・13日の札幌真駒内アイスアリーナでの追加公演でいよいよファイナルを迎える。久しぶりのツアーにファンは大喜びだった様子。ベストアルバム『初夏の頃』も好評リリース中だ。

074

PAMELAH

シングル「SPIRIT」に続いて、3rdアルバム『SPIRIT』を3月26日リリース。

075

B'z

シングル「FIREBALL」が好調。現在は初の全国ドームツアー『LIVE-GYM Pleasure'97-FIREBALL-』が行われている。3月28日福岡ドーム、4月1・2日大阪ドームでファイナルを迎える。

076

PIZZICATO FIVE

新レーベルの＊＊＊＊＊records,tokyoから、ニューシングル「イッツ・ア・ビューティフル・デイ／愛のテーマ」がリリースされた。現在は次作のレコーディング中。初夏にはニューアルバムがリリースされるかも!?

077

氷室京介

ロスでニューシングルのレコーディング中。4月末にはビデオクリップ集がリリースされる予定。

078

FEEL SO BAD

アルバム『東京パワー』を引っ提げてのライブツアー『LIVE JUMPIN' BUTT Ver.5"東京パワー"』が、4月24・25日大阪ウォホール、5月9・10日東京日清パワーステーションで行われる。

079

FIELD OF VIEW

次作の楽曲制作に入っている。

080

FAME

ボーカルのYASUが、昨年の11月に東名阪ツアー終了後、正式にフェイムを脱退。今後のフェイムの活動としては、夏のライブとCDのリリースを目指し、リハーサルおよびレコーディング中。

081

BLOODY IMITATION SOCIETY

新作のレコーディングも大詰め。全11曲をレコーディング。サウンド、曲、歌詞すべてにおいて広がりが見られ、前作よりもさらにパワーアップした内容になっているらしい。

082

BLANKEY JET CITY

曲作り中。とにかく夏まで待て！

083

布袋寅泰

3月19日にライブアルバム『HOTEI PRESENTS SPACE COWBOY SHOW』（本編のみ収録）をリリース。4月25日にはアンコールのみ収録したライブアルバム『RIMITED LIVE CD SPACE COWBOY SHOW ENCORE』とライブビデオ『SPACE COWBOY SHOW』（本編のみ収録）が同時リリースされる。アンコールのビデオは3本共通購入者対象のキャンペーンになっている。

084

真心ブラザーズ

4月2日神奈川県民ホールを皮切りに全国ツアー『APRIL PATROL』がスタート。日程は同3日仙台青年文化センター、5・6日札幌ペニーレーン24、8日新潟フェイズホール、10日大宮市民会館、13日福岡ロゴス、15日広島アステールプラザ、17日大阪厚生年金会館、18日名古屋ダイアモンドホール、25日NHKホール。今年ブレイクすると言われている彼ら。その理由はライブで分かる。

085

松任谷由実

アルバム『Cowgirl Dreamin'』が好調。『Strollin' Cowgirl Tour』も展開中で、4月2・3・5・6日名古屋レインボーホール、16・17日仙台市体育館、23・24日新潟産業センター、5月17・18・20・21・23・24日国立代々木競技場第一体育館。

086

THE MAD CAPSULE MARKET'S

最近、恵比寿MILK『デビ・ロックナイト』のシークレットライブ、アメリカテキサスのS×SWでライブと、結構活発に動いているマッド。そろそろレコーディングにも入るらしい。『MAD HOUSE Vol.2』（日程未定）も控えているので、マメにフライヤーでチェック！

087

MANISH

次作の楽曲制作中。

088

Mr.Children

待望のニューアルバム『BOLERO』をリリース。ツアーもいよいよファイナルで、3月27・28日東京ドームを残すのみだ。

089

thee michelle gun elephant

待望の『WORLD STEREO LYNCH TOUR』が決定！　5月17日日比谷野外音楽堂を皮切りに、29日札幌ファクトリーホール、6月1・2日仙台ビーブベーズメントシアター、5日福岡ロゴス、7・8日広島ネオポリスホール、10・11日大阪IMPホール、14日新潟フェイズ、16日名古屋ダイアモンドホールで行われる。

090

media youth

ギタリストKIYOSHIが、4月23日にソロシングル「SOMETHING NEW,SOMEBODY NEW」を、5月7日にソロアルバムをリリースする。

091

modern-grey

3月21日に通算3枚目のフルアルバム『Face』をリリース。これに伴い各地でキャンペーンを行う。3月29日渋谷タワーレコード、30日HMV大阪心斎橋、4月1日HMV名古屋、5日熊本マツモトレコード、6日福岡タワーレコード。内容はトーク&ミニライブ（一部ビデオ&トーク）。『Face』購入者にインビテーションカードを配布するらしいが、どの場所にどのメンバーが来るかはお楽しみ！

092

THE MODS

5月1日にシングル「HEAVY SO HEAVY」、21日にはアルバム『LOOSE GAME』をリリース予定。6月29・30日には東京日清パワーステーションのライブも決定した。チケットは5月18日より発売される。

093

矢沢永吉

アニメ映画『ドラえもん・のび太のねじ巻き都市冒険記』の主題歌に挑んだ。曲はバラードの「ラブ・イズ・ユー」。この曲は今のところCD化の予定はなく、映画のための書き下ろし。意外な組み合わせは話題になっているが、彼の一番の願いは「映画を見た子供たちに、自分の曲が持つ優しさを伝えたい」というピュアな気持ちのようだ。

094

LOUDNESS

新作のレコーディング中。

cut up 098

cut up 097

cut up 096

cut up 095

J-BLUES 8 select artists
featuring too much fabulous japanese artists!

cut up 100

cut up 099

cut up 4

cut up 3

cut up 2

cut up 1

cut up 8

cut up 7

cut up 6

cut up 5

095

LA'CRYMA CHRISTI

3月12日に初回盤5万枚限定ジャケットで豪華12面ジャケット仕様のシングル「Forest」をリリースした。4月にはイタリアなどで撮影したファーストビデオ『Glass Castle』を発売。ツアー『Sanskrit Child』は、4月16日大阪御堂会館、19日日本青年館で行われるが、チケットは両日16分でソールドアウトになった。

096

RAZZ MA TAZZ

4月9日に、TBS系TV番組「CDTV」オープニングテーマ曲に決定した待望のニューシングル「あじさい」をリリース! サウンドはよりソリッドに、メロディーはよりシンプル&ポップな仕上がりになっている。

097

LAUGHIN' NOSE

6～7月にツアーが決定。

098

L'Arc～en～Ciel

バンドの今後の活動については、現時点では未定。

099

LUNA SEA

バンドとしては充電期間中だが、5月21日にビデオ『▲▲(REW)』(¥5800)の発売が決定。全26曲が収録されたこの作品は、あの横浜スタジアムの『真冬の野外』はもちろん、最新アルバム『STYLE』リリース後の武道館公演、大雪に見舞われた94年2月12日の横浜アリーナ公演、またインディーズバンドがホール公演を行うことが驚異的だった91年9月19日の日本青年館公演など、懐かしい映像も盛りだくさんのライブヒストリービデオだ。

また気になるメンバーの動きだが、河村隆一が、4月23日にセカンドシングル「glass」をリリース。また、4月14日スタートのANB系ドラマ「ふたり」に初出演する(月曜・夜8時～)。他のメンバーの動きにも注目しておきたい。

100

WANDS

楽曲制作中。

1

石田長生

3月27日和歌山オールドタイム、28日岐阜マガジン、29日三重マクサ、31日豊橋ハウスオブクレイジー、4月1日古川リトルビレッジにてライブツアーを展開。また4月29日にも下北沢クラブQUEにてライブを行う。

2

QUNCHŌ

クンチョー&ヒズバンドとして、5月27日に高円寺JIROKICHIでライブを行う。

3

近藤房之助

ザ・ディペスト・ポケットでのライブを展開中。3月27日横浜クラブ24、4月8・9日藤沢市リストランテ・ジェノバ、10日名古屋ボトムライン、5月25日佐賀市文化会館、27日大分トップス。

4

塩次伸二

4月3日四国学院学園祭、6・10日高円寺JIROKICHI、12日京都磔磔、19日大阪ウォホール、21日京都RAGでライブを行う。

5

妹尾隆一郎

ローラーコースターとして4月11日に松本、12日小淵沢月下草舎、14日長野、15日軽井沢カナダハウスで、セノ・テラ・バンドとしては高円寺JIROKICHIでライブを行う。また、5月1～5日まで、西荻窪ワッツにて東西対抗のブルース&ソウルイベントを主催予定している。

6

永井隆

4月12日に京都磔磔の23周年ライブに出演。また、ゲストにビッグ・ホーンズ・ビー、青木智仁、佐山雅弘を迎える『JAMES BROWN大会』と称したライブも4月18・19日大阪ウォホール、23日六本木ピットインで行う。

7

山岸潤史

未定。

8

憂歌団

4月16日京都磔磔、29日日比谷野外音楽堂「緑のイベント」、5月3日茨城笠間野外コンサート、18日大阪城野外音楽堂、24日日比谷野外音楽堂でライブを行う。

★プレゼントの詳細は、P95!

3/21 Char

EDCR-68001-2
EDCR-48001-2
6,800・4,800yen

「Char-Electric Guitar Concert-#1 #2」

昨年デビュー20周年を迎えたチャー。その20年を記念して日本武道館で行われた『エレクトリックギターコンサート』(96年11月15日)の模様を完全収録。チャーの20年を2時間でたどれる選曲はお見事。ポール・ジャクソン(B)を筆頭に多彩なゲストプレイヤーが集結、デビュー当時の歌謡ロックからピンククラウドのナンバーまで、超スリリングなプレイを展開(でもチャーはリハ不足?…カッコいいから許す)。写真集付きの豪華盤も同時リリース。ファンなら迷わずこっちをゲットだ! ◆

3/19 井上陽水奥田民生

FLCF3679
SRCL3769
3,000yen

「ショッピング」

収められた全12曲のうち、「月ひとしずく」は小泉今日子が、「アジアの純真」はパフィーが既にヒットさせているけど、それ以外の曲はすべてこのアルバムで初めて聴けるものばかり。音楽的には、笠置シズ子の「買物ブギ」をもじったような曲からツェッペリン風の曲まで様々なスタイルを見せてはいるが、アルバム全体の基本的な部分は60〜70年代のロックサウンドを中心に組み立てられている。とはいうものの、この二人の個性はほんと強烈です。 ♠

3/12 ASKA

TOCT-9835
3,000yen

「ONE」

シングルカットされた「ID」と「風邪の引力」を含むニューアルバムは、全部で10曲収められていて、そのどれもが親しみやすいメロディーを持っている。歌詞にしても、曲にしてもよく練り上げられてるし、コーラスアレンジは特に優れている。「ID」を聴いた時は、アジア市場をターゲットにした感じがしたんだけど、アルバムを通して聴いてみると、バックの音なんかは、アメリカ西海岸のものが多かったりしてちょっと面くらった。ASKAの重厚な歌はやっぱりすごい。 ♠

3/3 Kiyoshiro Meets de-ga-show

SWIM-C002
1,900yen

「HOSPITAL」

最近はソロより、いろんな人とのコラボレーションで清志郎らしさを放っているが、話題作「パーティーをぬけだそう」で、はた目に見ても意外!の篠原涼子から若いエキスを吸った後の、ファイト一発状態の本作。ブラスのスパイスが効いたde-ga-showと出会い、男の本能をブチまける。再び涼子も参加しているが、曲中でもキャアー!と叫ぶほどH(でもカラッとしてる)で放送禁止モード全開だ。好きなコトを表現できるのはインディーレーベルの特権と言えるだろう。 ◆

Pick Up! New Disc

3/21 ValentineD.C.

BVCR-783
3,000yen

「All is Vanity」

一年十カ月ぶりの3rdフルアルバムがようやくリリースされる彼ら。このレビューでも最近のシングルを取り上げて紹介してきたが、今回まとめて彼らの楽曲にたっぷり触れてみて、改めて「イイ曲書くよなあ…」と再認識した。Ken-ichi(作詞)とNaoya(作曲)のコンビネーションも抜群だ。ロックの持つカッコよさもアーティストにより様々だが、男気が感じられる力強さと、飾りっ気ないストレートさが気に入った。中でも「カセットケース」はメジャーデビュー2年半を迎えた彼らの志のうかがえる、意味深いナンバー。豪快さを武器に97年は飛躍を遂げてほしいものだ。 ◆

NEW DISC Review

select artists
featuring fabulous japanese rare disc information

♥…小林 麗 ◆…青木美紀 ♠…河崎直人
♣…トライアウト ♪…編集部

4/23 ZEPPET STORE

MVCH-29001
3,045yen

「Cue」

日米インディーズシーンでCDをリリースするなど、ワールドワイドな活躍を行っているゼペット・ストアのメジャー1stアルバムが完成した。前作のアルバムでは全曲英詞だったため、意味が分からなくともフィーリングでなんとなく理解したつもりという、非常に頼りない聴き方をした私だったが、今回耳に飛び込んできた歌詞は全曲日本語。緩やかに流れるメロディーに乗ったそれは、より彼らを身近に感じることができ、メッセージがリアルに伝わってくる。 ♥

3/26 栗林誠一郎

BMCR-7016
3,000yen

「No Pose」

アーティスト活動10周年を迎え、ますます脂の乗ってきた栗林の8作目。ロックポップスも彼の手にかかればソフィスティケートされたオシャレなサウンドに変身。声質ゆえに柔らかく軽いタッチに仕上がっている。ブラックミュージックへの傾倒もうかがえ、楽曲のアレンジによい影響が見られた。気になったのは、曲先だからか日本語詞の乗せ方に少し不自然さを感じたこと。英詞の方がメロディーに合うようだ。それは彼のセンスが、洋楽に限りなく近い証拠かもしれない。 ◆

3/21 SION

TECN-40366~40367
4,000yen

「11月のクリスマス」

どこまでもやさしく心に響くSIONの歌声。昨年の『がんばれがんばれ』ツアーの渋谷公会堂を収めた、2枚組全21曲というライブアルバムが届いた。同時発売されるニューアルバム『フラ フラ フラ』収録の新曲から、「12月」や「Once Only Love」など初期の代表作までとベスト的な内容になっている。松田文、小山英樹らのいつものメンバーに支えられたSIONの歌声は様々な表情を見せながら、究極なまでの温かさをもって聴く者を包み込んでくれる。 ♣

3/21 RED WARRIORS

PCCA-01093
3,000yen

「FIRE DROPS」

昨年11月にシングルをリリース、伝説の武道館公演で復活したレッドウォーリアーズ。7年ぶりに活動を再開するまでの間にぽっかり空いた彼らの地位は他のバンドに埋められてしまった感が強いが、そんなハンデは難なく吹き飛ばしそうなパワフルサウンドで再びJロックシーンになぐり込みをかける本作。60〜70年代のハードロックテイストを押し出した男らしい王道ロックには、本物のカッコ良さを感じた。音の火の玉をつかんだら、ライブにも繰り出せ! ◆

3/21
ARDJ5045/800yen

エレファントラブ
「3マン'S」

エレファントラブの3rdシングルは、彼らMCの自己紹介的な内容でなかなか面白い。3人そろって3（さん）マン'Sという安易なテーマ。Jラップは聴いて楽しめるエンタテインメント性がウケる秘けつのようだ。クールなビート、スクラッチノイズ…とくりゃロックの道を外れてる！などとカタいことを言わず、柔軟な耳と心で立ち向かおう。◆

3/21
SRDL4321/1,000yen

VANILLA
「空を飛ぶ[illegible]~ROOM#412~」

Jロックシーンでは希少価値の女性ボーカルバンド。その中でも超個性的なサウンドを聴かせるバニラの久々のシングルは、作詞に中山加奈子を起用した彼らららしくないと感じるほどピュアでライトな楽曲。C／Wは中華風味の前シングル「つばさ」を大胆にリミックス。だが、彼らにはコアなデジタルロック路線を貫いてほしいとも思う。◆

3/14
PCDA-00959/1,000yen

エレファントカシマシ
「戦う男」

早くも今年に入って2枚目のシングルが登場。野茂が出演しているキリンのジャイブ・コーヒーのCMソングとしてオンエアされている「戦う男」は、いつもの彼らよりハードな音作りだけどエレカシ節には違いはない。C／Wの「遠い浜辺」はいつもの聴かせるパターンだけど、ノってるバンドだけに生きの良さが違うネ。♠

3/5
MEDR-11067/1,000yen

TWINZER
「Don't lose your way」

生沢佑一のワンマンプロジェクトであるツインザーの10枚目のシングル。生沢の深みも力強さもある抜群の歌唱力、適度にハードで温かいメロディーと前向きな歌詞には、文句の付けようがない。音楽ファンとして素直にいい曲だと思う。テレビ朝日の「NBA FAST BREAK」のエンディングテーマとしてオンエア中。♠

2/26
MVVD-14/6,000yen

hide
「UGLY PINK MACHINE file 1」

ピンクの髪を振り乱し、メンバー共々ステージ狭しと大暴れ! 映像に照明、そして迫力あるサウンドで観客の感覚器官を思いっ切り刺激する、めくるめくライブだ。音楽の力だけに頼らず、ショー的要素やお笑い（彼のMCは非常に面白い!）も盛り込んだ、サービスの良さ。こーんな大無礼講ライブ、機会があればぜひ観たいもの。◆

4/9
FLDF-1623
/1,020yen

RAZZ MA TAZZ
「あじさい」

壊れそうなほどの繊細さを持った彼らの新曲は、タイトル通り、淡いあじさい色のような恋心を歌ったもの。サビのメロディーがとても印象的な佳曲。C／Wの「ラバーズ　コンチェルト」もヒット性十分の美しい曲だ。96年の後半はライブも50本近くこなし絶好調だったけど、これ位高水準の曲があれば今年もきっと大丈夫。♠

3/21
FLDG-1009/800yen

中谷美紀with坂本龍一
「砂の果実」

やっぱり坂本龍一は存在そのものが話題となるだけのすごいアーティスト&プロデューサーだ。今回は素朴で透明な声の持ち主の女優、中谷美紀の3rdシングルを手がけた。楽曲自体はシスターMを起用して先行発売され、話題を呼んだ「The Other Side of Love」の日本語版。教授らしい表現は打ち込みバージョンのM②で開花する。◆

3/21
FHCF-1620/1,000yen

SHEEN
「終わらないヴァケーション」

阿久津達也、隆一がイニシアチブをとるシーンの7thシングル。ギタリストがキーボードのプログラミングを兼任したり、ドラムでなく打楽器パートの総称としてパーカッションの存在をアピールするサウンド面の工夫は注目したいが、楽曲にインパクトが感じられなかったのが惜しい。感性に火をつけて、もっと個性を磨いてほしい。◆

3/5
VIZL-25
/2,300yen

SOUTHERN ALL STARS
「平和の琉歌～StadiumTour1996 "ザ・ガールズ万座ビーチ" in沖縄～」

17年ぶりにコンサートを行った沖縄での2日間を、沖縄に住む人たちやFM局のDJ、コンサートに来た人の話などを交えて、ドキュメンタリー・タッチで描いている。ライブ前の風景や、打ち上げのシーンなど楽しい場面もいっぱいあるが、現在の沖縄が抱えている問題も忘れているわけではなく、彼らの主張は全編に満ちている。♠

3/5
VIVL-200/5,500yen

桑田佳祐
「夷撫悶太レイト・ショー～長距離歌手の孤独 in Jazz Cafe～」

酔っ払いの夷撫悶太に扮する桑田が、ジャズ・クラブでスタンダードを歌うという内容のミュージカル風ステージをビデオ化したものである。総勢18名からなるバックバンドは、村上"ポンタ"秀一や村田陽一ら、日本の誇るミュージシャンばかりだ。桑田も本来の個性を失うことなく、ご機嫌な歌を聴かせてくれる。♠

3/1
SRVM572/4,800yen

SIAM SHADE
「SIAM SHADE」

この一本で成長を続ける、シャムの魅力を探ろう。収録インタビュー中、バンド内での役割、音楽&ビジュアル的な個性を冷静に判断していたのは印象的だ。挑戦的でハードなサウンドは男性にウケが良く、それが災いしてか、まだブレイクにつながらないのが惜しいが、チャラチャラこびることなく彼らだけのカッコよさが光ってる。◆

3/1
SRVM-566/5,500yen

久保田利伸
「CONCERT TOUR'96 "Oyeees!"」

日本一グルービーな男、久保田が4年半ぶりにステージへ返り咲き! ツアータイトルやオープニングの「BIBANON FUNK NATION」は、昔人気のあったTV番組「8時だヨ!全員集合」（知ってる?）のノリ。観客も陽気に踊りだす、超楽しいライブだ。過去のヒット曲からニューアルバムの楽曲など15曲を収録。◆

3/21
ESVU465/2,800yen

TOMOVSKY
「VIDEO TOMOVSKY」

独特の雰囲気とタイム感を持つトモフスキー初のビデオ作品。カッコいいとかかわいいという感覚からちょっとハズレてるとこが、見た目にも音楽にも出ていて個性的だ。メトロフスキー（メトロノーム）を従え、のれんに腕押し（これはホメ言葉です）系へなちょこ一人ライブを繰り広げる姿を見て、コイツただものぢゃねーな、と思った。◆

3/21
SRVH-564/3,500yen

VANILLA
「R」

バニラの新旧シングルコレクション・クリップ集がリリース。ダンスビートとロックを掛け合わせた衝動的なサウンドから、昔の歌謡曲のような大衆性を感じる音作りまで多彩な楽曲を映像と共に楽しもう。演奏シーンだけでなく、映画仕立てのクリップもあって（あのローリーが出演!）面白い。オマケにCFバージョンも収録されている。◆

3/19
POVH-7005/3,000yen

GLAY
「無限のdeja vu-海賊版-」

グレイファンならもっともっと彼らのことが知りたいはず。そんな期待にこたえて、さらにツアードキュメント&オフショット満載の海賊盤が限定で登場。前作とはまた違う、リラックスしたメンバーの表情が見えるのがイイ。ライブ映像との対比を見ることで、彼らのカッコよさに納得でき、バンドへの愛着も深まること請け合いだ。◆

3/12
MEVR-48008
/4,800yen

Eins・Vier
「Live from ask」

温かく包み込むような楽曲と、トゲトゲしくアグレッシブな楽曲。そんな相反する性格を巧みに使い分けるアインスフィアの初ライブビデオは、さすがに刺激的である。いい意味でも悪い意味でも、息が詰まりそうなぐらいにメンバーの熱いエナジーが画像から押し寄せてくる。初回プレスのみに収録されているボーナストラックは必見だ！♪

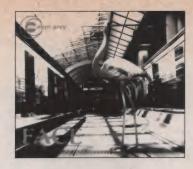
NEW DISC Review

select artists featuring fabulous japanese rare information

3/26 ESCB1805 2,800yen

JUDY AND MARY 「THE POWER SOURCE」

昨年は「そばかす」「クラシック」のヒットでジュディマリ旋風が吹き荒れたが、今年もパワー全開だ!! 記念碑的なヒットチューン二曲と、新曲「くじら12号」を含むロンドン録音の4thアルバムが完成。男臭いロックが全盛の中、女の子の視点で自然に描かれたYUKIの詞の世界と、キュートでスイートな歌をもっと楽しんじゃおう。突き刺さる音はパンクだけど、どこかに優しさを持っていたり、印象の残るメロディーがきっと人気の秘けつなんだろうな。 ♦

3/21 MVCD-44 3,000yen

modern-grey 「Face」

機械的で洗練されたサウンドのイメージがあったが、通算3枚目になる今回のフルアルバムは、ギターがより感情的になったバンドサウンドが強調されている。しかしそれとはまたひと味違った、ピアノの演奏をバックに、悲しくも美しい詞を静かにしっとりと歌い上げている楽曲もあり、モダン・グレイの世界がよりいっそう広がった感がある。大気中に溶けていきそうな、澄んだボーカルが乗ったメロディーラインは、聴いていて思わずため息が漏れそうだ。 ♥

3/21 TECN-30365 3,000yen

SION 「フラ フラ フラ」

SIONの11枚目のアルバムは、心に染み入る最高の音楽となった。一曲目の「桜のトンネル」から最後の「8月の自惚れ」まで、すべてが名曲。本当の安らぎを求めるのならこのアルバムを聴けばいい。今の時代にこんな音楽に出会えるなんてことは、そう多くないんだから。土の香りのする演奏を聴かせてくれる、松田文をはじめとするバックのミュージシャンたちも最高だ。CMで流され話題となった「がんばれがんばれ」もアルバムバージョンで収録されている。 ♠

3/26 JBDJ-1026/1,000yen

大黒摩季 「ゲンキダシテ」

大黒摩季の16thシングルは、イチローがさわやかにバットを振っている清涼飲料水のCFでオンエア中。堂々としたブラスロックに乗せたメッセージで聴き手に喝を入れてくれる。彼女の歌ってハツラツとしたイメージそのまんまが伝わってくるから、説得力があるし、同じ女として共感とあこがれを抱かずにはいられない。 ♦

3/21 VIDL250/930yen

CASCADE 「OH YEAH BABY」

彼らの2ndシングルは、引き続きムーンライダーズの白井良明がプロデュースとアレンジを担当している。元気いっぱいのリズム隊に、ポップで覚えやすいメロディーが乗るという、典型的なパワーポップ系のバンドで、個人的には大好きなタイプ。彼らのいいところは荒削りな部分だが、売れても今のザラザラした感触は大事にしてほしい。 ♠

3/19 PCDA-00948/1,000yen

L↔R 「STAND」

Doubtシリーズ第二弾シングルがリリースされた。前作でL↔Rじゃないみたいと思った人も今回は大丈夫。彼らららしい清涼感あふれる曲は、ポップスの王道と呼べる仕上がりになっている。ティンパニの音が効果的だし、メリハリのあるボーカルの存在感はさすが。東京三菱銀行のイメージソングとしてオンエア中。 ♠

ATTENTiON! PLEASE

CURIO

ロックに限らず、楽しいのが一番カッコいい

これまでに本誌インディーズコーナー“INDIES JUNK BOMB”に何度か登場したことのある関西出身のキュリオが、いよいよ4月9日にシングル「ときめき」でメジャーデビューを果たす。バンド結成から約一年でメジャーへのキップを手に上京するという、その速い展開に驚かされると共に、彼らの活動歴や今後の展開に興味がわく。そこで、メンバー全員に話を聞いてみた。

photographed by TAKASHI interviewed by KEIKO MURATA

●いよいよメジャーデビューということで、今の気持ちを聞かせてもらえる?

NOB(Vo):メジャーデビューに関しては、まだそんなに実感がないんですよ。デビューするのはもちろんうれしいけど、今は一つひとつのライブに集中してるって感じで。

●頼もしいね。デビューまでの道のりが一見トントン拍子だけど、実は考えに考えて活動してたんじゃない?

AJA(G):作戦は”ライブをいっぱいやる“。そういう前向きな野望だけはありました。

NOB:で、二年以内にデビューしようって。

●二年以内っていうのは、なぜ?

AJA:それは今年、僕が25歳になるから。25歳でプロになれなかったらバンドをやめようと。最後のバンドだから、きっちりやろうと思ったんです。

BRITAIN(Ds):これであかんかったらあかんわって感じ。だから思いっ切りやろうって。

NOB:そのことについて特に話し合うことはなかったけど、お互いの頭の中には常にありました。

KASSAI(B):ライブの度に反省会はやったし。

AJA:良くなるための努力は欠かさなかった。

●キュリオは通常のライブとは別に大阪アメリカ村の三角公園でフリーライブを定期的に行ってたけど、そのきっかけは?

KASSAI:最初は友達のバンドに誘われて出させてもらって「気持ちええな」って。で、次の誘いを待つんだったら僕らで機材買ってやろうかみたいな。

●機材を買ってまでやるバンドは珍しいでしょ。

NOB:いないですね。僕らは絶対に必要だと思ったんで。

BRITAIN:勢いで買ったとかじゃなかったし。

AJA:いるから買う。ギターを始めるのにギターを買うのと一緒の感覚で。

●そこでのライブで、どんどんファンが増えていったんだよね。

NOB:もともと僕がライブ慣れするためにやってたようなもので、ファンを獲得しようと思ってやってたわけじゃなかったけど、自然に増えたって感じ。

●”二年後にメジャーになる“を目標に活動してたわけだけど、そのために意識してたことって?

NOB:まず僕らがキュリオを好きになる。自分らが好きになって、それをみんなに聴かせたいから。

AJA:メジャーを意識して色気付いて書いた曲は一曲もないです。

音楽性は「アオーッ」ですよ

●去年の8月に上京してデビューシングルのレコーディングに入るわけだけど、やってみてどうだった?

NOB:緊張するかなと思ったんですけど、環境がすごい良かったからリラックスしてできた。もちろん「頑張ろう」っていう気持ちはあって、素直にいつもの感じでできたっていう。

AJA:結構笑ってる時間が多かった。音決めの時は悩むかなって思ったけど、それも割と素で笑いながらやってたし。「えっ? もう終わり～」とかって(笑)。

●今回、白井良明さんがプロデューサーとして参加されてるけど、彼の印象は?

AJA:面白いおじさん。

NOB:初めて会った時は緊張したけど、始まったらすっごい楽しかった。キチッと決めるところは決めて、楽しいところは楽しくっていう。なんか、監督が入ったって感じでしたね。

AJA:アレンジとかの面ではすごい助けられた。

●キュリオは自称”ブランニュー・ダンサブル・ロックンロールバンド“ってことだけど、ここにバンドのどういう思いが込められているのかなって。

NOB:素直に踊る。楽しい曲もいっぱいあるけど、もっとロックな曲もあるんですよ。それは体を動かして踊れないから心で踊るみたいな。す

べてがダンスなんですよ。

AJA:うちにあるロック色の強い曲っていうのは、割と混とんとした感じのが多いんですよ。でもロックに限らず、楽しいのが一番カッコいいから。

NOB:だから、気持ち的なところで踊るっていうのはある。アレンジにしても、何にしても、とりあえずストンと抜けるようなところはかなり意識してますね。

●キュリオの音楽は多彩な音楽ジャンルを取り込んで自分たち流に料理してるっていう印象が強いよね。

AJA:とりあえず音楽性は最初から決めなかったですね。

KASSAI:枠組みをしなかったのは、それがこれからは窮屈になってくるだろうと。

AJA:音楽性は「アオーッ」ですよ。ワーってなる感じ。それさえあれば何でもいい。

NOB:だから僕らの楽曲の中でラップが入っても、サックスが入っても、ジャズっぽいのがあってもOKだし。ジャズの上にラップが乗ってるのも全然OK。

●面白いと思ったのが、バックのサウンドだけを聴いてるとブリティッシュロックのにおいがプンプンしてるのに、NOBくんの歌が乗るとたちまちポップにはじけるところ。バンドのオリジナリティーを自分たちはどういうふうに考えてるの?

NOB:僕ら自身。

AJA:僕らが変われば音楽性も微妙な変化を見せるだろうし。成長と共に変わっていくだろうし。

●自分たちではそれをロックだと思ってる?それともポップ?

AJA:ポップの方が強いですね。ロックの縛られた感覚よりは、ポップの開けた感じの方が。

NOB:ポップな中にロックがあるっていう。

AJA:割とポップスを作ることに抵抗はないですね。ロックの姿勢って僕自身どういうものを言ってるのか分からないですけど、多分、新しいものにどん欲なものを前面に打ち出したポップスが、すごいロックに見えるんだと思うんですよ。僕は昔、ザ・ブームが好きだったんだけど、彼らが沖縄の音楽を取り入れた時とか、なんかロックな形のポップスやなと思ったし。それに多くの人たちに支持されたしね。ああいう姿勢は見習いたい。

メロディーと歌詞は僕らの命

●ポップな要素の一つとして、詞も上げられるんじゃないかと。

NOB:それは絶対そうです。

●詞は汚れがなくて透き通ってる印象があって、読んでると『アルプスの少女ハイジ』のハイジになった気分になる(笑)。

NOB:いいっスね(笑)。僕はペーターになった気分です(全員爆笑)。僕自身、書いてる詞に景色を出したいっていうのがあるんで、ああいう雰囲気っていうのはかなり意識してますね。

●それに資料としてもらったデビューシングル「ときめき」を含む四曲の詞を読んでて気付いたのが、〝雲〟という言葉が全部に出てくる。

NOB:多いですよ。空っていうか。

AJA:太陽も多いな。

NOB:その四曲は初期に書いた曲なんですね。僕ら的な飛んで行くみたいな、「これから頑張ろう!」っていう気持ちがかなり入ってる(笑)。

●その雲も全部表情が違うしね。

NOB:曇り空の雲とか、きれいなわた雲とか。全部違う雲ですね。

●結構、自然なものに引かれるって感じ?

NOB:好きですよ。草であったり、川であったり。気持ちいいんですよね。でも、これからは透き通ったところはあるけど、例えば、怒ってる詞とかも出てくると思う。

AJA:今、詞の主人公は傷ついたことがないって感じで、これからは傷ついていきますっていう。

●じゃあ、詞はどんどん変わっていきそうだね。

NOB:そうですね。

●ところでNOBくんは、ずっとジャズの世界でサックスを吹いてた人だから、歌うこともそうだけど、詞を書くこともキュリオが初めてでしょ。

NOB:そうです。だから詞を書くのは、難しいですよ。苦戦してます(笑)。僕の思ってることは僕にしか分からないから、それを他の人に伝えようと思ったら表現するところで悩みますね。逆にちゃんと伝わった時のうれしさはすごいけど。

●そこには素直な気持ちが出てるよね。

NOB:僕らは直球ですからね。

AJA:初めて聴いた時にジーンとくるかこないかっていうところが大事だと思ってて、そこでくるものがなかったら、多分二回目はないだろうし。

NOB:まず聴くところってメロディーと歌詞ですからね。そこが僕らの命であったりするから。

●今、関西のバンドが注目されている状況があってキュリオにも多大な期待が持たれるわけで、自分たちとしては音楽シーンの中で、どんな存在のバンドになっていきたい?

NOB:〝関西発〟っていうのは全然考えてなくて、なんかすごいバンドが出てきて、それがたまたま関西出身だったというのがいいですね。

AJA:目指すは上なんですけど、僕はとりあえずでかい所でやって、うちの曲の大合唱が聴きたいので、それを聴くまではやめません。

KASSAI:今、観に来てくれてるお客さんとかはすごい大事なんで、そういう人たちと僕らが一緒にどんどん成長していきたい。その結果、上に行けたらいい。

BRITAIN:やっぱりメジャーデビューできるってことは、日本全国津々浦々のレコード屋さんに届く可能性があるわけで。だから、どこでも同じように評価されて僕らのやってることが伝わればいいなと。それは周りがどうとか、位置がどうっていうんじゃなくてね。

AJA:自分のやってることが好きなうちはやり続けさせてくださいって感じかな。

●今後も楽しみながらキュリオを育てていってくださいね。

AJA:〝たまごっち〟みたいに(笑)。

NOB:へびになったらあかん(笑)。

BRITAIN:へびっち(笑)。

NOB:キュリオはへびにはなりません(笑)。

2月22日IMPホール、彼らは上京して約半年ぶりに大阪のステージに立った。大阪初のホールをソールドアウトにしてのライブは、ロックなサウンドとポップにはじけるNOBの歌声による〝ブランニュー・ダンサブル・ロックンロール〟をパワフルに元気よく見せつけられるものだった。体が踊る軽快な曲や、心が踊る聴かせる曲、そして愉快なおしゃべりが織り込まれ飽きることがない。何より、彼らがキュリオ・ファミリーと呼ぶファンとのアットホームなコール&レスポンスは、ほほ笑ましい限りだった。

今日のライブを観てNOBの言った「今は一つひとつのライブに集中してる」の意味が分かった。それは彼らが放つ音と声から自信と野心が満ちあふれ、すでに前に向かっていることが見て取れたから。今後どんなライブバンドになっていくのか今から楽しみだ。

CURIO

DEBUT SINGLE
「ときめき」
KTCR-1402

ライブスケジュール:4月12日福岡イムズホール(イベント)
First Live Tour "ドキドキパレード"
4月29日日清パワーステーション
5月8日名古屋ハートランドスタジオ
5月9日大阪IMPホール

that's the key person

インタビュー・里居正裕／撮影・金原　誠
interviewed by MASAHIRO SATOI /photographed by MAKOTO KANEHARA

今月のキーパーソンは、Jブルースの雄、近藤房之助の出番だ。売れなくても地道に活動を続けた中年ブルースマンが、アルバイト感覚で参加したB.B.クイーンでレコード大賞を受賞してしまうアイロニー。業界の売れる仕組みに気付いても、自らの本質は何も変わらない男が音楽シーンの現在を浮き彫りにする。

スターを前面に時給雇いのバックなんてことは絶対したくない

●近藤さんはブレイクダウンっていうバンドから始まって、ブルース一本で来た。それを土台に理想のバンド、グラブストリートバンドに到達することができた。やりたい素地っていうのを現実に自分の手にされているわけですが、その立場で、この音楽シーンを語っていただけないかと。

近藤房之助（以下、近藤）：最近やっと音楽が自分の生業だということが分かったんだけど、始めた当時はズルズルやってる感じで、それで生活しようなんて思ってなかった。俺も70年代くずれで会社の内定出してもらえなかったんで、バンドをやってた。あのころはブルースの過激なところとか、12小節に何でも入ってる感じの魅力にしびれて。ブルースファンだったわけですよ。若いうちっていうのは、ブルースをブルースらしく演奏することに精一杯なんだね。でも俺はブルース以外にもいっぱい培ってきてるわけですよね。ビートルズの体験だとか。

●ルーツは、必ずしもブルースばっかりじゃなかった。

近藤：というか、なんで今までこだわってたんだろうと。自分で自分の可能性があるとするならば、自分でその可能性を摘み取ってたんじゃないかって思うようになっちゃったのね。それで何でもやってみようと。プロデューサーの時代だって言われてるんだけども、音楽をコンセプチュアルにやっていくんじゃなくて、できるものをすればいいじゃないっていう。へただったらへたでもいいし。今、三つプロジェクトを持ってるんですね。その中で俺だけ切り取っても、おそらく変わってないっていう感じ。

●一人の動きとしては。

近藤：うん。愛人宅を回ってるような感覚ね（笑）。とりあえず仲がいいし、楽しいですね、すごく。日本の場合、まだロードしてグワーッて回っている人ってのは、数えるぐらいしかいないと思うんだけど。向こうは、例えばB.B.キングとか、いまだに250本やってるし。そういうバンドマンになりたいですね。ミュージシャンではなくて、バンドマンに。アーティストって呼ばれるのも嫌ですね。

●グラブストリートバンドは、分類できない音楽をやっていますね。

近藤：メンバーそれぞれのバックボーンが違うでしょ。ロンドンで持ってるバックボーンと、ニューヨークで持ってるバックボーン、宗教感が違う。その人のバックボーンを引き出すのも仕事だと思うし。それをしないでバンドがまとまるはずがないもんね。業界の音楽の作り方っていうのは、スタープレイヤーを押さえて、時給なんぼのバックバンドを作りまして、デビューさせて、発表会のようなライブをやっていく。

●だれかフィーチャーするフロントマンが一人いて。

近藤：そう。そういうのは絶対やめようと。

●そういえばニューアルバムのライナーノーツの中であえてバンド名の「FUSA&クラブ〜」からFUSAというところをはずしたんだって書かれてましたね。

近藤：もともと俺は匿名性でやってきたしね。どこそこのバンドの房之助みたいなことで成り立ってたんで、そのバンドがなくなった時は、自分の名前で出なきゃいけなかったでしょ。なんか調子悪かったですね、正直言って。

●違和感があったわけですか。

近藤：バンドの中に自分がいるみたいなのが一番好きだから。俺は自分はキャッチャーだと思うわけ。ピッチャーじゃないわけね。俺は一人だと何もできない立場なのね。

いろいろおいしい話はあるでも、そういうのダメなんだ

●シーンという大きな見方からすれば、近藤さんは傍観というか、わざと離れたかたちでいたのかなと。

カラオケを意識して曲なんか作れない

近藤：だから良かったんだと思いますよ。

●近藤さんのボーカルパワーを持ってれば、安易なやり方もあったんじゃないですか。

近藤：いろいろおいしい話はありましたけれども、俺ダメなんで、そういうの。

●90年代初頭は業界の仕掛けで色々出てきました。

近藤：でもね、そういうことは日本に限らずどこにでもある話であって、別にどこだろうといいんだけれど、俺らみたいなバンドがあってもいいんじゃないか、っていうのはありましたね。音楽がビックビジネスになってきて、プロデューサーみたいなのが現れて、それをいじられるんだけど。例えばチェッカーズだった（藤井）フミヤ君は、正直言って彼の歌を最初に音楽会で聴いたときは、「こりゃあへ ただなあ」なんて思ったんだよ。でも、ああいう世界でもまれているうちに、ひとかたのシーンになってくる。ということは、ひょっとすると俺らみたいなオヤジがブルースやってるのは何かを損してるんではないかという気はずっとありました。

●それでもわが道を行く感じになってきてますね。

近藤：ええ。それってね、どこに身を置くかっていうのは、意味のないことなんですね。

●よく聞かれるんでいやだと思うんですが、やっぱりポンポコリンの話を出さざるを得ないんです。

近藤：俺もやりたいことを続けるためには、メイキングマネーしなければいけないわけですね。俺にも生活っていうもんがありますから、子供もいて。で、俺はいまだにナレーションの仕事もやってるし、悲しいかなバンドのギャラよりいい。そういうアルバイトをいっぱいやってた一つがポンポコリン。俺、テレビも当時持ってなくって、その印税でテレビ買いましたよ（笑）。

●90年のB.B.クィーンは、フミヤ君っぽく一回のってやるって感じだったんですか。

近藤：全然のると思ってなかったです。というより全くの偶然です、あれは。

●そりゃ面白い。

近藤：印税契約でホントに良かったですよ。

●結局あのシングルが生活を変えちゃう。200万枚売れたんですよね、確か。

近藤：生活は変わらなかったですよ。慰謝料にとられちゃいました、前のカミさんに。

●あはは。

近藤：どうでもいいんだよ、そんなこと。笑って暮らせるほどの金があればいいし。ただね、それまでは、酒もホワイトなんか飲んでたけど、いまはリーガルに変わりました。

●ゴメンよ、売れちゃったんだよっていう世界（笑）。レコード大賞取っちゃったんですからね。

近藤：家が建ってない唯一のレコ大歌手。

●ははは。

何で30年続けられたか？
もっとうまくなりたいから

●自分の居場所って今どこにあるんでしょう。

近藤：だれでもそういう自分の中でのバランスをとっているはずなんだよね。例えば、2号さんとこいってイッパツやるでしょ、すると女房が恋しくなったりするんですよ。

●居場所はいくつか作っておきたい。

近藤：そういうのが偶然でき上がっちゃうんだけどね。ボーダレスでバンドやってても要するにバックボーンが違うだけだと。それでも分かり合える。それをみんなで背負い込んじゃう。みんながホントに同価値で存在するみたいなバンドがもう夢なんで。ホントに難しいことなんだろうけど。

●ここまでマイペースな近藤さんにこういうことを聞くのは気が引けないわけじゃないですが、今の音楽シーンはどう見えてますか。

近藤：日本は情報数もないのに情報誌が一つの町に五つもあるような国じゃない。情報から先に入ってくるわけよね。俺はね、面白い音楽っていうのは、例えば隣のスタジオで起こってるし、隣のちっちゃいライブハウスで起こってるというのを信じてますんで、ホントにヒップでかっこいいものがストリートで起こってると思ってますね。さりとて俺は「トップテン」を卑下したりはしない。なぜならば同格だと思っているから。売れることと売れないことっていうのは同価値なんだよね。

●ロックないし音楽で食えるっていう時代ですよね。

近藤：それはとってもいいことですよ。だってJリーグができたからこそ中学生のサッカーが盛り上がるわけだから。それはとっても素晴らしいことだよ。

●プロの世界っていうのが存在するんだっていう。昔はね「ロックなんてやってて食えるわけないじゃないか、そんなのは社会からドロップアウトするだけだよ」って言われてたのが、今それは「千人に一人かもしれない、でもお前ロックを続けてたらトップになる可能性はあるんだよ」っていう。

近藤：俺の場合バンドやり始める前、パクられてるんでドロップアウトから始めてるんですよね。バンドでしかやりようがなかったっていうか。しょうがなしにやってたもんね。当時はライブハウスなんかなくって、最初の仕事は忘れもしませんけどトップレスのお姉さんに囲まれてやったっていう、悲しい仕事でした。

●それはブルースですね、生き様が（笑）。

近藤：ブルースはもっとかっこいいですよ。ハダカを見に来たヒヒおやじが音楽なんて聴いてないですよ。

●その局面で生き残ろうというたくましさがすごい。

近藤：俺ね、18になる息子に聞かれたんですよ。売れてないのにどうして30年もやってこれたんだって。考えちゃったなあ。どうしてだろうって。まあ、他に何もできない男だっていうのが第一の理由だと思うんだけど、へただからと思ったのね。当時俺の百倍くらいうまかった人が今はもうやってないわけね。もっとうまくなろうと思って俺、ここまでこれたんだと思う、多分。

●近藤さんがうまくなりたいっていう言葉はすごく象徴的だな。

近藤：俺はへたですもん。もっとうまくなりたいですね。いい歌を歌える歌い手になりたいです。全然なっちゃいないから自分で、ホントそう思ってますよ。だから続けてられるんじゃないかな。少しずつうまくなってるから、あと40年もすりゃうまくなるかもしれんね（笑）。

ロックンロールカタルシス
なんて幻想に過ぎない

●流行音楽の背景はカラオケとかいろいろあると思うんですけど。

近藤：俺はあんまりカラオケってものはだめだなあ。作曲家にとってはおいしい話かもしれないけど。カラオケって俺自身行かないんでね、なんで銭払って行かなきゃいけないんだろうって。ただジャスト・ウェイスティング・タイム（時間の労費）って感じで、あんまり好きじゃないんだけど、あれも思えば一つの音楽のあり方かもしれないしね。例えば作曲家がカラオケではやるのを想定して作曲してるとするならば、それは大きな問題が起こってるなとは思います。そうじゃないとしたら別にいいんじゃないでしょうか。

●近藤さんはカラオケを意識して作るつもりはない（笑）。

近藤：はい、まず俺は書きません、そんな曲だったら。相撲界に例えるならば俺は死ぬまで前頭の十枚目でずっといきたいなあって思ってる。こういうリスキーなバンドは1000人くらいの会場でないと手配できないんで、三役とると今度は逆に音楽ができなくなってしまう。ここで俺商売したくないんですよ。お金はほしいですけど。

●そういう生き様って、息子さんとかどうおっしゃってますか。

近藤：ばかにされてますよ。

●ちょうど息子さんっていうのが今の音楽の受け手でしょ。息子さんはどんな音楽を聴くんですか。近藤さんの曲は聴かないとか言うんじゃないでしょうね（笑）。

近藤：あんまり聴かないんじゃないかな。今の人は割とフレキシブルに聴いてるんで、息子から教わったものも多いですよ。俺、奥田民生ってすごいいいと思うし。あと斉藤和義。カスケードってバンドも俺好きだったなあ。それも息子から教わったんですよ。

●よく聴いてらっしゃる（笑）。

近藤：興味あるのよ。何が受けてんのかな、っていうのが。

●じゃあ、けっこう最近の音源とか聴いたりします？　例えばイエローモンキーとかいるじゃないですか。

近藤：はいはい。どうもああいうグループサウンズっぽいものは好きじゃないんで、かっこいいと思うことがそうないし、ピンとこないんですけど。シャ乱Qなんてのはガッツがあっていい。一連のあの手のバンドの中では生き残る要素を持ってるんじゃないでしょうか。ああいうガッツって俺大事だと思うよ。歌謡ロックっていうものが存在するならば、まっしぐらにいってるわけでしょ。いいと思うんだよね。

相撲で言えばずっと前頭十枚目でいきたいね

●なんか今、俺たちこそロックだっていう言い方するやつの方がかっこ悪いですよね。

近藤：かっこ悪いよ。だいだいね、ロックンロールカタルシスっていうのは幻想なんだからさ。セックス・アンド・ドラッグ・アンド・ロックンロールなんてものは、もういいよって。

●今の時代にね。

近藤：というより、あのころからだいたいおかしかったよ。

●もうすでにおかしかった（笑）？

近藤：うん。だってさ、フラワーパワーが、もしそのころからホントのパワーを持ってるんだったら何か変えられたはずなんだけど、サンフランシスコのフラワーパワーの生き残りって相変わらずラリってるだけなんだから。ドラッグ研究家だったらいいけどさあ、ばかばかしいじゃない、ああいうのは。だから俺は旅が好きで旅先でいっぱいいろんな人にあったんだけど、旅が目的で生きてる人も似たようなばかばかしさを持ってるって感じ。

音楽は好きか嫌いか 白黒付けやすいのがいい

●近藤さんの場合、旅行好きだっていうのは自分の音楽とのつながりっていうので何か発見できますか。

近藤：俺の場合、例えば某フォークシンガーみたいにそれを歌にするみたいな答にしたくない。直接歌にするっていう作業ではなくてもっと形而上の影響っていうのが絶対あると思うのね。どこ行ってもね、チベットに行こうがカンボジアの最前線に行こうが、旅って自分を見に行くみたいなとこがなんかありませんか？

●それは言えますね。

近藤：それは景色はきれいだなあ、チベットっていいなあ、とか4000メートルの高山でぽかーっとするのも最高だけど、結局自分に会いに行くのよあれ。ホントにそれはニューヨークに行こうがプノンペンに行こうが俺にとっての旅っていうのはやっぱりそういうことなんだよね。

●会う度にその自分って違います？ 抽象的だけど。

近藤：うん。また抽象的にお答えしますけど、俺は「I'm changing and changeable.」なんですね。だから、変わり行く変わらないものでいたい、流されゆく流されないものでいたいなあっていう。幼児的な自意識だけで40代くらいまで生きられないですからね。そりゃ昔みたいに反体制うわーってやってって、結局その体制に組み込まれてるってこと気付かずにやってるわけでしょ。科学文化だってやっぱりそういうもんだったと思うし、そこから逃れられないっていうか。まあそういうことがよく分かる歳になってきたんですよ（笑）。だから、じゃあ自分のコアっていうのがなくなるかっていうと、ますます頑固になってくるっていうか、やっぱり流され行く流されないもの、変わり行く変わらないものでいたいって言い方が一番しっくり来るのね。

●まさに自分を確認しながら自分を保ち続けるっていうそんな感じですね。

近藤：まあ、そういう作業に他ならないと思うのね、音楽ってやっぱり。

●音楽そのものがそんな存在だと。

近藤：音楽は2種類しかないんですよ。自分にとっていい音楽と、合わない音楽。俺の音楽つまらないっていう人に朝まで説明してもしょうがないもん。

●そういう意味ではあいまいだと言われながら、最も白黒つけやすいものなのかもしれないですね。自分が好きか嫌いかっていう。

近藤：やっぱね、2年前の自分を演じなきゃいけないっていうかさ、音楽がそういうもんであるとするならば音楽やめますよ。さっき言った三役とってしまうと自分を演技しなきゃならない、しかも古い自分を演技しなきゃいけないわけでしょ。それはもう、ちょっとかなわないですね。

日本を征服したから世界へ そういうの下品で嫌いだね

●例えばここ一連の動きで、外タレでいえばキッスをはじめ復活劇が相次いでますが、ああいうのは近藤さんにはどう映ってたんですか。

近藤：別に、やればいいでしょ。ジョニー・ロットンもそれは金のためだ、って言ってるわけだから。

●はっきり言っちゃってますけども（笑）、おまえたちの金をふんだくってやるために復活したんだと。

近藤：そうそう。それはそれでいいと思うよ。すごいいい時代だと思うよ。「何やっても借金ばっかでさあ、セックスピストルズだったら借金返せると思ってやった」って言うべきだと思うよ、正直に。

●そこは、らし過ぎてね。

近藤：そういうことをね、音楽は言っちゃいけないみたいなとこがあるんだけど、俺は違うと思うな。別に金のためにやったっていいじゃない。

●それくらい音楽は自由だと。

近藤：絶対そうだよ。なんかはばかられるものがあるのね、金のこと言うと。

●近藤さんはオリジナルをこれだけ作りながら日本語的なアプローチっていうのは、あんまりされないですね。

近藤：あのね、もう10年前から考えてます。それで、もうすぐドメスティックバンドのレコーディングに入りますけれども、全部日本語でやります。

●やるんですか。ついにその挑戦が今年始まる。

近藤：別に何もこだわってたわけじゃないんですよ。ただ要するにベースは洋楽なわけですよね。洋楽の洗礼を受けているわけですよ。その表現方法が日本語だとすると絶対これは合わないんですよ。それを無理矢理合わすから英語日本語みたいなのができ上がってくるし、ああいうのってなんか奇形的な感じがしていやなんですよ。

●つまりまぜこぜにしちゃうのがいやだってことなんですか。

近藤：だから日本語でやるんだったら日本語でびっしりやりたい。ただ、いつもこれ思ってたんだけど、例えばアトランタで起こっていることは世界発信しますよね。ロンドンで起こってることも世界発信する。ロスもしかり。ところが大阪で起こってることは世界発信しないでしょ。東京に向かうだけでしょ。東京と張り合うっていうか。それってなんでだろうと思ってたの。まあ戦争に負けたっていうのが大きいのかもしれないけど、そういう感覚ではいたくないのね。だからどこでも俺は仕事があれば行くし。有名某バンドがさあ、日本を征服したから外国に目を向けようとか、ああいうものの考え方が俺は下品で嫌いなの。すごく下品な感じしますよね。そうじゃないのよ。もともと音楽っていうのは思いっ切り個人的な経験にほかならないわけで、それが世界発信ていう全体で作られるべきものであると思う。だから今度の日本語のアルバムは日本語でやるから、音の面白さっていうのを考えてみたいですね。例えばスマトラの原住民が面白く聴けるようなもの。どうもロンドンのどこそこのコンサート大成功ってうたってるんだけど、客が全部日本人だったりさ、ああいうのって俺はおかしいと思うんですよ。すべてにおいてそういうものの考え方っていうのがあって、がっくりくるんですけどね。俺は少なくともそういう生き方はしません。若い人たちはもっと、俺がとりあえずここまで来たところを、最短距離で行ってほしいですね。

TOPICS

PIZZICATO FIVE

日本から世界の音楽ファンへ向けて　新レーベル発足!

ピチカート・ファイヴが発足した新レーベル『*****records, tokyo』(レディメイドレコーズ)の発表記者会見が行われた。このレーベルは、ピチカートを中心に、日本人アーティストの世界進出を目的に作られたレーベルで、もしかするともしかして今以上に日本人アーティストの作品が、世界に鳴り響く日が来るかもしれないわけだ。

日本人アーティストが海外でどのように受け入れられているか?　最近のJ・MUSICシーンは、次から次へとエサを運び続けてくれる過保護な親鳥状態だから、ヒナ鳥のリスナーたちは常に満腹状態で、そんなことに興味のない音楽ファンも多そうだが、例えば94年にアメリカデビューを果たしたピチカートのアルバムが20万枚を突破!　95年にはアメリカ10都市、ヨーロッパ4都市でワールドツアーを行い、全会場がソールドアウト…なんて知ると、思わず関心を抱かないだろうか。日本でもCMでどんどんオンエアされるほどポップでキャッチーな彼らの楽曲が、海の向こうでも注目されているというのだから。

記者会見の席でメンバーの小西康陽氏は、「去年のDJツアーで世界中に僕たちと同じような音楽を聴いている、共通の趣味を持った人たちがたくさんいることが分かった。でも、海外に進出する日本のミュージシャンって、みんな一様に海外のレコード会社との苦労や日本の感覚とのズレを感じてる。だれだって自分のやりやすい場所で仕事をするのが一番いい力が出せると思うけど、それを考えたときに僕たちは日本コロムビアから出すのがいいかなと。これから日本の音楽も、世界中の耳にチャーミングに聴こえる時期が来ると思う。だから僕らが自分たちのやり方で、海外の人たちに合わせるんじゃなくレコードを出すことができたら」と、自分たちの音楽センスへの自信に裏付けされるロックな抱負を語ってくれた。

日本から世界に発信される音楽が、どう受け入れられるのか。今はまだ全く未知の世界だが、例えば外国映画に登場する典型的な日本人(頭髪七・三分けでメガネ)を、カッコいいロックな日本人に変身させてしまうくらいの効果を期待したいもの。加えて、21世紀のJ・MUSICシーンにも大きな影響と刺激を与えてくれたら…、そう、願わずにはいられない。

[文・山田純子]

INDIES JUNK BOMB

インディーズ・ジャンク・ボム

PEALOUT

写真左から、近藤智洋（Vo & B）、岡崎善郎（G）、高橋浩司（Ds）

PEALOUT / [ONE]
CXCA-1017 ¥2,200

4月12日三軒茶屋ヘブンスドア、25日名古屋ダイアモンドホール、5月11日下北沢クラブQUE、17日大阪クラブクアトロ。
問い合わせは、ミディ・クリエイティブ（03-3498-9555）まで。

「音楽とか気持ちが同じ方向に向いてる人と一緒にやれたらなと思ってて。最初に三人が集まって話をした時に、変なカッコ付けじゃなく、この三人でずっとやれるなっていう直感があった。それは今でも変わらないし、この先も」（岡崎）

94年7月に近藤智洋（Vo &B）、岡崎善郎（G）、高橋浩司（Ds）の三人が知り合い結成されたピールアウト。彼らはこれまでにいくつかのバンド経験を経て、お互いに「これが最後のバンドだ」の思いで活動を開始する。

「この三人でやる決め手になったのは、音楽的なことより人間的に信頼できるものの方が強かった。音楽的に根底にあるものは一緒だと思うけど、みんなが聴いてるものは多分バラバラだと思う」（近藤）

彼らのライブを観て、音と声からあふれ出る生々しさに圧倒された。攻撃的な激しい曲と、それと相反する叙情的なもの悲しさを誘う曲が併存する。それは、まるで人間の内面にある様々な感情が吐き出されているように…。

「人間だったら、だれでも持ってる両極の感情ってあるじゃないですか。例えば、表面的にはやさしくても、心の中で『ふざけんな』って思ってることもあるだろうし。そういうのが三人ともにあって、それが素直に音に出ているっていうか。サウンドでは激しい部分が出て、歌詞では本当に心の底からやさしい部分が出てるときもあるし。人間ってそういう両方の気持ちを常に天秤にかけて、どっちかを強く出して成り立ってる。バンドによっては強い部分ばかりを出していると思うけど、僕らは多分両方が出てる」（近藤）

「音楽的にはメロディーがあって、しいて言えば中期以降のビートルズみたいな雰囲気があるんだけど、サウンド的にはハードコアに通じるくらいの激しいものもありだし、ピアノを使ってしっとりしたものをやってもいいねって」（岡崎）

作曲のクレジットはすべて〞ピールアウト〟と記されている。

「基本的な原曲は僕と近藤が、フォークギターで録ったり、MTRで簡単に作ったりしたテープなんですよ。メインのフレーズやリフがあって、鼻歌が乗ってていう。骨組みだけをスタジオに持って行って、三人であれこれやって組み立てる。作曲のクレジットを〞ピールアウト〟にしてるのは、三人で作って編曲してどんどん変わって行ってできたものだから、それが一番正しいと」（岡崎）

作詞を手掛ける近藤の書く詞はすべて英語。また、これまでに発表した二枚のアルバムには各曲に必ず訳詞が付けられている。

「三人で音を出したときにやっぱりこれは英語でないとダメだと思ったんです。英語に関してはシンプルにだれでも分かるような言葉を使うことを心掛けてて。訳詞は英語で全部書いてから訳すんです。やっぱり的確に自分の思いを分かってもらいたいので、訳詞は必ず付けたい。歌詞が日本語だとメロディーを考えて作らないといけないけど、訳詞だとホントに詩として字面で書けるから、メロディーの制約もなく自分の世界が出せる」（近藤）

音楽からウソ偽りのない生き様が伝わる

作詞は英語をナチュラルに違和感なく聴かせる近藤らしさがのぞく。

「基本的に詞は曲のサビの部分から付けるんですよ。一番言いたい言葉を見つけて一行詞を作って、後はそこから広げていく。例えば、岡崎くんが作ってきた曲だったら、テープにでたらめ英語が入ってたりするんだけど、その中にすごくいい言葉があったりする。適当な英語なんだけどニュアンスで『ここにはこの言葉しか入らない』っていうのがあって、それを使って展開させていく。そういう意味では、本能的に出てきた言葉をそのまま使って展開させるんで、すごくメロディーと合う」（近藤）

「音と一体だから、どうしても方法として英語は崩せない」（岡崎）

近藤が書く詞の内容は身近なものだったり、だれもが経験して生まれる感情だったりする。

「僕が詞で一番表現したいのは、バンドでやってる、ある意味確信みたいなことで、僕たちが信用できるのは自分たちが出してる音であり、言葉であると。だから自分たちが、なぜこの三人でやってるかっていうことを歌詞で表現したい」（近藤）

「詞は必ず読みますね。それは近藤くんの考え方とダブる場合もあるし、違ったふうに取る時もある」（岡崎）

「感情移入はしますね」（高橋）

彼らは、これまでに海外アーティストの来日公演でフロントアクトを務めたことがある。

「観に来てるお客さんは、まさか僕らが出てくるなんて思ってないから、最初はシラ〜としてるんだけど、そういうところに出ると結構燃える（笑）。それがきっかけで、その後、僕らのライブを観にきてくれてる人もいるから、何回でもやりたい」（近藤）

「絶対にこっちに振り向かせてやるって（笑）」（岡崎）

2月に2ndアルバム『ONE』を発表。そこでは、バンドの本質が鮮やかな色彩を放っている。

「サウンド的にも内容的にも音の立体感が出せたっていうのがすごくある。1stがモノクロだったとしたら、2ndでよりカラーの景色を見せられるようなサウンドが作れたっていう満足感はあります」（近藤）

「気持ち的な部分も含めて納得できる音で録れたし、三人それぞれの感情がすごく出てる一皮むけた感じのアルバムになった」（高橋）

「でも、今は『次に行きたい』ってなっちゃってる（笑）。次はもっと激しくなって、やさしくなって。今はまだ、それが甘いなと思ってる」（岡崎）

「もっと極端に。今はまだ型にはまった部分での満足度だから、自分たちでさえ予想できないくらいの突き抜け方をしたい。枠があるとしたら、もう枠を壊しちゃうぐらいに。基本的にバンドってどんどん変わっていくものだから、そういう意味で変わっていくところを出して行きたい。そして、どこにもない唯一のバンドになりたいですね」（近藤）

［文・村田圭子］

INDIES DISC WATCHIN'

THE CURRENT [BRANCH]

CJIK-2010 ¥2,400

ジワジワと、しかも確実に聴く者の心を揺り動かすサウンドとボイスを聴かせる、ザ・カレントの2ndアルバム。彼らは、ザ・キュアー（どこかゆがんだ毒気のあるポップ性を持つイギリスの80年代ニューウエイブを代表するバンド）が死ぬほど好きとのことで、楽曲の中には随所にその影響が見られる。特にギタープレイは、キュアーサウンドを自分の音として表現しバンドのカラーを構築。詞は、退屈な世の中に対する、がむしゃらな自分の思いをぶつけ、平四郎のボーカルが切々と訴えかけてくる。そんな彼の歌唱力には若干、物足りなさを感じるものの、ついつい引き込まれ耳について離れない存在感があるので今後に期待したい。このバンド、その音楽からやりたいことがはっきり見えるので、そこをさらに煮詰めていけばまだまだ進化していきそうだ。

★彼らのCDを5名の方にプレゼント！

＊4月9日・5月1日・15日下北沢クラブQUE。
問い合わせは、力塾内JIKレコード（03-5410-5004）まで。

V/A [Skankin' in the Pit]

CR-005 ¥2,000

アメリカ西海岸を中心にパンク・レーベルを取り扱うディストリビューター、C.R.ジャパンが、アメリカのホープレス・レコードとの共同制作により日米14スカ・バンドを収録したオムニバムアルバム。参加した日本のバンドはすべてインディーズだ。スカと言っても、そこにパンクの要素が入ったポップな2トーンサウンドが目白押し。とにかく2拍子が跳ねまくり、もうハチャメチャにやんちゃで愉快な一枚。しかも、各バンドの個性が奔放に吐き出されていることも関わらず、それぞれの楽曲に共通する楽しさがあふれていて、そこに〞オムニバス〟という感覚はない。このアルバムは初回プレスが一週間で7000枚の実売という話題作で、それもうなずける説得力が備わっている。また、遅くはない。ぜひ聴いてみて。

★このCDとポスターを各5名の方にプレゼント！

＊問い合わせは、C.R.JAPAN（03-5386-8831）まで。

バンドパワー全開の2ndアルバム

93年に大阪で結成。結成間もなくの解散や、復活後のベーシスト不在時期を乗り越え、96年9月にShame (Vo)、Yo-Yo (G)、Atsuya (G)、Takeshi (B)、Hayashi (Ds)となり現在に至る。これを機にバンド名も"ラヴクラフト"から"レイヴクラフト"に改名。シャープに疾走するビートに、ツインギターがハードな音と繊細な音で聴かせたり、二本が激しく絡んだりと楽曲により様々なコンビネーションで迫ってくる。ボーカルは、その上で細く鋭い声で歌い上げるのだ。3月30日に発売された2ndアルバム『Delution』は、ハードロックのだいご味を味わせながら、それだけに留まらない心地よいポップナンバーも盛り込み音楽性の幅の広さを感じさせる。4月から始まる全国ツアーに期待大。

"Howaruri nation" Tour　4月1日福岡Be-1、2日大分トップス、6日高知キャラバンサライ、9日姫路ベータ、10日岡山ペパーランド、12日福山ミントンホール、15日広島並木ジャンクション、16日京都ミューズホール、27日熊谷ヴォーグ、28日前橋ラタン、30日目黒鹿鳴館、5月2日横浜7thアベニュー、3日名古屋ハートランド、6日新潟ジャンクボックス、24日大阪ブランニュー(ワンマン、入場者全員に未発表CDシングルプレゼント)。また、3月28日にアルバム発売記念イベントが大阪ROCK ROCKで行われる。問い合わせは、ナック(06-363-5032)まで。
★2ndアルバム『Delution』(NAC-705 ¥2700)を5名の方にプレゼント!

痛快にぶっ飛ぶ脳天気ビート

94年3月に千葉で結成されたトルエン。メンバーはヤマヤ ツトム(Vo)、フルタ トモノリ(G)、カワノベ タロー(B)、カマタ タツヲ(Ds)の四人。彼らが3月1日に発表した9曲入りミニアルバム「ラリホー」を聴いて、その底抜けに脳天気なはちきれ具合に思わずニヤニヤしてしまった。基本的にビートサウンドなのだが、そのビートがリズミカルでエキセントリック。だから、ギターもリズムギターに徹している。そこに乗るボーカルはというと、歌詞に意味があるのか疑ってしまうような言葉の羅列状態で、こちらも声色を自由自在に変えノリノリだ。一見、カスケードを思わせる遊び感覚おう盛な彼らの音楽、はまるとクセになる痛快さがいっぱい詰まっている。現在、彼らはCD発売記念として"春のラリホーツアー"(全国19カ所)を展開中。彼らのライブを観たら悩みなんて吹っ飛ぶこと請け合いだ。

"春のラリホーツアー" 3月27日姫路ベータ、28日松山サロンキティ、30日大分トップス、31日福岡Be-1、4月1日広島ネオポリスホール、3日長野J、4日高岡もみの木ハウス、5日金沢バンバンV4、6日新潟ジャンクボックス、7日熊谷ヴォーグ、18日目黒鹿鳴館。また、"ラリホー祭り" 5月2日千葉LOOK。問い合わせは、P.P. RECORDS(043-222-6922〈15:00〜22:00〉)まで。
★彼らのCD「ラリホー」(PPC-006 ¥2000)を5名の方にプレゼント!

●I・Z・M〈パワフルで野性的なロック〉
4月16日大阪ミューズホール。問い合わせは、尼崎ライブスクエアビブレ(06-413-3564)まで。
●eastern youth〈痛さを充満させるロック〉
3月29日盛岡市中三AUNホール、30日仙台バードランド、4月11日十三ファンダンゴ、12日博多ビブレホール、13日広島バッドランズ、14日名古屋ハックフィン、4月26日下北沢シェルター。問い合わせは、ブラックボックス(03-5350-3681)まで。
●ALLNUDE〈退廃的な詞と攻撃的かつポップなサウンド〉
4月3日下北沢クラブQUE、26日大阪ミューズホール。問い合わせは、力塾内JIK RECORDS(03-5410-5004)まで。
●candy cherry red〈ポップでセンスフルなロック〉
4月9日下北沢シェルター(ワンマン)。問い合わせは、シャリラレコード(03-3292-9710)まで。
●THE COLTS〈ハチャメチャ陽気なロックンロール〉
ツアー"ザ・コルツのカンニバルフッド"を行う。日程は、5月16日広島並木ジャンクション、17日福岡ビブレホール、19日大阪ミューズホール、20日名古屋E.L.L.、23日渋谷クラブクアトロ。なお、8月に新作をリリースしそうだ。問い合わせは、フリーワークス(03-5721-0893)まで。
●SUB-ROSA〈ヘビーでパンクなブルースロック〉
3月29日吉祥寺マンダラ、4月25日新宿ACB。問い合わせは、アスティオン(0422-20-0028)まで。
●SAVOY TRUFFLE〈本格的なブルース・ハードロック〉
3月28日大阪ウォホール、4月25日大阪ロケッツ。問い合わせは、DEAD ONE(06-212-3595)まで。
●JACK・A・NAPES〈ソリッドで都会的なロック〉
4月14日渋谷エッグマン、17日名古屋E.L.L.(ワンマン)、5月1日渋谷オン・エア・ネスト。問い合わせは、〒460 名古屋市中央区大須2-27-30 西大須ビルB1 名古屋E.L.L. ジャカネイプス係(052-201-5004)まで。
●SUGAR CUBE〈軽快でメロディアスなロック〉
4月5日京都ミューズホール(イベント)、5月6日大阪ミューズホール。※両日のライブで最新テープ『SUGAR CUBE』を発売。問い合わせは、ブレイクラッシュレコーズ(06-212-3435)まで。
●ステンレス〈突き抜けるソフトなボーカルが印象的なギターロック〉
4月16日大阪クラブクアトロ、29日大阪サンホール。問い合わせは、〒572 寝屋川市香里北之町16-7 エグゼコート香里302 / 0720-33-3443(大石橋方)まで。
●SELAPHY〈名古屋出身のたくましさと繊細さを兼ね備えたハードロック〉
4月11日名古屋E.L.L.。問い合わせは、〒460 名古屋市中央区大須2-27-30 西大須ビルB1 名古屋E.L.L. セラフィー係(052-201-5004)まで。
●セロファン〈ねじれたポップセンスが心地よいロック〉
4月6日大阪クラブクアトロ、5月11日下北沢クラブQUE。
●Chap Chimes〈ダークでちょっぴりポップなロック〉
5月4日大阪クラブクア トロ、26日新宿ロフト。
●Tinker Bell〈メロディアスなハードロック〉
1stミニアルバム『LINK』の発売記念〜Touch for "LINK" Tour〜 がいよいよスタート。3月30日目黒鹿鳴館、31日新潟JUNK BOX、4月2日名古屋ハートランド、4日博多Be-1、5日広島並木ジャンクション、6日大阪カウボーイ・ワールド(ワンマン)。問い合わせは、〒542 大阪市中央区西心斎橋2-17-9 DOWNTOWN2F DEAD ONE ティンカーベル係(06-212-3595)まで。
●NICOLE〈バラエティーに富むポップなロック〉
4月3日大阪ベイサイドジェニー、26日二丁目劇場(ライブイベント)。問い合わせは、ベイサイドジェニー(06-576-5640)まで。
●BY-SEX〈鋭く激しいノイジックロック〉
4月29日福岡Be-1、5月2日名古屋ハートランド、3日大阪ブランニュー、10日札幌ペニーレーン、14日新潟ジャンクボックス。問い合わせは、03-5376-5032(応答専用ダイヤル)まで。
●覇叉羅〈激しくパワフルなロック〉
3月29日川崎クラブチッタ(イベント)。覇叉羅プロデュースオムニバスイベントは、3月31日名古屋クラブクアトロ、4月1日大阪ウォホール、4日福岡ロゴス、24日渋谷オン・エア・ウエスト。また、ツアー「Dear Unusually Sadists」&イベントは、4月2日大阪ミューズホール、5日福岡ロゴス、6日大分トップス、8日広島並木ジャンクション、9日岡山ペパーランド、11日姫路ベータ、13日大阪カウボーイワールド(ファンクラブ会員限定イベント)、14日京都ミューズホール、15日京都ミューズホール(イベント)、17日名古屋ハートランド、21日熊谷ヴォーグ、30日新潟ジャンクボックス、5月2日仙台マカナ、4日豊田市中央公民館(イベント)、6日渋谷オン・エア・ウエスト。尚、5月2日以外のライブはすべてワンマン。問い合わせは、アリノス・マネージメント(03-3365-2867)まで。
●the Barnetts〈スタイリッシュにこだわったR&B、ロックンロール〉
4月29日大阪サンホール。問い合わせは、〒570 大阪府守口市寺方本通り3-4/06-991-6272(中矢)まで。
●THE HARPER ST. BAND〈アメリカン・ブルース・ロック〉
3月31日難波ロケッツ、4月11日大阪カウボーイワールド、18日京都ネガポジ、25日難波ロケッツ、5月14日大阪ミューズホール。問い合わせは、オフィス・ハーパー(06-698-9190)まで。
●ぱるぼら〈アグレシブでスリリングなロックンロール〉
4月20日十三ファンダンゴ、5月4日大阪クラブクアトロ、25日下北沢シェルター、26日新宿ロフト。問い合わせは、ヨロシタミュージック(03-3406-7780)まで。
●THE FILM〈アコースティックな世界を聴かせるロック〉
4月26日大阪カウボーイワールド。問い合わせは、ヒートウェイブ・リミテッド(06-634-2828)まで。
●Booby Trap Speaker〈様々なジャンルをミックスしたロック〉
1stアルバム『GREEN TUNNEL』が好評。4月3日難波ロケッツ。また、4月27日に大阪・近郊某所にて野外イベントを予定している。問い合わせは、UNDER POP(06-634-6990)まで。
●Blüe〈メロディアスなビートロック〉
一度にボーカルとキーボードが脱退したブルーだが、早くも新ボーカル決定! ライブは3月30日川崎クラブチッタ(イベント)。4月はライブをお休みして、5月4日・13日渋谷オン・エア・ウエスト(両日ともイベント)で行う。問い合わせは、クライス(06-644-0350)まで。
●THE PLAYMATES〈リズミックで親しみやすいロックンロール〉
4月11姫路マッシュルーム。また、4月16日に2ndアルバム『SAD REFRAIN』(CD)がリリースされる彼らは、その発売記念ツアーを、5月16日下北沢シェルター、18日大阪クラブクアトロ、30日博多ビブレホール、31日熊本ジャンゴで行う。問い合わせは、K.O.G.Aレコード(03-5376-1325)まで。
●ペンギンノイズ〈メロディーラインが光るギターポップ〉
4月7日下北沢クラブQUE、5月21日渋谷オン・エア・ウエスト。問い合わせは、力塾内 GOD'S POP RECORDS(03-5410-5004)まで。
●U.S.R.〈アメリカンロックとブリティッシュロックが融合したロックンロール〉
4月15日大阪ミューズホール。問い合わせは、〒616 京都市西京区嵐山中尾下町9、リバーサイド嵐山216号 office GREEN HELL(075-864-6018)三浦まで。
●楽天パイプ〈"ほのぼの"を充満させるロック〉
4月1日京都ラグ、16日渋谷ラ・ママ、5月10日広島並木ジャンクション、15日大阪カウボーイワールド。
●Raspberry Circus〈メロディアスで、ちょっぴり屈折したロックンロール〉
"HOTな夜をFIGHTでGO! Tour"が決定! 4月12日北九州マーカス、13日長崎スタジオDo、15大分トップス、16日福岡Be-1、28日広島ネオポリスホール、30日渋谷ラ・ママ、5月2日千葉クラブGIO、4日京都ボックスホール、5日名古屋E.L.L.、6日大阪ミューズホール、24日福岡Be-1(ワンマン)。また、4月27日にKBCラジオ番組"ライブ・イン・ハカタ"の公開録音がKBC第一スタジオにて行われる(入場無料)。オンエアは5月17日KBCラジオ、18日はCROSS FMにて。問い合わせは、〒812 福岡県福岡市博多区博多駅東1-1-28 松本ビルB1 博多Be-1 ラズベリー・サーカス係(092-481-7881)まで。
●ラフィアンズ〈アグレッシブでメロディアスなロック〉
5月2日十三ファンダンゴ、11日下北沢クラブQUE。問い合わせは、スマッシュウエスト(06-361-0313)まで。
●LEMONADE〈ポップでグラマラスなロック〉
"アクエリアン・エイジ・ツアー#2"展開中。3月30日原宿ルイード、31日渋谷ラ・ママ、4月2日横浜7thアベニュー、3日本八幡ルート14、8日大阪ミューズホール、13日広島ネオポリスホール、15日大分トップス、16日福岡Be-1。問い合わせは、〒460 名古屋市中央区大須2-27-30 西大須ビルB1 名古屋E.L.L. レモネード係(052-201-5004)まで。

●●●● and sO On

●ここに登場しているバンドの中でAPRIL FOOL、SUGAR CUBE、U.S.R.、Raspberry Circus、LEMONADEは、音源(テープ、またはCD)を下記のレコード店で店頭販売および、通信販売しています。在庫の確認および、通信販売方法などは各店へお問い合わせください。

JEEZ大阪心斎橋店	TEL 06-211-0063	FAX 06-211-9656
JEEZ京都北山店	TEL 075-702-6888	FAX 075-702-6999
JEEZ名古屋栄店	TEL 052-241-7676	FAX 052-241-7747

★プレゼント応募方法★

コーナー中の★印がプレゼント。官製ハガキの裏にご希望のプレゼント名と、あなたの住所・氏名・年齢、ハガキの表には「ジェイロックマガジン インディーズ・ジャンク・ボム プレゼント係」と明記の上、ジェイロックマガジン社宛に送ってください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます。締め切りは4月26日(必着まで)。

このコーナーでは、オリジナリティーを持った意欲あふれるインディーの、バンドやソロアーティストを紹介します。我こそはと思う人は、編集部まで音源、プロフィール、写真、ビデオなど活動内容が詳しく分かる物を送って下さい。取材をお願いする場合は、こちらからご連絡します。推薦もOKです。

〒542 大阪市中央区西心斎橋2-17-8 MACビル 8F
ジェイロックマガジン編集部　インディーズ係

頭に浸みこみ、想い出す、それが“ニュースタンダード”

ヴェス

VESSE

『balloon farm』 97.4.15 in store!!

SRCA-020/¥2,000 (incl.tax)

タワーレコードでお買いあげの方にライブ無料券プレゼント!! 詳しくはシャリラレコードまでお問い合わせください!!

ShaRiRa RECORDS presents EXIT vol.11

『VESSE “大気圏突入!!”』

4/14 (mon) 下北沢QUE

w/ウルトラBEEM、ザ・ディーズメイト (問) スキット! ☎03-5469-2444

3月下旬よりビデオ・クリップ ON AIR!!

シャリラ情報ダイヤル→VESSEの音が聴けるゾ! ☎03-3292-9709

《information》 シャリラ レコード ☎03-3292-9710 http://www.rock-za.co.jp/sharira-records

OUTRAGE

Volume .007

『日本が誇る世界のロックバンド』

TALK AROUND THE ROCK

YUKINOBU KAMI'S EXCITING TALK

アウトレイジを認めないヤツとロックを語り合いたくない

ワタシは、アウトレイジというバンドの大ファンである。ワタシたちの周りのロック系（？）業界人の中にも彼らのファンは多い。なのにダ！　君たちの中には、このアウトレイジを知らない人がいるというではないか。それはおかしい！　彼らは世界を舞台に堂々と活躍しているハードロックバンドなんだゾ。それなのに、彼らを知らない人が一人でもいるということは、ヒジョ～に残念である。

そこで今回は、1月25日にリリースしたアルバム『フー・ウィー・アー』を引っ提げて、ワタシのラジオ番組にメンバーの橋本直樹（Vo）、安井義博（B）がゲスト出演してくれた時の模様を紹介して、ぜひ彼らのことをもっともっと知ってもらいたいと思う。

●アウトレイジのアルバムって、リスナーが聴く前にイメージを持ってしまっている場合が多いと思うけど、今作はそんなイメージを裏切るように、これまでとチョット違うよね。基本の部分での変化はないと思うけど、さらに奥底にある何かを引っ張り出してきたような気がするんだけど。

橋本：今は、これしかやることができないんだろうね。確かに今までは〝スラッシュメタル〟とか〝これぞアウトレイジ！〟と言われるイメージの音をバンドでも出そう出そうとしてきたけど、もうそういう小細工はできないところまで来て、これしかできなかったって感じかな。曲作りにしても、構成にしても、アレンジにしても、何でもすべてこれだけしか絞り出せなかった。

安井：それだけに自分たちを丸裸にしたような、そんな恥ずかしさもあったね。

●「ブロークン・マン」や「シャドー」といった曲のような、速さというよりはむしろ、重さがズシッと来て、下からうねりがハートに伝わってくる。アウトレイジの音楽をメタルという言葉で表現してしまうなら、それは対極の意味を持つことになるけど、このアルバムは実に人間らしい人間が作った作品といったイメージを持ってしまった。

安井：自分が聴いて楽しめるアルバムを作りたいとは、ずっと思っていたんだけど、これまでは周りからのイメージにとらわれていたところがあって…。だけど、今作は曲作りの段階から、納得してとても楽しみながらできたって感じ。

橋本：ネガティブな考え方しかできない自分から、事故（彼は生死の間をさまようような大事故から復活した）を挟んで、ポジティブな自分に変わっていくその変わり目に、自己の価値観がガラガラって崩れていくのが分かって…。急激な変化がス～ッと突然出てきて、ス～ッと過ぎ去れば何でもないことなんだけど、何か分からないジワジワと膨らんでくる黒い塊みたいなもの…昔の価値観が今の生きようとしている価値観にぶつかってくるというか…挑戦してくる、そんな感じのものをいろいろな言葉を使って表現したいと思ったのが「シャドー」なんだ。

●なるほどね。とにかくこのアルバムに収録された全12曲は、アウトレイジの四人が試行錯誤しながらも何かを考え、何かに向かって、自分の生身の体で表現し、ぶつけている。そういうところがリアルに伝わってきて、頭や体、そして血の中からもわき出るような熱いものを感じる作品だと思う。

橋本：まあ、だけど自分がこの『フー・ウィー・アー』ってアルバムを聴いてみると、自分たちこそ「いったいだれなんだ」って感じがしたけどね。

現在、アウトレイジはツアーの真っ最中である。きっと君たちの街にもやって来るだろう。もしワタシの熱いメッセージが少しでも伝わったならば、ぜひ彼らのライブを体験してもらいたい。そうすれば必ずファンになることは間違いない！　しかし、もし万一、ライブを観てつまらないなどと言う人がいたとしたら、もうその人とはロックについて語り合いたくないし、そんなヤツの後のトイレは絶対に使いたくない！

ワタシをそこまで決心させるアウトレイジ。このバンド、恐るべし！

加美幸伸プロフィール

大阪市出身、32歳。「FM横浜インターナショナルDJコンテスト」でFM横浜賞受賞後、脱サラしてラジオDJに。無類のROCK好きで、その本来性とは何かを追求し続けている。
レギュラーにFM大阪「カップ・ミュージック・スポット」（月～日・21：55～）、FM滋賀「BIG TIME RADIO SHOW」（毎週金曜日・16：00～）。

□ 成長を期待するしかない…

NA-ZE?

歌謡界の雄、ホリプロが本格的なロックバンドNA−ZE?を手掛ける、と聞いて面白いと思った。それもサウンドと歌詞の両面を元ビリー&ザ・スラッツのギター、HIKARIが支えるとなれば期待は膨らむ。実際、彼は大阪にプロモーションで訪れた際、私に熱い胸の内を語ってくれた。

しかし、である。その時見せてもらったビデオでも気付いたのだが、小さからぬ問題があるのだ。最近送ってくれたプロモーションビデオを見て(聴いて)、その問題はただならぬのでは、と懸念はさらに増す。音楽性は高く、歌詞もメッセージ性が強く感じられる。才能は確かなものがあるのだ。

ずばり歯に衣着せず指摘すると、問題はボーカリストである。以前から本誌が指摘するアイドルロック的なやばさが、もろに出ている。つまり、とてもいいルックスなのだが、歌えていない。楽曲に示された才能を伝えるよりむしろ、壊している節さえある。キャッチーなフロントマンがいれば売れる、それは確かだが、今のままではロックはおぼつかないのでは・・。ともかく、ボーカルの成長を期待するしかない。

(里居正裕)

□ "流行"とは無縁の"本物"

THE PROGRESSIVE
97年2月10日〜13日
神戸チキンジョージ

"流行"とは一体何だろう? "流行"を追うことはそんなにも素敵なことなのだろうか?

2月10日から13日にかけて、神戸チキンジョージに集まった人たちは、そんなこととは無縁な、一時のロックパーティーに酔いしれていた。"ザ・プログレッシブ"。この言葉の持つ永遠なる魔力に引き込まれた私たちは、閉ざしていたものを瞬時に開け放ち、この重要な時間を共有したのである。

ノヴェラのメンバーや、そのファミリー(?)の個々の現在のスタイルを各々のバンドで表現し、当然のことながら健在ぶりを披露。観客として参加している私たち"ノヴェラマニア"との間の見えない壁は徐々に取り払われ、遂に最終日のノヴェラの登場で、確実に会場は一つのハートでつながった。熱い! 激しい! そして美しい。そこには、あの伝説のノヴェラではなく、現在のノヴェラの永遠なる姿が存在したのだった。

私は、この日からまた"流行"ではなく、"本物"ノヴェラを追い続けることを確信したのである。

(加美幸伸)

Illustration・庄原嘉子

□ ビートルズ風味の90年代サウンド

『JAMPACK〜カエルにだって言いたい事がある』
THE POSTMEN
VPCC-81196

職業柄いろんなアーティストの音を耳にしているのだが、メジャーやインディーを問わずに、ニルヴァーナやルナシー、イエローモンキーらを敬愛し過ぎている人たちが少なくない。それが彼らのルーツなのであろうから、とがめたりはしないが、ちゃんと自分の中で消化してから音に出してほしいもんだ。どうも、その大半がマネやコピーのレベルで終わっているように思える。

で、このポストメン。古いロックファンに言わせれば「ビートルズやんけ!」となるのかもしれないが、複製バンドが増殖し続ける時代だからこそ彼らのようなバンドが新鮮なのである。分かりやすいメロディーと実験的なサウンド。うん、確かに彼らの楽曲はビートルズっぽい。が、しかし、"実験的なサウンド"というのは常に新しいものを模索しているのである。故に手法は"ビートルズっぽい"のだが、完成した楽曲は"ビートルズ風味の90年代サウンド"となるのだ。それがまた、肩に無駄な力が入ってなくて、聴いていて気持ちいいから、何も言うことはない。そして、これが彼らの個性となるのである。

(編集部)

□ ライブで歌う拓郎は最高!

『感度良好ナイト LIVE in 武道館』
吉田拓郎
FLVF-8532

豪華なメンバーと多彩なゲストを迎えて、リッケンバッカーを笑顔で弾く拓郎を毎週テレビで観ることができるが、これはJロックの将来にとって、非常に重要なことが起こっていると認識するべきだ。なぜなら、そこにゲスト出演しているアーティストは、拓郎だけでなくそうる透や高中正義といった一流プレイヤーとセッションできるのだから、きっといろんな刺激を受けているはずだし、今後の活動にそれが生かされるはずだから。そういう意味でも拓郎はやっぱり偉大だ。

そんな拓郎のライブビデオが届いた。野郎の乱暴な声援など屁とも思わない説得力を持った歌声はさすがである。往年の名曲「マークII」や中島みゆき嬢の「ファイト!」を歌い上げる姿は、若かりしころのライオンのような猛威は感じないものの、それを上回る貫録と味を持っている。そして、何より思うことは「やっぱりライブで歌う拓郎は最高!」ということだ。こんなにキュートでカッコいいおじさんはそういるもんではない。

(石田博嗣)

□ 幻覚アレルギーからの贈り物

残念ながら活動を停止してしまった幻覚アレルギーのライブビデオが、ファンクラブの会員のみという形で販売された。『BOOTLEG』というタイトルからも想像できるようにハンディカメラ一台で撮った質素な作品なのだが、昨年のツアー『BOLLOCKS EVERY-ONE TOUR』のファイナルである大阪ウォホールのライブをシューティングした映像は、逆にそのチープさがライブの熱さをリアルに生々しく伝えてくれる。"音の暴力"とも言えるすさまじいサウンド。1曲の中でもカラフルに声質を変えるSCEANAのボーカル。スリリングなうなりを上げて暴れ回る梶井のギター。とにかくこのビデオは部屋中の照明を落とし、可能な限りの大音量でご覧いただきたい。個性的かつ刺激的なバンドが放つ強烈な音の波動を受け止めることがでるはず。

『VOL.1』ということは『2』が発表されるかもしれないので、ファンは期待を持ちつつこのビデオで活動停止の悲しみをいやすしかない。

『OFFICIAL BOOTLEG VOL.1』
幻覚アレルギー

このビデオについてのお問い合わせは、マジック・ベアー(03-5486-7577)まで。

(石田博嗣)

□ 素直な自分を見つけたいのなら

2月21日にアルバム『melodious world』でメジャーデビューを果たした関西出身のシュガー・フィールズ。と、言ってもバンドではなく原朋信のソロユニットだ。実は私、彼が同名でバンド活動をしていたころを知っていて、デビューしたと聴いた時はビックリ。そのころからアコースティックな香りを漂わせながら、ポップなナンバーを今にも壊れそうなか細い歌声で聴かせる独特な世界を構築していたのだが、デビューという言葉には失礼ながら実感がわかなかった。

だが、作詞・作曲・アレンジ・演奏すべて一人で手掛ける、このアルバムを聴いて、以前のつかめそうでつかめないフワフワした印象は影を潜め、音に声に詞に加えられた自由な好奇心が一曲一曲をくっきりと、しかも柔軟に見せている。また、そこからは彼の人柄なのか、ほんのりムードな温かさや、強さ、そしてやさしさといった感情も見え隠れしているのだ。ありのままの原朋信ワールドが広がるシュガー・フィールズに触れたら、きっとあなたは素直な自分を見つけられるはず。

『melodious world』
SUGAR FIELDS
PCCA-01079

(村田圭子)

毎月、いろんなアーティストの取材がある。しかし、それが来阪するアーティストをすべて網羅しているわけではない。ページ数が限られている雑誌では、彼らをすべて紹介するのは物理的に不可能なのだ。それだけにインビテーションやプライベートで観に行ったライブが最高に良かった場合や、逆に気付いた点を指摘したいときなど、その感動や批評を記事にしたくてもできなくて口惜しい思いをしていた。そんな行き場のないフラストレーションに報いるためにあるのが、このコーナーである。編集部スタッフがいろんなアーティスト(セレクト以外のアーティストも含めて)から受けた、様々な印象をどんどんぶちまけていきたいと思う。今月のインプレッションは…。

□ THE ZIP GUNS、再デビュー

デビューしたのはいいけど、売るための戦略だからと「これはダメ」「あれはダメ」と、まるで飼い犬状態で市場に出されることがある。まあ、納得できるのであればそれも成立するのだろうけど、ただ仕方なくやってるとしたら話は別もの。

95年4月にデビューを果たしたザ・ジップ・ガンズは、そんなやり方に飽き飽きし、その状況から飛び出す。その後、彼らの生まれ変わった(原点に戻った)音楽に好感を抱く現事務所との出会いにより、3月21日にシングル「そばにいたい」で新たなスタートを切った。「やっと本当の俺たちになれた気がする」と語るボーカリストの雄介。そんな彼らは、かわいいだけが露出していたこれまでのイメージから一転してスタイリッシュになり、音楽は以前のポップなメロディーに、パンキッシュでテクノチックなスピード感あふれるビートを取り入れ心地よい刺激たっぷり。音楽って"やりたいことをやる"と、こんなに生き生きと伝わってくるものなんだと改めて実感させられた。彼らには迷うことなくこのまま突っ走ってほしい。

『そばにいたい』
THE ZIP GUNS
BVDR-1149

(村田圭子)

□ 要チェックバンド、叫ぶ詩人の会

よく雑誌のコラムで目にする"ドリアン助川"という一風変わった名前のコラムニスト。実はこの人物、"叫ぶ詩人の会"というこれまた一風変わった名前を持つロックバンドのボーカリストである。悪臭を放ちながらも"フルーツの王様"という異名を持つドリアンを名乗るだけあって、この男もタダモノではない。サンプラザ中野や大槻ケンヂに勝るとも劣らない強烈なキャラクターの持ち主だ。もちろん僕が言っているのは、彼の"歌"に対してである。

それを編集部に送られてきた彼らのニューシングル「はきだめの鶴」を聴いて実感した。包容力あるボーカルと詩的な歌詞。正にそれは"歌う"のではなく"叫ぶ"だった。勘違いされては困るがパンクバンドさながらにドリアンががなり立てて歌っているのではなく、歌詞に込められた彼のメッセージが"叫び"なのである。さらにロックという刺激的な音楽に乗れば、言葉はこんなにも説得力を持つんだということを思い知らされた。これはちょっとライブに行かなければならないようだ。とにかく要チェックのバンドである!!

叫ぶ詩人の会

(編集部)

STAFF ROOM

今月のお題 | No.05

生き様

私はこう考える!!
「人を振り向かせてこそ、アーティストだ!」

本誌編集長 里居正裕

ジェイロック5項目の最後は「生き様」である。目次では「芸能人、タレント化していない」と付記してある。これについてはこれまでにも読者から多くの言葉が寄せられてきた。「これをクリアしないアーティストがセレクトされている」というのだ。

ちなみに本誌がこれを語る場合、アーティストが音楽に依拠し、中心に置いていることが重要なのだ。映画やテレビドラマに出ようが、テレビCMに出ようが、バラエティー番組に出ようが、タイアップや売名という次元を越え、そこから吸収したものを昇華し、音楽に還元してリスナーに返してくれればそれでいい。読者には漫然とドラマやCMやバラエティーに出ているアーティストを排除しているわけではないことを理解してもらいたい。

生き様とは、いわば人と人をつなぐシグナルなのである。それはアーティストへの共感というより、アーティストと心を共振させる喜びであり、それこそがロックの真髄と言える。そうすると、このシグナルをいかに力強く発信し、リスナーを揺さぶり、振り向かせることができるか、それがアーティストの問われる資質ということになるだろう。

こうした価値観が正面から問われるのは、ロックをやるものの宿命なのかもしれない。ロックスターは時にはアジテイターであり、予言者であり、カリスマである。人を引きつけて止まない輝きは、音楽というフィルターを通して示される、アーティストの歩んできた生き様に他ならない。だからこそ、音楽に生き様を刻むアーティストは、例えばそれがボーカリストなら、一声を放つだけでリスナーの胸を打つ。同じ曲を表現するにも、伝達する力に開きがあることに気付かされるだろう。

それでもなお、本誌のセレクトには疑問が残るという向きもあろう。それでいい。情報のセレクトこそ、読者に与えられた特権である。ジェイロックが提示する5項目を盲信することなかれ。

今回で私は編集長を退き、このコーナーを降りるが、愛読を感謝しつつ警告したい。すなわち情報を読み取り、音楽の善しあしを判断するのは、雑誌でもレコード会社でも他人でもない。紛れもなく読者自身である。

このコーナーは、より深く音楽に親しむために、そして日本の音楽シーンがより面白くなることを願って、毎号ジェイロックマガジン編集部が一つのお題を基に語り合っていこうというもの。何気なく感じる疑問や問題を、編集長が鋭く指摘し、それに対して編集部スタッフがそれぞれの思いを込めディスカッションする。このコーナーでのお題や内容に意見や反論があれば、キミもどんどん参加してほしい。待っているぞ!

対談者
◎石田博嗣
◎村田圭子
◎加美幸伸

自分をごまかすとカッコ悪くなる

石田:いよいよ5項目の最後「生き様」なんですけど、最近タレント化してるヤツっています? よく読者のアンケートハガキに「大槻ケンヂはタレントじゃないのか!」って書かれているんですけど、大槻ケンヂはバラエティー番組に出ていても、全然タレントじゃないでしょ。
村田:私にしたら大槻ケンヂは生き様を見せてると思う。バラエティー番組に出ている時も、もちろんライブの時も自分をちゃんと見せてるし。
石田:ステージ上の大槻ケンヂとバラエティーに出ている大槻ケンヂは一緒やし、そこで得た刺激が音楽に反映され、音楽で得た刺激が他の何かに反映されてるよね。
加美:だから、陣内孝則は、今の子らは知らんかっても僕らのころのロッカーズっていったらちょっとしたもんやったじゃないですか。あれだけつっぱってた人が、いつの間にか役者になってしまってるっていうのは、寂しい気がするな。
石田:(元ARBの)石橋凌さんの時も寂しかったな。
加美:けど、あの人がやっぱりロックやなって思ったのは、結局アメリカに行っちゃったでしょ。「ハリウッドで主役を取る!」って。
石田:それは知らなかった。
加美:あの辺の姿勢はやっぱりロック魂やなと思った。日本の中でなんぼ人気があってチョコチョコしててもあかん、アメリカに行ってハリウッドで評価されてこそっていうのは、すごくロック魂っぽいじゃないですか。
石田:確かにロックしてる。
加美:デヴィッド・ボウイにしても映画出たり、ミュージカルに出たりして、いっぱい副業をやってるけど、ミュージシャンという位置は全く維持したままでしょ。
石田:永ちゃんがCMに出てるからタレントかっていったら違うもんね。
加美:違う違う。やっぱり矢沢永吉やもん。
石田:ドラマに出ても、やっぱりロッカーやもんね。鮎川誠(シーナ&ザ・ロケッツ)さんもそうでしょ。
加美:そうそう。そう考えると、陣内さんはロッカーじゃなかったのかな。
石田:ミュージシャンであるよりも、俳優だという意識が強くなっていったんやろね。
加美:そう考えたら泉谷しげるさんってすごいな。
石田:あの人はパンクスやから(笑)。
加美:そうやね(笑)。どんな役やっても危険な感じがする。
村田:どんな役をやっても泉谷さんっていうキャラクターはそのまんまやもんね。
加美:だけど、今って役者になるための足掛かりとしてミュージシャンになった人もいるでしょ。それって、タレントになる足掛かりのためにAV女優になってるのと一緒じゃないですか。
石田:ミュージシャンとしてデビューしたのに全然売れんと、タレントになって売れたからって、音楽活動に戻ってくるヤツもいるけどね。
村田:そういうのは嫌い。でも、最近のインディーズのバンドを見てると、生き様を感じることが多いよ。私は生き様って、その人がどんな環境に育って、何を経験して、何に興味を持って、そこで何を考えてっていうすべてをひっくるめた、その人自身のことを示してると思う。だから、生き様が伝わってくるっていうのは、ウソのないありのままの自分を出してることやと。
石田:自分をごまかしてカッコつけようとするとカッコ悪くなるからね。
村田:そう。それでね、例えば自分が影響を受けたアーティストがいて、その人の仕草がカッコいいと思って、その人のマネをする。または、音をマネたりする。でも、それが自分のものになったら、それも生き様の中に入るんじゃないかなと思う。だから、3月号で『パクリと引用の違い』ってやったけど、自分のものになった時点でそれは引用につながるからパクリじゃなくなると思うんですよ。
加美:それは言える。例えばAという曲をそのままパクっても、それにBなりCなり自分の意見が入ってきた場合は、それはパクリじゃない。
石田:それは、もうAダッシュになってる。
加美:例えば曲を作る時にスタッフに「ツェッペリンっぽい感じで作って」とか言う人がいるじゃないですか。そうなってしまうのはあかんけど、自分の音楽を作ったら自然とルーツでもあるツェッペリンっぽい曲になってしまうのは、全然問題ないと思う。それはその人のほんまの音楽になってる。血となり肉となってるんやしね。
石田:シナモン(レッド・ツェッペリンの完全コピーバンド)にしても、もうパクリとか完コピとかそんなレベルじゃないでしょ。
村田:(笑)あそこまでいったらね。
加美:ただ、ああいう弾き方をしていると、いろいろ周りから中傷されたりするんですよ。でも、彼らは「俺はこれでええねん」ってやり続けているから、もう生き様になってるよね。
村田:やめないってことは、それだけ崇拝してるってことでもあるしね。逆にやめちゃったら、「今までのスピリッツはなんやったん」ってなる。

スピリッツを隠さずに出せばそれが生き様になる

加美:編集長が「ロックスターは時にはアジテーターであり、予言者であり、カリスマである」って書いてるけど、やっぱり何かに反抗したりとか、先導して引っ張っていくっていう人間でなかったらいけないっていうのは絶対的にある。だから、その部分での難しさ、辛さって絶対あると思うねん。最近、すごく人のいいアーティストって多いでしょ。それに対して周りの人間が「この人はいい人や」って評価してしまうのがイヤなんですよ。例えば取材をしていて、ロックなヤツが「お前それ何言ってんだよ」ってインタビュアーに反発したり、「もうこんな仕事はイヤだ」って言って途中で出て行ったとするでしょ。そしたら「イヤなヤツや、あいつは」っていう評価になって、逆にそうしたいのを我慢して「はいはい、そうです」って言って感じ良く帰っていったら、「あいつはいいヤツや」ってなってしまうじゃないですか。やっぱり本来のロックスターっていうのは、自分の思いとか、自分の感情とか意思とかっていうものをきちっと伝えられて、はっきり言える人間のことやと思うんですよ。ロックってそういうもんやと思うしね。だから、僕らメディアの人間たちがロックアーティストを受け入れようっていう姿勢がまだできてないんちゃうかな。
石田:実はセレクトしてるアーティストの中には、ジェイロックマガジンに出るのをイヤがっているアーティストがいるらしんですよ(笑)。でも、僕らは彼らがほんまにロックしてると思うから応援を続けてるし、別にジェイロックに出たくないんやったら出んでもいいと思う。それやのにプロモーションのためやからって無理して出てもらったら、それは絶対にカッコ悪いからやめてほしい。ちゃんと「この雑誌、出てもええな」と思って出てくれるのは大

歓迎やけどね。話してみたいし。
加美:逆を言えば、「ブランキー・ジェット・シティをちゃんと雑誌が取り上げるようになったのは最近ですもんね。最初なんかみんなビビって近寄らへんかったでしょ(笑)。入れ墨してるし、発言も斜に構えたようなのが多かったし。でも、きちっと話できる人には話してる。
村田:多分ブランキーにしても、この人は分かってくれてるっていうのがあるからでしょうね。
加美:そうそう。それと最近ね、何人かのロック系のヤツらと話してたんやけど、みんな変わろうとしてきてるような気がする。なんか今ってリスナーが「こんなんロックと違う」って言い始めてるでしょ。だから、アーティストが「俺らほんまのロックがしたいからまじめにやる」って思いだして、すごくいい状況にはなってきてる。ほんまに自分をしっかり持って、生き様がしっかりしてる人が残っていくやろうなって思うな。例えばウルフルズが今やってることって、80年代のソウルミュージックを基盤としたものでしょ。あのころのいい音楽を自分らのフィルターを通して、みんなに教えてやろうとしているような気がするし、そういう意味では彼らもロックスターやと思うしね。だから、表面だけ見てしまうと「ウルフルズはロックじゃない」って言われるかもしれないけど、やろうとしてることは何かを残さないといけないって考えながらやってるんじゃないかな。ユニコーンにしてもアイドルロックバンドでずーっときてて、だんだんメンバーがバラバラの個性になっていった。やっぱりあそこで個々の生き様みたいものが見えてきてから渋くなったし、カッコよくなったしね。
石田:最初はアイドル的に売られてたからね。
村田:自分の生き様を出せなかったんやろね。
加美:今の個々のメンバーの活動を見てたら、やっぱりそれなりにみんな生き様を見せてやってるから、なるほどなって思う。だから、自分の生き様を早く発見して、それに気が付いたら、残るんやろうなって。
村田:今月のゼペット・ストアのインタビューであったよね。「ほんとの自分を見つめることが大切なんじゃないか」っていうようなことを言ってた。それにこの間のグレイのライブにしても、みんなデザインは違うけど黒の衣装だったんですよ。全員が黒やから遠くで見たらみんな同じような格好じゃないですか。それがライブが始まったら、それぞれの存在感がやっぱりあるんですよね。その辺も、メンバー一人ひとりの生き様っていうのが出てきてるのかなと思う。…何かこんな対談でテーマにしていたら「生き様」ってすごく大げさな気がするけど、違うよね。
石田:深く考えることじゃない。自分の持っているスピリッツを隠さんとそのまま出したら、それが生き様になる。たったそれだけのこと。
村田:だってウソつく方がしんどいやん、ねえ(笑)。
石田:ビジュアル系のアーティストが化粧をどんどん取っていくのも、自分の生き様が出てきたからやと思うし。売れたからとか、メジャーに行ったからじゃなくてね。
加美:でも、一人ぐらいずっと化粧したままのヤツがおってほしいな。
石田:ヴァレンタインD.C.のJunは、ずっと化粧してるよ。他のメンバーはみんな素やのに。
村田:それが好きでやっているんやからね。そのまま突っ走ってくれたらいい。
石田:他のメンバーもそれをとがめへんしね。
加美:だから、やっぱり結局は、さっき石田さんが言ったけど、ウソをつかんと自分のスピリッツをむき出しにして、正直に生きたら生き様が見えてくるってことになるよね。

ボクらはこう思う!!

5項目を盲信するな 判断するのは自分

石田:これで5つの項目について全部語られたわけですが、改めてどう思います?
加美:取り上げてるものとか、読んでる人とかによりますね。
石田:前にも言ったけど、当たり前のことを並べてるだけなんですよ。「偉そうなこと言って、生意気な雑誌や」と思われているんやろうけど、そうせんとあかんような時代になってることを分かってほしい。それに、編集長が「5項目を盲信するな」って言ってるように、最後に判断するのは読者自身なんやし。
加美:この音楽が好きや、嫌いやっていうのはだれしも持っていていいと思うしね。その人がロックやと思ったらロックやと思うし。
村田:無理矢理みんながロックって言ってるからって聴いてはほしくないな。
石田:ロックは押しつけるもんじゃないからね。でも、例えばウルフルズを嫌いな人がいて、その理由が「あの顔が嫌い」やったり、もしくは「ガッツだぜ!」しか聴いてないくせに、「ウルフルズはコミックバンドや」って言い切るのは間違ってる。「『嫌いや』って言うんやったら、せめてアルバムを聴いてから言えよ」って思う。
加美:もっと言ったら、「ライブを観てから言えよ」って。
村田:みんないろんなことに興味があるやろうから、自分が好きなアーティストのアルバムだけとか、ライブだけになってしまうんやろね。
石田:CDもチケット代も高いからなぁ。だからこそ、テレビに出てる印象とか、周りの人の意見やメディアの評価とか頼るんやろね。
加美:雑誌とか、ラジオとかテレビとかで、「これが面白いです!」っていうのをとりあえず聴こうと思うし。
村田:私も雑誌を買ったら、絶対にディスクレビュー読んでたもん。
石田:時たまウソついてるのもあるから、「だまされた!」ってなったけどね(笑)。でも、音楽雑誌を作っている僕らが偉そうなことを言っても、自分が聴いて良くないと思ったら良くないでいいんやし、ライブレポートでも「このライブは良くなかった!」って書いても、その人が観て良かったら良かったでええんやからね。ライブって、100人おったら100人が違うこと感じるんやから。
加美:それは絶対そうやね。ただ、自分の好きなアーティストやから絶対にいいって思い込んでしまうんじゃなしに、もっとリラックスした目を持ってほしいな。例えばライブでも「ちょっと今日はダメだった」とか厳しい一面を持って、そういうのをアンケートとかファンレターなんかに書いてあげたらアーティストは嫌がらへんと思うしね。
石田:逆にそっちの方が喜ぶ。ちゃんと聴いてくれてるのが分かるからね。観てくれてるんじゃなくて。
加美:ファンだからこそ厳しい耳や目を持ってほしいなっていう。
石田:だって一番信じているのはファンでしょ。
加美:アーティストはファンの耳や目が一番怖いからね。

絵画界のビートルズ、アンディー・ウォーホルのロック感覚

FEEL SO GOOD ITEM

THE VELVET UNDERGROUND POCP-2519
PRODUCED BY アンディー・ウォーホル

毎月、リリースされる旬な新譜から、Jロックの名盤や旧譜、そして個人的にオススメというフリーク必聴盤。さらにギターやベースの楽器に至るまで、とにかくこのコーナーでは「これは!?」と興味を引かれた、グッド・アイテムを紹介していくことにしよう。ここで紹介したことによって少しでも、そのアイテムに対しての耳を傾ける角度が変わったり、これがきっかけでそのアイテムに興味を持ってくれたら、また新たなロックの衝動を体験できるかもしれないゾ。今回はグッド・アイテムではなく、グッド・パフォーマーを紹介しよう。

キャンベルのスープ缶やコカコーラの空瓶、それにマリリン・モンローやエリザベス・テイラー、ミック・ジャガーにブロンディーらスーパースターたちのポートレートを素材にしたシルクスクリーン作品、エンパイア・ステート・ビルを夜半から夜明けにかけて、カメラアングルを変えずに撮影した、上映に8時間かかる『エンパイア』、眠っている男をこれまた6時間半に渡って映し出す『スリープ』他のアンダーグラウンド映画作品、ジャケット・デザインとプロデュースを手掛けた、ロックバンドであるヴェルベット・アンダーグラウンドのデビュー作品など、既成体制の変革と芸術の大衆化、それに異メディア間の混合、いわゆるマルチ・メディア化を推進したのが、今月紹介するアンディー・ウォーホルである。

ウォーホルは1950年ごろから商業画家として活動を始めた。そして、成功を収めた後、1962年にはポップアートの芸術家として、シルクスクリーンを用いた、前述のキャンベルスープ缶やハリウッドスターの作品を既に発表。映画作家としては1966年ごろまでに上記の二本はもちろん、『チェルシー・ガールズ』や『キス』『イート』など、彼の代表作と思われる作品はほとんどこの時期に発表されていて、制作された映画の本数は100本とも150本ともいわれている。

また、そんな彼がスポンサーとなったロックバンドがある。バンド名はヴェルベット・アンダーグラウンド。1965年にルー・リードとジョン・ケイルを中心にニューヨークで結成され、1966年4月には現在の大規模なライブの原型ともなる、『The Exploding Plastic Inevitable』という、ダンス、音楽、映画、照明、スライドなどを融合させ、その上観客をも巻き込んでしまうマルチメディア・イベントをウォーホルの指揮の下に行っている。そして、ウォーホルがプロデュースを手掛け、1967年に発表されたデビューアルバムは、ドラッグやゲイ、SMなど退廃的なものや背徳的なものを賛美する内容の曲が多く、サウンド的にも大都市の持つ凶暴性や混乱をそのまま音にしたようなアグレッシブなものだった。おそらくウォーホルの人間業とは思えない精力的な活動は、このヴェルベット・アンダーグラウンドと関わったころがピークであったと思う。あの忌まわしい事件の後、創作活動は段々と少なくなっていくのだった。

その忌まわしい事件とは、1968年6月に起こったウォーホル狙撃事件である。犯人は男性抹殺協会に属する(といってもメンバーは一人)ヴァレリー・ソラナスという女性であった。ヴァレリーはウォーホルの仕事場に出入りしていたこともある人間で、一種のストーカー的な犯罪だといえなくもない。結局、2発の弾丸が彼の胃と肝臓、肺、そして喉を貫通し、大手術によって一命はとりとめたが、二カ月間絶対安静の入院が必要だった。この事件があってからウォーホルは死ぬまで彼女の影におびえ続けたといわれている。1970年代からは毛沢東をはじめ、有名人のポートレイトを数多く制作したり、テレビに出たりはしていたが、1987年2月22日、胆嚢手術の後、ウォーホルはこの世を去った。

ウォーホルは自分の表現したいことを、絵や映画や自らの生活を通して我々に伝えてくれているが、その中心にあったのはロック的な感覚であると僕は思う。芸術絵画の重さと商業絵画の軽さ、という暗黙の了解で成り立っている世界を彼は見事に覆した。それを力を入れずにやってしまうところに彼のすごさがある。ウォーホル以前にも試行した人たちがいなかったわけではないが、その方法にポップさが欠けていたようだ。ポップアート以前と以後では絵画のあり方自体が変わってしまうが、それはウォーホルの影響であることはいうまでもない。そして、このウォーホルをビートルズに置き換えると、そっくりポピュラー音楽の話になってしまうのである。

昨年、日本各地で彼の回顧展が開かれたし、今年になってウォーホルの日記が文庫化され、アメリカでは狙撃事件を映画化した『I Shot Andy Warhol』が公開されるなど、ウォーホルの名前を見かけることが少なくない。機会があればぜひ見に行ってほしいと思う。

【文・河崎直人】

"GYO-KAI" ANATOMY

Vol.7 = マガジン

BATTLE TALK with EDITOR IN CHIEF

●谷奥氏

音楽メディアを語る最終回は、音楽雑誌。ウーン、ついに来るとこまで来てしまった。FMがどーだ、テレビがどーだと、かやの外から人のことばっか言ってると、ロクなことはない。ここは自らの業界をも切るべきだろう。音楽雑誌の音楽業界における位置づけとは何か？　音楽業界と密着しすぎたメディアの行き着く先はどこなのか？　きわどい話をあえて読者に提供したい！

雑誌の種類と背景 明星、平凡からザッピィへ

里居：今回はメディア論の最終回ということで、音楽雑誌について。シリーズの一回目はFMラジオ、二回目にテレビ音楽番組と、そういったフィルターを通して流行音楽というものを語ってきましたね。つまり流行音楽というものがいかにメディアに仕掛けられてるかということを、一つひとつ解き明かしてきたわけですけど、当然音楽雑誌もその片棒を担いでいるわけですよ。

谷奥：いいんですかね、この話題。これも音楽雑誌ですよ（笑）。

里居：だってここまで語ってきて、自分だけが逃げてちゃまずいでしょう（笑）。というか、特に音楽メディアの中の音楽雑誌を考えるに当たって、現在の邦楽雑誌のラインナップを思い浮かべていくと、やはりレコード会社系列であったり、あるいは楽器店とか音響機器メーカーがバックに付いていたり。広告のほとんどが業界筋のものだし、これはロックに限ったことではないですけど、大半の音楽雑誌の基盤、背景が業界筋であるという。

谷奥：そうですね。僕らが少年のころに出会ってる音楽雑誌のスタートは「明星」とか「平凡」ですか。歌とタレント、アイドルというのが中心。フォーク歌手とかロック歌手はテレビに出ないというところで、平凡社とかから雑誌がニョキニョキ出てきました。細分化されたような「ヤングギター」とか。

里居：あの当時っていうのは「明星」「平凡」に対抗する雑誌って、プレイヤー系の雑誌のウエートが大きかったんですよ。

谷奥：リスナー用では「FMファン」とかね。

里居：「ニューミュージックマガジン」とか、評論系の雑誌も出てきたじゃないですか。そこで初めて、例えば日本語ロック論みたいなものが出てきたり、色々あったわけなんですけどね。評論系の邦楽雑誌っていうと、今現在存続してるものでは、まだ新しいんですけど「ロッキンオン」から派生したインタビュー誌「ロッキンオンジャパン」。あるいはインタビュー誌「音楽と人」等々。他にプレイヤー系雑誌、それから「ぴあ」とかシティ情報誌。リリース情報をメインにした「CDデータ」のような情報系雑誌。ビジュアル系専門誌も出た。そしてとうとうCD付きの「ザッピィ」のような、カラオケユーザーを意識した、完全なカタログ化した音楽誌が登場して現在に至るわけです。

ギョーカイはジャーナリズムを嫌う

谷奥：プレスの関係なんですけど、「音楽記者クラブ」があるのをご存じですか？

里居：もちろん。ウチは大阪なのでかやの外ですが。

谷奥：その「音楽記者クラブ」の中に何年か前から「ぴあ」みたいなシティ情報誌が入ってきだしたんです。そこまで認知されていったっていうのと、音楽を書ける人間の数が限られて、音楽関係はプレスの中でも相当スミに追いやられてるっていう状況があるんですね。その中で音楽雑誌に絞っていくとリスナー系、プレイヤー系っていうけども、実はそれぞれのプロダクションだとか、楽譜出版社とかが出してるわけですよ。だからそこの中の編集部の立場は、非常に辛いと思うんですね。あんまりえこひいきもできないし。

里居：いろんなしがらみや背景がすでに存在してることを踏まえれば、それを無視した本っていうのはできようがない。やはり背景の利益を背負ってますから。

谷奥：テレビの民放もそうなんですけど、どこまでジャーナリスティックに徹することができるのか。

里居：「ロッキンオンジャパン」なんかは、個人的には好きなんですね。ジャーナリスティックな立場で挑もうとしてる姿勢も分かる。外部の写真チェックや原稿チェックっていうのは基本的にさせない雑誌なんですよね。けれど、そういう立場を守らんがために雑誌がどうなっていくかというと、ビジュアル系のアーティストが登場しない。彼らは自分たちのイメージを守ろうとするから。写真や発言をイメージの基に制限したいから。つまりビジュアル系の中にしても、あまり登場しないわけですよ。となると渋谷系のアーティストとか、あの辺に情報を頼らざるを得ない。それでは音楽シーンをあまねく照らしているとは言い難い。

谷奥：なるほどね。

里居：政治的に背景を何も抱えてなくても、厳密に言えばバランスなど成立し得ないのが音楽雑誌。

谷奥：音楽業界がジャーナリズムを嫌ってるからですよ。「ショービジネスには夢がなくては」とよく言われるんですが、実は閉鎖的なこの業界の自己防衛本能が働いているんじゃないでしょうかね。虚像を守りたい。事実は書かれたくない。

里居：だからこの業界のホントの話は写真週刊誌とかにスキャンダラスに暴かれて、一般大衆の好奇の視線を浴びるわけでね。

谷奥：「日経エンターテインメント」の廃刊もしかりじゃないかな。今また復刊してますけど、前と違いますもんね。書店に並ぶようになってからは。

里居：そうですね。かなり内容的に配慮が見える（笑）。

谷奥：見え見えの配慮ですからね。

里居：休刊になった昔の「日経エンターテインメント」っていうのは、いかにも専門誌で、知られざる深層を知らしめようという意気込みがありましたけど、今の「日経エンターテインメント」は。

谷奥：全国民に対してのメディアですね。

里居：よくいえばゼネラルな。

谷奥：表層的な読み物になっちゃったんですね。でもあれは今まで記事を追いかけてたそれぞれの記者たちにとって、すごく不満だと思うんですよね。

里居：あれは純粋な意味で音楽雑誌とは言えませんけど。

谷奥：業界誌だから。

里居：でもね、業界誌と専門誌は違うって言われるじゃないですか。業界誌っていうのは、どれもいわば業界からカネをもらって作る雑誌なわけであって、基本的に業界筋の味方。業界批判というのはタブーですよね。

谷奥：そういう意味では専門誌でしたよね。でも音楽雑誌の場合は、ほんとにこのアーティストが好きだから、特集されてるからというピュアな気持ちで書店で手に取る人がほとんどだと思うんですけど、僕なんか発行人とか、どこが出してるかって、そういう目でどうしても見てしまいますよ。「やっぱりな」って思いますもんね。

里居：まあ現場にある程度の権限があれば、記事にキャパシティが生まれる。この「ジェイロックマガジン」もそういう意味では、記者が結構な物言いができてた。

谷奥：でもどっかの雑誌がそれをやってないと、みんなどれとっても一緒、企画本ですもんね。

音楽雑誌はギョーカイのプロモーションの道具

里居：ジャーナリズムを業界が嫌うっていうのがありますけど、音楽雑誌が背景を抱えてるということになれば、販売促進という考えが基本にありますよね。報道のスタイルをとりながら、実はプロモーションである。で、メーカー側の考え方からすれば、音楽雑誌っていうのはプロモーションの道具に過ぎない。軽く見られてるんですよ。

谷奥：音楽雑誌はパブリシティのためのチラシなんですね。感覚的に。

里居：だからどんな特集だっていっても、アーティストが載るタイミングっていうのは、彼らのプロモーション時期と一致する。新しいアルバムが出ました、シングル切りました、ツアーやります。だからメディアに登場するわけで、オフの時にインタビューを受けてくれるアーティストなんて、まずいません。これははっきりしてますよ。すなわち業界側の都合で動いてるのが音楽雑誌っていうことです。

谷奥：民放テレビでも一部はありますけどね。

里居：力関係とかあると思うんですけど、それでも音楽雑誌ほど弱くはない。つまり電波の持ってるメディアパワーがでかいから。最近はアーティストもテレビだったらホイホイ出るわけですよ。ところが地方の雑誌はなかなかうまい具合に進まない（笑）。

谷奥：テレビにアーティストが出たがらなかった

音楽雑誌を疑え!

里居正裕…本誌編集長。関西にこだわり続けて出版業界に居座った変わり種のエディター。
本コーナーでは地方都市・大阪の視点から音楽業界を見つめ、情報の一極集中や東京至上主義に一石を投じたいと考えているとかいないとか…。

谷奥孝司…毎日放送テレビ編成局ソフト開発部所属。前日本音楽著作権協会(JASRAC)大阪北支部係長で、現職では著作権管理に当たっている。
JASRACでの豊富な経験から音楽業界の深層を知り抜き、これを表裏から詳細に分析できる貴重な存在。彼の名を聞いただけでヒヤリとする人がいるとかいないとか…。

一時とは違いますよね。

里居:それとね、音楽雑誌は掲載したアーティストに引きずられる部分があるんです。特に表紙。それこそ「明星」「平凡」の後継みたい。アイドル誌に近い。

谷奥:そうですね。パターン的にも最初にグラビアがあって、そこでちょっとした内容があって、後ろのページに行くほど一応マニアックな人間が読んでも面白い企画を整えてる。

里居:雑誌によっては、もうモロにそれが出てるじゃないですか。要するに「アーティストの人間性を見せる」という大義名分があるんですけど、それって「趣味は何ですか」「好きな食べ物は何ですか」って聞くことであって、それはアイドル扱い以外の何ものでもない。

谷奥:それを月刊誌のペースでやっていこう、何かを表現していこうっていうのは至難の業ですよね。

明星、平凡に取って変わったアイドル誌に過ぎないのか

里居:最近、ジェイロックの奇抜さ過激さが、業界筋に敬遠されてる感じなんです。

谷奥:あると思いますよ。

里居:例えばイエローモンキーなんかは、取材要請に対して非常に渋る。高く評価してるのにね。移籍後も状況は変わらないから、多分、メンバーがジェイロックのことを嫌いなんでしょうね。そこは僕と直接話をしてるわけじゃないから、伝聞とか表面から伝わってくるものだけをとらえて、出るのがイヤだと思ってるんでしょ。こっちは逆にジェイロックのどこが嫌いかっていうのをモロに載せてあげるから出てくれよってなもんですけどね。

谷奥:そこは絶対出てこないでしょ。悪者になるのがイヤですからね。やっぱりメディアは怖いですよ、アーティストは。

里居:ほかの雑誌には出るのになあ。うちみたいな物言いをする雑誌はやばいと感じるのかな。ええけど。

谷奥:多分ね。でも例えば映画評論でも徹底的にたたかれるものだったら、それを見てみたいなっていう気もするしね。そういう度量がアーティストサイドに必要なんですよね。徹底してやられながら、自分なりの実力を自負してる人がいてもいいと思いますよ。ただそこでプロダクションの意識だとか、アーティスト本人の意見ではないところで商品として価値をコントロールしてるんであれば、ちょっと話が違ってきますよね。商品論として取材の話を受ける受けないっていうのは、プロダクションが「今こいつは売りやから徹底的に骨まで搾り取れ」というような働き方をするから、損になりそうな事は退ける。昔ながらの芸能界システムです。これをロック系は嫌ってたはずなのに、なんでまたその体質に逆戻りするのか。

里居:そういう意味では一部のアーティストが変質してきてるんですよ。

谷奥:音楽雑誌、専門誌ですといいながらアイドル誌なんですよね。昔の「明星」「平凡」なんですよ。いっそのことそのまま歌本まで付けたらいいんじゃないかなって。

里居:先月号でロックのアイドル化っていうことに触れましたけど、まさにそれが深く関わってる気がする。特に現行の雑誌は、大半が「明星」「平凡」に取って替わっただけなんじゃないかって。

発信された良心をくみ取るのが読者の義務だ

谷奥:危険なことを聞きますけどね、「うちのこのアーティストを今度雑誌の誌面で載せてください」ってお金を包んで持ってくるプロダクションってあります?

里居:それはない。もちろんこれを載せてほしいっていうのはありますけど。

谷奥:まあ、それは当然のプロモーションで。

里居:要するにジェイロックって大阪にあるから切り口が非常に少ないんですよね。でもそういうヤツっていうのはきっといるんだろうな。

谷奥:いると思いますよ。昔のレコード大賞の「審査員宅に札束入りリンゴ箱送付事件」とか、その実例ですよね。

里居:このシリーズの第一回の時に「ペイオラ」って言葉が出ましたけど、そういう世界になってくる。要するに金を出すから、これをラジオでかけてくれっていうのが日常的になってくる。同じように、広告を出すからこのアーティストを取り上げてくれっていう流れは、雑誌ではもう日常茶飯事でしょ。そうしてプロモーションの道具に成り下がってしまう。

谷奥:電波媒体でもそれはありますからね。エンディングのタイアップと、それと提供枠と。提供スポンサーが一緒だとか。目立ってますよね。

里居:雑誌広告というのは、お付き合いレベルではありだと思うんですが、編集者が何とも思ってないヤツがいつも出てくるとかなってくるとね(笑)。

谷奥:今、編集長のところにお金を積んで持ってこないということは、非常に健全な雑誌だということですね。

里居:ただ警戒されてるだけだと思いますけど。

谷奥:でも全く中立で政治色がないなんて有り得ない話ですから。メディアというもののほとんどがそうですよ。そこはこんな話をして、これが本当じゃないかっていうことを二人でやり取りできるような部分があるというのは健全ですよね。

里居:だから理想の音楽雑誌を作りたいと希望を持っていても、諸々のしがらみを各社抱えてる部分があって、その意思っていうのは雑誌全体を統一することができないですよ、おそらく。ま、雑誌であれば多かれ少なかれ、これはどこでも事情は同じだと思います。むろんどこにも良心ある記者はいると思うんだけど、それを全面的に雑誌から放出することは無理がある。

谷奥:某大手音楽出版社で雑誌を出してるところなんだけど、プロモーションの部署と出版の部署がある。これらは互いに、あえて会わないようにしてるんですよ。

里居:なるほどね(笑)。

谷奥:トイレで会っても口をきかないとかね。同じ会社の中なのに。そういう話は聞いたことがありますからね。そうしないと出版っていうのはできないんだなーというね。

里居:少なくともジャーナリストを自覚してる批評精神を持った書き手が、果たして自分をプロモーション素材の一つとして徹して仕事ができるかっていったら。

谷奥:できないでしょう。

里居:けどもシステム背景がそうであるから、図らずもそれに加担してるライターが書かざるを得ない。いつしか業界のコピーライターになってるわけです。音楽雑誌にレトリックだけに酔って中身のない文章がはんらんする。ほんとに編集者である自分自身の限界を感じる。そこを読者は分かってるかどうか。だから今回のテーマで一番言いたいのはサンケイ新聞じゃないけど「音楽雑誌を疑え」ってこと。それはこのジェイロックをも含めてね。いろんな音楽雑誌から発信されている良心を自分でくみ取るのが読者の義務なんですよ。

谷奥:余談ですけどね、この間東京で文化庁のお役人にWIPO(知的所有権国際条約)の新条約の説明を聞いてきたんですよ。最後に「これから官僚に頼ってもらったら、困る。そのための規制緩和であって、行政改革なんだから、自分で選択して、自分で方向を定めて、自分で尻をふく。これがあなたたちの道ですよ、放送事業者は」とか言われたんです。すごい都合のいいこと。だけども、道はあるんですよね。今まではあるシステムに乗っかってブームに乗っかってただけなんですよ。考え方を変えて、これからは一読者なり、一リスナーなり、一視聴者ではなくして、いろんな多チャンネル多情報の時代を迎えた時に自分の正しい目を持たないと、どれもこれもが限界にくるんじゃないですか。

里居:音楽ユーザーは今後は流されるようなことがあってはならないんじゃないかな。これはメディア編の第一回から言い続けてるんですけど、自分独自の価値観っていうのを築いてほしい。

谷奥:多メディア、多チャンネル、多情報の中では特にね。まず疑ってかかれですよ。疑ってかかれるぐらい自分の感性を磨いてないといけないし。結局、今みたいな時代になってくるとそれぞれの一消費者が裸の王様状態なんですよね。

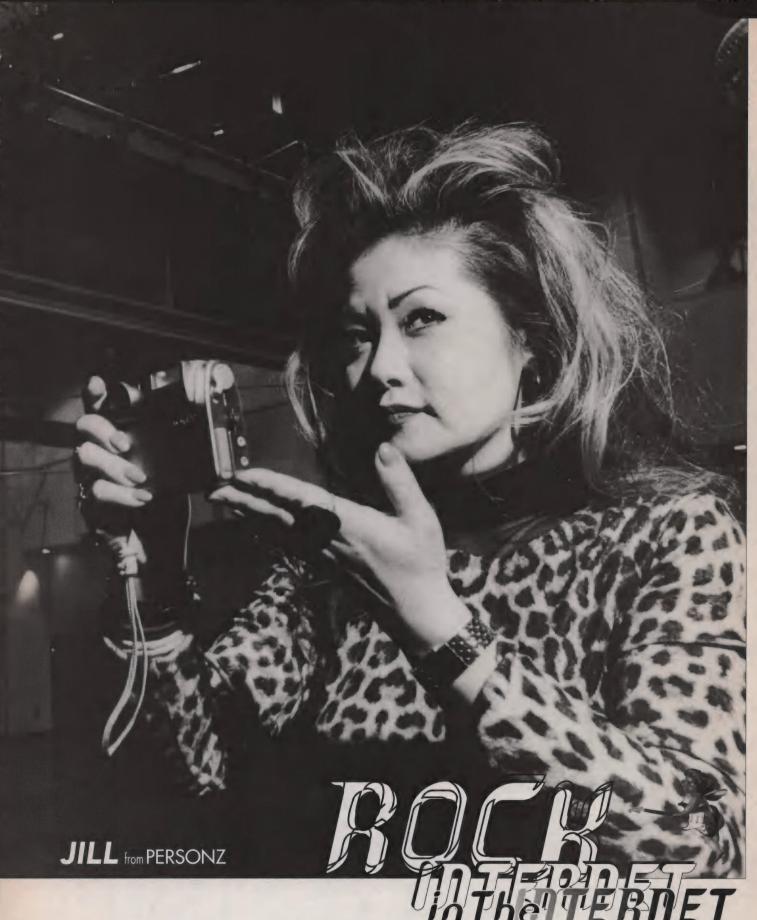
里居:公正だと言われてる活字メディア、例えば朝日新聞でも実例を出せば北朝鮮への帰国奨励とか中国の文化大革命礼賛とか、その悲惨な結果に対して朝日は報道責任があるのに全く釈明をしていない。それでもやっぱり良心っていうのはどこかに残ってる。カイシャの枠と制限の中で良心を発揮するヤツは必ずいる。僕はそいつを信じたい。

谷奥:それを切り取るのは読み手なんですよ。ユーザーが自己の責任において情報を切り取ることが必要な時代になってきてるんです。

里居:僕は創刊から3年やってきた編集長を今月で降りるんですが、後を継ぐ人たちには、業界に対していい意味でバランスの取れた批評精神を発揮してほしいですね。

谷奥:続くんですかねえ、このコーナー。

JILL from PERSONZ

ROCK in The INTERNET

久しぶりのコーナー復活！　だってインターネットやってるアーティストってまだ少ないんだもーん。ともあれ、アーティストたちのインターネット熱は確かに高まりつつあるのだ。今回は昨年暮れにホームページを開設したばかりというパーソンズのJILLが登場、たっぷりサイバーメディアについて語ってくれたぞ。

インタビュー・大西智之　　撮影・金原 誠

何も決まってないのに開設日を発表しちゃった

●まず、オフィシャルホームページの開設おめでとうございます。クリスマスでしたよね。

J－LL：ハハハハ。どうも。全部出そろったのはちょっと遅れましたけど（笑）。

●J－LLさんがインターネットに興味を持ったのは最近だとか。

J－LL：うん。去年ぐらいかな。前からそういうものがあるのは知っていたんだけど、私ってメカニックなものだとかエレクトロニクスだとか、その関係のものがダメな人だから、話に聞いても「ふ～ん」ぐらいに思っていたんですよ。

●実は僕もそうなんですけど、ちょっとした家電でも新しく使うとなると避けたくなる人にとって、コンピュータだとかインターネットだとかって、ハードルが高過ぎるんですよね。

J－LL：分かる、まず説明書を読むのがイヤなんですよね。私は今でも読まずに使っちゃいますけど（笑）。私はね、詞を書くのにワープロを使い始めたの。そしたら、「便利じゃ～ん」って。次はもう、「じゃあ、インターネットもやってみよう」ってノリで、のぞいてみたのね。その時ですよ、初めてだったのにホームページをやってみたいなって思った。それが去年の6月ぐらいだったかな。

●パーソンズのホームページには、「10月10日にホームページを作るよってライブで宣言した」って書いてありましたけれど。

J－LL：あの時は「言ってしまった～」って感じだったんですよ。まだなんにも決まってないのに（笑）。

●ゲッ、そうだったんですか。

J－LL：うん。うちのスタッフに詳しい子がいて、「一緒に作ってね」とは言ってたんですけど、忙しくって、なかなか進まないんですよ。だから言っちまえば作るだろうって。そんなだから、ホームページがどのくらい時間が掛かるものなのか、それこそホームページを作るってどういうことなのかも知らない。で、メンバーの藤田くんの入院なんかがあって少し止まってたんだけど、11月に入ったころたたき台を作ってそこから話を広げていこうってことになった時、11月中にできるかと思っていたら、スタッフのマルチメディア部長が言うには「12月25日までにできればいいと思います」。「ひぇ～」って。私の希望とは遠い隔たりがありましたね（笑）。

●その時のたたき台って、今のスタイルでした？

J－LL：うん、他の人たちのホームページを見て回ったんだけど、ピンからキリまで、いろいろじゃないですか。金さえかけりゃあもう（笑）、ね。

●そのパーソンズのホームページですけど。ZOE（ゾイ）ちゃんという天使のキャラクターが中心になっていて、デジタルの世界の中に人間的な温かみがあって引かれるんですけど。この意味は？

J－LL：ホームページをやろうと言い出したのが私と渡辺くんで、二人がたまたまZOEという会社を持っているものですから、その名前を使ってホームページを作ろうと最初に計画して。その中に一部パーソンズがあるっていう形なんです。パーソンズのオフィシャルの宣伝は（東芝）EMIでもやっているから、何月何日にライブをやりますといった情報を流すんじゃなしに、規制なしにいろんなことを言っていけるようにしたくて。メンバーがそれぞれでやっているっていう説明もしにくいんで、一人架空の人物を作って天使を作っちゃおうと。でも、いまだにあまり理解されていないようなんですけれど（笑）。

●ハハハハ。

J－LL：代わる代わる違う人間が書いているんだよーって（笑）。

●あっ、一人じゃないんですか。担当の人がいて、ZOEってペンネームみたいなものだと思ってました。

J－LL：スタッフだったり、私自身だったり。メンバーってことも考えられるでしょうね。

●ホームページのコンセプトは？

J－LL：普通ライブをやっていたり、アルバム作ったりっていう、私たちが作ったものって、リスナーがどう思うかですから、そこで終わっちゃう。基本的には音楽で伝えてバイブレーションでいいんだけど、そのほかの部分、ファンの人たちがそれぞれに興味を持ったことだとかを語る、その同じフィールドで、メンバーだとかパーソンズというバンドに何かを聴ければいいと思うので、ホームページは何でもありますよーっていうスペースにしたかった。だから、今はZOEが中心ですけど、これからは半分がZOEで、残りはコンタクトしてくれた人が作っていくようなものにしたいな。

●それが今ZOEが募集している、ファン参加の企画なんですね。

J－LL：そうそう。企画だれも持ってきてくれないんですよ、まだ（笑）。

更新のプレッシャー 早く英語版を作らなくちゃ

●インターネットを通してファンとのコミュニケーションは広がっていってますか。

J－LL：ホームページの反響のほうは、"ぼちぼち"って感じ。周りにも「見たよ」って人は多いんだけど、深い内容まではね。こちらも（内容を）変えてないし、年末・年始を挟んじゃったし。まだ、受け手は見えてこないっていう感じかな。ただ音楽を聴けばいいやっていう人も多いと思うんですよ。まだどういう人たちがインターネットの世界の中に浮遊しているのか分かんないな。

●このあいだ、ある人が、ファン層とインターネットで来てくれている人たちって年齢層だとかが必ずしもイコールじゃないんで、インターネットで寄せられる意見が必ずしもファンの声を代弁したものじゃないって言ってたんですが。

J－LL：それはあると思いますよ。本人不在のファンの人が作っているページだと、一人のアーティストに対してファンの人がやいやい言うじゃないですか。いいも悪いも。悪い時は「俺はヤツはもう終わったと思う」なんて書いちゃうやつがいて。それがまた面白いんだけど。だって私だと、レコ評だとか、相対的な意見を言ってくれるのって友達くらいしかいないんだけど、実際には結構シビアに見てる人っているんですよね。そういう人に開放してあげればいいと思うことがありますね。

●手紙ほどでないにしろ、文字にするってことにハードルがあるのかもしれないですね。書くと改まっちゃったり。

J－LL：それはあるかもしれないですね。見るのはいいけど、書けないって、うちの渡辺がそ

PERSONZ
[The Life Without ZOE]
http://www.t3.rim.or.jp/~zoe

オフィシャルなのに「The Life Without ZOE」のタイトルで掲げられているパーソンズのホームページ。インタビューに答えてくれたJILLのそのままの雰囲気を伝えるこのホームページは、まさにパーソンズのお宅におじゃましたような気にさせてくれる。

話題に挙がっているダイアリーとは「ZOE'S WORD」の中にある「ZOE'S DIARY」のこと。世の中の事件へのコメント以外にも、紅白歌合戦やKISSのライブを観た感想など、生活の中でのつぶやきがそのまま書かれているのだが、3月上旬にアクセスしたところ、大阪ウォホール（2月6日）、名古屋ボトムライン（7日）、熊谷ヴォーグ（15日）、横浜クラブ24（16日）で行われた『COME ALIVE』のライブレポートと、デジタルカメラによる写真（楽屋やステージからのショットもあった）が加えられていた。次回の更新でさらに詳しくと予告まで付いていたので、この本が出るころにはきっと…。

あと、占い好きのJILLの趣味を反映して？　占いのコーナーが設けられていたりするので本コーナーと並行して楽しんでほしい。

うですから（笑）。もうずっと画面を眺めているのに一行だけだとか（笑）。

●電子メールは来ますか。

JILL：友達関係とかですかね。でも、アメリカのアトランタからもらいましたよ。日本の子が行ってて、一度手紙をもらったことがある子なんだけど、その子がメールを送ってきたりして。こういう子にはいいんだろうなって思いましたけどね。早くイングリッシュ・バージョンを作らないとって脅迫観念が。

●ハハハハ。うちの担当者もそんなこと言ってますけど、ホームページをやっている人の更新するプレッシャーってすごいみたいですね。

JILL：そうですね。中心になっていく人がどんどんやっていかないと。と言いながら、もう2カ月ぐらいがたつという…。

●（笑）でもダイアリーは更新されているじゃないですか。

JILL：しました、やっとの思いで。

●えらく実感がこもってますね（笑）。でも、あのZOEのダイアリーって、ライブに行った感想以外に日本海の重油流出事故だとか社会問題についての意見とか書いてあるじゃないですか。アーティストの人間味が感じられていいんですけれど、ああいった意見は電波や活字メディアに載せるには大げさ過ぎてできない気がするんですが、個人レベルでのホームページだと自分の意見として、思ったこと感じたことを堂々と発信できてそれがちゃんと伝わる。

PERSONZ
JILL

JILL：うん。それにね、ああいった事件についてだとかをJILLっていう名前で書いたとすると、いろいろな自分の中で区別や整理がつかないんだけど。あくまで、ZOEっていう第三者的に書いているので。ニュースも見て毎日いろんなことを思うじゃないですか。そういうのも発信していってもいいのかなと。それにね、自分たちの曲にも海だとか地球だとかに対するメッセージを込めた詞ってあったんだし、そういった事件に対しての意見をパーソンズのホームページで出してもいいんだと思って。

普段見られない写真をいっぱい載せようかな

●ホームページの今後のビジョンについてうかがいたいんです。ライブレポートやレコーディングレポートがタイムリーにあるのが面白いってZOEの欄で言ってたので期待しているんですが。客席からとステージからではライブの見え方も違うだろうから、ステージからはどういうふうに見えるのか、レポートしてほしいなあって思うんですけれど。

JILL：ふん、ふん。ZOEとして、JILLとして、書いてみたいと思います（笑）。

●お願いします（笑）。

JILL：でも、冗談は抜きにしても書くと思いますよ。ダイアリーの所に必ずそういったものは入っていくとは思いますし、ファンの子たちが送ってきてくれたレポートもあればいいなって。

●音源を用意することは考えないんですか。

JILL：見に来てくれる人はそれぞれの条件があるじゃないですか。よっぽど好きな人でない限り、データの読み込みに長い時間が掛かって、聴ける音楽はちょっとではねぇ。私も長いこと待たされた経験がありますし。あと、音のクオリティーね。まだ余り良くないんじゃないかな。だから音源は考えてないんですけれど、好きな人がメンバーの中にいれば、やる可能性もあるかもしれない。でもそんなこと期待するくらいなら、CDを買ってよって思っちゃう（笑）。基本的には自分のオフィシャルページだから、音源を使ってもいいんだけど。親方の方から来ましたから。「自分たちの音源を無許可に使っちゃあいけない」って。「なんで、なんで？」とか言ってたんですけれど（笑）。まあ、これからはケースバイケースでしょうね。今は私が中心になっているものですから文字情報の方が多いわけですよ。よくファンページのボードに3Dチャットでライブやって下さいってあるんだけど、「なんだそれ？　普通にライブすればいいじゃん」って思っちゃう。

●今のホームページは、例えばインターネットの世界をさまよっている人たちがパーソンズのファンになるキッカケにっていうよりは、ファンの集いだとかのニュアンスの方が強いですか。

JILL：そうですね。それをまとめるのがZOEさんって感じですけれど。

●なるほど。パーソンズのページを見て、当たり前のことなんだけど結局は人間が作って人間が発信する場なんだから、人が考えてその人の体温が伝わってくるようなページが面白いって改めて思いましたね。先端技術も必要だし、すごいってことには変わりはないけれど、インターネットは個人が情報を発信する場でもあって、そこが今までにないメディアなんだと。

JILL：そう。私たちにしても、ファンクラブってあるんですけれど、時期的に限られるものだったりして。でも、まだ初めの一歩だから、あんなこともできる、こんなこともできるって小耳に挟んだりすると、ウチのマルチメディア部長に「ねえ、ねえ、ねえ、これできないの」って。そういうのはあるとは思いますけれどね。

●最新技術ってことなら、JILLさんの個人ゾーンに掲げてある天使の写真、あれはデジタルカメラで撮ってるんですか。

JILL：うん。去年、いろんなものを一気に買っちゃいましたからね（笑）。プリンターも、デジタルカメラも、MACも新しいの買わなくちゃって。お金がいくらあっても足りませんね。

●ハハハハ。そのデジタルカメラを使ってステージからの撮影なんてのは？

JILL：ちゃんと今日も充電して持ってきています（笑）。

●今日はツアーの初日になるから、これからデジタルカメラでフォローしつつツアーを回ることになるんですね。

JILL：とりあえずは、ホームページを作ってからのライブは初めてだから、いろいろと撮っておかなければ（笑）。

●楽しみですね。

JILL：ファンのページを作っている子も言ってたんですけど、肖像権があって私たちの写真って彼らのページでは掲げられないじゃないですか。だからパーソンズのページには、写真をいっぱい載せてあげた方がいいなあって思ってたんでね。それもこんな（ポーズをとる）なってるプロモーション用の写真じゃなくて、「あっ、こういうのもあるんだ」って思えるような、ライブ一日の私たちとかね。普段は見られないところが少し見られるように。

●ホームページを作るに当たって、参考にするためにいろんなホームページを見て回ったということなんですけど、その中で感性に止まったページってありました？

JILL：Yukinori Tokoro Home Page「Digital Fantasy Photo Museum」(http://www.ajbb.co.jp/tokoro/museum.html)。エアーブラシなんかで天使のイラストを書く人なんですけど、キレイですね。その方の展示しているところとかが紹介されてて、ちゃんと原盤を売るシステムになっているんです。何気なく雑誌を見ていて見にいったんですけれど、偶然写真集を持っていた人だった。「ああ、縁があったんだ」って思いましたね。これぐらいの写真だったら、こういうふうにどんどん載せていった方がいいんだよねって思いましたから。あれはキレイでしたね。あと個人的には占いのページによく行きます。

●お好きなんですね。

JILL：そうなんですよ。その中では…「魔女の館」が一番面白かったですね（笑）。

JILLの推薦ホームページ

お薦めのメッセージボードを掲げているのがこの「PERSONZ FAN PAGE」。私たちのファンの子が作っているホームページで、このメッセージボードはZOEがアクセスした後、彼が思いついて始めたんだけど、それからどんどんアクセス数が増えて、内容も変えていっているみたい。みんなが見られて、好きなことを書き込んでいける所だから、私たちのホームページを見た気持ちだとか、知っているだろうと思っている情報とかでも以外とみんな知らなかったりするんでどんどん入れていっていただけるとうれしいな。時々ZOEさんと私も乱入したりしているけど、ちょっとメッセージが少なくなってくると「みんな忙しいのかなあ」なんて言いながら（笑）、いつも見ていますから。

もちろん、ZOEの方もあれはあれで頑張っているんですけれど、まとめてやるには時期がずれちゃうかもしれないんで、ほぼリアルタイムでフィードバックされる彼のページと並行して見てもらえれば面白いんじゃないかな。彼は大変らしいですけどね（笑）。

あと、うちのホームページでチャットやる前の段階であのメッセージボードを使わせていただこうと思っているから、ここで彼にお願いしておこうかな（笑）。

［PERSONZ FAN PAGE］

http://www2f.meshnet.or.jp/~glp/personz/

ハダカのロック・・・・・・・

オトナになっても、ロックを愛してくれますか。

ジェイロックマガジンインタビュー集発売!

97年春、ジェイロックマガジンは2周年を迎えます。それに先駆け、本誌インタビュー集を発売しました。本誌を飾ったインタビューのうちアーティストの生き様に焦点を当てた20本を厳選、再構成、再編集。伝説を作り続けるベテランアーティストや飛ぶ鳥を落とす勢いで活躍するアーティストたちの、むき出しのロック魂をお届けします。いつまでもロックを愛し続けるアナタに!

好評発売中
本体価格1,359円(税抜)
A5判サイズ/288ページ
ISBN4-916019-02-4 C0073 P1400E

収録アーティスト
矢沢永吉、B'z(稲葉浩志、松本孝弘)、LUNA SEA(RYUICHI)、黒夢、THE MODS(森山達也)、DER ZIBET(ISSAY)、BUCK-TICK(ヤガミトール、星野英彦)、T-BOLAN(森友嵐士&五味孝氏)、L'Arc~en~Ciel(tetsu)、大黒摩季、GLAY(TAKURO&JIRO)、斉藤和義、CRAZE、Eins·Vier(Hirofumi&Lüna)、明石昌夫、SHERBET(浅井健一)、kyo、WANDS

初のビジュアル散文集
「トゥー・ハーフ」大黒摩季著
本体価格1,553円(税抜)
○四六判サイズ ○上製本 ○144頁オールカラー/ISBN4-916019-00-8 C0095 P1600E

好評発売中

TRIBUNE 単行本化
「ジェイロック・バイブル」
本体価格1,262円(税抜)
○A5判サイズ ○モノクロ ○208頁 / ISBN4-916019-01-6 C0073 P1300E

●お近くの書店にない場合は、郵便局備え付けのブルーの振込用紙に、ご希望の書名および住所・氏名・電話番号を記入の上、本体価格+消費税(4/1から5%)+送料(1冊310円、2冊340円、3冊以上450円)を右記口座までお振り込み下さい。口座番号:00980-1-51829 加入者名:(株)ジェイロックマガジン社

J-ROCK TRIBUNE

MAY Vol. 24

voice
スタッフルームの記事を読んで

4月号の「スタッフルーム」を読んで、納得のいくものもあった。私たちが普段あまり関わりのないレコード会社のことは何とも言えないが、納得のいかないものもあった。まず前書きに「CDにもPL法を適用すべきだ」と書いてあったが、それはひどいと思う。あなたたちがそうやって、「このバンドはだめ、音はだめ」と思うのは自由だが、その歌が好きな人たちがいる、頑張っている本人たちがいるのだから、そんなに否定しまくることはないと思う。

あと「松雪泰子、河村隆一」が例にある「アイドル化したから大きく報道が流された」という部分、別に私はLUNA SEAのファンではないが、アイドルになんかなってないと思う。知名度が上がり、周りに知られたからといって、アイドルと一緒にしてほしくない。ただ相手が松雪泰子だったからということで大きくなった面もあると思う。確かにLUNA SEAも有名なのだが…。それに「アイドルのスキャンダルはすぐに話題になる」とあるが、別にアイドルだからとは限らないし、マスコミというものがあり、それがその人たちの仕事だし、ちょっとしたことでもなんでも大きく話題にする、それが現代なのだから。あなたたちは昔というものが強過ぎて今を受け止められない部分があるんじゃないかと思う。今は今で受け止めればいい。それをロックとつなげるのはどうかと思う。それは本人たちに言うことではない。

あと、「ビジュアルのアマチュアの奴が毛皮のコートを着て…」とか「一軍、二軍、つまりプロとアマチュアの実力が分かれていない」とあったが、実力がないならビジュアルは関係なく売れないと思う。もし、関係があったとしても、その人たちが悪いんじゃなく、そういうところしか見ないファンが悪いと思う。だからそんなビジュアルに対して全面的に否定することはないと思う。

最後に今回これを読んでの全体的な感想は、テーマが漠然とし過ぎていて話が広がってしまい、ただ自分たちの言いたいことを言っているだけでまとまっていない。認めるなら認める、指摘するなら指摘するで、しっかり芯を持ってほしい。結果が見えてこなくて、読んでいる方からただ反感を買うだけになってしまっている。これならディスカッションの意味がないと思う。

(長野・アリ・♀・16歳)

ローテク・ジャンキーズ#3

釣りに行ったフレッシュが持って行くのを忘れたお弁当を届けるため、ブラッディはバイクのエンジンに火を入れた。

illustration=Mori Mitsuo

voice
ファンのあり方について

私は氷室京介と布袋寅泰が好きだ。布袋さんは常にこう言っている。「ファンが女だけになったら、俺は音楽をやめる」と。この言葉に私は女ながら共感を覚えた。彼の音楽はロックと言えるものだ。そのロックというのは曲であったり、歌詞の内容から判断することができる。特に歌詞の内容というのは、彼は男であるから当然男に理解されるはずのものであり、男にあてたものが多い。故に、彼には男のファンが多いのであろう。そこに本誌が挙げるところの"ロックスピリッツ"イコール魂が込められているように思う。だが、今の日本の音楽シーンには、身なりはいかにもロックという感じだが、やっていることはポップスであり、歌詞もありきたりな、差し障りのないものが多いように思う。おまけにそういうバンドやグループには大多数が女のファンというありさまだ。そしてキャーキャーと黄色い声を浴びせている。私はそのことについて疑問を感じている。バンドやグループが男で構成されている以上、同性からの支持があるというのは大事なことのように思う。やっぱり男からもカッコイイと思い慕われている人たちは、本物のアーティストという感じがするし、それが女だけからしかカッコイイと思われていない人たちは、男までも引き付ける魅力(表面だけでない男らしさや生き方、歌詞が男の共感を呼ぶようなカッコよさ)が備わっていないように思う。

こういうことを言うと、本気でそのアーティストのことを愛している女性ファンから抗議が来るかもしれない(事実、私もそうなのだが)。だが、そんな女性たちにも少し考えてもらいたい。私たちは、本誌のような自分の好きなアーティストの載った雑誌を買い、そこでインタビュー記事などで、アーティストの考えていることや意見を読んだりする。それをうのみにしてしまってはいないか。あまりにその人を愛するあまり、すべてをその人のようにしてしまい、自分の独自の思想も、善かれあしかれそのアーティストの考え方によって、その人の色に染められていく。それではあまりにも悲し過ぎる。ファンにも個性というのが必要だし、時にはアーティストの意見にも反感を覚えてもいいように思う。アーティストもそれを望んでいると思うから、ファンならファンらしく、そのアーティストと対等な位置で考えることは大事なことだと思う。

もう一点言いたいことがある。TVによく出るグループや歌手がいる。それ自体は別に悪いとは思わない。だが、その人たちの中には作曲も作詞もしないのに、自分たちはロックをやっているつもりでいたり、副業のような感じで音楽をやっていたり、自分に書かれた曲の形式や詞の内容が説明できなかったりする人がいる。そして自分は淡々と今風に歌うだけ。それではこちらに伝わってくるものなんて何もない。でも音楽のことなど大して分かっていない司会者は「イイ曲ですね」なんてうわべだけの感想を言う。今はこんな歌番組が多い。それでは氷室さんや布袋さんがTVに出たがらないのも無理はない。私だって氷室さんや布袋さんがTVに出ているのを見たい。そのためには歌番組自体が変わらないと可能にはならないのではないかと、現状を非常に悲しく思っている。

(埼玉・靖子・♀・18歳)

■グレイのインタビューのために都内某所へと向かった村田&山田。前の取材が少し押しているとのことで待っていると、スタッフのNさんが気を効かせて彼らのビデオを見せてくれた。「この曲カッコいい」「TAKUROくんの髪が長いね」と最初はすっかり楽しんでいたのだけれど、そのうちビデオの中で演奏しているこの人たちがもうすぐやってくるということにふと気付き、そこからは妙な緊張感が膨らむ一方。思わずビデオを横目に質問したいことをおさらいしている二人がそこにはいた…。何度も会ってはいるんだけど、さすがにインタビュー直前のビデオは心臓に悪い。

■最近、なぜか『DISC REVIEW』コーナーで紹介している新譜ディスクへのプレゼントの応募ハガキが届く。そんなプレゼントをするなんてどこにも書いてないのに不思議!?と思っていたら、ようやく原因が判明した。『インディーズ・ジャンク・ボム』のコーナーに、"★はプレゼント"と書いてあったのだ。
あわてんぼの読者のみなさん、あのプレゼントはインディーズコーナーだけに適用させているんですよ。『DISC REVIEW』のコーナーの★はライターの区分けの印(というわけで今月号から変更!)。こんな細々とやっている、それも400円の雑誌が、毎月新譜をプレゼントなんてできるわけない! でも、もっと隅々まで気を使わなくてはと、ちょっと反省もしている編集部だった…。

■ヴァレンタインD.C.の撮影は、お天気はいいけどなぜか雪がチラつく寒空の下で(2/13)。震えているken-ichi(彼は風邪を患っていた)に「寒い中すみませんねえ」と担当の石田が声をかけると、「いえいえ、みんなも寒いんですから」。おお〜、心は温かくなりました!

■SLYのインタビュー後、翌々日の神戸チキンジョージでのライブが話題に昇ると、ベーシストの寺沢が「チキンジョージってまだチキンライスが出るのかなあ…」と懐かしそうにつぶやいた。「えっ、外国みたいやな」と樋口。先月のToshiに続いて登場したチキンライスの話題。次はだれの口から語られるのやら、そしてこうなれば今もなおチキンジョージにチキンライスが登場するのかを探るしかない!

■インディーズバンドのバイセックス(ex.バイセクシャル)のライブを見に行った村田。終演後楽屋を訪れると、ボーカル&ギターのRYOのカバンの中からチワワが飛び出してきてビックリ! ドラムのNAOが「(飼い犬に)会いたいなあ」と言ったから連れてきたらしいが、いきなり茶色い物体が飛び出してきたときは寿命が縮んだ。ちなみにその愛犬の名前は、ルーサ。ライブ会場ではバックステージでノリまくってるらしい!?

募集!!

J-ROCK magazineでは、音楽にこだわりを持ったいろいろな人達が「だれかに伝えたい」と思いながらも、自分の中に葬り去っている「こだわり」「疑問」「意見」「批判」などを発表する場になりたいと考え、このVOICEコーナーを設けています。ライブレポート、ディスクレビュー、アーティスト評、アーティストへのメッセージなど、どんなスタイルでもOK。102ページ下部あて先「VOICE係」まで本音を投稿してください。採用させていただいた方には、CD券(3000円分)を差し上げます。

投稿規定

◎文字数:1600字程度まで。 ◎原稿用紙での投稿を基本としますが、FAXでも構いません。 ◎ペンネームも可能ですが、必ず住所・氏名・年齢・タイトルを明記してください。

voice

ライブでのアーティストの責任

ライブに足を運ぶ私たちオーディエンス側にとって、良いライブ、「うーん」と思わせるライブがあるように、逆にアーティストにとって良い観客、悪い観客というのもあるだろう。MCを聞かなかったり、ヤジを飛ばしたりというのは論外として、客のノリという点から見れば、地方都市はノリが悪い、ださいと言われることも少なくない。逆にその機会の少なさ故に、一生懸命という面もある。2月、長崎でGLAYのライブが行われた。長崎で行われる久々のロックのライブに、楽しみでもあり、また先に述べたような不安も混じった気持ちで当日を迎えた。というのも今から10年位前、ある大物アーティストが当地での客のノリの悪さにステージを降りたという話を聞いたことがあるから。事の真相がどうなのかは当時知る由もなかったのだが、もし本当ならそのアーティストに無責任さを感じた。最高のライブをしたいという大物アーティストの気持ちが分からないではないにせよ、ライブというのは客をあおるアーティストの度量にもよるのではないだろうか。それをすべて観客のせいにするのはどうかと思った。

さてアップテンポの曲で始まったGLAYのライブは小気味よいものであり、皆それぞれにライブを楽しんでいた。途中、MC中にも声援を送る人がいてTERUから「静かに聞きとうせ…」と方言まじりに注意を促されたりしても、和やかにライブは進行していった。

中盤、聴き入るようなメロディーにアレンジされたD.I.E.のキーボードから、曲は「カーテンコール」へと移っていった時、私が最も恐れていたことが起きてしまった。静かなこの曲に一部の人が手拍子を始めてしまった。TERUも歌うのをやめ、手拍子が収まったころ再び歌い出したのだが、再び手拍子が…。場内は再度歌うのをやめたTERUへの声援と、手拍子に対してのブーイングのざわめきが混じり、私もどうなるのだろうとハラハラしていた時、TERUははっきりと「初めて来た町でちゃんと歌いたいから手拍子はいらないよ」と促してくれた。場内はメンバーに対する気まずさに似た申し訳ない雰囲気に包まれ、それでも静かに熱唱するTERUの声に聴き入っていた。バックの照明が美しいほど、TERUが熱唱するほど、先ほどの中断が残念でならなかったが、曲が終わった後わき起こった拍手は紛れもなく感動の拍手だった。

その後、一度は静まり返った場内を再び盛り上げるのに、彼らは本当によくやってくれた。私はGLAYというアーティスト自体にさほど思い入れがなく、純粋に歌のみのファンだったので、その分冷静にライブを楽しめたのかなと思うのだが、あのアクシデントにクサることなく、よくベストを尽くしてくれたと思う。ホールの音響の悪さもあってか「BURST」を歌いながらのMCの言葉が聞き取り辛く、彼らの呼びかけとそれを忠実に受け止めようとするファンの反応との間が空いたりして、メンバーが苦笑する場面も見られたのだが、たかが地方都市、と手を抜くことのなかった彼らに心より拍手を送りたい。形は悪かったとはいえ、あの手拍子もファンの誠意の一つである。

ライブの余韻を味わうことなくメンバーが引っ込んで、間髪を入れずのアンコールの呼びかけや、MC中の声援など、もう少しライブそのものを楽しんでいいのではという反省点もある。ライブは完ぺきが用意されているわけではない。曲を完ぺきに演奏することも大事だが、アクシデントの対処もアーティストの腕である。ライブの流れを中断させても自分の考えを発言し、ファンを突き放すことのなかった彼らの姿勢が、次の世代のGLAYを育てていくと思っている。ネームバリューがあればある程、アーティストはそういった責任を負っているのではないか…。ライブ最後の「また会おうぜ! 待ってろよ!」のTERUの言葉を多くの地方のファンが信じているに違いない。

(長崎・Be-Myself・♀・36歳)

プレゼント

応募は、本誌アンケートハガキまたはインターネットでお待ちしています!
今月号の締切は4月26日。当選者の発表は発送をもって替えさせていただきます。

- **A** GLAY『アルバム「BELOVED」オリジナルテレホンカード』(プラチナムレコード) 2名
- **B** ValentineD.C.『Naoya&Junオリジナルピック』(ファイブ・フォルド) 12名
- **C** ZEPPET STORE『シングル「SUPER STITION」特製レポート用紙』(MCAビクター) 10名
- **D** THE SPACE COWBOYS『メンバーサイン入「GALAXY WARS TOUR」Tシャツ』(ストーンブローク) 3名
- **E** SLY『メンバーサイン入ツアーTシャツ』(ソルブレッド) 1名
- **F** SLY『ツアー「JUMP INTO CHOAS」特製ペンダント』(ソルブレッド) 1名
- **G** 樋口宗孝『ソロアルバム「FREE WORLD」特製ポスター』(ソルブレッド) 1名
- **H** CURIO『メンバーサイン入ポストカード』(エピック・ソニー) 3名
- **I** PERSONZ『アルバム「GUARDIAN ANGEL」特製Tシャツ』(A.R.B.オフィス) 3名

チャターボックス

イラスト・鯨 有紀子

[J-ROCKオリジナルチャートや音楽番組のランキングをどう思いますか?]

●ランキングってワクワクします。自分の好きなアーティストが入ってると、HAPPYになれるもんね。だから好き。
(神奈川・二階堂香奈・♀・17歳)

●好きなバンドが上位だとうれしいけれど、たとえ何位だろうと気にならない。私が好きなんだっていう気持ちがあればそれでいい。私の中ではいつも一番だから。
(東京・三匹のこぶたのママ・♀・32歳)

●はっきり言って嫌! わざわざ数字に置き換えなくてもいいものはいい!!　(鹿児島・BE!!・♀・?歳)

●自分としては順位なんてどーでもよいと思っているが、やっぱり好きなアーティストが上位にいるとすごくうれしい。ファンなんか少ない方がより自分に近い。私にしか良さは分からないんだなんて思ったりするくせに、周りから「すごいね」、とか言われるとうれしい。でも本当に純粋なランキングなんてあるとは思えません。
(神奈川・小野朋美・♀・31歳)

●ランキングに入らなくてもステキな音を作っているバンドを私は知っています。話題になれば必然的にチャートは上がる。ランキングは作品に対する評価。反応だけではなくネームバリューなども含まれて、浮き沈みするもの。
(千葉・みいとゆう黒ネコ・♀・19歳)

●知りたがっている人がいるからやっているのか、知らせたい(知ってもらいたい)コトがあるからやっているのか、その意図がよく分からない(ちなみに私は知りたがってる人ですが…)。　(大阪・April Fool・♂・31歳)

●10代、20代、30代以上っていうふうに分けてくれたら、甲斐よしひろもベスト10(30代以上の部)に入るのになぁー。　(静岡・田中元啓・♂・33歳)

●見ててドキドキ。　(京都・PIG・♀・17歳)

●音楽番組のランキングはとても細かく載っており、見てて楽しいけど、J-ROCKのオリジナルチャートのパート別ランキングは、正直言ってちょっと…。なぜなら、全パートの一位が同じグループの人たちでしたよーっ!! なんだか「面白くないなァ…」と感じてしまいました。
(神奈川・MOTHER GOOSE・♀・18歳)

●チェックはする。当てにはせん。(広島・B列15番・♀・18歳)

●オリジナルチャートはすごいいいと思うけど、普通のランキングは別に見る必要はない。見なくても大体売れているものは分かる。ただミュージシャンにとって一つの励みとか、目標にはなるんじゃないかな。
(石川・与咲・♀・23歳)

●何のランキングなのかをはっきりさせないものは困る。投票なのか売り上げなのか、特に異なったものを組み合わせる場合、バランスをどう取るかで全然違う結果になるんじゃないでしょうか。　(三重・柳一・♂・24歳)

●最初、なんでアーティストにランキングつけるの?って思ったけど、それなりに楽しめるし、いいと思うようになった。
(長野・ムフ♡・♀・16歳)

●単に数字だけで決めちゃうのははっきり言ってムカツクけど、一位だったりして喜んじゃうのも悲しい事実…?
(京都・B-178-z・♀・13歳)

●みんな、ちまたの音楽番組のランキングに左右され過ぎだと思う。何で自分の耳で聴かず、ランキングで判断してしまうんだろ。　(大阪・662・♀・22歳)

●「ランキングなんて関係ないもんねー。好きなもんは好きやもんねー」と言いながらも好きなアーティストが上位にいるとうれしくて、下位にいたらやっぱり「関係ないもんねー」…。私をいろんな意味でクサらせるもの。
(高知・プレアデス・♀・17歳)

●多少なりウソが入っていると思うので信用していません。　(大分・R&R・♀・?歳)

若い子の方が柔軟性があって、音楽に対する間口も広いと思ってたのに意外です。姪はバンドが復活するまで、似たようなロックバンドに命をかけると言ってます。頑張ってね…。　(熊本・お月様・♀・37歳)

■最近、L'Arc〜en〜Cielにはまってしまい、子供のお昼寝時にコーヒー飲んで、『True』を聴いてるときが、今一番の幸せ。静岡にライブに来たときは、子供を預けて絶対絶対行くゾ。10代の若い子のノリについていけるかどうか、心配。でも主婦でも行かせてもらうゾ。
(静岡・ガコ・♀・31歳)

■modern-greyのライブへ行った。多くの人が手を振り上げるでも、リズムを取るでもなく、じっと聴き入っているというライブは久しぶりだった。気分良く帰宅し、ニコニコとしていたところ、母から「青春してるよね…」とあきれた口調で言われてしまった。でも!新曲「Speed」はカッコいいし、アルバムも出るし、と頭の中は、春・春・春…。あぁ、時のたつのが待ち遠しいなんて不思議だね。
(北海道・ゆきやなぎ・♀・20歳)

■LAUGHIN' NOSEのライブに行ってきました。友人たちは口をそろえて「だれか、それは」と言うので一人で行ってきましたが、いやぁ、一人ででも行ってきてよかった。客がむやみに暴れるのはよくないことだと思っていたけど、あれは暴れざるを得ませんね。「暴れる」というより「踊る」に近いかな。無意識のうちに体の方が反応してしまうんですよ。それから、いいなぁーと思ったのが、客が一人ひとり、みんなノリ方が違うこと。各々、自分独自のノリ方でノッてました。それは多分、みんなが心から音に酔っていたからだと思います。これぞ究極の音楽の楽しみ方なんじゃないでしょうか。
(大分・外弁慶・♂・17歳)

■年々、ますます新しいアーティストが、売れては消えたりしてるけど、本当にいいアーティストって、大ブレイクはしなくても、決して消えないと思う。現に僕の気に入ってるアーティストもその一人です。そういう、すごくいいのにブレイクしないでいる、そんなアーティストたちをピックアップするコーナーを確立できたら、すごくいい雑誌になるんじゃないかな。　(京都・吉水順一・♂・22歳)

■浜田省吾さんのコンサート「ON THE ROAD'96」ツアーに参加して感じたことがあります。それは子供連れで来てる人がとっても多かったこと。3歳くらいの子供たちをひざの上に座らせて見ていた夫婦、たーくさんいました。子供たちも楽しそうにしていて、家族そろって参加できるなんて、とってもうらやましいです。私にもいつかそんな日が来るのであろうか。浜省にはいつまでも元気なツアーを続けてほしいです。
(東京・リリー・♀・28歳)

■去年は中学2年の娘とそのお友達を引き連れてあっちのライブ、こっちのライブといろいろ行きました。楽しい日々でしたが、彼女たちにすると初めてのライブ、大好きなバンドとの出会い、ということで、各々がそれぞれのライブで涙していました。かわいくて、初々しくて。おばさんも音楽を純粋に楽しむことを改めて教えてもらいました。大好きな音を前にすると、年も何も関係なくみんな楽しく幸せになれるんですよね。と、幸せにしてくれたバンドのみなさん、オーディエンス、だんなさま、お義母さん、ありがとう。　(京都・Cielにおいで・♀・38歳)

■去年の年末、初めてX JAPANのドームライブに行きました。そこには、店(公式じゃないもの)が出てて、ファンの気をそそりました。私はすごく欲しかったけど、がまんしました。しばらく観察してると、もうコスプレさんとかは商品を買ってなかった。やっぱり、不正に売ってるのってよくないよね、ファンの心理をつかんで。だからみんなにも好きなアーティストのためにも、欲しくてもがまんしてほしいナ。今は、買わなくてよかったと思ってるヨ。
(長野・バカ学・♀・16歳)

■THE STREET BEATSを聴き出して、J-ROCK magazineを読むようになった。あまり難しいことは分からないけど、少しずつ勉強しています。
(広島・ゆうき・♂・14歳)

■稲葉浩志という人間に直接会ったことも話したこともないけど、音楽というもので、詞というもので、何度も救われた。ヒトとの関わり方というのは幾通りもこの世にはあることを知った。　(埼玉・川宮ナオミ・♀・20歳)

■写真が白黒で字が多い音楽雑誌の方が好きです。けれど私が以前買っていた雑誌は二つとも廃刊しました(笑)。J-ROCKにはいつまでも頑張ってほしいです。
(北海道・M・♀・28歳)

■14歳年下の妹の部屋にはラッピングのはがされていないCDが山積みとなっている。「聞きもしないCDをなぜ買ったの!?」と怒ると、「はやりものだから」と言う。「買ったんなら聞けば」と言えば、「聞くことより買うことに意味があるんだよ」と平然とした答えが返ってくる。彼女の大好きなビジュアル系バンドのCDさえ「ファンだから買わなきゃ」という理由で買われそのままだ。彼女が真実の音楽と出会い、向き合うことができるのはいつだろうか? そんな日が来るのか?（長野・有閑夫人・♀・29歳）

■3月22日、東京ドームに行きます。B'zに感動するために。ライブは初めてだからキンチョー。私がキンチョーしたところで、そのキンチョーがB'zに届くわけではないけど、とにかくキンチョー。頑張ります! 何を?!って感じですが。（福島・帯川知津子・♀・15歳）

■雑誌でライブレポートとかライブの感想とか読んでると、なんでか分かんないけどナミダが出てくる。どーしてかなァ。きっとカンドーがよみがえってくるからダネ。将来はあたしもそんなライブを作っていこう!
（青森・Bean Jam・♀・18歳）

■私のペンフレンドはひどい。勝手にダフ屋にチケット売った。「チケット交換して」って言ったから郵送したのに、私の手元にはチケット届かなかった。会場でダフ屋に勝手に売った。お金も返してくれない。私が悪いのか?（北海道・華乃・♀・15歳）

■L'Arc〜en〜Cielのみんなが少しずつ標準語になっていってる気がする…。なんか寂しい…。
（三重・はいどっち・♀・17歳）

■とにかく「骨」のある「心」のあるROCKが欲しい。上っ面だけの音楽なんて、この世に必要ない。カッコイイ曲が何百、何千と世界に存在するんだから、それよりカッコ悪い曲は作ってはいけないと思う。
（東京・ヨコカワ・♀・27歳）

■コンサートに小さな子供を連れてくる人についてです。周りの迷惑もありますが、あまり静かでないコンサートなどでは子供の耳も心配です。行きたくてしょうがなくて、預かってくれる人もいないということもあるかもしれませんが、親の責任は大きいものです。しばらくの間はガマンするのはどうでしょうか。（埼玉・いつき・♀・30歳）

■音楽の好きな人って実はさみしがりやなのかもしれませんねぇ(私だけ?)。だって、音楽聞いてるとスゴク安心するし、勇気づけられる。真っすぐ前を向いて歩いていける。これからも、大好きなアーティストと一緒に泣いたり、笑ったりしながら、長くて短い人生歩いて行こう!
（愛知・HALTA・♀・17歳）

■「売れる」のはとってもうれしいけれど、「流行」になるのはとっても怖いです。勝手に周りが騒いで、勝手に飽きて、勝手に「もう終わりだね」ってなるのが怖い。もしそれにアーティストが左右されてしまったら、もっともっと怖いです。（神奈川・エミ・♀・17歳）

■最近は今輝いているアーティストが注目され過ぎて、これまで長いキャリアを積んできたアーティストがあまり目立たなくなってきたように思う。それはそれで時代の流れを感じさせるものだけど、私にとっては少しだけ悲しい…。（岐阜・岩田加代子・♀・18歳）

■X JAPANは完全なるプロ。個々のメンバーもソロアーティストとして堂々と第一線でやっていける実力者の集まり。それをまとめるYOSHIKIはすごい。命をかけて音楽をやっている彼に、他のだれにもないオーラを感じる。（京都・時代と共に生きるおばちゃん・♀・48歳）

■どうしてJ-ROCKに投稿する人は皆、へりくつ野郎ばかりなんだろう。13や14歳でそんなに固まってしまって、この先どうするのと毎回思ってしまう。そうそう、追っかけをそれほどロッカーの人たちは嫌がってないと思うんです。追っかけしてもらえない"華"のない奴なんて、つまらないと思うんじゃないかしら。
（埼玉・T-MAMA・♀・29歳）

■内容はどうであれ、36歳、47歳っていう人たちが、もっと載ってて当たり前になりたいね。
（神奈川・きゃほー・♀・33歳）

■音楽や歌って人間のエネルギーだと思う。人それぞれ好みは違っても、音楽が嫌いな人ってそういないでしょ? 私は小学生のころからミュージシャンになりたいと思ってた。でも結局、何も行動に移さないまま、結婚してしまった。本気で恋焦がれた夢だったのに、夢のまま終わってしまった。若く、実力のあるアーティストはどんどん出てきていいと思う。でもキカイに頼り過ぎているアーティストは、もっと努力してほしい。せっかくつかんだ夢なのだから、おぼれないでほしい。
（宮城・岩上京子・♀・24歳）

■「音楽に夢中になると勉強できなくなる」というのは違うと思う。本当にそのアーティストが好きならば、その人が自分の力の源となってくれるはず。心の底から好きになれるアーティストがいれば、受験なんて怖くない!
（石川・ピンクの♡・♀・15歳）

■3月号の「J-ROCK magazineの嫌いなところ」には笑えた。自分もその通りだと思った。だけど嫌いなわりには愛読している。（北海道・杉・♀・35歳）

■この前、ラジオで黒夢の清春さんが「沢田研二さんはカッチョイイ!!」と言っていた。みんなが黒夢を好きなのと同じように好きだと言っていて、意外な人だったので、驚いたけど、何でも素直に言ってくれるところが好きです。曲だけいいなと思ってたけど、今は曲も好きだし、インタビューなどで話してることもちゃんと理解できる(うなずける)し、これからも、カッチョイイ黒夢でいてください。（埼玉・塚田恵・♀・18歳）

■私は、私が好きなアーティストを好きになった自分の感性を誇りに思っています。私の体を音が通っていく。震える。うれしい。生きてる。（東京・トモコ・♀・17歳）

■毎日仕事とかで忙しくて、一日の中で大好きな音楽を聴ける時間って限られてる。私は毎朝、早起きしてイヤホンでガンガンにValentine D.C.を聴いてます。お陰で朝からめちゃくちゃテンション高くて、「今日も一日頑張ろう!」ってすごく前向きになれるんです。
（大阪・ライブであいましょう・♀・24歳）

■いやー、最近の音楽市場を仕切っているのは、中・高校生、おまけに小学生までがチャートシーンを変えてしまうような時代。びっくりしますねぇー。私が中・高校生の時は、CDを買うのはもう大変。金をなんとかやりくりして、好きなミュージシャンのCDをやっと買ったものだが、最近ではポンポン1カ月に何枚も買うらしい。とってもうらやましいと思うが、「お前ら本当にそのCDのメッセージ性や、伝えたい気持ちが分かってるのか」と言いたくなる。ま、でも音楽はフィーリングと「あ、いいネ!」というのが最大の目的なんだろうけどね。
（茨城・関昌彦・♂・22歳）

■私は今学校でイジメられている。ヒデちゃん、ヤツらの前で言ってやって! 「オレはカツラじゃない!」って…。
（愛媛・ひでろう・♀・15歳）

■"ライブが成功する"ってことが分からない。チケットがソールドアウトすること? トラブル、アクシデントがなかったってこと? いつも疑問に感じてます。
（兵庫・オッド・アイ・♀・16歳）

■今妊娠6カ月でこの3月を最後に子育てに専念するつもり。胎教にSLYや、筋肉少女帯のナンバーを聴かせている。これでロック好きの子が生まれるかなぁと、かすかな期待。「ライブに行けなくなるから結婚しない」と言っていた友人もいたが、私は実家にいたときよりダンナにうるさく言われないので快適。結婚してみないと分からんものだと思っている。（東京・V.百瀬・♀・29歳）

■音楽番組の司会者は、そのミュージシャンが出ると分かっているなら、少しでもその人たちのことを調べておくべきだと思う。当たり前のコトだけど、できていない、これが…。（埼玉・メーテル・♀・18歳）

■氷室さん、今年こそステージに立って下さい!
（長野・宮下恵美子・♀・18歳）

■大好きなバンドのボーカルがソロデビューします。既にカップリング曲が某番組のエンディングに流れていますが、なんだかまるで知らない人みたいにドキドキしました。こんな曲をこんなふうに歌う人でもあったんだと新鮮な驚きに感動していたら、同じファンの姪の子は「バンドじゃないんならいい!」と言って聴こうともしません。

TRIBUNEにひと言!

●3月号のマサシのイトコさん他へ。私はレンタル店のスタッフです。確かにリクエストカードに「SIAM SHADE」と書いてくる人、います。でも我々は、考えた上で入れないことにするのです。はっきり言って、レンタル店は商売です。ビジネスです。音楽を安い価格で聴いてほしい思いもあります。しかしレンタルは販売と異なり、1回レンタルされても元は取れません。少なくともシングルで6回位、アルバムで7、8回位レンタルされないとダメなのです。レンタル商品の入荷は投資なのです。同じ投資をするなら、見返りの大きいと思う方につぎ込むのは当然なのです。理解していただきたいです。（兵庫・レンタル店スタッフの1人・♂・19歳）

●3月号のジーリストさんへ。私も同意見です。うまく言えないけれど、作詞、作曲を手掛けずに歌うだけのアーティストからは曲に対する情熱や愛情、感情が伝わってきません。伝えたい気持ちを歌詞、曲に込めて作り、その気持ちを相手に伝え、感動させるのが本当のアーティストなのではないでしょうか。作詞、作曲をした本人が歌わなければ、本当に伝えたいことが伝わらないと思います。
（埼玉・宏美・♀・18歳）

●3月号のジーリストさん、僕はちょっと違うと思います。映画に監督=製作者と役者=表現者がいるように、音楽だって、作詞、作曲する人=製作者、歌う人=表現者という型があってもいいと思います。だから人の作った歌でもそれを上手に表現できるのなら、それは立派なアーティストと言っていいのではないでしょうか。問題なのは「○○さんが作った曲だから売れる」という気持ちで歌っている人たちではないでしょうか?
（岐阜・WING.O・♂・26歳）

●私も4月号のIkuさんと同じように自分で稼ぐようになってからロックにはまりました。最近のライブとか10代の若い人が多くて、(はまったのが)遅かったかなと思ってたのですが、好きなことに年は関係ないなということで(笑)、今すごく楽しいです。（栃木・AKIRA・♀・21歳）

●4月号のyumiさんへ。私も以前よく「好き」の意味を考えていました。昔「ライブに行かないなんて本当のファンじゃないんだね」と言われたことがあったから。今、私は大好きなバンドがいて、時間とお金が許す限りライブに行っています。でも好きだからライブに行くのが当然とは決して思わない。ライブに行けなくて、悔しくて、悲しくて、泣いて過ごしたこともあるから。だから今こうしてライブに行けることがすごく幸せだと思ってる。たくさんのライブに当たり前に行けるようになった私より、行きたくても行けない人、一本のライブにかけてる人の方が思いは強いかもと思うこともある。人とは比べられないけれど。好きって気持ちはほんとにだれにも計れないよね。（愛知・マリー・♀・24歳）

MONTHLY CHART TOP 10

1. B'z 3112votes
2. L'Arc~en~Ciel 2759votes
3. X JAPAN 2455votes
4. 氷室京介 2182votes
5. GLAY 2138votes
6. WANDS 1807votes
7. THE YELLOW MONKEY 1796votes
8. T-BOLAN 1659votes
9. LUNA SEA 1648votes
10. FIELD OF VIEW 1598votes

本誌3月号アンケートハガキによる読者投票と全国33局で放映中の本誌協力テレビ番組「J-ROCK ARTIST BEST 50」の月間総合順位を集計し、2月度のジェイロックマガジンオリジナルチャートをお届けする。次回締め切りは4月26日、さあ、キミの投票でチャートを変えよう。本誌とじ込みのアンケートハガキまたはインターネットでセレクトアーティストを1名投票してほしい(それ以外は無効)。抽選で毎月30名様にオリジナルステッカーをプレゼント!

Original Chart J-ROCK BEST 50

TOP11~20

11. 大黒摩季 1592votes
12. ZARD 1345votes
13. BUCK-TICK 1323votes
14. 筋肉少女帯 1321votes
15. 黒夢 1133votes
16. DEEN 1064votes
17. 布袋寅泰 1048votes
18. ウルフルズ 898votes
19. SPITZ 864votes
20. JUDY AND MARY 828votes

TOP21~30

21. FEEL SO BAD 816votes
22. 浜田省吾 811votes
23. PAMELAH 775votes
24. ZYYG 763votes
25. エレファントカシマシ 760votes
26. Eins・Vier 722votes
27. GUNIW TOOLS 720votes
28. CRAZE 670votes
29. ⬆THE HIGH-LOWS⬇ 647votes
30. 奥田民生 628votes

TOP31~40

31. BLANKEY JET CITY 582votes
32. CASCADE 559votes
33. Valentine D.C. 551votes
34. THE STREET BEATS 543votes
35. THE MAD CAPSULE MARKET'S 538votes
36. SIAM SHADE 534votes
37. SUPER JUNKY MONKEY 501votes
38. 甲斐よしひろ 487votes
39. modern-grey 484votes
40. MANISH 471votes

TOP41~50

41. SLY 427votes
42. kyo 421votes
43. TWINZER 394votes
44. CHARA 347votes
45. Akashi Masao Group 340votes
46. 斉藤和義 326votes
47. 真心ブラザース 321votes
48. Mr.Children 305votes
49. SPAED 273votes
50. THE SPACE COWBOYS 269votes

20 Part Ranking

1月27日から2月26日の間に寄せられた本誌アンケートハガキを基にチャートを作成した各パート別のランキング。お目当てのアーティストは入っているだろうか?

GUITARIST

1. 松本孝弘 B'z
2. ken L'Arc~en~Ciel
3. 布袋寅泰
4. HIDE X JAPAN
5. SUGIZO LUNA SEA

6	HISASHI	[GLAY]
7	橘高文彦	[筋肉少女帯]
8	柴崎 浩	[WANDS]
9	INORAN	[LUNA SEA]
10	TAKURO	[GLAY]
11	今井 寿	[BUCK-TICK]
12	小田 孝	[FIELD OF VIEW]
13	五味孝氏	[T-BOLAN]
14	菊地英昭	[THE YELLOW MONKEY]
15	田川伸治	[DEEN]
16	Naoya	[Valentine D.C.]
17	SEIZI	[THE STREET BEATS]
18	瀧川一郎	[CRAZE]
19	PATA	[X JAPAN]
20	浅井健一	[BLANKEY JET CITY]

VOCALIST

1. 稲葉浩志 B'z
2. 氷室京介
3. hyde L'Arc~en~Ciel
4. TERU GLAY
5. TOSHI X JAPAN

6	浜田省吾	
7	上杉 昇	[WANDS]
8	吉井和哉	[THE YELLOW MONKEY]
9	清春	[黒夢]
10	櫻井敦司	[BUCK-TICK]
11	大槻ケンヂ	[筋肉少女帯]
12	RYUICHI	[LUNA SEA]
13	浅岡雄也	[FIELD OF VIEW]
14	森友嵐士	[T-BOLAN]
15	坂井泉水	[ZARD]
16	池森秀一	[DEEN]
17	Ken-ichi	[Valentine D.C.]
18	生沢佑一	[TWINZER]
19	ØKI	[THE STREET BEATS]
20	浅井健一	[BLANKEY JET CITY]

BASSIST

1. tetsu L'Arc~en~Ciel
2. 明石昌夫 Akashi Masao Group
3. JIRO GLAY
4. 人時 黒夢
5. J LUNA SEA

6	HEATH	[X JAPAN]
7	廣瀬洋一	[THE YELLOW MONKEY]
8	樋口 豊	[BUCK-TICK]
9	内田雄一郎	[筋肉少女帯]
10	恩田快人	[JUDY AND MARY]
11	TAKESHI"¥"UEDA	[THE MAD CAPSULE MARKET'S]
12	新津健二	[FIELD OF VIEW]
13	上野博文	[T-BOLAN]
14	Lüna	[Eins・Vier]
15	飯田成一	[CRAZE]
16	照井利幸	[BLANKEY JET CITY]
17	Jun	[Valentine D.C.]
18	加藤直樹	[ZYYG]
19	栗林誠一郎	
20	大橋雅人	[FEEL SO BAD]

DRUMMER

1. sakura L'Arc~en~Ciel
2. YOSHIKI X JAPAN
3. 真矢 LUNA SEA
4. 菊地英二 THE YELLOW MONKEY
5. ヤガミトール BUCK-TICK

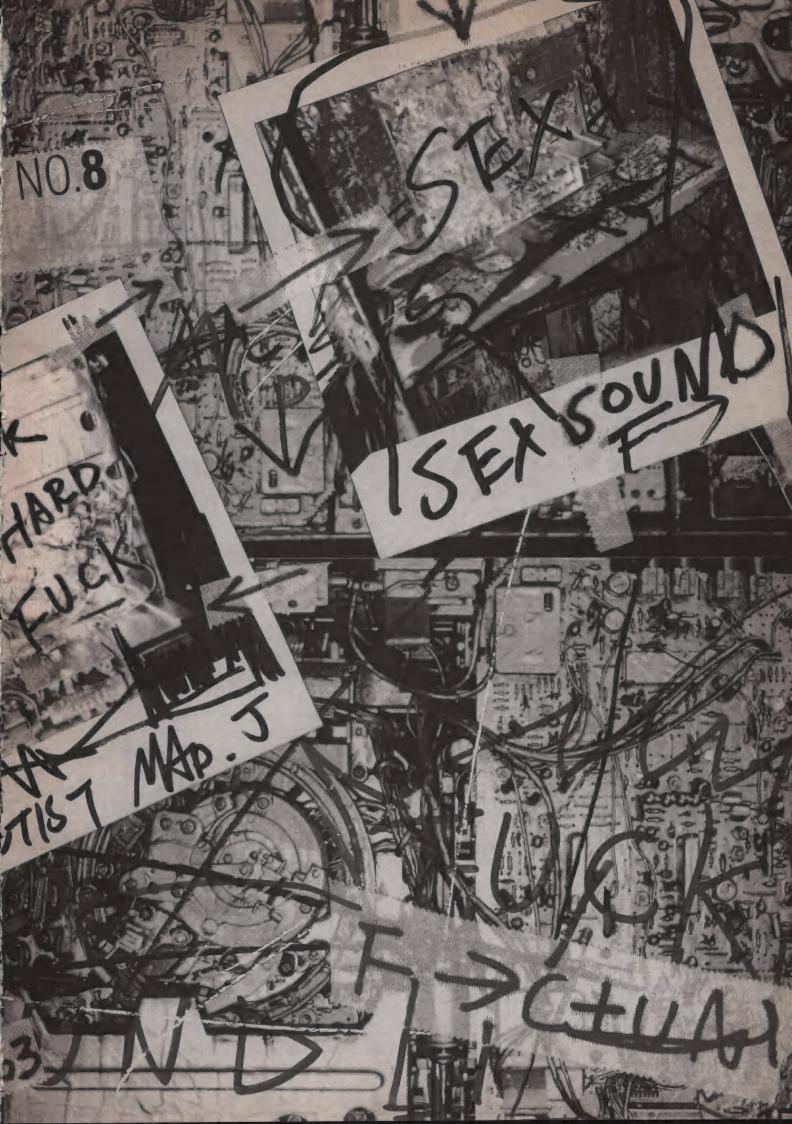
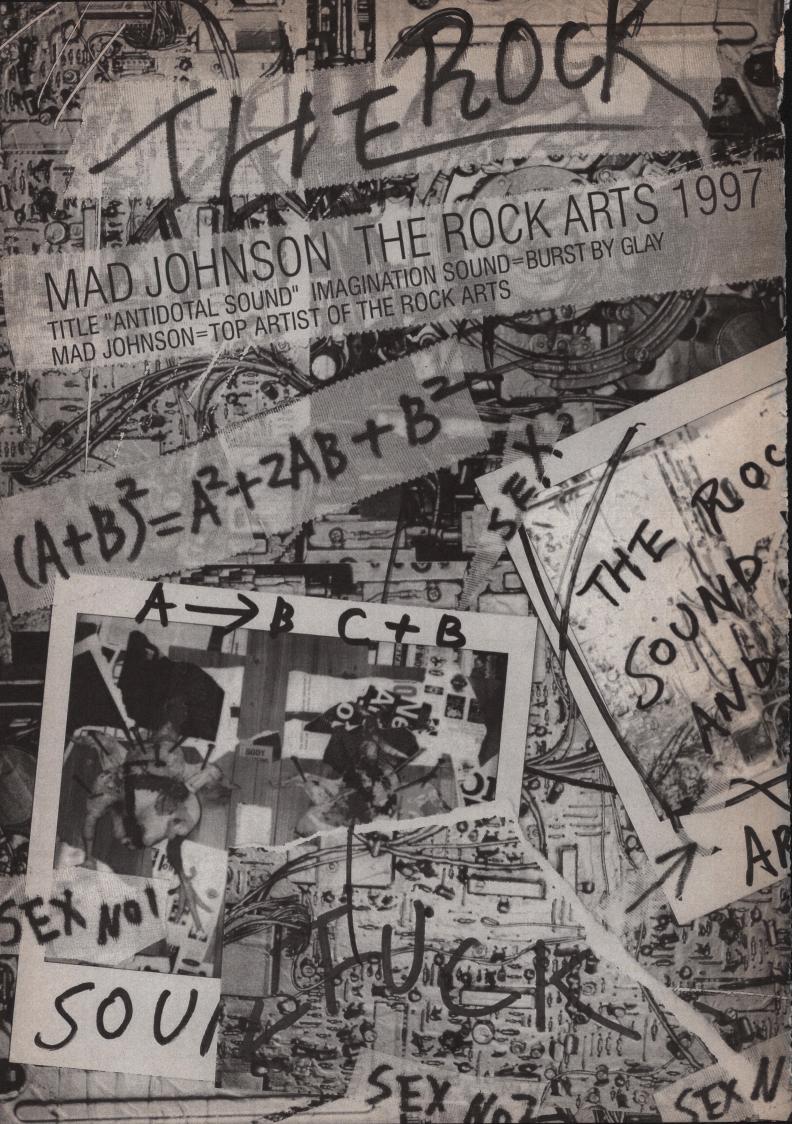
6	菊地 哲	[CRAZE]
7	太田 明	[筋肉少女帯]
8	MOTOKATSU	[THE MAD CAPSULE MARKET'S]
9	小橋琢人	[FIELD OF VIEW]
10	青木和義	[T-BOLAN]
11	宇津本直紀	[DEEN]
12	中村達也	[BLANKEY JET CITY]
13	樋口宗孝	[SLY]
14	鈴木英哉	[Mr.Children]
15	Takeshi	[Valentine D.C.]
16	Atsuhito	[Eins・Vier]
17	山口"PON"昌人	[FEEL SO BAD]
18	JUNJI	[SIAM SHADE]
19	藤本健一	[ZYYG]
20	五十嵐公太	[JUDY AND MARY]

ANOTHER PLAYER

1	坂本龍一	
2	木村真也	[WANDS]
3	山根公路	[DEEN]
4	原 由子	[サザンオールスターズ]
5	西本麻里	[MANISH]
6	妹尾隆一郎	
7	白井幹夫	[↑THE HIGH-LOWS↓]
8	牧田一平	[SMILE]
9	奥野真哉	[SOUL FLOWER UNION]
10	西川隆宏	[DREAMS COME TRUE]

NO.8
SEX SOUND
HARD
FUCK
MAD. J

BACK NUMBER

1995.11月号

筋肉少女帯 / SOUTHERN ALL STARS / BUCK-TICK / BLANKEY JET CITY / FEEL SO BAD / GLAY / BOW WOW / nuvo:gu / TOMOVSKY 他

1996.1月号

T-BOLAN / 黒夢 / CRAZE / DEEP / THE MODS / CHAGE＆ASKA / ChapChimes / PIZZICATO FIVE / 斉藤和義 / 明石昌夫グループ / SIAM SHADE 他

1996.8月号

黒夢 / TAK MATSUMOTO (B'z) / THE YELLOW MONKEY / GLAY / SPITZ / 奥田民生 / SUPER JUNKY MONKEY / LA'CRYMA CHRISTI 他

1996.11月号

X JAPAN / GLAY / BUCK-TICK / CRAZE / ROCK'N ROLL STANDARD CLUB BAND / TOSHI / 大槻ケンヂ / Eins:Vier / BOW WOW 他

1996.12月号

DEEN / hide / L'Arc~en~Ciel / 矢沢永吉 / SION / THE MODS / 甲斐バンド / RAZZ MA TAZZ / 黒夢 / エレファントカシマシ / 真心ブラザーズ 他

1997.1月号

Eins·Vier / GLAY / ウルフルズ / FIELD OF VIEW / SMILE / 森山達也 / Akashi Masao Group / THE ENDS / 久保田利伸 / NOKKO / ZYYG 他

1997.2月号

L'Arc~en~Ciel / 矢沢永吉 / LUNA SEA / GLAY / ⬆THE HIGH-LOWS⬇ / 布袋寅泰 / 甲斐よしひろ / Eins·Vier / THE SPACE COWBOYS 他

1997.4月号

X JAPAN / TOSHI / GLAY / 黒夢 / 筋肉少女帯 / SMILE / 永井"ホトケ"隆 / 真心ブラザーズ / thee michelle gun elephant / L'ACRYMA CHRISTI 他

上記以外は売り切れです。詳しいお求め方法は下記をご覧ください。

J-ROCK magazineは、消費税アップにもかかわらず、しばらくは値段据え置きで頑張ります。
なお、6月号で全国創刊2周年を迎え、新編集長 斉田 才の元、一層の誌面充実を目指しますので、乞うご期待!

定期購読&バックナンバーの申込方法

■本誌の定期購読を希望される方は、とじ込みの郵便払込用紙に必要事項（郵便番号・住所・氏名・電話番号）を記入の上、最寄りの郵便局よりお申し込みください。半年間（6冊）、2700円（税・送料込み）でお届けします。

■「J-ROCK magazine」バックナンバーを希望される方は、下記注意事項をご覧の上、とじ込みのバックナンバー専用払込用紙に必要事項を記入し、希望冊数分の本代と送料の合計金額を最寄りの郵便局より振り込んでください。お届けするまで約2～3週間かかります。なお、希望されるバックナンバーが売り切れた場合は、返送料を差し引いて切手または小為替で返金させていただきます。ご了承ください。

※注意

◇本の価格は、95年11月号と96年1月号は1冊300円、96年8月号以降は1冊400円です（売り切れもあるのでご注意下さい）。

◇送料は、1冊160円、2冊220円、3～5冊600円、6～12冊850円です。

◇希望する号数（必ず何年何月号かを記入）・冊数・郵便番号・住所・氏名・電話番号を必ず振込用紙に記入してください。

◇消費税率の改訂により書店ではお求めになれません。

ロック音楽ROOTS　J-ROCK ARTIST BEST 50

■TV音楽番組「ロック音楽ROOTS」（J-ROCK magazine提供、全国30局ネット）では、番組に対するご意見・ご要望をお待ちしています。官製ハガキにご意見・ご要望・住所・氏名・年齢・職業を明記の上、〒602-88 KBS京都「ロック音楽ROOTS」係宛までお送り下さい。毎月抽選で50名様に番組オリジナルグッズを差し上げます。

■「J-ROCK magazine」は、全国33局ネットで放映中の音楽番組「J-ROCK ARTIST BEST 50」に協力しています。読者の皆さんも番組づくりに協力してください。投票方法は、官製ハガキに投票したいアーティストを1組と、住所・氏名・年齢・職業を明記の上、〒602-88　KBS京都「J-ROCK ARTIST BEST 50」係宛お送りください。投票者には、毎回抽選で番組からの記念品が贈られます。

＜訂正＞ 4月号P18のGLAYのPLAY LISTにおいて誤りがありました。1月27日の6曲目は、「都忘れ」です。

＜決定＞ 4月号P27の黒夢ライブレポートPLAY LIST中新曲のタイトルは、「Ah~Valentine」が「BLOODY VALENTINE」に、「Positive Punk」が「Frustration」に決定しました。

★今月号巻頭広告でも紹介している本誌主催イベント『SEEK』に読者2名5組様をご招待。
ご希望の方は巻末のアンケートハガキのプレゼントナンバーに「SEEK」と記入して送付下さい。

次　号　予　告

J-ROCKmagazine 97年6月号は、4月27日発売。

登場予定アーティストは、JUDY AND MARY／B'z／黒夢／CASCADE／kyo／TWINZER／modern-grey／河村隆一／SIAM SHADE／SION 他。

株式会社ジェイロックマガジン社・編集部　〒542 大阪市中央区西心斎橋 2-17-8 MACビル 8F　TEL 06-214-1751 FAX 06-214-1761

J-ROCK ARTIST BEST 50

この番組は、視聴者からのハガキ・街頭アンケート・J-ROCK magazineの読者人気アンケートを総合的に集計し、毎週番組独自のJ-ROCK ARTISTのベスト50をいち早く紹介すると共に、ARTISTの最近の活動状況をお知らせする視聴者と一体型の音楽情報番組です。番組名が[J-ROCK ARTIST COUNT DOWN 50]から[J-ROCK ARTIST BEST 50]に変わりました。

J-ROCK ARTIST BEST 50

放送局	曜日	放送時間	放送局	曜日	放送時間
KBS京都	金	23:30~	テレビ愛媛	木	24:50~
岐阜放送	土	23:30~	長崎文化放送	金	24:25~
びわ湖放送	土	24:00~	熊本朝日放送	日	24:00~
三重テレビ	金	17:15~	仙台放送	水	24:50~
奈良テレビ	水	24:35~	テレビ静岡	金	25:05~
サンテレビジョン	木	17:00~	福島テレビ	木	24:50~
テレビ和歌山	金	17:00~	北陸朝日放送	日	23:55~
岩手めんこいテレビ	水	25:10~	山口放送	土	25:25~
秋田朝日放送	日	23:55~	日本海テレビ	木	24:45~
群馬テレビ	木	23:45~	沖縄テレビ	木	25:45~
北日本放送	日	24:45~	高知放送	水	24:45~
テレビ埼玉	金	23:30~	テレビ神奈川	日	23:30~
千葉テレビ	金	23:30~	青森放送	木	25:15~
長野朝日放送	日	23:55~	大分朝日放送	日	24:30~
鹿児島読売テレビ	日	25:15~	札幌テレビ	月	25:40~
広島テレビ	水	25:45~	四国放送	火	24:45~
テレビ新潟	金	26:25~			

ロック音楽ROOTS

すべてのROCK音楽の原点である「ブルーズ」。数年前から関西を中心にブルーズのムーブメントが全国に広がってきています。この番組は、「ブルーズ」から始まりすべての音楽へ広がっていく「音楽ルーツ」を深く探り音楽の素晴らしさ・楽しさを全国へ発信する番組です。

ロック音楽ROOTS

放送局	曜日	放送時間	放送局	曜日	放送時間
KBS京都	金	24:00~	テレビ新潟	月	25:40~
岐阜放送	土	24:00~	テレビ愛媛	月	25:20~
びわ湖放送	金	24:30~	長崎文化放送	土	25:28~
三重テレビ	火	24:35~	熊本朝日放送	土	24:30~
奈良テレビ	土	24:00~	青森テレビ	日	24:35~
テレビ和歌山	土	24:10~	テレビュー山形	日	25:15~
岩手めんこいテレビ	木	25:10~	テレビ山梨	火	24:35~
秋田朝日放送	土	24:58~	テレビ高知	土	25:26~
群馬テレビ	土	24:00~	琉球放送	日	24:50~
北日本放送	金	25:15~	日本海テレビ	金	25:15~
テレビ埼玉	金	24:00~	南日本放送	月	25:05~
千葉テレビ	日	23:30~	札幌テレビ	日	25:45~
静岡第一テレビ	日	25:15~	福井放送	火	25:15~
テレビ金沢	日	25:15~	福島中央テレビ	日	25:15~
山口放送	土	25:55~			
長野朝日放送	日	24:25~			

KBS京都 MODS HOUSE